

物理学Ⅰ教材

(ニュートン力学)

筑波大学生物資源学類 2019 年度 春学期

はじめに

この教材は筑波大学生物資源学類 1 年生のための物理学の教材である。授業「物理学 I」(奈佐原顕郎) でも使う。まず、本書の基本的な方針を示しておこう。

- 想定する学生は、少なくとも高校の数学 III レベルの数学力があり、かつ、中学理科の 1 分野を理解している人。高校「物理基礎」「物理学」は不問。
 - 数学の副教材として、「ライブ講義 大学 1 年生のための数学入門」(もしくはその前身の生物資源学類「数学リメディアル教材」) を使う。
 - 本書の文中に「数学の教科書」という言葉がよく出てくるが、それは具体的には この教材を意味する。
 - 物理学の理解に数学の学力は必須。「あったら良い」という程度でなく、「必須」。この教材では、前半部では主に「数学 III」までの高校数学を使うが、後半部ではさらに大学の数学(微分方程式・偏微分・全微分・外積など) も使う。これらの数学は「大学 1 年生のための数学入門」で自主的に学んでおくこと。「とりあえず物理を勉強してみて、数学が必要になったらそのとき数学を勉強しよう」という考えは、残念ながら通用しないだろう。
 - 高校物理の履修は前提としないが、中学理科(1 分野) の物理(特に、力、運動、エネルギーの内容) は前提とする。その復習のために、まず以下の本を読んで欲しい:
 - － 関口知彦・鈴木みそ「マンガ 物理に強くなる ... 力学は野球よりやさしい」講談社ブルーバックス
 - 物理実験の映像をたくさん見よう。物理学は机上の空論ではなく、実際の自然現象を説明する理論だから、実験を通して理解することが必要。テレビ番組では以下がお勧め:
 - － 「NHK 高校講座 物理」
 - － 「ピタゴラスイッチ」特にピタゴラ装置
 - － 「大科学実験」
 - － 「世界一受けたい授業」
 - ... 特にでんじろう先生
- 「NHK 高校講座 物理」「大科学実験」はネット上

で見ることできる。他にも、ネット上(YouTube 等) に、良い動画がたくさんある(「物理エンジン」で検索!)。楽しんで見よう!

- この教材の誤植訂正情報は、以下のウェブサイトまたは manaba に掲載する:

<http://pen.envr.tsukuba.ac.jp/lec/physics/>
- この教材の内容は、(基本法則や慣習的に理解されていること以外は) 全てオリジナルである。
- ただし、Richard Feynman "Lectures on Physics" Addison-Wesley から影響を受けている(岩波書店から「ファインマン物理学」という題で和訳が出ている)。ちなみに、この本の著者が書いた自伝エッセイ「ご冗談でしょうファインマンさん」は秀逸であり、一読を薦める。
- ベクトルは、細字や「文字に上矢印」ではなく、太字で書くこと。
- x を χ と書かないように。
- 数値を求める問題では、(無次元量でない限り) 数値に単位をつけること。数値の有効数字は、特に指定がなければ、2 桁でよろしい。
- 各章末に問題の解答を載せた。ただし一部の問題については解答を省略した(「解答略」とすら載っていないものもある)。そのような問題は、テキストをしっかりと読めば自然に解答が見つかるはず。

よくある質問 1 物理って必要なんですか? あんまり役立ちそうな気がしないのですが ... 物理は「役に立つ科学のナンバーワン」です。理系の学問で、物理学のお世話になっていないものは何一つありません。物理は空気と同じようなもので、気にしなければ気づきませんが、常に我々のまわりにある大切な存在です。

よくある質問 2 私は物理学は苦手だし、私の将来には必要ないと思っていたのですが ... そういうメッセージは要警戒です(笑)。ものごとの重要性や意味は、それを理解し習得してはじめてわかる、という面があります。「物理なんか必要ないよ」と言う人の多くは、その人自身が物理を理解していないのです。

よくある質問 3 物理って、覚えた公式に数字を入れるだけじゃないのですか? ... ちがいます。物理学は実験事実から導かれた基本法則と数学で組み立てられる、精密で普遍的な理論体系です。世の中のものの成り立ちや現象の仕組みを根本から説明するスーパーパワーです。「公式に数字を入れる」のは、物理学のごく一部に過ぎません。

よくある質問 4 でも、ボールとかパネとか、ものの動きをあれこれ考えるだけでしょ? ... 「ものの動き」は物理学の対象のごく一部なのですが、「ものの動き」がわかるだけでも凄いことですよ。地震も津波も台風も「ものの動き」です。化学反応も分子や原子という「ものの動き」です。魚が水中を泳ぐのも、鳥が空を飛ぶのも「ものの動き」です。高校物理で出てきたボールの軌跡やパネの振動は、そのような森羅万象の「ものの動き」を説明する、最初の例にすぎません。

よくある質問 5 高校でやった物理基礎は面白くなかったのですが... それはあなたの心がまだ物理学に向いていなかったからではないでしょうか。教科書に太字で記された公式を丸暗記して、解法のパターンを覚え、時間内に正確に解く、みたいな勉強なら、いくらやっても物理は楽しくなりません。物理の理論が実際の現象にどのように対応するのかを自分の頭で考え、試し、納得するまで自問自答する、という作業をすれば、あなたの心は物理学に向かって開かれ、物理学が面白くなります。

よくある質問 6 物理、嫌いです。どうすれば好きになれるですか? ... 数学もそうですが、まず、先入観を捨てて素直になること。「問題が解けるかどうか」ではなく、「自分が本当に理解しているか」に関心を向けること。テキストを丁寧に読んで考えること。自分で試すこと。身の回りの現象に応用して考えてみる。一方、やみくもに暗記とか、テストやレポートで点をもらうことだけにこだわると、嫌いになります。

よくある質問 7 でも、テストやレポートで点がとれないと成績が悪くなるし単位も貰えないじゃないですか。... 成績や単位は、その学問を理解し、習得したことの証明です。ちゃんとわかっていないのに良い成績をとろうとするのは「ごまかし」じゃないでしょうか?

よくある質問 8 でも、成績が悪かったり単位がとれないと、就職や進学で困ります ... 仮に就職や進学でごまかせても、その後で見抜かれますよ。最後に評価されるのは 実力 だけです。

よくある質問 9 でも、やはり成績や単位が気になります... なら、残念だけど今のあなたにはこの授業は向いていないかも

しれないですね...。

よくある質問 10 高校で物理を勉強していないので不安です ... あまり関係ありません。高校での履修でむしろ重要なのは数学 III です。

よくある質問 11 物理は高校で挫折しましたが、高校数学は学びました。リベンジできますかね? ... 高校数学を修めた今こそ、物理にチャレンジ&リベンジする時です! 実際、高校物理の難しさの大部分は、ちゃんと数学を使わない(文科省の縛りで使っちゃいけないことになっている)ことにあります。ちゃんと数学を使えば「覚えること」は半分以下に減り、見通しもすっきりします。

よくある質問 12 このテキストは高校物理の復習ですか? ... 高校物理と同じ題材も出てきますが、高校物理では説明されなかった(説明できなかった)部分を説明し、理解していきます。そのために数学をたくさん使います。「高校物理やったから簡単!」と思ってる、ちょっと痛い目にあうかもね...。

よくある質問 13 私は高校物理既習ですが、有利ではないのですか? ... 高校物理をやった人は、有利な面と不利な面があります。それぞれの題材や問題に慣れ親しんでいるのは有利なこと。高校物理と似た話題を「それ高校でやった」とスルーしてしまいがちで、体系的な理解に到達しにくいのは不利なこと。高校物理を忘れて、謙虚にやりなおすことが何より大事。

よくある質問 14 てことは、もしかして高校物理をやったのは無意味? ... そんなことはありません。人間は成功体験や先入観があると新しいことを学びづらくなります。それに気をつけよう、と言ってるだけです。謙虚にやり直せば、「高校で学んだアレは実はこういうことだったのか!」という驚きや感動が、君を大いに成長させてくれるでしょうし、それは高校で物理をやらなかった人には味わえない体験です。

よくある質問 15 簡単な公式は覚えておいた方が良いでしょうか。... 「公式」よりも、まず「基本法則」と「定義」をしっかり覚えましょう。「公式」は、基本法則と定義から論理的に導出されます。

よくある質問 16 質問は授業中よりも、授業後に個別にするほうがいいですね? ... いえ! 授業中に、その場で質問して下さい!!! その方が、何倍もありがたいです。「他の人の迷惑」とか「恥ずかしい」とか思わなくていいです。疑問をその場でぶつけてくれたら、あなただけでなく他の人たちにも説明できるし、私のケアレスミスもその場で修正できます。

目次

はじめに	i
第 1 章 物理学とは	1
1.1 物理学の分野	1
1.2 だまされないための物理学	3
1.3 ものづくりや研究のための物理学	3
1.4 危機管理のための物理学	4
1.5 スポーツや音楽のための物理学	4
1.6 生物資源学類と物理学	4
1.7 科学者・技術者としての一生の基礎を作ろう	5
1.8 法則・原理・定義・公理・定理	5
1.9 概算	6
1.10 質点モデル	6
第 2 章 力の法則	9
2.1 力とは何か?	9
2.2 4 つの力	10
2.3 力の一般的な性質	10
2.4 重力	10
2.5 重力加速度	11
2.6 クーロン力	12
2.7 電場と磁場	13
2.8 張力	14
2.9 圧力と応力	16
2.10 弾性力 (フックの法則)	16
2.11 垂直抗力	18
2.12 摩擦力 (クーロンの摩擦法則)	20
2.13 系とは何か?	21
2.14 解答	22
第 3 章 仕事とエネルギー	25
3.1 仮想仕事の原理	25
3.2 仕事とエネルギー	27
3.3 ポテンシャルエネルギー	30
3.4 仕事率	33
3.5 電位・電位差・電圧	33
3.6 電流・電力・電力量	34

3.7	解答	35
第 4 章	運動の三法則	39
4.1	ベクトルとスカラー	39
4.2	位置・速度・加速度	40
4.3	等速直線運動	41
4.4	等加速度直線運動	41
4.5	運動の三法則	42
4.6	力が一定の運動	44
4.7	力が変化していく運動	45
4.8	運動の三法則と哲学	47
4.9	解答	47
第 5 章	さまざまな運動	51
5.1	単振動	51
5.2	斜め投げ上げ	53
5.3	円運動	54
5.4	解答	57
第 6 章	力学的エネルギー保存則 (1)	59
6.1	運動エネルギー	59
6.2	力学的エネルギー保存則	61
6.3	問題の解答の作り方	62
6.4	物理学における保存則	64
6.5	解答	65
第 7 章	運動量保存則	67
7.1	運動量保存則	67
7.2	衝突のときエネルギーはどうなるのか?	69
7.3	回転運動再考	72
7.4	解答	73
7.5	補遺: 量子のエネルギー	74
第 8 章	熱力学入門	75
8.1	温度の定義	75
8.2	理想気体の状態方程式 (気体分子運動論)	76
8.3	理想気体の内部エネルギーと温度	78
8.4	熱容量と比熱	79
8.5	理想気体の定積モル比熱	79
8.6	熱力学第一法則	80
8.7	理想気体の定圧モル比熱	80
8.8	内部エネルギーとは?	81
8.9	エンタルピー	82
8.10	エントロピー	83
8.11	可逆過程	84
8.12	不可逆過程	85

8.13	熱力学第二法則	85
8.14	ギブスの自由エネルギー	86
8.15	解答	88
第 9 章	力学的エネルギー保存則 (2)	89
9.1	3 次元空間における運動エネルギー	89
9.2	3 次元空間における仕事	89
9.3	3 次元空間におけるポテンシャルエネルギー	90
9.4	3 次元空間における力学的エネルギー保存則	91
9.5	振り子の運動	92
9.6	ポテンシャルエネルギーと力の関係	93
9.7	解答	94
第 10 章	角運動量保存則	97
10.1	外積	97
10.2	角運動量	97
10.3	角運動量保存則	99
10.4	解答	101
10.5	補遺: 熱放射	102
第 11 章	慣性モーメント	103
11.1	剛体というモデル	103
11.2	剛体の回転運動	103
11.3	慣性モーメント	104
11.4	分子の運動と慣性モーメント	107
11.5	剛体振り子	108
11.6	解答	109
第 12 章	慣性系と慣性力	111
12.1	慣性系と慣性の法則	111
12.2	複数の慣性系	112
12.3	非慣性系と慣性力	113
12.4	回転する座標系の慣性力	114
12.5	解答	116

第1章

物理学とは

自然現象は多種多様であり、それらの多くはどのように起きているのか説明しがたいように思える。しかし、どんな自然現象でも少数の「法則」に従うはずだと考え、そのような法則、すなわち「基本法則」*1を解明し、基本法則で自然現象を説明しようとする学問が物理学だ。

そして、そのような法則を見出すと、執拗にその正しさを、あらゆる実験で検証する。そして、その法則に合わない「例外」や「矛盾」を見つけたら、それをきちんと説明できて、かつ、もとの法則とも矛盾しないような、より包括的な基本法則を物理学は探す。そのとき武器になるのは数学だ。物理学では、人間の想像力が及ばない法則であっても、数学の論理と整合性は崩れないだろうと考え、数学の力を信じる。だから、物理学には数学が必要なのだ。

また、物理学は、全てのものごとを、それらの基本法則と数学だけで説明しようとする。

例えば、手に持ったボールを手放すと、ボールは地面に落ちるのはなぜだろう？

ありがちなのは「重力があるから」とか「地球がボールをひっぱてるから」という答である。しかしこれは不十分である。仮に、重力(地球がボールをひっぱる力)の存在は認めるとしても、地球がボールをひっぱるとなぜボールは落ちるのが説明できていない。そこで論理が飛躍しているのだ。「そんなの説明するまでもなくアタリマエのことだろう」というのは、物理学ではないのだ。

よくある質問 17 なんか、アタリマエでどうでもいいことに屁理屈というかイチャモンつけてるような気がします ... 学問はそういうものです。アタリマエのように思えることも疑ってかかって、きっちりした理論体系で「説明」しようとするのです。

まず、質量を持っている物体同士にはたがいに引き合う力(重力)が働く、という基本法則がある(万有引力の

法則)。地球もボールも「質量を持った物体」なので、それらの間に力が働く。次に、物体に力がかかると、物体にはその力に比例した加速度が生じる、という法則がある(運動の第二法則)。「ボールが地球から受ける力」からボールの加速度を求め、それに数学(微積分学)を適用すると、物体の位置は地球に向かって移動する(落ちていく)ということが導き出される。これが、「ボールを手放したら地面に落ちる」ことの物理学的な説明である!

よくある質問 18 それ、説明になってます? 簡単なことをわざわざ難しく言い換えてるだけの様な気がします ... いえ、そうではありません。このロジックを使えば、火星でもボールが落ちることを、そのスピードがどのくらいも含めて予測・説明できるし、宇宙の彼方にある小惑星に探査機を飛ばして着陸し、地球に帰還させることもできるのです(「はやぶさ」)。そのような、「行ったことのない世界」の出来事まで、この物理学のロジックは予測・説明できるのです。

1.1 物理学の分野

物理学の基礎は、おおまかに言って、以下のような分野にわけられる:

- 力学
- 熱力学
- 電磁気学
- 相対論
- 量子力学

力学は「古典力学」とか「ニュートン力学」ともいう。我々の日常的な時空間スケールでの物体の運動を扱う。1 学期に学ぶのはこの分野である。津波の伝播、地震波の伝播、地球の周囲をまわる月の運動、本田圭佑のフリーキック、浅田真央のトリプルアクセル、レインボーブリッジの強度や構造、交通事故の衝撃等は、力学

*1 「基本原理」「第一原理」などとも言う。

で解析できる。「運動の三法則」と呼ばれる法則（慣性の法則・運動方程式・作用反作用の法則）が基本法則である。万有引力の法則も力学の一部である。力学を数学的に洗練した「解析力学」という分野もある。

熱力学は、熱や温度が関与する現象を扱う。「化学 I」や秋学期「物理学 II」で学ぶ。同じ対象を統計学の手法を使って解析する「統計力学」というものもあるが、熱力学との区別は明瞭ではない。そこで、両者を一緒にして「熱力学」とか「熱・統計力学」と呼ぶこともある。「熱力学の三法則」という法則（エネルギー保存則・エントロピー増大の法則・絶対エントロピーの法則）が基本法則だ。多くの場合、後述する量子力学と組み合わせあって威力を発揮する。気体の状態方程式（温度・圧力・体積の関係）、比熱、相転移（融解・蒸発等）、電池の活性などは熱力学で解析できる。地球温暖化は大部分が熱力学の問題だ。

電磁気学は、電気や磁気が関与する現象を扱う。「物理学 II」で学ぶ。「マクスウェル方程式」というのがその基本法則だ。中学校以来なじみ深い「オームの法則」は、電磁気学と熱力学との境界に位置する法則である。身近な電気製品はもちろん電磁気学の対象だ。分子や原子の間で働く力の大部分は電磁気力なので、物質の構造や性質を理解するためにも電磁気学は必要だ。空間の電磁気的な性質が波として伝わる現象が「電磁波」すなわち「光」だ。光を電磁気学的に解析する中で、次に述べる相対論が生まれた。

相対論は、大きな速さで運動する物体の運動に関する物理学である。電磁気学から導かれ、実験的にも確かめられたこととして、光は誰から見ても一定の速さで飛ぶ、という事実がある。ここから出発し、力学を修正したものを「特殊相対論」と呼ぶ。その中で、質量がエネルギーと同じものであることが示された。また、特殊相対論を包含し、さらに万有引力（重力）を説明するものを「一般相対論」と呼ぶ。天文学には相対論が必要である。原子力（核反応）で解放されるエネルギーは相対論で説明される。カーナビで使う GPS（Global Positioning System; 人工衛星からの電波によって、地上の位置を高精度で計測するシステム）の精度を高めるにも相対論が必要。

量子力学は「量子論」とも言う。主に原子や分子といった極微のスケールの現象を説明する。「シュレーディンガー方程式」というのがよく出てくるが（秋学期の「化学 II」でも出てくるだろう）、必ずしもそれが基本法則ではない。量子力学の基本法則は高度に抽象的で数

学的だ。そこでは微積分だけでなく、線形代数学（ベクトルや行列の理論）や、複素数、確率などの考え方が活躍する。化学や生物学のミクロな現象は量子力学が支配する。光子が活躍する現象、例えば太陽光（熱放射）や、植物の光合成、レーザー、発光ダイオード（LED）などは、量子力学が無いと説明できない。コンピューター等の情報デバイス（半導体）のほとんどは量子力学をもとに高性能化・小型化されている。病気を怪我をして病院で MRI（核磁気共鳴画像法）の診断を受けた人もいるだろうが、あれは物理学、特に量子力学のカタマリである。筑波大学の前身だった東京文理科大学で、朝永振一郎教授がノーベル物理学賞をとったが、それは量子力学の一分野（量子電磁力学）を開いた功績によるものである。

問 1 力学・熱力学・電磁気学の、それぞれの基本法則の名前を述べよ（内容はまだ理解しなくてよい）。

これらの物理学を組み合わせ、発展させることで、物理学は様々な対象を扱う。宇宙論（天文学）や気象学、多くの工学（電気工学・電子工学・建築工学・土木工学・機械工学・航空工学・船舶工学）は、物理学に立脚する（というか実質的にほとんど物理学だ）。

一方で、原子よりもずっと小さいスケールの粒子（素粒子）の法則を追求し、現有の様々な法則を統一的に理解するために「究極の法則」を探す営為も、物理学の先端で続けられている。湯川秀樹、南部陽一郎、益川敏英、小林誠、小柴昌俊、梶田隆章といった日本人物理学者がノーベル物理学賞を受賞したのはこの分野である。

また、その派生的な成果として、様々な素粒子で人間の病気を治療する方法が開発されたり（筑波大学病院の重粒子線治療）、火山の活動を素粒子で透過的に観測する技術が開発されたりしている。

このように考えれば、ほとんどの科学は、根本の部分で物理学に依存することがわかるだろう。物理学以外の科学も多々あるが、それらが扱う対象は、ほとんどが物理学の法則に従う。ただ、往々にして対象が複雑・特殊過ぎて、物理学の法則を直接的に適用するのが大変だから、とりあえず物理学とは別の学問とするのだ。

そういうわけで、「私は に興味があるから物理学は関係ない」という考え方はとてもズレている。文化・経済・文学・芸術などですら物理学と無関係ではない。文化や経済に大きな影響を与える新技術の開発や地球環境変動は、それを理解するのに物理学が必要である。夏目漱石の小説には物理学の話題が多く登場する。音楽は楽器の開発とともに発展したが、楽器は非常に物理学的

な装置（音響工学）である。

よくある質問 19 量子力学にとっても興味があります。... この授業では量子力学についてほとんど言及できませんが、量子力学はすごい学問です。リチャード・ファインマン著「光と物質の不思議な理論」(岩波書店)や、朝永振一郎著「鏡の中の物理学」(講談社)などを読んでみましょう。本格的に勉強したければ、数学をしっかり勉強してください。

1.2 だまされないための物理学

ところで、世の中には、オカルト的な科学がたくさんある。物理学は、そのようなものへの耐性を君に与えてくれる。

例 1.1 「マイナスイオン」というのが健康に良い、という話が社会に広まり、「マイナスイオンを出す装置」なるものが開発・販売されている。そういうのを聞いて、懐疑的に思うのが物理学だ。物理学には「電荷の保存則」という強い法則があり、それを否定する実験結果は見つかっていない。もし「マイナスイオン」を発生するなら、それを打ち消すプラスの電荷がどこかにあるはずで、それはどこに行っているのだ？

例 1.2 テレポーテーションやテレパシーという超能力に対しても、物理学は懐疑的である。物理学では、「いかなる物体も情報も、光よりも速く移動することは無い」という強い法則（相対性理論）がある。それを否定する事実を多くの物理学者が血眼になって探したが、いまだにひとつも見つかっていない。もし物体が瞬間的に遠くに移動したら、その法則が崩れてしまう。

例 1.3 水を凍らせる際に、水にやさしい言葉をかけるときれいな氷の結晶ができる、という話がある。これも物理学は懐疑的である。物理学（熱力学）では、物体の結晶成長に関する精密な理論ができており、結晶のできる様子は温度や圧力、湿度（過飽和度）、不純物の存在などによって決まることがわかっている。

例 1.4 2003 年頃、あるカルト宗教が「スカラー電磁波」なるものから身をまもるために、あらゆるものに白い布を巻き付けるといった行動に出たことがテレビで報道されたが、物理を学んだ人は、電磁波はベクトルの波であり、「スカラー電磁波」などそもそも存在しないと知っている。

オカルト科学は、いかにも科学的な裏付けがありそうな言葉で、科学が苦手な人をだます。特に、物理っぽい言葉がよく使われるのは、多くの人が物理が苦手だからだろうか。物理をきちんと理解していれば、オカルト科学にだまされる危険は大きく減るだろう。

問 2 社会を騒がせたオカルト的な科学の例を 1 つ調べて、その概要と、君ならそれをどう見破るかを合計 200 字～400 字程度で述べよ。ただし、上で例に挙げた事例はダメ。

1.3 ものづくりや研究のための物理学

さて、石だろうが紙だろうが生き物だろうが食べ物だろうが、物を相手にする仕事には、測ったり作ったりということが不可欠になる。測るということは、対象の特徴を、数値的な量に置き換えて表現することだ。その過程は物理学である。例えば溶液中の化学物質の濃度を測るには、特定の波長の光がその溶液をどれだけ透過するかを調べるが、その原理は物理学である。

原理を知らないでも、説明書（マニュアル）のとおりによれば、とりあえず計測機械を使うことはできる。しかし、マニュアルを読みこなすには、原理がわかっていないと大変だ。マニュアルは人が書いたものなので、ミスもあり得る。あるいは「こんなことはマニュアルに書くまでもないだろう」ということもあるだろう。

実験したり物を作ったりするには、計測だけでなく「制御」も重要になる。例えば生き物を育てるときに、温度や光、湿度などの環境を一定に保つことは、しばしば必要になる。その原理も、物理学である。物理学をきちんとわかっていれば、高価な恒温槽などを買わなくても手近な材料や機械を組み合わせ、適切な制御系を組むことができる。

このように、計測も制御も、多少なりとも機械が必要になる。機械は君の気持ちには無関係に、あくまでも物理学の法則に従って働くのだ。君が機械を手足のように自在に使いたいならば、機械の気持ち、つまりは物理学を理解しなければならない。そのためには、物理学実験を学ぶ必要がある。特に、多くの機械は電気で動くから、電気の知識は重要である。

1.4 危機管理のための物理学

さて、社会にも人生にも危機（ピンチ）はある。生命を脅かすピンチの多くは物理的な現象である。交通事故、飛行機の墜落、船の沈没などはニュートン力学（とその応用である流体力学）である。特にこれから運転免許をとる諸君は、車の構造や交通法規の背景に、たくさん物理学があることを意識しよう。意味や仕組みがわかってこそ、ルールも守る気になるものだし、結果的に安全な「カーライフ」を送ることにつながる。

自然災害（津波や台風、地震、落雷、火山噴火など）も、多くは物理学（地球物理学）で扱われる。落下や感電、窒息なども物理現象である。これらを事前に予防したり、対策したりするには、やはり物理学の考え方が重要だ。

家庭用電気製品は、事故が起きないように、メーカーが慎重に設計・検証して作られるので、めったに事故は起きない。しかし、それでも老朽化すると故障するし、事故が起こる。それを防ぐのは、個人の判断であり、管理である。それには機械の動作原理の理解、つまり物理学が必要である。

家電製品以外の機械、つまり研究・業務目的の機械は、「プロ仕様」なので、家電製品のような徹底した安全対策や検証はされていないのが普通である。専門的な中小企業が作ることが多いし品数が出ないので、そのような「素人向けの安全対策」までは手がまわらないのだ。従って、そのような機械を扱うときには、慎重さと判断力、熟練が必要で、それが、多くの資格が必要な理由である。そういう資格試験の問題の多くは物理学である。

1.5 スポーツや音楽のための物理学

意識している人は少ないが、実は、スポーツと音楽は物理学のカタマリである。テニスで速いサーブを打つには？ サッカーでボールのスピードを上げるために芝に水を撒くのはなぜ？ 相撲で小さな力士が大きな相手に押し負けられないようにするには？ などなど、多くの工夫やスキルは、物理学の観点で裏付けできるし説明できる。だからスポーツ用品メーカーの開発部はまるで物理学の研究室だ。アスリートも物理学がわかると、他人のフォームやスキルの中の良いところに気付きやすくなるし、自分の癖に気付いたり人からのアドバイスを理解したりもスムーズになるだろう。

良い音色を出す楽器の構造は？ 気温や湿度で楽器のチューニングが狂うのはなぜ？ 良い音でレコーディング

するにはどんな工夫が必要？ 野外ライブでは電源をどのように確保・配給すればいい？ ノイズをカットするにはどういうことに気をつけて配線すべき？ 音階が狂うのはなぜ？ など物理学で説明できる。だから音楽をやる人は、物理学を学んで損は無い。

1.6 生物資源学類と物理学

生物資源学類生の中には、「自分は生物学に興味があるので物理学は不要だ」と思っている人もいるが、そういう考え方はおそらく間違っている。生き物の機能や構造がどのように作られているのかを理解するには物理学は必須だ。昆虫が固い殻（外骨格）を持っていることには、物理学的な理由がある。魚が高速で水中を泳いだり、鳥が空を飛ぶのは、彼らが物理学的に合理的な身体構造と機能を持っているからだ。植物は光合成で獲得した炭素を、根・幹・葉・生殖器官に最適に分配しているが、その戦略は、物理学的な事情（根から水を効率的に吸い上げる・風などの外力で倒れたり折れたりしない・多くの光を葉に受ける・種子を風に乘せて遠くに飛ばすなど）で決まる。

農業の効率化に灌漑施設や農業施設、農業機械は不可欠だが、それらを低コストで効率よく働かせるには、物理的に最適な設計と配置が必要だ。田畑に霜がおりると作物はダメになってしまうので、霜がおりないような工夫をするのだが（茶畑で扇風機がくるくるまわってるやつとか）、それも物理学だ。乾燥地農業で塩類集積が問題になるが、あれを予測・制御するには土壌水分と塩類の移動を物理学でモデル化する必要がある。家畜が逃げないように牧場のまわりに電気柵を張り巡らす、それを安全に扱うには電気の知識（結局は物理学）が必要だ。地域で伝統的に行われている農法や漁法（霞ヶ浦の帆引き船など）には、物理学的に理にかなった工夫が随所にある。そういうのを理解しないと、伝統の継承や発展は難しい。

地球環境を保全するには、人工衛星で地球を観測する必要があるが、そこでは衛星の軌道制御や観測装置の設計などで、膨大な物理学的知識が使われている。土砂災害を防ぐには、地すべりや土石流の発生と移動を予測し制御する必要があるが、その中心は物理学だ。物理学を駆使して、起き得る災害を正確に予測できれば、コンパクトで効率的なダムや堤防を作ることができ、経費の節約や環境保全になる。

食品の保存や加工、微生物の培養などには、最適な温度・湿度環境が必要だが、その制御には物理学が活躍し

ている。

1.7 科学者・技術者としての一生の基礎を作ろう

以上のように、物理学は、ほとんどありとあらゆる場面に登場する。しかし、仕事や研究の個々の場面では、物理学の法則までわざわざ立ち返って検討したりしなくても、既にマニュアルやノウハウや慣例が存在し、それに従っていればなんとなくやりすごせるものである。そこで、若い人の多くは、「物理学なんか学ぶよりも、実用的な技術を身につける方が楽だし意味がある」と思うものである。

ところが、そういう人も歳をとってくると、不思議なことに「ああ、若い時に物理学をちゃんと理解しておけばよかった…」と後悔し、嘆くものである。とりわけ、多くの立派な仕事をこなしているプロフェッショナルな人ほどそのように言うのだ（だから「物理学なんかやっても仕方ないよ」と君に言う大人は、プロとして甘い仕事をしている人である可能性がある）。

科学や技術の進歩は速い。若い時に身につけた技術もやがて陳腐化する。諸君は歳をとっても、多くの新しい技術を身につけねばならなくなるだろう。しかし物理学の基礎はおそらく何十年、何百年たっても変わらない。そしてそれは、仕事や研究の現場で、まだマニュアルやノウハウになっていない問題や矛盾を解決する大きな支えになってくれるのだ。

物理学は、ビルディングの壁の中に埋められた鉄骨のようなものである。普段はその存在は見えないし、意識されることも無い。しかし、そのビルディングを地震や強風、洪水や津波が襲ったとき、最後に頼りになるのがそれらである。順風満帆で「普段通り」が続く日常では物理学をことさら意識しないでもなんとかなるが、人生はそんなに甘くない。

1.8 法則・原理・定義・公理・定理

ここで、法則・原理・定義・公理・定理などの言葉の意味を確認しておこう。

- 法則 ... 自然現象や社会現象の中に見られるルール。物理学・化学・生物学・経済学などで使う。数学ではほとんど使わない。例：万有引力の法則
- 原理 ... 法則と同じようなもの。ただし、法則の中でも、より根源的なもの（基本法則に近いもの）を

原理と呼ぶ傾向がある。例：アルキメデスの原理

- 定義 ... 言葉の意味を定めること。
- 公理 ... 定義と同じようなもの。主に数学で使う。言葉の意味を定めるだけでなく、そのようなものが存在することを認めよう、という立場も示す。例：ユークリッド幾何学の公理
- 定理 ... 公理や他の定理から論理的に導かれること。主に数学で使う。定理の中で、いまいち影が薄いものを、補題と呼ぶ。例：三平方の定理

法則 A と法則 B があって、法則 A で説明できることはすべて法則 B でも説明され、なおかつ、法則 A では説明できないが法則 B で説明できるようなこともあるような場合、法則 B は法則 A より一般性が高い、という。そのような場合は、たいてい、法則 A は法則 B の特別なケースであり、法則 B から法則 A を論理的に導出することができる^{*2}。

科学は、より一般性の高い法則を見出すことを目指す。最も一般性の高い法則（つまり根源的な法則）を「基本法則」とか「第一原理」と呼ぶ。しかし、基本法則は抽象的なので、実際には使いづらいこともある。そこで、具体的によくある状況に限定して基本法則を変形することで、「適用範囲は狭いが扱いが簡単」な法則が派生的に生まれる。しかし、そのような「派生的法則」は無数にあって、きりが無い。それに、それぞれの「適用範囲」を覚えて判断するのが面倒くさい。

派生的法則の例として、一定の力を受けて直線上を動く点の位置や速度を表す公式がある（高校物理を習った人なら覚えているだろう、 $x = x_0 + v_0 t + \frac{1}{2} a t^2$ というやつだ）。この法則（公式）は、力が変化する状況では成立しない。それがなぜなのか、とか、その代わりに何を使えばよいのか、などを理解するには、運動方程式という基本法則と、それを記述する数学（微積分学）に戻らないとダメである。

君は、多くの法則をばらばらに覚えるのではなく、何が基本法則で、そこからどのような条件でどのような派生法則が生じるのか、といった体系性を意識して学ぼう。

^{*2} ところが、科学というのはおもしろいもので、法則 B から論理的に導かれる法則 A のほうが一般性が高いということも、たまにある。例えば「力学的エネルギー保存則」という法則は運動の三法則から導かれるが、「エネルギー保存則」は力学の範囲を超えて普遍的に成り立つ法則でもある。

ところで、「オッカムの剃刀^{*3}」という考え方がある。基本法則として、複数の候補があったとき、それらが同程度に有効であるなら、より単純なほうが正しい、という考え方である。これは必ずしも常に正しい考え方とは言えないが、物理学(と多くの科学)は「無矛盾さ」の次に「シンプルさ」を求める傾向にある、ということは覚えておこう。

問3 オッカムの剃刀とは何か?

1.9 概算

いろんな自然現象や社会問題について、具体的な数値をもとに定量的に考えることに、あまり慣れていない人も多だろう。しかし、問題を「数」として量的に把握することは、とても大切である。

基本的ないくつかの数字と、各分野における基本法則、そして常識と少しの数学(特に対数や近似)を使いこなすことで、多くのことを「おおざっぱ」に「ざっくり」と見積り、理解できる。これは、普通はほとんど教育されることはないが、とても重要なことである。

例えば、2018年現在、日本政府の債務(赤字、つまり借金)の額は、約1000兆円である。15桁にもおよぶ金額だが、多くの国民にとって、まず重要なのは、その15桁の全ての数字なのではなく、15桁という桁数、すなわち「規模」である。

ところが多くの人は「1000兆円なんて大きすぎてピンと来ない」と言う。高等教育を受ける人がそんなことを言ってはならない。想像しにくい規模の数を想像するには、「～あたり」という視点に立てばよい。膨大な額の借金も、国民のひとりあたりの借金に換算すれば、想像しやすくなるだろう。日本の人口は約1億人だから、 $1000 \text{ 兆円} \div 1 \text{ 億人}$ で、1000万円/人、つまりひとりあたり1000万円である^{*4}。こんな調子で、「だいたい」でいいから、何らかの数値をぱっと出すことを、概算という。

よくある質問 20 概算はどこまでアバウトでいいのですか? ... 一概には言えませんが、 ± 50 パーセント程度でいいのでは。

問4 ある人の息子が、「僕は将来、サッカー選手に

なりたい」と言う。その夢を応援するためには、親としては、それがどれだけ厳しい戦いになるかを知っておかねばなるまい。

(1) 日本のサッカーのプロリーグ(Jリーグ; J1, J2, J3をあわせて)には、約50チームがある。各チームに選手は30人いるとして、日本のプロサッカー選手の人数を概算せよ。

(2) サッカー選手の選手寿命は短い。平均5年で引退すると考えて、Jリーグで1年間に引退するサッカー選手の総数を概算せよ。それが、1年間に新たにサッカー選手になれる人数だろう。

(3) 一方、小学校1学年には、何人の男の子がいるだろうか? 少子化とかは無視して、日本の人口を1億人、平均寿命を100年として概算せよ。

(4) 一学年の男子のうち、何人に一人が、夢をかなえてサッカー選手になれるのだろうか?

問5 2018年現在、日本の年間の国家予算は約100兆円である。また、日本から国際連合(国連)への年間の拠出金額は約240億円である。これらの数字を、(1)政府の借金に比べてどのくらいの大きさか? (2)国民ひとりあたりいくらか? という、2つの観点で、概算で評価せよ。有効数字は1~2桁でよい。

問6 日本の平均年間降水量は1500 mm程度である。一方、日本では、水田1 m²あたり、500 g程度の米がとれる。一方、米1 kgの生産には3000 kgの水が必要とされる。日本では、水田に降る雨だけで、この水量をまかなうことはできるか?

1.10 質点モデル

我々はこれから、力と物体の運動に関する法則を学ぶのだが、まず、「質量」という概念を受け入れよう。質量とは、物体の根源的な属性(物体を特徴付ける性質)のひとつであり、「どうやらそういうものが存在するらしい」と受け入れるしかない。質量とは何か、質量はなぜ存在するのか、ということを執拗に探求する物理学者達の熱い戦いはまだ続いているが、とりあえずそれは彼らに任せて、我々は先に進む。感覚的には、質量は物体の重さとか物体の「動かしにくさ」に関係するような性質である。

次に、「質点」という概念を定義しよう: 質点とは、質

^{*3} 剃刀は「カミソリ」と読む。

^{*4} 信じられない、奈佐原はまた誤植をしているのではないかと
思う人は、自分で調べてみたらよい。

量は持つが大きさを持たない、点状の仮想的（理想的）な物体である。

現実の物体は大きさや形を持つのだが、大きさや形を考えると、物体に働く力がややこしくなるのだ。例えば、大きな物体の各部位に働く力がまちまちだったりすると、物体全体に働く力はもうわけがわからぬ、ということになる。そこでとりあえず、質点とみなせるくらい小さな物体に働く力を考える。そうやってひとまず大きさや形といった属性を切り捨てることで、次節以降に述べる諸々の力の法則や、いずれ学ぶ「運動の三法則」という単純かつ強力な法則を見出すことができたのだ。

このように、現実のものや現象を単純化・抽象化してとらえ直し、扱いやすくした近似的概念を「モデル」（模型）と呼ぶ。質点は、物体のひとつのモデルである。

なら「質点」は空想の産物、机上の空論に過ぎないのかというと、そうでもない。現実の中には、物体の大きさや形を近似的に無視できるような現象がたくさんあり、そのような場面では、質点の議論がほとんどそのまま成り立つ。物体の大きさや形が無視できなくても、質点としての考察は議論の出発点として役立つことが多い。

例 1.5 野球のボールは、ある場合は質点とみなせる。例えば、ボールを初速度 100 km/h で斜め 45 度の角度で地上から空に投げるとき、どこまで遠く飛ぶか？ のような問題では、ボールは質点と考えてモデル化しても、ほぼ差し支えない。

どうしても大きさや形を考慮しないとまずい状況では、質点の集合（それを質点系という）として物体をモデル化するのである。そうして、質点の理論に持ち込むのである^{*5}（図 1.1）。

例 1.6 野球のボールは、微妙な運動、特にボールの回転が重要であるような運動では、質点とみなしてはダメである。例えば、カーブやシュートなどの変化球は、ボールが回転することで周囲の空気に乱れを生じさせ、それによってボールが受ける力が変化することで起きるため、ボールの形・大きさを無視できない。このような場合は、ボールは質点系としてモデル化すべきである。

問 7 モデルとは何か？

問 8 質点とは何か？

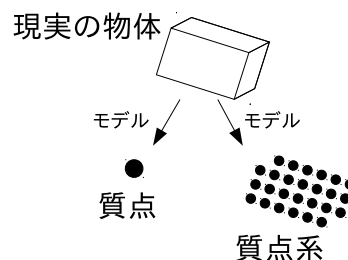


図 1.1 物体のモデル。大きさと形を無視できる場合は質点。そうでない場合は質点系としてモデル化する（質点系では質点どうしの間に働く力も考える。そうすることで物体がバラバラにならないように理論化できる）。

モデルは科学のあらゆるところにある。例えば化学でいずれ学ぶ「理想気体」は現実の気体のモデルのひとつである。

現実の現象や物体は往々にして複雑だが、それを複雑なままで見ているだけでは、仕組みはわからない。人間のしょぼい知性では複雑なものを理解できないのだ。しかし複雑さをばっさり切り捨てて、単純な状況に限定すると、自然の仕組みは人間ごときにも理解できることがある。だからモデルが必要なのだ。モデルの力を借りて科学は進歩してきた。

ところが、いったん出来上がった科学を学ぶ我々は、恩あるモデルの存在を忘れ、モデルに限って成り立つ法則が、現実の複雑な現象にそのまま全面的に成り立つような錯覚を起こしがちである。これは大変危険なことである。

例 1.7 君は小学校で振り子を習っただろう。そこで振り子の周期は振幅に依存しない、と習ったはずだ。これを振り子の等時性という。ところが、振り子の等時性は、振り子の振れの角が十分に小さいという単純なモデルについてのみ成り立つ近似的・限定的な性質である。振れの角が大きくなれば、等時性は成り立たない。実際、振れの角が 60 度になれば周期は 7 パーセント程度長くなることがわかっている。ちなみにこの「ずれ」は、物理学と数学の理論で説明できる。

君はこれから学ぶ科学の様々な事柄に対して、それがどのような限定の中で成り立つかを注意深く理解しなければならない。そのためには、法則や理論の結論だけを丸飲みするのではなく、その理論の成立する過程をきちんと理解し、それが現実の中の何をモデル化しているのか理解しなければならない。

^{*5} その場合は、後述するように、角運動量や慣性モーメントといった概念が必要になる。

演習問題 1 「筑波大学ギャラリー」(大学会館の中にある)を訪れて、筑波大学にゆかりのあるノーベル物理学賞受賞者に関する展示物の中から、あなたにとって最もインパクトのあったものを報告せよ(その理由も含めて)。

演習問題 2 エンジニアや科学者にならない人も物理学を学ぶべきだろうか? 君の考えを論じよ。

解答

以下、解答が無い問題は、解答が略されているものである。

答 1 力学の基本法則: 慣性の法則・運動方程式・作用反作用の法則。万有引力の法則を加えることもある。熱力学の三法則: 熱力学第 1 法則 (エネルギー保存則)・熱力学第 2 法則 (エントロピー増大の法則)・熱力学第 3 法則 (絶対エントロピーの法則)。電磁気学の基本法則: マクスウェル方程式^{*6}。

答 3 基本法則として、複数の候補があったとき、それらが同程度に有効であるなら、より単純なほうが正しいだろう、という考え方

答 6 日本の水田に、1 m² あたり 1 年間に必要な水量は、0.5 kg×3000 kg/kg=1500 kg。水の密度は約 1000 kg/m³ だから、これは 1.5 m³ に相当。これを面積 1 m² の地平面に敷くと、厚さは 1.5 m、つまり 1500 mm になる。一方、日本の平均年間降水量は、1500 mm なので、なんとか雨だけで足りる(計算上は)^{*7}。

よくある質問 21 解答を省略するの、やめてください。... これ、すごく悩ましい話です。私は 10 年くらいかけて数学や物理学の授業テキストを作っていますが、最初のころは問題の解答が雑だったり「略」が多かったのです。その頃は、学生がよく「問題が解けません...」といって質問にきました。そして問題を一緒に考えて、単なる「正解」だけでなく、学生の考え方の癖や、勉強法などまでも、助言できました。解答のついていない問題を友達と一緒に考えているうちに、数学や物理学の楽しさにのめりこんでしまった、というタイプの学生もたくさんいました。

しかし、学生から「ちゃんと解答をつけてください」と言われて、丁寧に解答をつけるようにしたら、学生は質問に来なく

なりました。それで学力は伸びたかという、そうでもありません。むしろ、「単に正解を覚えて再現してるだけ」で、深くは理解していない学生が増えました。

学問は、「誰かが作った正解を覚えこむもの」ではなく、自分の頭で納得するまで考えるものです。そこが苦しいところでもあり、楽しいところでもあります。そしてそれは大学教育の最も大事な部分です。「問題の解答」は、そこにおいて、むしろ悪影響をもたらすものではないか、と、私は悩んでいます。あなたは どう思いますか?

よくある質問 22 でも、自力で解いた後の答え合わせには、正解を教えてもらうことが必要です。... 大学では「正解」は、誰かが与えるものでなく、あなたが作るものです。いろんな観点から考えぬいて、「これが正しい!」とあなた自身が納得し、人にも説明できるなら、それが「正解」です。実際、教員や教科書が与える「正解」には、間違っていることも多いのですよ。お互いの「正解」を比べて議論しながら、「より正しい正解」を作るのです。学問とは本来、そういうものです。

よくある質問 23 でも、解答が無いと勉強の効率が悪いです。いくら考えてもわからないときは解答を見るしかありません... その気持ちわかります。私もそう思います。でもね。解答があると、突き詰めて考える前にどうしても見たくなくなってしまうものです。あなたはそれを自制できるかもしれませんが、「問題は正解を丸写しにして覚えるもの」と思っている人も多いのです。

よくある質問 24 じゃあ、答がわからないときは結局どうすればいいのですか? ... 質問に来ればよいのです。あるいは、友達同士で一緒に考えたり教え合えばよいのです。

^{*6} それぞれの基本法則は、別の形で言い換えることもできる。特に、熱力学第 2 法則やマクスウェル方程式の一部は、別の形や名前で表現されることがある。

^{*7} 現実には、もっと難しいことがいっぱいあるので、ほとんどの水田で灌漑が必要です。

第2章

力の法則

2.1 力とは何か?

小学校以来、理科には何回も「力」が出てきたが、諸君は「力」とは何か、わかっているだろうか?

「力」は、有名な国語辞典である「広辞苑」(第六版電子版)では以下のように記されている:

(1) 自らの体や他の物を動かし得る、筋肉の働き。(後略)

(2) 気力。精神力。根気。(後略)

(3) 能力。力量。実力。(後略)

...

(8) [理] 静止している物体に運動を起こし、また、動いている物体の速度を変えようとする作用。(後略)

科学でいうところの「力」は、この(8)である。(1)、(2)、(3)とは全く違うものである。

ところが、このことをきちんと理解せずに、「力」を(1)、(2)、(3)のような意味とごっちゃにして「理解」している人が多い。おそらく、「物理が苦手」「物理は嫌い」という人の多くがそうだろう。日常で使われる(1)、(2)、(3)のイメージに引きずられて、ついつい「わかった気」になってしまっているのである。

余談だが、力とエネルギーを混同している人も多い。後述するが、力とエネルギーは、明確に別物である。「エネルギー」も日常でよく出てくるので、なんか「わかった気」になってしまうのだろう。

科学では、このように、「言葉にこだわる」姿勢が重要である。言葉に関する間違っただけの思い込みやあやふやな理解が、理解を妨げるのである。

さて、「広辞苑の(8)の説明を読んでもよくわからない」という人もいるだろう。当然である。これを理解するには、「運動」とか「速度」などを定義する必要があるし、いろんな事例や観点について考えて納得していく必要があるからだ。

実はこの(8)は、第4章で詳述する「慣性の法則」と

「運動方程式」を、部分的に言い換えたものである。これらの法則をもとに、「力」が定義されるのだ。

「運動方程式」は、ざっくりいうと力は質量と加速度の積に等しい、という法則である(その「意味」は第4章で学ぶ)。例えば、質量 2 kg の物体が 3 m s^{-2} の加速度で動くとき、その物体にかかる力は、 $2\text{ kg} \times 3\text{ m s}^{-2} = 6\text{ kg m s}^{-2}$ である。ここで「 kg m s^{-2} 」という不思議な単位が出てきたが、まさにこれこそが力を表す単位(のひとつ)である。この「 kg m s^{-2} 」には N (ニュートン) という名前(いわばニックネーム)がついている。つまり、 $\text{N} = \text{kg m s}^{-2}$ である。である。 1 N とは、「質量 1 kg の物体に 1 m s^{-2} の加速度を与えるような力」であり、それは「質量 2 kg の物体に 0.5 m s^{-2} の加速度を与えるような力」でもある。

よくある質問 25 なぜ質量と加速度をかけると力になるのですか? ... その答は誰も知りません。なぜかわからないけど、世界はそうにできているのです。そのように解釈すると、全てがつじつまが合うのです。

よくある質問 26 よくわかんないです。質量は質量、加速度は加速度ですよ。なぜ力が関係するのですか? ... よくわかんないですよ。だからこの法則(運動方程式)は、人類発生以来、何千年も何万年もの間、未知だったのです。それをニュートンという天才が、ティコブラーエとケプラーという偉大な天文学者の研究を踏み台にして、発見したのです。

よくある質問 27 力って、本当に存在するのですか? 目に見えないのでイマイチわかりません ... 力というものが「本当に存在するかどうか」は、実はどうでもよいのです。「力」が存在すると考えれば、宇宙の法則が矛盾なく簡潔に整理できるのです。それが「力」の実在性の保証です。「そう考えれば全てつじつまが合う」というのが、物理学で認められる説得力であり、正しさであり、実在性なのです。

よくある質問 28 N (ニュートン) の定義がわかったようなわからないような... kg m s^{-2} です。ただそれだけ。

問9 質量 2.0 kg の質点に、3.0 N の力をかける。質点に生じる加速度の大きさを求めよ。ただし基本法則に基づいて根拠もきちんと述べること。

問10 君は、今まで「力」をどう理解・認識していたか？科学的に正確に理解していたといえるか？そうであれば、それはどのようなきっかけでそうなったか？正確に理解してはいなかったなら、なぜそうだったのか？

2.2 4つの力

自然界にはさまざまな力が存在するが、根源的には、それらは以下の4つからなるということが、物理学者達の長い苦闘の末、明らかになっている：

- 重力
- 電磁気力
- 強い力（核力など）
- 弱い力（ベータ崩壊など）

その他の力、例えば摩擦力やバネの力などは、いずれもこれらから派生するものだ。言い換えると、どのような力も元をたどればすべてこの4つで説明できるのだ。

我々の身近な現象に関与する力は、ほとんどが重力または電磁気力だ。「強い力」「弱い力」は「重力」や「電磁気力」と同じように、これ自体で科学的な専門用語である。何かの基準よりも強い（または弱い）力を指すのではない。「強い力」は原子核の中で陽子や中性子を同居させる力であり、これがなければ物質（元素）は存在できない。

「弱い力」は、原子核のベータ崩壊（陽子が陽電子とニュートリノを発生して中性子に変わるなど）のときに関与する。その例として、原発事故で漏れ出した放射性セシウム ^{137}Cs が放射性バリウム ^{137}Ba に変わる崩壊がある。また、放射性炭素 ^{14}C が窒素 ^{14}N に変わる崩壊もベータ崩壊である。これは過去の生物遺体の年代測定に使われる。

問11 自然界に存在する、根源的な4つの力とは何か？

2.3 力の一般的な性質

ここで、力の一般的な性質について学んでおこう。ここで述べるのは、その力の起源が重力であれ電磁気力であれ何であれ、例外なく成り立つようなことだ。なお、以後しばらく、「物体」は質点と同義語と考えて欲しい。

物体の大きさや形を考えねばならないときは、逐次、そのように言及する。

- 力には、大きさと向きがある。つまり、力はベクトルである。
- ベクトルの数学に基づいて、複数の力を足し合わせたり、ひとつの力を複数の力に分解して考えてもよい。特に、ある物体に複数の力が働く場合、結果的には、その物体には、それらの力をベクトルとして足し算したもの（合力）のみが働くと考えてよい。
- 物体が静止している場合、その物体に働く力（合力）はゼロである^{*1}。これを「力のつりあい」という。これは後に述べる「慣性の法則」の特殊な場合だ。
- 2つの物体 A、B において、A が B に力を働くとき、A は B から、同じ大きさで逆向きの力を受ける。これを「作用・反作用の法則」という。

ではこれから、具体的な力について学んでいく。

2.4 重力

重力とは、質量を持つ物体に働く力である。万有引力ともいう。質量 M と質量 m をそれぞれ持つ2つの質点が距離 r だけ離れていれば、その間に、お互いが引っ張る向きの力が生じる。その力の大きさ F は以下の式を満たす：

重力の法則

$$F = \frac{GMm}{r^2} \quad (2.1)$$

これが重力だ。ここで、 G は「万有引力定数」と呼ばれる定数で、以下の値である：

$$G = 6.6741 \times 10^{-11} \text{ m}^3 \text{ s}^{-2} \text{ kg}^{-1} \quad (2.2)$$

G の値は記憶しなくてもよいが、式 (2.1) は記憶せよ。

式 (2.1) は、英国の物理学者アイザック・ニュートンが発見した。どうやって発見したのか？惑星の運行を説明するためにいろいろな数式を試行錯誤したのだ。ニュートンだけでなく、ガリレオ、ティコ・ブラーエ、ケプラー等の学者を含めた、長い苦闘の成果である。

この式よりもさらに重力を一般的に説明する理論が

^{*1} 逆は必ずしも成り立たないことに注意せよ。すなわち、働く力がゼロであっても物体は静止しているとは限らない。力が働かなくても物体は動いていることができるのだ。（詳しくは慣性の法則のところで述べる）

「一般相対性理論」である。しかし一般相対性理論は学類 1 年生には手に負えない理論なので、我々は式 (2.1) を重力の基本法則（根源的な法則）とみなそう。

ところで質量とはそもそも何だろうか？それは物体に重力を生じさせるような、物体の属性である。では重力とは何か？それは質量を持つ物体どうしに働く力だ。この議論は循環論法だ。質量を定義するのに重力の概念が必要で、重力を定義するのに質量の概念が必要だ！こうして見ると、世の中は全てが論理的にすっきり説明できるものではなく、どこかで「そういうものがあるのだ」と認めねば話がはじまらない。というわけで、物体を特徴づける量として質量というものが存在する、ということをつたうに認めよう。

作用・反作用の法則のために、質量 M の物体が質量 m の物体を引く力と、その逆、つまり質量 m の物体が質量 M の物体を引く力は、互に向きは逆だが、大きさは同じだ。質量の大きな物体が質量の小さな物体を引く力は、質量の小さな物体が質量の大きな物体を引く力と同じ大きさなのだ。

さて、重力が最も活躍するのは、天体の現象だ。星は、重力によって物を引きつける。重力の法則、すなわち式 (2.1) に関しては、地球を含めて

球状の星は、その中心に質量が集中している
とみなして扱える。 (2.3)

ことがわかっている。例えば地球の表面に立つ質量 m の君に地球が及ぼす重力を考えると、 M として地球の質量を、 r として地球の半径を考えればよい。これは自明なことではなく、重力の法則をもとに数学的に証明されることだが、ここではその詳細は述べない。気になる～という人は、まず大学の数学をしっかり勉強しよう。

問 12 地球の半径を $r = 6400 \text{ km}$ 、地球の質量を $M = 6.0 \times 10^{24} \text{ kg}$ とする。地表において質量 $m = 1.0 \text{ kg}$ の物体が受ける、地球からの重力が、 9.8 N であることを示せ（有効数字二桁でよい）。ヒント：単位を埋め込んで計算しないと失敗するだろう！

2.5 重力加速度

多くの場合（次節などで見る電気力などが無視できる場合）、地表にある物体にかかる力の大きさ F は、物体の質量 m に比例する。すなわち、何らかの比例係数 g

を用いて、

$$F = mg \quad (2.4)$$

と書ける。このとき、

$$g = F/m \quad (2.5)$$

と書ける。この g 、つまり F/m を「重力加速度」と呼ぶ（定義；記憶せよ）。この g について考えよう。

まず、なぜ g の呼び方に「加速度」という言葉がついているだろう？それは、 g の次元を考えればわかる。さきほど学んだように、 F の SI 単位は N （ニュートン； kg m s^{-2} ）、 m の SI 単位は kg なので、 g すなわち F/m の SI 単位は、 $\text{kg m s}^{-2}/\text{kg} = \text{m s}^{-2}$ 。従って、 g は、加速度の次元を持つのだ。

次に、 g の値がどのように決まるか考えよう。 m を地表の物体の質量、 M を地球の質量とする。地球中心から地表までの距離（つまり地球半径）を r とする。地表の物体が地球から受ける重力の大きさ F は、式 (2.1) から、

$$F = \frac{GM}{r^2}m \quad (2.6)$$

となる。ここで、

$$g = \frac{GM}{r^2} \quad (2.7)$$

と置けば、式 (2.4) が得られる。式 (2.7) に実際の G 、 M 、 r の値を（問 12 でやったように）代入すると、

$$g = 9.8 \text{ m s}^{-2} \quad (2.8)$$

である（この値は記憶せよ）。

ところが、これはあくまで近似的な議論である。本当は、重力加速度 g は、そんなに単純なものではないのだ。

まず、地球の形は完全な球形ではなく、赤道付近がわずかに膨らんだ、楕円体である。だから、式 (2.3) でやったように地球の中心に質量が集中している、とみなすのは、厳密にはダメである。また、地球の密度は均一でないために、地表の場所によって重力は大きかったり小さかったりする。

さらに、実際に地表で感じられる重力には、後で学ぶ「遠心力」（地球の自転に起因する力）も加わる。というのも、不思議なことに、遠心力も物体の質量 m に比例するので、式 (2.5) の中に入って来てしまうのだ（「重力加速度」と言うくせに、「重力」以外の力もカウントしてしまうのだ）。

従って、実際は g の値は場所によって微妙に異なる。これは生物資源学類としては注意が必要なポイントだ。

よくある間違い 1 重力加速度とは? と聞かれて、式 (2.8) または式 (2.7) を答えてしまう ... そう答えてしまったら、 g の値が場所によって異なることが説明できません。

問 13 化学実験では、試薬を量り取る時に電子天秤を使う。電子天秤で量る重さは、その場の重力加速度に比例する。北海道大学（札幌市）と筑波大学で同じ電子天秤を調整せずに使ったら、重さの測定値は何%くらい違うか? ヒント: 「電子天秤の校正 札幌 茨城」などをキーワードにしてインターネットなどで調べよ。

これを意識しないと、北大と筑波大で同じ実験をしたつもりでも、試薬の量が異なってしまう、違う実験結果になりかねない!

さきほど、 g が加速度の次元を持つことを示したが、 g は実際に加速度として意味を持っている。君が地表付近で何かの物体を落としたら、その物体はほぼ一定の加速度 g で加速しながら落下するのだ。そのあたりの事情は、後で詳しく述べる。

問 14 重力加速度とは何か?

重力加速度 g でもうひとつ気をつけるべきなのは、高度（標高）である。 g の大部分は式 (2.7) で決まるのだが、その r が変われば当然、 g の値も変わる。

問 15 高度 100 m まで上がった野球のボールと、高度 10,000 m の上空を飛ばす旅客機と、高度 36,000 km の上空を飛ばす静止衛星では、それぞれ g の値は地表での値の何パーセントほどになるか? 式 (2.7) によって見積もれ。それぞれの r は地表での r の何倍になるか?

この問題でわかったように、地表から上空 100 m 程度までなら、 g の値を一定にすることの誤差は、概ね 0.003 パーセント程度である。野球ボールの飛距離に及ぼす影響に換算すると（詳細は省略）、100 m の飛距離に対して 3 mm 程度である。ボールを質点とみなして議論する場合はボール 1 個分の大きさ（70 mm 程度）の誤差を暗に許容するので、この程度の誤差は十分に無視してよいだろう。しかし、ロケットを静止衛星の軌道まで打ち上げるときは、当然ながら g を一定値にして計算してはダメである。

このように、物理学の議論のほとんど全ては、何らかの「近似」や「無視」を含んでいる。物理学を使った議論の結末が「何かおかしい」というときには、そのあたりが原因ではないかと考えることが必要である。

問 16 月の質量は地球の質量の $1/81.3$ 、月の半径は地球の半径の $1/3.68$ である。月の表面で月から受ける重力は、地球の表面で地球から受ける重力の何倍か? ヒント: 式 (2.1)。 M と r の両方が変わることに注意。

よくある質問 29 地球の中心に行けたら、万有引力はどのように働くのでしょうか? ... 全方向からの引力が打ち消しあって 0 になります。要するに「無重力」です。

よくある質問 30 地球の質量は一定ですか? いろんな反応が起こって絶えず変わっているイメージです。... 地球には隕石等が宇宙から飛来して質量を増やす一方、地球大気から（地球の重力をふりきって）宇宙に飛散する分子や原子もあり、質量を減らす。そんなこんなで、地球の質量は、絶えず微妙に増減しているでしょう。

よくある質問 31 万有引力はどんな物体の間にもはたらいているのですか? 例えば人と人の間とか。... 質量を持つ物体ならどんな物体の間にも働いています。もちろん人と人の間にも働いていますよ。

2.6 クーロン力

次に、電磁気力について考えよう。電磁気力とは、「電荷」を持つ物体に働く力のことだ。

物質を構成するのは原子核や原子、イオンなどであり、それらを構成するのは、電子や陽子、中性子、中間子など、「素粒子」と呼ばれる微細な粒子だ。なぜだかわからないが、それぞれの素粒子には、電荷 という、固有の性質（物理量）がある。電荷の性質として、

- 電荷は正と負という符号のある量である。
- 電子 1 個と陽子 1 個は、同じ大きさを逆の符号の電荷を持っている。

ということが知られている。これらがなぜなのかは、根本的にはわかっていない。そのようにこの世界は作られているのだとしか言う他はない。そして、電子 1 個や陽子 1 個が持つ電荷の大きさを $1.602 \times 10^{-19} \text{ C}$ とする（C というのは電荷の単位であり、「クーロン」と呼ぶ。SI 基本単位で表せば、 $1 \text{ C} = 1 \text{ A s}$ だ）。これを電荷素量と呼び、 q_e とあらわす。 q_e は、有効数字 4 桁では、 $q_e = 1.602 \times 10^{-19} \text{ C}$ である（記憶せよ）。電子の電荷を $-q_e = -1.602 \times 10^{-19} \text{ C}$ 、陽子の電荷を $+q_e = 1.602 \times 10^{-19} \text{ C}$ とする。

原子核や原子、イオン、分子などの粒子や、もっと大き

い物体は、それを構成する素粒子の持つ電荷の総和（正の値と負の値を加えて差し引きした量）を電荷として持つ、と約束する。例えば、水素原子は1個の陽子と1個の電子から構成されるが、陽子と電子の電荷は同じ大きさで逆符号なので、その総和は0である。従って、水素原子の持つ電荷は0である、とみなす。正の電荷と負の電荷のどちらが多いときだけ、その粒子は0以外の電荷を持つことになる。粒子や物体が0以外の電荷を持つときは、その粒子や物体は「帯電している」という。帯電している粒子のことを荷電粒子という。電子や陽子、原子核、イオンなどは荷電粒子だ。荷電粒子のことを電荷ということもある。

さて、電磁気力のひとつを紹介しよう。「粒子1」と「粒子2」という2つの荷電粒子があるとき、それらの間には、電荷に応じて、お互いが引きあう力（引力）またはお互いを遠ざけあう力（斥力）が働く。その引力または斥力の大きさを F とすると、 F は以下の式を満たす：

$$F = \frac{k q_1 q_2}{r^2} \quad (2.9)$$

ここで、 q_1, q_2 は粒子1と粒子2がそれぞれ持つ電荷、 r は粒子間の距離である。 k は定数で、有効数字4桁では、 $k = 8.987 \times 10^9 \text{ N m}^2 \text{ C}^{-2}$ だ。この式(2.9)を、クーロンの法則 (Coulomb's law) と呼び、このように記述される電磁気力をクーロン力 (Coulomb force) と呼ぶ。クーロンというのは、この法則を見つけた物理学者の名前だ。 k の値は記憶しなくてもよいが、式(2.9)は記憶しよう。

クーロン力は、電荷を持つ物体に働く力だ。一方、重力は、質量を持つ物体に働く力であった。興味深いことに、これらの数学的な表記、すなわち式(2.9)と式(2.1)は、互いによく似ている。従って、重力に関して成り立つ議論、特にその数学的な扱いは、クーロン力にも通用することが多いし、その逆も然りである。

よくある質問 32 性質も似ているのでしょうか？ この2つの式は統合できるのでは？ ... 地球中心で重力がゼロになるように、一様に帯電した球の中心では電場がゼロになる、などの、よく似た性質があります。しかし、これらの式の統合には、誰も成功していません。

さて、上述のように、電荷には、正電荷と負電荷の二種類がある。 q_1 とか q_2 はプラスやマイナスの値をとり得

るのだ。そして、 q_1 と q_2 が同符号（両方ともプラス、もしくは両方ともマイナス）のとき、式(2.9)から F はプラスになり、そのとき、2つの粒子の間には、斥力（互いに遠ざける力）がはたらく。一方、 q_1 と q_2 が異符号（片方がプラスで片方がマイナス）のとき、 F はマイナスになる。力の大きさがマイナスになるのは奇妙だが、このマイナスは、2つの粒子の間に、引力（互いに引き合う力）がはたらくことを意味する（ここが重力との大きな違いだ。重力には引力しかない。また、質量にはプラス（またはゼロ）しかない）。つまり、式(2.9)は力の大きさだけでなく向き（引力か斥力か）も表現している。

問 17 クーロンの法則とは何か？

問 18 電荷素量とは何か？

問 19 互いに 1.0 m 離れたところに存在する2個の電子の間には、クーロン力と重力の両方が働く。そのクーロン力を F_e 、重力を F_g とする。

- (1) F_e の大きさを求めよ。
- (2) F_g の大きさを求めよ。ただし、電子の質量 m_e は、 $9.1 \times 10^{-31} \text{ kg}$ である。
- (3) F_g は F_e の何倍か？

2.7 電場と磁場

さて、電磁気力には、クーロン力だけでなく、磁気的な力（磁力）もある。クーロン力は、荷電粒子が静止して、いようが運動していようが、無関係に働く。ところが磁力は、荷電粒子が運動しているときにのみ働く。それらを含めて正確に言えば、次のようになる（今は詳細は理解しなくてよい）：

電磁気力とは、荷電粒子の電荷 q に比例するような力であり、それは何らかの2つのベクトル \mathbf{E} , \mathbf{B} を用いて、

$$\mathbf{F} = q\mathbf{E} + q\mathbf{v} \times \mathbf{B} \quad (2.10)$$

と書けることがわかっている（ \mathbf{v} は荷電粒子の速度）。このような形で荷電粒子に力を及ぼすようなベクトル \mathbf{E} と \mathbf{B} を、それぞれ 電場 と 磁束密度 と呼ぶ（定義）。

ここで \times という記号が出てきた。これはただの掛け算ではなく、ベクトルの「外積」というものである。今はこれは理解できなくてもよい（知りたい人は数学の教科書を参照せよ）。「そんなものがあるのか」という程度の理解で OK。そして、ある定数を磁束密度にかけたものを 磁場 という（詳細は割愛する）。

電場と磁場は不可分であり、互いに影響を及ぼしあうから、これらをまとめて語るのだ。その基本法則を「マクスウェル方程式」という。これは本書では扱わない。それを理解するには、「ベクトル解析」という高度な数学(ベクトルの微分と積分に関する数学)が必要であり、今の君には難しい。また、特殊相対性理論というものでは、電場と磁場が統一されるのだが、それも難しすぎるので本書では学ばない。

問 20 1 個の電子から 1.0 m 離れた点での電場の大きさは? ヒント: 今は B を考えなくてよい。

よくある質問 33 高校で磁力を習った時、フレミングの左手の法則というのがありました... 式 (2.10) があればフレミングの左手の法則は不要です。式 (2.10) はフレミングの左手の法則を包含し、それよりも一般性の高い、強い式なのです。ただしこれを使いこなすには「外積」を理解する必要があります。がんばって数学を勉強してください!

よくある質問 34 磁力は電荷を持った粒子が運動しているときに働くとのことですが、静止した磁石同士にはたらく磁力はどうなんですか? ... 磁石の中では電子のスピンというもののせいで電流が流れており、それに磁力がかかります。

よくある質問 35 「今は理解できなくてよい」のなら、ここで教えずでもいいんじゃないですか? ... 「聞いたことがある」「見たことがある」というのが大事なのです。そういうのが「伏線」になり、皆さんの学習効率を高めるのです。

2.8 張力

ここまでは、上で述べた根源的な 4 つの力について学んだ。ここからは、この 4 つの力から派生する力について学ぼう。まずは「張力」という力だ。

例として、君が天井から垂れ下がったロープに吊り下がって静止しているとしよう(簡単のため、ロープの質量は無視する)。ロープに 1 箇所でも弱い部分があればロープは切れて君は落下するだろう。従って、君に働く重力は、ロープの全ての箇所にも働いていることがわかる。

ではロープの任意の 1 箇所 X を考えよう。そこより下の部分をロープ A、そこより上の部分をロープ B と呼ぼう。本来はロープ A とロープ B は X で繋がっていて 1 本のロープなのだが、便宜上、そう名づける。

さて、ロープ A はロープ B を下向きに引っ張っている。これは直感的に明らかだ。一方、同時にロープ B は

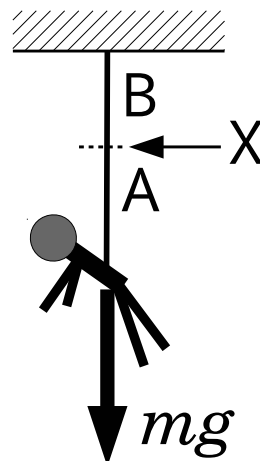


図 2.1 ロープに吊り下がる人

ロープ A を上向きに引っ張っている。これは作用・反作用の法則に従えば明らかである(ロープ A を「物体 A」、ロープ B を「物体 B」として考えればよい)。ロープ B がロープ A を上向きに引っ張っているというのがわかりにくければ、次のように考えてもいい: 仮にロープ B がロープ A を上向きに引っ張っていないとすると、「君の体とロープ A を合わせた物体」に働く力は重力のみである。しかし今、「君の体とロープ A を合わせた物体」はロープに吊られて「静止」している。静止しているからには、「力のつりあい」が成り立たなくてはならない。従って、ロープ B は X においてロープ A に「君に働く重力と同じ大きさで、反対向き(上向き)の力」を及ぼしていると考えざるを得ない。

これらの考察の結論(「君に働く重力と同じ大きさの力は、ロープの任意の箇所(つまり全ての箇所)にも働いている」「ロープの任意の箇所では、そこを挟んで互いに逆向きで同じ大きさの力が働いている」)から、次のような結論が得られる: すなわち、ロープの端に力が働く場合、それと同じ大きさの力が、ロープの任意の箇所において、その箇所を挟んで互いに逆向きに働く。

このような力を張力と呼び、慣習的に T で表す。張力には以下のような性質がある(というか、以下が張力の定義である):

- 張力は糸状の物体(ロープなど)に働く。
- 張力は糸の各箇所で、糸(の接線)に平行に働く。
- 糸にかかる摩擦力や、糸自体の質量にかかる重力が無視できる限り、張力の大きさは糸のどこでも同じである。
- 張力は、引っ張りの向きにしか働かない。つまり、糸を任意の箇所で 2 つに分割すると、両者は互いに

引き合う力を及ぼす（互いに押し合う力は及ぼさない）。

ところで、不幸にして X が弱かったらどうなるだろう？ ロープは X で重力に耐えきれずに、次第に伸びて、最後には切断されてしまう。そうすると、君に働く重力に抗っていた力は消えてしまい、君は落下してしまうことになる。ただし、その場合でも、ロープが完全に切断される寸前まで張力は存在するのだ。

問 21 図 2.2 のように、片端が壁にとりつけられた綱を力 F で引く場合（上）と、両端を力 F で引く場合（下）では、綱にかかる張力の大きさは、どちらも F で等しい。このことを説明せよ。

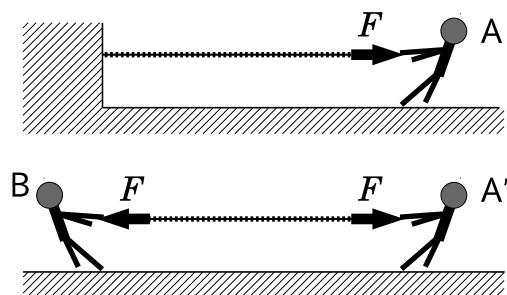


図 2.2 壁対人の綱引き（上）と、人対人の綱引き（下）

問 22 図 2.3 のように、質量 m の君は、天井に吊り下げられた滑車に通されたロープの片端を体に結び、もう片端を手にとって、自らの力で自らの体を持ち上げようとしている。君の手がロープを引く力は $mg/2$ であることを示せ（つまり、体重の半分の力で君は自分を上げることができるのだ）。

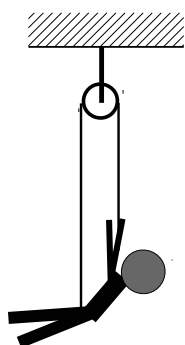


図 2.3 自力で上昇しようとする人

問 23 図 2.4 のように、君は、天井から固定された滑車 A と、自由に上下できる滑車 B（動滑車）を利用し

て、質量 m の物体をロープで持ち上げようとしている。滑車の質量は無視し、ロープと滑車の間の摩擦は無いものとする。ロープは一端が天井に固定され、滑車 B と滑車 A を通って、もう一端が君の手に握られている。君がロープを引っ張るのに必要な力は、 $mg/2$ であることを示せ。ヒント：ロープにかかる張力を T とすると、滑車 B には上向きに $2T$ の力が働く。

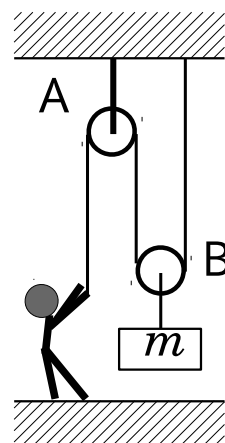


図 2.4 動滑車を使って物を持ち上げる

よくある質問 36 要するに天井と人が半分ずつ引っ張っているということ？ ... そうです。

問 23 の考え方を援用すれば、図 2.5 のように、動滑車の数を増やせば増やすほど、小さな力で物を持ち上げることができる、ということがわかるだろう。

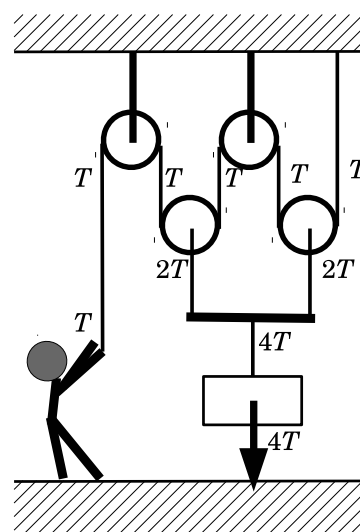


図 2.5 2 個の動滑車を使えば、必要な力は $1/4$ になる。

問 24 君の手がロープを引っ張るとき、その力の根

源は何か?自然界に存在する4つの根源的な力に帰着して説明せよ。

2.9 圧力と応力

化学などでは「圧力」がよく出てくる。圧力は、面に垂直にかかる力を、面積で割ったもの(すなわち、単位面積当たりの力)である。

圧力は、「面に垂直」以外の方向まで含めて、「面にかかる力を面積で割ったもの」をあらわす時は、「応力」という。圧力は応力の一種である。特に、面に平行にかかる力を面積で割ったものを、「せん断応力」という。それに対して、圧力のことを「垂直応力」ともいう。

当然ながら、圧力や応力の単位は、力の単位を面積の単位で割ったものである。SI単位系では、 N/m^2 である。 $\text{N}=\text{kg m s}^{-2}$ なので、これは $\text{kg m}^{-1} \text{s}^{-2}$ とも書ける。この単位のことを Pa (パスカル) と呼ぶ。

圧力は力ではない。圧力に面積を掛けたものが力である。

力はベクトルだが、圧力は、多くの場合、ベクトルでなくスカラーとして表現する。その理由は、ここでは述べない。とりあえず「その方が便利だから」ということで納得しておいてほしい。以下でも、圧力やせん断応力はスカラーとして扱う。

例 2.1 底面積が $A=0.50 \text{ m}^2$ で質量が $m=3.0 \text{ kg}$ の箱がある。この箱を地面に置いた時、箱の直下の地面にかかる圧力を求めよう。

重力加速度を g とする。箱の重さは mg であり、これが地面にかかる力。従って圧力は、 $mg/A = 3.0 \text{ kg} \times 9.8 \text{ m s}^{-2} / (0.50 \text{ m}^2) \doteq 60 \text{ kg m}^{-1} \text{s}^{-2} \doteq 60 \text{ Pa}$ 。(例おわり)

問 25 上の例で、箱の質量はそのまま、箱の底面積が $1/10$ になると(つまり 0.050 m^2 になると)、圧力はどうなるか?

問 26 君が立っている時、君の足の裏の直下の地面にはどのくらいの圧力がかかっているかを見積もれ。君の体重や足の裏の面積などは適当な数値を仮定せよ(多少の嘘は OK)。

問 27 地表面での大気圧はおよそ 1000 hPa である。 hPa の h は「ヘクト」であり、 100 を意味する。

(1) 面積 1 m^2 の地表には、どのくらいの力がかかっているか?

(2) 面積 1 m^2 の地表の真上には、どのくらいの質量の大気があるか?

よくある質問 37 人間が地上にいるとき、大気の圧力に押しつぶされないでいられるのは、どのような力が内側からはたっているのですか? また、もし人間が体ひとつで圧力のあまりかからないものすごく高い場所に行ったとしたら、その人は破裂するのでしょうか? ... 人体の大部分は水であり、そもそも(液体の)水は圧力がかかってもあまり変形しません。それが「つぶれない」ことのひとつの理由。また、肺に空気がありますが、鼻を介して肺は外気とつながっているのでその圧力は基本的に外気の圧力(大気圧)と同じ。従って、肺の空気は大気圧と同じ圧力で押し返すから肺もつぶれない。ただし、人間が体ひとつで潜水する場合は、これが成り立ちません。特に、水压のために肺の空気が圧縮されます。そのため、ある程度以上の深さに潜ると、人間の体に働く浮力(それは体積に比例する)が小さくなって、人間の体は勝手に沈んでいくそうです(先日、テレビでやっていました)。

逆に気圧の低いところ、特に真空では、体液が沸騰します(圧力が低くなると液体の沸点は下がる)。

2.10 弾性力(フックの法則)

次にバネについて考えよう。バネの自然状態での(力がかかってないときの)長さを「バネの自然長」と呼ぶ。我々の日常経験から、バネを伸ばせば伸ばすほど強い力が働くことは自明だろう。バネみたいに、変形させると力を生じる物体について、変形(変位) x と力 F の関係を関数 $F(x)$ で書くと、その関数がどんなものなのかはわからなくても、とりあえず微分の定義から、

$$F(x+dx) = F(x) + F'(x)dx \quad (2.11)$$

となる(dx は微小量)。ここで、 $x=0$ がつりあいの位置(バネの片端を固定し、自然状態に保ったときのもう片端の位置)に来るように座標をとれば、 $x=0$ では力は働いていないから、 $F(0)=0$ となる(図 2.6 の上の図)。すると上の式は、 $F(0+dx) = F(0) + F'(0)dx$ 、つまり

$$F(dx) = F'(0)dx \quad (2.12)$$

となる。この式は微小な量 dx にしか厳密には成立しないけど、 x が十分に小さい範囲に限定して、 dx を x と置き換えても近似的に成り立つと仮定すれば、

$$F(x) = F'(0)x \quad (2.13)$$

となる。ここで $F'(0)$ の符号について考えてみよう。バネの力というものは、伸ばせば縮まる方向に、縮めれば伸びる方向に働く。つまり、変形(変位)と逆向きに働く。従って、 x が正なら F は負、 x が負なら F は正で

ある。従って、式 (2.13) において $F'(0)$ は負であるはずだ。そこで、形式的に $F'(0)$ を $-k$ と書き換えよう。このとき k は正の定数である。すると式 (2.13) は、

フックの法則

$$F = -kx \quad (2.14)$$

となる。ここで、 F は、バネから受ける力、 x はバネの伸び、 k はバネ定数と言われる定数である。これをフック (Hooke) の法則という (ちなみにこれを発見したロバート・フックは、細胞を発見して cell と名付けた人物でもある)。

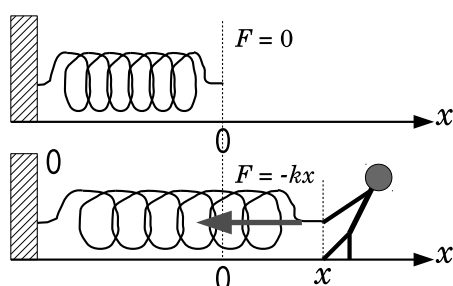


図 2.6 フックの法則

このような数学的な考え方を線型近似という。要するに、フックの法則は、力と変形 (変位) の関数の線型近似式に過ぎず、バネ定数とはその関数の微分係数 (の絶対値) に過ぎない。

式 (2.14) から明らかに、バネが伸びるほど力の大きさは大きくなる。繰り返すが、右辺のマイナスは、バネの伸びの方向 (x の符号) と力の方向 (F の符号) が逆だよ、ということを示す。バネは伸びると (x が正だと)、縮もうとする力、つまりひっぱる力を生じるから F は負になる。一方、バネは縮むと (x が負だと)、伸びようとする力を生じるから F は正になる。

問 28

- (1) フックの法則とは何か?
- (2) バネ定数とは何か?
- (3) バネ定数の SI 単位は?

さて、この「法則」は、万有引力の法則やクーロンの法則よりも、ずっと一般性の低い「しょぼい」法則である。フックの法則は、限定的な例にしか成り立たない経験則に過ぎない。実際、バネをどんどん伸ばすと、まっすぐな針金になってしまって、それ以上は伸びようがない。

無理に伸ばすと、ぶちっと切れてしまう。従って、フックの法則は、バネの伸び (x) がゼロに近いときにしか成り立たない。また、そもそもなぜこのような力が生じるかというと、バネの中の物質を構成する原子や分子どうしが引き合う力 (主に電気力) がその根源にあるからである^{*2}。

式 (2.14) は、バネだけに成り立つのではなく、一般に、多くの物質や物体に成り立つ。例えば橋を構成する鉄骨は、荷重や自重によって伸び縮みする。フックの法則に従うような力を弾性力と呼ぶ。弾性力によって変形する物体を弾性体と呼ぶ。そう考えると、フックの法則は、「法則」というよりもむしろ、弾性力や弾性体の定義である、とも言えるだろう。

問 29 弾性力とは何か? 弾性体とは何か?

問 30 弾性体ではない存在として、「塑性体」というものがある。塑性体とは何か、調べよ。

よくある質問 38 高校ではフックの法則は $F = kx$ で習ったのですが、 $F = -kx$ との考え方の違いは? ... $F = kx$ と書くときは、力の大きさだけを考えていますが、 $F = -kx$ の場合は力の向きまで考えています。

さて、例として、バネ定数 k のバネを天井からつるし、その先端に質量 m の物体を吊り下げて静止させる。バネ自体の質量は無視しよう。では、バネはどのくらい伸びるだろうか?

鉛直下向きに x 軸をとり、物体をつるす前のバネの先端の x 座標を 0 とする。物体をつるしてバネが x だけ伸びたとき、物体にかかるバネの弾性力は $-kx$ 、物体にかかる重力は mg である (ただし g は重力加速度)。前節で述べた、「物体が静止している場合、その物体に働く力 (合力) はゼロである」という法則 (「力のつりあい」) から、この物体が静止するにはこの 2 つの力の和がゼロでなければならない。従って、

$$-kx + mg = 0 \quad (2.15)$$

従って、 $kx = mg$ 、従って、

$$x = \frac{mg}{k} \quad (2.16)$$

である。これがバネの伸びである。

問 31 同じ物体と同じバネを月面に持って行って同様の実験をするならば、バネの伸びは地球上の何倍にな

^{*2} ただし、基本法則からフックの法則を導くのは、簡単ではない。

るか? ヒント: 地球上の重力加速度に相当するものは、月面上ではどうなるだろうか?

問 32 図 2.7 左のように、バネ定数 k のバネを 2 本、平行にならべて天井からつるし、その先端をつなげて、そこに質量 M の物体を吊り下げて静止させる。バネは $Mg/(2k)$ だけ伸びることを示せ。この状況で 2 本のバネをあわせて 1 つのバネとみなすとき、そのバネ定数は $2k$ となることを示せ。ヒント: 重力 Mg を、2 本のバネで分担する。バネ定数を求めるには、バネ定数の定義を思い出すこと。(バネの並列)

問 33 図 2.7 右のように、バネ定数 k のバネを 2 本、縦につなげて天井からつるし、その先端に質量 M の物体を吊り下げて静止させる。バネは $2Mg/k$ だけ伸びることを示せ。この状況で 2 本のバネをあわせて 1 つのバネとみなすとき、そのバネ定数は $k/2$ となることを示せ。ヒント: こんどは重力を分担できない。上のバネにも下のバネにも、 Mg の力がかかる。(バネの直列)

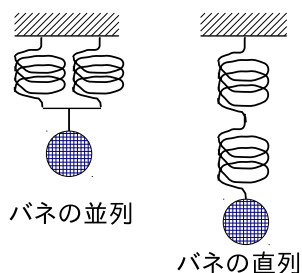


図 2.7 バネの並列と直列

問 34 バネ定数 k のバネを a 本だけ縦につないだものを b 本だけ束ねて大きなバネを作ると、そのバネ定数は bk/a となることを示せ。ヒント: n 本の直列を m 本だけ並列。

断面積 A 、長さ L の棒 X のバネ定数を考える。この棒を、無数の小さい(細くて短い)棒の集合(それぞれが弾性体)と考えれば、棒 X の断面積は、小さい棒の並列の本数に、棒 X の長さは、小さい棒の直列の本数に、それぞれ比例するので、棒 X のバネ定数 k は、 A/L に比例する。そこで、

$$k = E \frac{A}{L} \quad (2.17)$$

と書く。このとき E をヤング率と呼ぶ。ヤング率は物質に固有の定数(物性値)である。

問 35

- (1) ヤング率の SI 単位は?
- (2) 鉄のヤング率を調べよ(「理科年表」^{*3}などを使え)。
- (3) 長さ 10 m、直径 2.0 mm の鉄線の先に 10 kg の物体を吊り下げると、鉄線はどのくらい伸びるか?
- (4) (3) で直径を半分 (1.0 mm) にするとどうなるか?
- (5) (3) で鉄のかわりに銅を使うとどうなるか?

ヤング率を使うと、フックの法則は以下のように書ける:

$$F = -E \frac{A}{L} x \quad \text{従って,} \quad \frac{F}{A} = -E \frac{x}{L} \quad (2.18)$$

左辺の F/A は単位面積あたりの力で、以前述べたように「応力」と呼ぶ。「圧力」と呼んでもよさそうなものだが、この手の話題では圧力ではなく応力という言葉を使う。

右辺の x/L は単位長さあたりの伸びであり、「ひずみ」と呼ぶ。応力を σ 、ひずみを ϵ と書くと、上の式は、

$$\sigma = E \epsilon \quad (2.19)$$

と書ける(符号はとりあえず無視した)。これもフックの法則のひとつの表現である。ここで示したフックの法則は、1 方向の伸びと、それと同方向のひずみとの間の関係であったが、それ以外にも、様々な方向の応力と様々な方向の歪みに関しても同様の関係が成り立つ。それを総称してフックの法則と呼ぶ。ただし、それをきちんと表現するには、テンソルという数学(「行列」の拡張版みたいなもの)が必要であり、それは 2 年生以降に学ぶ。

問 36 (1) 応力の SI 単位は? (2) ひずみの SI 単位は?

よくある質問 39 フックの法則はバネだけの話かと思っていましたが、もっと一般的なものなんですね。... そう。要するに力と変形の線型近似ですから、ほとんどの物体に成り立ちます。地震の波もフックの法則で説明されます。

2.11 垂直抗力

君が地面に立つとき、君は地球から重力(引力)を受ける。ところが、君が静止しているためには、君にかかる合力はゼロでなければならない。さもなければ君の体

^{*3} 国立天文台(編)「理科年表」丸善。毎年、最新版が出ているが、基本的なデータはそんなに頻繁には変わらないので、昔の年のものを参照しても大丈夫。

は地面にどんどんめり込んでいくはずだ。「力がどうであれ、そこに固い地面があれば、めり込んでいくわけがないだろう」と君は思うかもしれない。しかし、その考え方は物理学ではダメなのだ。物理学には「固いものにめり込んでいくことはできない」というような法則は存在しない。固いものの表面で物体が静止することも、あくまで「力のつりあい」で説明しなければならないし、説明できるものなのだ。

君の足下に、固い岩があったとしよう。その岩は、君の体重のせいで、ごくわずかだが、変形するのだ。その変形をもとに戻そうとする力、つまり弾性力が、君の体を押し返すのだ。それが重力と釣り合って、君の体にかかる合力はゼロになり、君は地上で静止できるのだ。

このように、物体が、固い面に対して垂直に力をかけると、面はほとんど変形せずに（といっても弾性力を発揮する程度には変形するが）、それと等しい大きさで逆向きの力を、面は物体に対して働く。その力を垂直抗力と呼び、慣習的に N で表す。

これは物体と「固い面」との間の「作用・反作用の法則」にすぎないじゃないか、と君は思うかもしれない。それは早計である。仮に垂直抗力が無くたって、作用・反作用の法則は成り立つ。君の体に働く重力は、地球が君を引っ張るのであり、その反作用として君は地球を引っ張る。君の足元に地面があったとしても、その地面がゆるゆるの状態、君を全く支えてくれないならば、君の体は加速度を持って地中に沈んでいくだけだ。それでも作用・反作用の法則は（君の体と地球との間で）成り立っている。

でも、もしそこに固い地面があるならば、その地面が垂直抗力を発揮して君の体を支えるのである。逆に言えば、垂直抗力を発揮してくれるような面のことを「固い面」と言うのだ^{*4}。

これらを総合して、以下のような例を考えよう。図 2.8 のように、傾斜角 θ のなめらかな斜面に、質量 m の物体が載っている。この物体には、重力 mg が鉛直下向きに働いている。

このとき、図 2.8 のように、鉛直下向きの重力 mg は、斜面に沿った方向の力と斜面垂直方向の力に分解して考えてもよい。前者の大きさは $mg \sin \theta$ 、後者の大きさは $mg \cos \theta$ である。

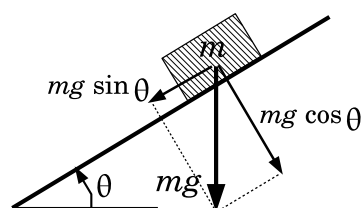


図 2.8 斜面に載った物体と、それにかかる重力

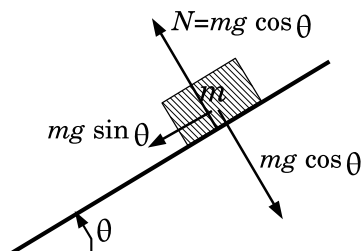


図 2.9 物体は斜面から垂直抗力 N を受ける。

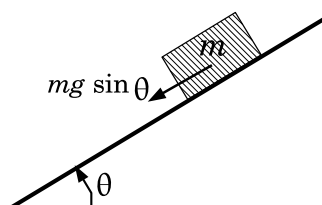


図 2.10 結局、物体は斜面に平行な力だけを受ける。

と言われても、なぜ、斜面に沿った方向と斜面垂直方向に分解するのだろうか？ そうするのが便利だからだ。というのも、もし斜面が固ければ、物体が動き得るのは斜面に平行な向きだけで、斜面に垂直な方向には動けない。従って、斜面に垂直な方向では、物体に働く力は釣り合っているはずだ。それをまずあぶり出せば、物体にかかる合力は求めやすくなる。

さて話を戻すと、物体にはもともと重力の斜面垂直成分 ($mg \cos \theta$) が働いているから、それと同じ大きさで物体を斜面に垂直に押し返す垂直抗力 N があるはずだ（図 2.9）。一方、今考えている斜面はなめらかなので、斜面に沿った方向には斜面は物体に力をおよぼさない（つるつるしている！）。結局、物体に働く重力と斜面から物体が受ける垂直抗力を足し合わせると、物体に働く力として、図 2.10 のように、斜面に沿った重力 $mg \sin \theta$ だけを考えればよいことになる。

問 37 図 2.11 のように、傾斜角 30° と 60° の 2 つのなめらかな斜面に、それぞれ質量 3 kg と質量 m の物体が載せられ、滑車を介してロープでつながり、静止している。物体と斜面の間の摩擦は無く、滑車とロープの

^{*4} この例では、君の体に働く力は、地球から受ける重力と、固い地面から受ける垂直抗力である。これらの釣り合いによって君の体は静止する。一方、固い地面（のごく表層）に働く力は、君の体に働く垂直抗力の反作用と、より下の地面から受ける弾性力である。これらの釣り合いによって、地面も静止する。

間にも摩擦は無く、ロープの質量は無視できるほど軽いとする。 m を求めよ。ヒント：ロープにかかる張力の大きさを T とする。まず左の物体が静止する条件から T の大きさが求まる。そしてその T は、右の物体にもかかる。

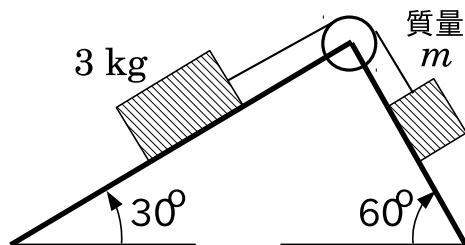


図 2.11 2つの斜面上に載せられ、ロープでつながって静止する2つの物体

よくある質問 40 斜面と滑車の問題は、高校時代に挫折したところです。... 滑車を介したロープはどこでも張力が同じ、というのがポイントです。

2.12 摩擦力（クーロンの摩擦法則）

我々は日常経験から、物体と物体を接触させたまま動かす（ずらす）には力が必要だと知っている。ということは、接触する物体どうしには、それらを「ずらすまい」とする力が働くのだらう。そのような力を、摩擦力という。これは、以下の2つの式で表現されることが多い。

まず、 N を、物体どうしが接触面を介して接触面に対して垂直に互いに押し合う力とする。2つの物体が相対的に静止している場合（ずれない場合）は、摩擦力 F_s は、

$$F_s \leq \mu N \quad (2.20)$$

となる。また、接触面を介して2つの物体が相対的に運動している場合（ずれる場合）は、摩擦力 F_m は、

$$F_m = \mu' N \quad (2.21)$$

となる。 F_s を静止摩擦力、 F_m を動摩擦力という。また、 μ, μ' は、それぞれ静止摩擦係数、動摩擦係数とよばれる定数で、接触面の物質や状態に依存する。

これを、クーロンの摩擦法則という。この「クーロン」は電氣的な力の「クーロン力」のクーロンさんと同一人物である。偉い学者は一人でいくつもの法則を発見するので、後世の我々は「クーロンの法則」としてもどの

法則だ？」と混乱してしまうのだが、まあそれは仕方がない。

さて、式 (2.20) に不等号「 \leq 」が入っているのは、次のような理由による：摩擦力は、接触中の2つの物体を「ずらすまい」とする力である。従って、静止中の2つの物体の間に、互いをずらそうとする力がそもそも働いていない場合は、あえて「ずらすまい」とする必要はない。そのとき、静止摩擦力はゼロであるべきだ。また、たとえ、「ずらそうとする力」が働いても、それが弱ければ、それを打ち消す程度の摩擦力があれば十分であり、それ以上は必要ない。物体が静止しているからには「力のつりあい」が成り立つはずで、となると静止摩擦力は「ずらそうとする力」と反対の向きに同じ大きさで働いていると考えざるを得ないのだ。従って、静止摩擦力は、ある一定の範囲（ μN 以下）で、「ずらそうとする力」に対応してそれを「ちょうど」打ち消す力を発揮するのである。

さて、多くの場合、 $\mu' < \mu$ である。つまり静止摩擦係数 μ は動摩擦係数 μ' より大きい。つまり、摩擦力は、静止状態の方が、動いている状態よりも強い。それがなぜなのかは、様々な説があるが、決定打は無い。

この「クーロンの摩擦法則」も、一般性の低い「しょぼい」法則である。単なる経験則であり、この法則から外れるような例もある。摩擦力は、結局、物質と物質の間に働く力なので、おそらく電気力がその根源なのだろう。しかし、基本法則からクーロンの摩擦法則を導くことには、まだ誰も成功していない。実は、摩擦力の起源や実体は、よくわかっていないのだ。クーロンの摩擦法則は誰もが「しょぼい」と思っているが、誰もそれに代わる法則を見つけ出せないでいる...

よくある質問 41 $\mu' < \mu$ となる理由がわかりません。... 正確な理由は不明。よく言われるのが、静止状態では接触面での微妙な凹凸が互いにかみ合って抵抗が大きいのにに対し、動いているとなかなか凹凸がかみあわず、滑りやすくなる、という説明。

よくある質問 42 「車のブレーキは、タイヤを完全に止めるより、少し回しながらのほうが、地面との摩擦が大きくなって早く止まれる」と聞いたことがあります。 $\mu' < \mu$ と関係していますか？ ... まさにそうです。それを利用したのが ABS（アンチロック・ブレーキング・システム）です。

問 38

- (1) クーロンの摩擦法則とは何か？
- (2) 摩擦係数とは何か？

- (3) 摩擦係数の次元は?
 (4) アンチロック・ブレーキング・システムを説明せよ。

問 39 傾斜角 ϕ の斜面上に、質量 m の物体が載って、ぎりぎり静止している。これよりも少しでも傾斜がきつければ、物体は滑り出してしまふ。このとき、傾斜角 ϕ と静止摩擦係数 μ の間に、次の関係が成り立つことを示せ(このような ϕ を安息角という)。

$$\mu = \tan \phi \quad (2.22)$$

問 40 図 2.12 のように、摩擦のある斜面(静止摩擦係数 μ) の上方からバネ(バネ定数 k) で物体(質量 m) が吊られて静止している。そのような状態が実現できるようなバネの伸び縮みの範囲を求めよ。

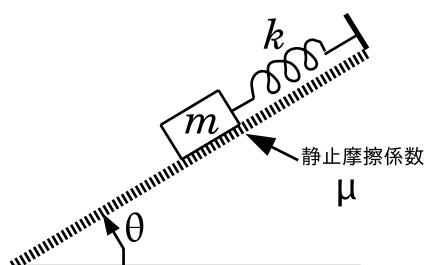


図 2.12 摩擦のある斜面上に、バネで吊るされた物体

2.13 系とは何か?

これまで扱った多くの例や問題では、それぞれで、単純化された状況を考えてきた。例えば図 2.12 では、ひとつの斜面とその上でバネにつながって静止する物体、そしてそれに働く重力だけを考えた。実際は世界にはもっとたくさんの物体があるたくさんの斜面があるたくさんの力がある。バネにつながって静止した物体に、突然上空から隕石が落ちてきて衝突する可能性も 0 ではないのだ。

しかし、科学をやるときは、世界の中のごく一部だけを限定的に切り出して単純化し、それ以外のすべてのものを無視した状況を設定することがよくある。そういう状況設定を「系」(system) という。それは、言ってみれば、当面の問題や議論のためだけに極限まで単純化された「世界のモデル」である。例えば、2 つの物体しかない世界や、バネにつながった物体が斜面上に載っている以外には何も無い世界を考えるのだ。それが系である。

系という言葉は、本書では今後、たくさん出てくるし、

化学などでもよく出てくるので、よく理解しておこう!

問 41 系とは何か?

よくある質問 43 黒板を手で押すとき、黒板がわずかに変形してその弾性力が手を押し返すことで手が静止すると聞きました。でも、手と黒板の間に、もし作用・反作用の法則がはたらくなら、黒板は変形しないでも、同じ大きさで逆向きの力が手にはたらくと思います。大きさが同じなら釣り合うんじゃないんですか? ... とても良い質問です。作用・反作用の法則を学ぶとき、多くの人が感じる疑問です。物体が動く(運動状態を変える)かどうかは、「その物体に働く力」が釣り合っているかどうかで決まります。ところが作用・反作用の法則は、「その物体に働く力」と同じ大きさで逆向きに「相手の物体に働く力」があるという話です。なので、「大きさが同じで向きが逆」ということだけを切り出して「ならば力は釣り合うのでは?」と考えるのは早計です。手が物体を押す力と、物体が手を押し返す力が「釣り合っている」としても、そのことは物体の運動にも手の運動にも、直接的には無関係なのです。つまり、作用・反作用の法則と力のつりあいは無関係なのです。

例として、ボール投げを考えましょう。ボール投げの際、手はボールに力をかけますが、その力はボールを加速することに寄与します(これは後に学ぶ運動方程式で説明されます)。一方、ボールは等しい大きさで逆向きに手を押し返します(作用・反作用の法則)。だからボールを投げるときには手は負担を感じるのです(だからピッチャーには体力が必要)。このとき、ボールにかかる力は釣り合っていない。手にかかる力(ボールから受ける反作用の力と、腕の筋肉が手を押す力)も釣り合っていない。

手が黒板を押すとやがて動かなくなるのは、筋肉(それは肩から手首にかけての部分)が手(手首から先の部分)を押そうとする力と、黒板が弾性力(それは結局は垂直抗力)で手を押そうとする力が釣り合うからです。その弾性力は、黒板がわずかに歪むことで発生します。従って、手が黒板を押し始めてから黒板が十分に歪むまでの間は、黒板の弾性力は手が押す力よりも弱いので、黒板は徐々に押し込まれて変形します。その過程では、手が押す力の「余り」は、黒板の変形を加速することに寄与します(運動方程式)。そして、それらの和、つまり手が押す力と同じ大きさで逆向きの力を手は黒板から受けます(これが作用・反作用の法則)。これは変形の途中でも、変形しきったときでも、同じこと。ところが変形しきったときは、黒板の加速度はゼロになるので、結局、手が押す力と黒板の弾性力は等しい大きさになります。

よくある質問 44 物体に力がかかるとき、ごくわずかもめり込むなら、かなり長い時間、力をかけていたら、その物体はへこみますか? ... 力の大きさと素材によりますが、そういう場合も多いでしょう。短時間では弾性的な(変形に比例した反発力を生じ、力が取り除かれると元に戻る)物体も、長時間、それなりの力にさらされ続けられたら、反発力を徐々に失い、変形が

戻らなくなったりします。この性質を弾塑性と呼びます。「レオロジー」という学問分野で扱います。

演習問題 3 質量 1 g の物体を 1 cm s^{-2} の加速度で動かす力の大きさを 1 dyn という (dyn はダインと読む)。 1.0 dyn を N 単位で書き換えよ。

演習問題 4 1枚のティッシュペーパーから、幅 2 cm ほどの帯を2枚切り出し、それぞれ帯 A と帯 B と呼ぶ。帯 A はそのままにし、帯 B はねじる (数 10 回)。それぞれの帯について両端をひっぱって引きちぎる。どちらが切れにくい (引きちぎるのにより大きな力が必要) か? その理由とともに述べよ。

演習問題 5 バネ定数 2.0 N/m のバネを、左端から 1.0 N 、右端から 1.0 N の力でそれぞれ引っ張った。伸びはどのくらいか?

演習問題 6 直方体の段ボール箱がある。それを構成する辺の長さを a, b, c とし、 $a < b < c$ とする。この箱を床に置いて横から押して動かす。最も小さい面 (面積 ab の面) を下にして置く場合と、最も大きな面 (面積 bc の面) を下にして置く場合では、どちらの方が、床とダンボール面に働く摩擦力は大きい? 根拠を含めて述べよ。ただし各面の素材は同じとする。

2.14 解答

答 9 (略解) 1.5 m s^{-2}

答 11 重力・電磁気力・強い力・弱い力

答 12 略。ヒント: 式 (2.1) に適切に値を代入して計算。ただし、 r は km で与えられているので、 m に換算すること。つまり、 $r = 6.4 \times 10^6\text{ m}$ とすること。

答 14 地表付近にある質量 m の物体が地球から受ける重力は mg と書ける。このときの定数 g が重力加速度^{*5}。

答 15 地球中心から地表までの距離を r_1 、地球中心から上空 (野球ボール、旅客機、または静止衛星) までの距離を r_2 とする。地表の重力加速度を g_1 、上空の重力加速

度を g_2 とすると、式 (2.7) より、

$$g_1 = G \frac{M}{r_1^2}, \quad g_2 = G \frac{M}{r_2^2}, \quad \text{従って,}$$

$$\frac{g_2}{g_1} = \frac{r_1^2}{r_2^2} = \left(\frac{6400\text{ km}}{r_2} \right)^2 \quad \text{である。}$$

野球ボールの場合、 $r_2 = 6,400\text{ km} + 100\text{ m} = 6,400.1\text{ km}$ を上の式に代入すると、 $0.999968 \dots$ 。従って地表での 99.997% 。旅客機の場合、 $r_2 = 6,400\text{ km} + 10,000\text{ m} = 6,410\text{ km}$ を上の式に代入すると、 $0.9969 \dots$ 。従って地表の 99.7% 。静止衛星の場合は、 $r_2 = (6400\text{ km}) + (36000\text{ km}) = 42000\text{ km}$ を上の式に代入すると、 $0.023 \dots$ 。従って、地表の約 2% 。

答 16 地球の半径を r_1 、月の半径を r_2 、地球の質量を M_1 、月の質量を M_2 とする。問題文より $M_2/M_1 = 1/81.3$ 、 $r_2/r_1 = 1/3.68$ 。さて、質量 m の物体が地表にあるとき地球から受ける重力を F_1 、月の表面にあるとき月から受ける重力を F_2 とすると、式 (2.1) より、

$$F_1 = G \frac{M_1 m}{r_1^2}, \quad F_2 = G \frac{M_2 m}{r_2^2} \quad \text{従って,}$$

$$\frac{F_2}{F_1} = \frac{M_2}{M_1} \times \left(\frac{r_1}{r_2} \right)^2 = \frac{1}{81.3} \times 3.68^2 = \frac{1}{6.00}$$

従って、 $1/6$ 倍。

答 17 電荷 q_1 と電荷 q_2 をそれぞれ持つ粒子が距離 r だけ離れて静止していれば、その間に $F = kq_1q_2/r^2$ を満たす力 F が生じる。なお、 k は定数で、 $k = 8.987 \dots \times 10^9\text{ N m}^2\text{ C}^{-2}$ 。

答 18 電子や陽子を持つ電荷の大きさ (ただし符号を考えない) $q_e = 1.602 \times 10^{-19}\text{ C}$ 。

答 19 (1) 式 (2.9) より、

$$F_e = 8.987 \times 10^9\text{ N m}^2\text{ C}^{-2} \times \frac{(1.602 \times 10^{-19}\text{ C})^2}{(1\text{ m})^2}$$

$$= 2.3 \times 10^{-28}\text{ N} \quad (2.23)$$

(2) 式 (2.1) より、

$$F_g = 6.7 \times 10^{-11}\text{ N m}^2\text{ kg}^{-2} \times \frac{(9.1 \times 10^{-31}\text{ kg})^2}{(1\text{ m})^2}$$

$$= 5.5 \times 10^{-71}\text{ N} \quad (2.24)$$

(3) $F_g/F_e = 2.4 \times 10^{-43}$

注: このように、クーロン力は重力よりもはるかに大きい。米国の物理学者リチャード・ファインマンは、これを、「光が陽子 1 個の端から端まで通り過ぎるのにかかる時間と、宇宙の

^{*5} たまに、重力加速度とは GM/r^2 である、という人がいるが、間違い。なぜなら、この式は、地球を静止した完全な球体とみなしており、この式に従えば地表のどこでも同じ値になってしまうから。実際の g の値は、場所によって微妙に異なる。例えば地下に重いものがある場合は、その直上の地表付近では g は大きくなる。低緯度では地球の自転による遠心力 (後に学びます) の影響も g の値に入ってくる。

年齢との違いくらい大きい」と表現している。

答 20 電場と磁束密度の定義式 (2.10) で、今は $B = 0$ として両辺を電荷 q で割り、両辺の絶対値をとって、 $|F| = F$, $|E| = E$ とすれば、 $E = F/q$ である。この F に式 (2.9) ($q_1 = q$, $q_2 = q_e$ とする) を代入すると、 $E = F/q = k q_e / r^2$ 。 $q_e = 1.602 \times 10^{-19}$ C, $r = 1.0$ m, $k = 8.987 \times 10^9$ N m² C⁻² を代入して計算すると、 $E = 1.4 \times 10^{-9}$ N/C。

答 21 「人対壁」では、人 A がロープを引く力は、ロープの各箇所での断面の左側に大きさ F で右向きにかかる。その反作用は、各断面の右側に大きさ F で左向きにかかる (これが張力)。それがロープの左端 (壁との接点) まで伝わり、壁との接点では、壁はロープから、大きさ F で右向きの力を受ける。その反作用として、ロープは壁から大きさ F で左向きの力を受ける (この「壁が引く力」がロープの各箇所での左向きの力の源泉であり、そのおかげで「作用・反作用の法則」とつじつまが合う)。これは、壁のかわりに別の人がロープを左端で大きさ F の力で左向きにひっぱるのと同じこと。従って、「人対人」でも、「人対壁」でも同じことになる。

答 22 君の体には 2 箇所からロープが上向きにひっぱられている。また、ロープの張力 T は、ロープのどこでも等しい。従って、君の体には上向きに $2T$ の力がかかる。一方、重力によって、君の体に下向きに mg の力がかかる。座標軸を、上向きを正にとると、力のつりあいから、 $2T - mg = 0$ 。従って、 $T = mg/2$ 。一方、君の手がロープを引く力は T に等しいので、結局、 $mg/2$ に等しい。

答 23 滑車 B の両端のそれぞれで、ロープの張力 T が滑車 B を上向きに引く。一方、滑車 B には質量 m の物質にかかる重力 mg が下向きにかかる。力のつりあいから、 $2T - mg = 0$ 。従って $T = mg/2$ 。ロープの張力は、ロープのどこでも等しいから、君の手にかかる力も T 、すなわち $mg/2$ である。

答 24 君の手がロープを引く力は、君の手の筋肉の筋繊維の収縮から生じる。この現象は、筋繊維を構成する高分子の変形によって生じる。分子スケールの現象を支配する力は、ほとんどの場合、電気力である。従って、君の手がロープを引く力の根源は電気力である。

答 28 (1) バネの伸び (変位) x と、バネが押す力 F が比例する、という法則。(2) フックの法則を $F = -kx$ と書くときの係数 k 。(3) $k = -F/x$ なので、 F の単位 (すなわち N=kg m s⁻²) を x の単位 (すなわち m) で割れ

ばよい。答は、kg s⁻²。

答 29 力と変位が比例する、という、フックの法則が成り立つような力を弾性力という。弾性力だけで変形する物体を弾性体という。

答 30 塑性体とは、変形すると元に戻らない物体である。(弾性体は、力がかかると変形するが、かかる力が無くなれば元にもどる。)

答 31 質量 m の物体が地表にあるとき、バネの伸びが x_0 だったとする。バネの弾性力と (地球からの) 重力のつりあいは、 $-kx_0 + mg = 0$ 。一方、質量 m の物体が月面にあるとき、バネの伸びが x_1 だったとする。月面での (月から受ける) 重力は、問 16 より、地表での (地球から受ける) 重力の約 $1/6$ なので、バネの弾性力と (月からの) 重力のつりあいは、 $-kx_1 + mg/6 = 0$ 。この 2 つの式から mg を消去すれば、 $kx_1 = kx_0/6$ 。従って、 $x_1 = x_0/6$ 。従って、月面でのバネの伸びは、地表での約 $1/6$ 倍。

答 32 下向きに座標系をとる。左側のバネを A、右側のバネを B と呼ぶ。バネ A について、バネが下端に働く力を F 、伸びを x とすると、フックの法則より、

$$F = -kx \quad (2.25)$$

である。左右対称なので、まったく同じ式が、バネ B についても成り立つ。一方、質量 M の物体にかかる力は、2 つのバネから受ける力、つまり $2F$ と、重力 Mg である。物体が静止するには合力はゼロだから、

$$2F + Mg = 0 \quad (2.26)$$

これらの式から F を消去すると、 $-2kx + Mg = 0$ 。従って、 $x = Mg/(2k)$ である。バネが 1 本だけのときは、 $x = Mg/k$ なので (式 (2.16))、この結果は、 k が 2 倍になったとみなせる。

答 33 下向きに座標系をとる。上のバネを C、下のバネを D と呼ぶ。バネ C について、バネが下端に働く力を F_1 、伸びを x_1 とすると、フックの法則より、

$$F_1 = -kx_1 \quad (2.27)$$

である。バネ D についても同様に、バネが下端に働く力を F_2 、伸びを x_2 とすると、フックの法則より、

$$F_2 = -kx_2 \quad (2.28)$$

である。一方、質量 M の物体にかかる力は、バネ D が下端に働く力、つまり F_2 と、重力 Mg である。物体が

静止するには合力はゼロだから（力のつりあい），

$$F_2 + Mg = 0 \quad (2.29)$$

である。また、バネ D にかかる力は、バネ C が下端に働く力 F_1 と、物体がバネ D を引っ張る力（つまり重力）である。バネ D に関する力のつりあいから、

$$F_1 + Mg = 0 \quad (2.30)$$

これらの式から、 $Mg = -F_1 = -F_2 = kx_1 = kx_2$ 。従って、 $x_1 = x_2 = Mg/k$ である。2 本のバネの伸びの合計 x は、 $x = x_1 + x_2 = 2Mg/k$ 。バネが 1 本だけのときは、 $x = Mg/k$ なので（式 (2.16)），この結果は、 k が 1/2 倍になったとみなせる。

答 34 問 33 と同様に考えれば、バネ定数 k のバネを a 本、縦につなぐと、バネ定数は k/a となる。問 32 と同様に考えれば、バネ定数 k/a のバネを b 本、束ねる（並列につなぐ）と、バネ定数は bk/a となる。

答 35 (1) $E = kL/A$ で、 k の SI 単位は kg s^{-2} 、 L/A の SI 単位は $\text{m/m}^2 = \text{m}^{-1}$ なので、 E の単位は $\text{kg s}^{-2} \text{m}^{-1}$ 。順番を入れ替えて $\text{kg m}^{-1} \text{s}^{-2}$ などでも OK。なんと! これは Pa、すなわち圧力の SI 単位ではないか! (2) 約 $2.0 \times 10^{11} \text{ Pa}$ 。(3) まずこの鉄線のパネ定数 k を求める。 $L = 10 \text{ m}$ 、 $A = 3.14 \times (0.002 \text{ m}/2)^2 = 3.1 \times 10^{-6} \text{ m}^2$ 。従って、 $k = EA/L = 6.2 \times 10^4 \text{ kg s}^{-2}$ 。さて、質量 m の物体を吊り下げたときの伸び x は、

$$x = \frac{mg}{k} = \frac{10 \text{ kg} \times 9.8 \text{ m s}^{-2}}{6.2 \times 10^4 \text{ kg s}^{-2}} = 1.6 \times 10^{-3} \text{ m}$$

従って、1.6 mm（約 2 mm）伸びる。(4) 伸びはバネ定数に反比例する。バネ定数は断面積に比例する。従って、伸びは断面積に反比例する。従って、直径を半分にすると断面積が 1/4 倍になり、伸びは 4 倍になる。従って、伸びは 6.4 mm になる。(5) 銅のヤング率は $1.3 \times 10^{11} \text{ Pa}$ 。鉄の約 0.65 倍。伸びはバネ定数に反比例し、バネ定数はヤング率に比例する。従って伸びはヤング率に反比例する。従ってヤング率が 0.65 倍になれば伸びは 1/0.65 倍。従って、2.5 mm 程度になる。

答 36 (1) $\sigma = F/A$ より、 σ の SI 単位は、 $\text{kg m s}^{-2}/\text{m}^2 = \text{kg m}^{-1} \text{s}^{-2} = \text{Pa}$ 。(2) $\epsilon = x/L$ より、 ϵ の単位は、 $\text{m}/\text{m} = 1$ 。従って、単位無し!（無次元）

答 37 3 kg の物体にかかる重力の、斜面平行方向の大きさは、 $(3 \text{ kg}) \times g \times \sin(\pi/6)$ 。質量 m の物体にかかる、斜面平行方向の力の大きさは、 $mg \times \sin(\pi/3)$ 。これらはともにロープの張力と等しい。

ロープの張力 T は、ロープのどこでも等しいから、 $T = (3 \text{ kg})g \sin(\pi/6) = mg \sin(\pi/3)$ 。従って、 $m = (3 \text{ kg})g \sin(\pi/6) / \{g \sin(\pi/3)\} = \sqrt{3} \text{ kg} \doteq 1.7 \text{ kg}$

答 38 (1) 物体どうしが接触している場合、静止摩擦力 F_s と動摩擦力 F_m が、 $F_s \leq \mu N$ 、 $F_m = \mu' N$ となること。ここで、 N は物体どうしが互いに接触面に垂直に押し合う力。 μ, μ' は、それぞれ静止摩擦係数、動摩擦係数とよばれる定数。(2) クーロンの法則が上の式のようにかける時の、 μ や μ' のこと。(3) $\mu' = F_m/N$ であり、 F_m も N も力なので、その比である μ' は無次元。 μ も同様に無次元。

答 39 質量 m の物体に、斜面に平行にかかる重力（重力の斜面成分）は $mg \sin \phi$ 。これが静止摩擦力 F_s とつりあっている。いま、静止摩擦力は上限の状態なので、クーロンの摩擦の法則より、 $F_s = \mu N$ 。ここで N は物体と斜面の間に働く、斜面に垂直方向の力であり、これは重力の斜面垂直成分に等しい： $N = mg \cos \phi$ 。従って、 $F_s = \mu mg \cos \phi$ 。斜面に平行な方向の力のつりあいより、 $mg \sin \phi = F_s = \mu mg \cos \phi$ 。従って、 $\mu = mg \sin \phi / (mg \cos \phi) = \sin \phi / \cos \phi = \tan \phi$ 。

答 40 斜面に平行で上向き（上り坂方向）に x 軸をとる。物体をとりつける前のバネの自然長での末端位置を $x = 0$ とし、物体をとりつけた後のバネの末端位置を x とする。物体にかかる、摩擦力以外の力は、重力： $-mg \sin \theta$ 、弾性力： $-kx$ の 2 つである。この合力が、静止摩擦力 F_s と釣り合うのだから、

$$-mg \sin \theta - kx + F_s = 0 \quad (2.31)$$

である。ここで、垂直抗力は $mg \cos \theta$ なので、 $|F_s| \leq \mu mg \cos \theta$ である。従って、

$$|F_s| = |mg \sin \theta + kx| \leq \mu mg \cos \theta \quad (2.32)$$

である。従って、

$$-\mu mg \cos \theta \leq mg \sin \theta + kx \leq \mu mg \cos \theta \quad (2.33)$$

である。従って、

$$-\mu mg \cos \theta - mg \sin \theta \leq kx \leq \mu mg \cos \theta - mg \sin \theta$$

である。従って、

$$\frac{mg}{k}(-\mu \cos \theta - \sin \theta) \leq x \leq \frac{mg}{k}(\mu \cos \theta - \sin \theta)$$

第3章

仕事とエネルギー

注: この章を理解するには、「積分」を理解していることが必要。

本章では「エネルギー」について学ぶ。世の中には「エネルギー」という言葉が溢れているが、なぜそんなに「エネルギー」って大事なのだろうか？ ていうか、そもそも「エネルギー」って何なのだろうか？ それを理解するには、まず「仕事」という概念を定義しなければならない。そこから話をはじめよう。

3.1 仮想仕事の原理

前章で、体を滑車に吊るす話や、動滑車で物を持ち上げる話や、質量の異なる物体を2つの斜面上に置いてロープでつないで静止させる話などを学んで、君は不思議に思わなかっただろうか？ これらの話は、とりあえず力のつりあいや、作用・反作用の法則などは、満足させている。だが、物体をその重さの半分の力で持ち上げられる、というのは不思議だ。我々の日常感覚では、ある物を持ち上げるにはその重さと同じ力が必要では？ と、シンプルに考えてしまう。しかし実際の自然はそうではない。不思議だ。気持ち悪い。この不思議さをうまく説明し、この気持ち悪さから我々を救ってくれるシンプルな法則は無いのだろうか？

それが、ここで学ぶ「仮想仕事の原理」だ。これは「力のつりあい」を、もっと普遍的に述べた物理法則である。「力のつりあい」と等価だが、ある意味、それよりも深く、根源的なものを内包した法則だ。

例 3.1 動滑車で物を持ち上げる話 (問 23) では、滑車やロープや天井などが互いに及ぼす力（張力など）は別とすれば、関与する力は、君がロープを下向きに引く力 T と、物体に下向きにかかる重力 mg だ。ここで、仮想的に、君がロープを、ちょっとだけ引っばったとしよう (図 3.1)。このとき、滑車 B が Δx だけ持ち上がったとする。すると、当然、物体も同じだけ、つまり Δx だけ持ち上がる。このとき、ロープの動きをたどって考えれば、

君がロープを引っ張った長さは $2\Delta x$ であることがわかるだろう^{*1}。

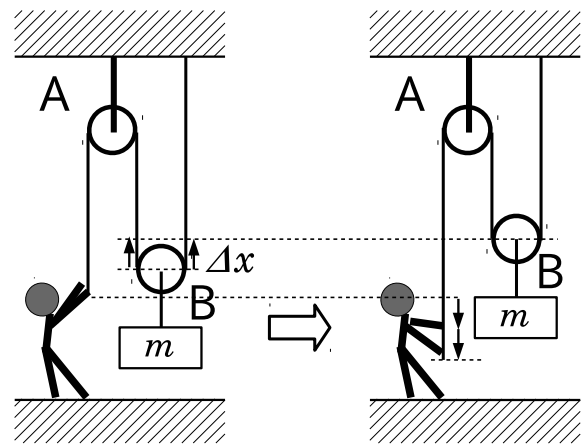


図 3.1 動滑車を使う持ち上げ。物体を Δx だけ上昇させるにはロープを $2\Delta x$ だけひく必要がある。

このとき、下向きに座標をとり、それぞれの力と、その力が働く点が動いた距離の掛け算を考え、それを合計してみる。

$$T(2\Delta x) + mg(-\Delta x) \quad (3.1)$$

ここで、第二項の $(-\Delta x)$ のマイナスは、座標の向き（下向き）とは逆の上向きに物体が移動することをあらわす。で、だまされたと思って、これを 0 とおいてみよう：

$$2T\Delta x - mg\Delta x = 0 \quad (3.2)$$

すると、

$$T = \frac{mg}{2} \quad (3.3)$$

という、正しい答えが得られる。これが仮想仕事の原理の例である。(例おわり)

仮想仕事の原理とは以下のようなものである：

^{*1} 滑車 B の左右端からそれぞれ長さ Δx だけ上の部分が、引っ張った後には無くなっている。これらの長さの合計は（左右にそれぞれ 1 つずつあるので） $2\Delta x$ である。

— 仮想仕事の原理 —

力がつりあっている系では、仮想的な微小変位に伴って外力のなす仕事の総和は0である。

「仮想的な微小変位」とは、上の例で言えば、君がロープを引く $2\Delta x$ や、物体が上に上がる Δx のことだ。「外力」とは、君が引く力と、物体にかかる重力のことだ。そして、

— 仕事の定義 —

「力と、その力が働く点が“力と同じ向き”に動いた距離との掛け算」を「仕事 (work)」という。

なんで「仕事」とか「仮想的な微小変位」とかの得体の知れぬものを持ち出してこんな「原理」を考えるのだろうか？ それは、こうすればうまく（シンプルに無矛盾に）いろんな物事を説明できるからだ。なぜこんな原理が成り立つのか、その理由は誰も知らない。自然はそうなっているのだ。

この例では、確かに動滑車のおかげで、ロープを引っ張る力は半分になったが、そのかわり、ひっぱる長さは倍になってしまった。つまり、同じ高さだけ持ち上げようとすると、かかる力が半分なら、ひっぱる長さ（距離）を倍にしなければならない。つまり、たとえ必要な力は動滑車などで変えることができて、力と距離の掛け算、つまり仕事は、変えることができない。それが自然の摂理なのだ。だから、仕事という概念が便利なのだ。

もうひとつの例を考えよう。前章で考えた、2つの斜面に物体を置いてロープでつないで静止させる話である。

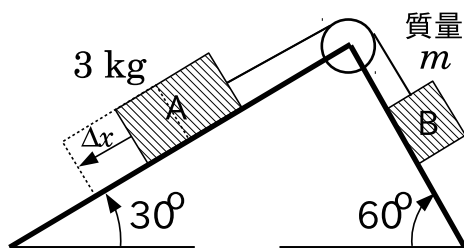


図 3.2 2つの斜面に載せられ、ロープでつながって静止する2つの物体。図 2.11 改変。

例 3.2 前章の問 37 において、物体 A を斜面に沿って左下向きに Δx だけ動かしてみよう（図 3.2）。すると、ロープにつながっている物体 B も、斜面に沿って左上向きに Δx だけ動くはずだ。このとき、物体 A に関して

重力がなす仕事は、 $(3 \text{ kg})g\{\sin(\pi/6)\}\Delta x$ である。一方、物体 B に関して重力がなす仕事は、 $-mg\{\sin(\pi/3)\}\Delta x$ である。マイナスがつくのは、物体 B が重力と逆方向（上方向）に移動したからだ。仮想仕事の原理より、

$$(3 \text{ kg})g\left(\sin \frac{\pi}{6}\right)\Delta x - mg\left(\sin \frac{\pi}{3}\right)\Delta x = 0 \quad (3.4)$$

ここから、 $m = \sqrt{3} \text{ kg}$ が出てくる。（例おわり）

問 42

- (1) 仕事とは何か？
- (2) 仕事の単位を SI 基本単位による組み立て単位で表せ。それを J (ジュール) と呼ぶ。
- (3) 仮想仕事の原理とは何か？

問 43 君は「てこの原理」を聞いたことがあるだろう。これは仮想仕事の原理から導くことができる。図 3.3 上のように、支点 S の上に、左右に長さ l_1, l_2 を持つ「てこ」が置かれ、左右それぞれの端にそれぞれ質量 m_1, m_2 の物体 1, 2 が載っている。これを、図 3.3 下のように、左側が下がるように、仮想的に小さな角 θ だけ下げる。このとき、

- (1) 左端がもとの状態から h_1 だけ下がり、右端がもとの状態より h_2 だけ上がるとすると、

$$h_1 = l_1 \sin \theta \quad (3.5)$$

$$h_2 = l_2 \sin \theta \quad (3.6)$$

となることを示せ。

- (2) 物体 1 における重力による仮想仕事は $m_1 g l_1 \sin \theta$ 、物体 2 における重力による仮想仕事は $-m_2 g l_2 \sin \theta$ となることを示せ。
- (3) 仮想仕事の原理より、次式（てこの原理）を導け：

$$m_1 l_1 = m_2 l_2 \quad (3.7)$$

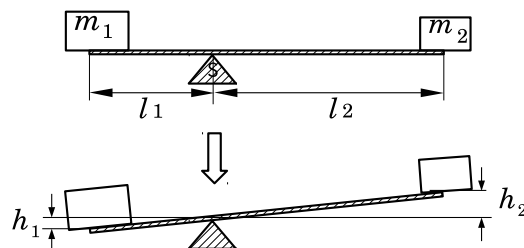


図 3.3 仮想仕事の原理からてこの原理を導く。

前章で述べたように、物体が静止しているとき、「力のつりあい」が実現している。しかし、実は、「大きさを持つ物体」についてはそれに加えて、上述の「てこの原理」に相当する、「モーメントのつりあい」というものも実現する。モーメントとは、簡略に言えば、ある点（支点）からの距離と、それに直交する力との積だ。そして、モーメントのつりあいとは、モーメントの合計が0になるということだ。高校物理を学んだ人は聞いたことがあるだろう。しかし、これをきちんと正しく記述し、理解するには、数学で「ベクトルの外積」というのを学ばねばならないので、今は詳述しない（後の章で学ぶ）。ただし、ここでは、「仮想仕事の原理は、力のつりあいだけでなく、モーメントのつりあいまでも含んだ、一般性の高い法則だ」ということを認識しておこう。

問 44 図 3.4 のようなジャッキについて、半径 r のハンドルを 1 回転すると、上載物は Δy だけ持ちあがるとする。摩擦は無視する。

- (1) ハンドルをまわすのに必要な力を F とする。ハンドルを 1 回転するとき、君の手がなす仕事は

$$2\pi r F \quad (3.8)$$

であることを示せ。

- (2) 上載物の質量を m とする。ハンドルを 1 回転するとき、重力のなす仕事は

$$-mg\Delta y \quad (3.9)$$

であることを示せ。

- (3) 次式を示せ：

$$2\pi r F - mg\Delta y = 0 \quad (3.10)$$

- (4) 次式を示せ：

$$F = \frac{mg\Delta y}{2\pi r} \quad (3.11)$$

- (5) $m = 1000 \text{ kg}$, $r = 0.2 \text{ m}$, $\Delta y = 0.003 \text{ m}$ のとき、 F はどのくらいか？

よくある質問 45 仮想仕事の原理の「仮想的な微小変位」はどうして仮想的である必要があるんですか？ ... 「微小変位」という考え方自体がそもそも仮想的です。バランスしている系に少しでも変化を加えたら、バランスが崩れるかもしれない。でも、「バランスを崩さない程度に小さな変位」というのが微小変位であって、そもそもそんなの厳密には現実的に無理じゃね？という気持ちがあるから「仮想」なのです。

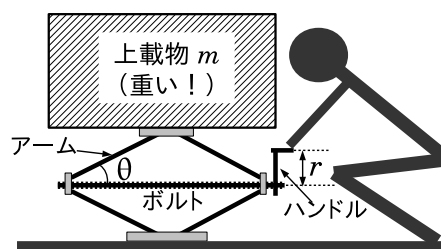


図 3.4 ジャッキで物を持ち上げる。

よくある質問 46 仮想仕事の原理に鳥肌が立ちました。自然の不思議さを感じざるを得ません。... このような原理を見つける旅が、学問としての物理学なのでしょう。

3.2 仕事とエネルギー

さて、仮想仕事の原理では、「仕事」という量が重要な働きをした。それにとどまらず、仕事は、物理学の全般にわたって、重要な役割を果たす概念だ。例として、図 3.1 の例をもういちど考えよう。君がロープを引くことで

$$2T\Delta x$$

という仕事をしたとき、同時に、質量 m の物体にかかる重力が

$$-mg\Delta x \quad (3.12)$$

という仕事をした。このとき、仮想仕事の原理から、両者の和は0である。

君がロープを引くことによって君は仕事をし、実際、疲れる。しかしその努力は、重力に逆らって物体が上昇した、という結果（重力による負の仕事）に残っている。この上昇した状態で物体に別のロープとか滑車とかてこをつければ、今度は物体が下がることによって、また別の物体を持ち上げることができるだろう。

このような話は、お金のやりとり に似ていないだろうか？ A 君が B 君に 1000 円を譲渡したとする。なぜそんなやりとりが起きたか、とか、それによって 2 人の関係はどうなるか、という興味もあるが、2 人以外の人にしてみれば、お金のやりとりは 2 人の間で完結している（2 人あわせた収支は 0 である）。そして、A 君からもらった 1000 円で、こんどは B 君が C さんから何かを買うことができる。

物理学における仕事とは、この話の「お金」のような役割をする。A 君、B 君、C さん、... とお金が手渡され

ていくように、君がロープを引くことでなした仕事は、後々まで、形を変えながら、様々なところに受け渡されるのだ。そのように、仕事を普遍化した量を、物理学では エネルギー という。エネルギーとは、仕事¹が形を変えた量、もしくは仕事に形を変えることができる量である。エネルギーは仕事と同じ次元を持ち、その単位は、SI 単位系では J である。

問 45 エネルギーとは何か?

エネルギーには、様々な形態がある。熱もエネルギーだ。なぜか? 例えば気体に熱を加えると膨張し、まわりのものを移動させることができる。つまり、仕事ができる。だから熱はエネルギーである。

光もエネルギーの一形態だ。なぜか? 太陽光を浴びると暖くなる、つまり熱を受け取ることができる。熱はエネルギーなので、光はエネルギーを運ぶのだ。

熱は、後に学ぶ「運動エネルギー」というタイプのエネルギーに帰着させて考えることができる。また、この章の後半で学ぶ「ポテンシャルエネルギー」というタイプのエネルギーもある。物質が化学反応するときに出る熱や光は、物質の分子レベルでのポテンシャルエネルギーの変化によるものである。

さて、仕事について、もう少し、丁寧に数学的に意味づけよう。

さきほど、仕事とは、「力と、その力が働く点が”力と同じ向き”に動いた距離との掛け算」であると述べたが、それが成立するのは、その点の移動中に、力がほとんど変化しないことが必要である(でなければ、どの時点での力を掛け算すればいいのかわからない)。では、移動中に力が次第に変化するような場合は、仕事はどのように定義されるのだろうか?

いま、ある物体に力 F がかかっているとき、それを力の向きに Δx だけ動かす。 Δx だけ動かす間には F は変化しないと考える。すると、その力がする仕事 ΔW は、

$$\Delta W = F \Delta x \quad (3.13)$$

である。これは仕事の定義だ。これをたくさん繰り返すことを考えよう。いま、座標上で、位置 x_0 にある物体を、位置 x_1 まで運ぶとする。この間、物体にかかる力は変化するかもしれないが、 x_0 から x_1 まではとても近くて、その間の力の変化は無視できるくらいに小さいとする(逆に言えば、力の変化が無視できるくらいに、 x_0 と x_1 を近づける)。つまり、この間の力は F_1 でほぼ一定

値とみなせる。このときの仕事 ΔW_1 は、上の式から、

$$\Delta W_1 \doteq F_1 \Delta x_1 \quad (3.14)$$

である($\Delta x_1 = x_1 - x_0$ とする)。位置 x_1 まで来た物体は、今度は x_1 のすぐ近くの位置 x_2 まで運ばれ、その間、物体にかかる力は F_2 で一定であるとする(ただし F_2 は F_1 と同じとは限らない)。このときの仕事 ΔW_2 は、同様に、

$$\Delta W_2 \doteq F_2 \Delta x_2 \quad (3.15)$$

である($\Delta x_2 = x_2 - x_1$ とする)。以下同様に、物体をすこしずつ x_3, x_4, \dots, x_n まで順次運び(n は正の整数)、各ステップでは物体に F_3, F_4, \dots, F_n というそれぞれ一定値の力がかかっていると、各ステップでの仕事は、

$$\begin{aligned} \Delta W_3 &\doteq F_3 \Delta x_3 \\ \Delta W_4 &\doteq F_4 \Delta x_4 \\ &\vdots \\ \Delta W_n &\doteq F_n \Delta x_n \end{aligned} \quad (3.16)$$

となる。これらを辺々で合計すれば、

$$\sum_{k=1}^n \Delta W_k \doteq \sum_{k=1}^n F_k \Delta x_k \quad (3.17)$$

となる。左辺は、物体を x_0 から x_n まで運ぶときの全体の仕事であり、これを W と書こう:

$$W \doteq \sum_{k=1}^n \Delta W_k \doteq \sum_{k=1}^n F_k \Delta x_k \quad (3.18)$$

ここで n を十分大きくとって、 x_1, x_2, \dots, x_n の分割を十分に細かくすれば、すなわち、式 (3.18) の極限として、

$$W = \lim_{\substack{n \rightarrow \infty \\ \Delta x_k \rightarrow 0}} \sum_{k=1}^n F_k \Delta x_k \quad (3.19)$$

を考えれば、積分の定義(数学の教科書参照)より、次式が成り立つ:

——— 仕事の定義(力が一定でない場合) ———

物体を位置 a から位置 b まで運ぶときの仕事は、

$$W = \int_a^b F(x) dx \quad (3.20)$$

ここで x_0 を a に、 x_n を b に、改めて書き換えた。 $F(x)$ は x の各点で物体が受ける力だ。この式 (3.20) は、仕事の定義式 (3.13) を、「力が次第に変化する場合」に拡張した(つまり、より一般性の高い)仕事の定義式である。

例 3.3 質量 m の物体が、地表付近で mg という大きさの重力を受けて、高さ h_0 から h_1 まで変化する。重力のなす仕事を求めよう。座標軸を上向きにとると、重力は、式 (2.4) より、

$$F = -mg \quad (3.21)$$

である。ここで右辺のマイナスは、重力が座標軸の向きとは逆向きであることを表す^{*2}。従って、式 (3.20) より、

$$\begin{aligned} W &= \int_{h_0}^{h_1} (-mg) dx \\ &= -mg(h_1 - h_0) = mg(h_0 - h_1) \end{aligned} \quad (3.22)$$

となる。もし $h_0 > h_1$ なら（つまり物体が下がる時）、 $W > 0$ である。もし $h_0 < h_1$ なら（つまり物体が上がる時）、 $W < 0$ である。つまり、重力に逆らって動く場合は、重力のする仕事はマイナスである、ということになる。（例おわり）

よくある質問 47 例 3.3 で、座標軸は下向きじゃダメですか？ ... いいですよ。その場合、 $F = mg$ となり、 $W = mg(h_1 - h_0)$ 。これは本文の結果とは符号が逆のように見えますが、今の場合は h が大きいと低いので、結局、物体が下がる時 $h_0 < h_1$ となり、そのとき W は正になる。という結論は変わりません。本文で座標を上向きにとったのは、「高いところほど h が大きい」ほうが、我々の空間認識では直感に素直だからです。

例 3.4 質量 m の物体 A が、質量 M の物体 B から万有引力を受けながら、物体 B からの距離が R_0 から R_1 まで変化する。このとき万有引力のなす仕事を求めよう。座標軸を物体 B から物体 A の向きにとると、万有引力は、式 (2.1) より、

$$F = -\frac{GMm}{x^2} \quad (3.23)$$

である。ここで右辺のマイナスは、万有引力が座標軸の向きとは逆向きであることを表す^{*3}。式 (3.20) より、

$$\begin{aligned} W &= \int_{R_0}^{R_1} \left(-\frac{GMm}{x^2} \right) dx = \left[\frac{GMm}{x} \right]_{R_0}^{R_1} \\ &= GMm \left(\frac{1}{R_1} - \frac{1}{R_0} \right) \end{aligned} \quad (3.24)$$

となる。（例おわり）

^{*2} 式 (2.4) では力の向きを考えず、力の大きさだけを考慮していたことに注意せよ。

^{*3} 式 (2.1) では力の向きを考えず、力の大きさだけを考慮していたことに注意せよ。

問 46 質量 m の質点を、地表から高さ h まで移動させるときに重力がなす仕事を E とする。

- (1) E を、式 (3.22) と式 (3.24) のそれぞれを用いて表せ（前者を E_1 、後者を E_2 とする。地球を半径 $R = 6370$ km、質量 $M = 5.972 \times 10^{24}$ kg の球とし、重力加速度を $g = 9.823 \text{ m s}^{-2}$ とする。物体に働く力は重力以外の力、例えば自転による遠心力などは考えない）。
- (2) $m=10$ kg として、 $h = 100$ m（野球のホームランボールの高度）、 $h = 10$ km（旅客機の飛行高度）、 $h = 1000$ km（人工衛星の高度）のそれぞれの場合で、 E_1 と E_2 を求めて比較せよ。有効数字 3 桁程度で。
- (3) h が大きい場合に E_1 と E_2 が違う値になるのはなぜか？

問 47 バネ定数 k のバネについての物体を、バネの自然状態を原点として位置 x_0 から位置 x_1 まで動かすときに、バネの弾性力がなす仕事 W は、

$$W = -\frac{1}{2} k (x_1^2 - x_0^2) \quad (3.25)$$

となることを示せ。ヒント：式 (2.14) より $F = -kx$ とし、式 (3.20) を使う。

問 48 気体を膨張させたり圧縮したりするときの仕事を考えよう。ある気体が、断面積 A のシリンダー（筒状の容器）に入っており、上面がピストンで蓋してある。鉛直上向きに x 軸をとり、シリンダーの底面で $x = 0$ とする。ピストンは x 軸にそって上下に動くことができる。最初、ピストン（つまり蓋）は $x = h$ にあって静止しているとする（図 3.5）。ピストンは十分に軽いとし、重力を無視する。気体の圧力を P とする。

- (1) 気体の体積 V は、 $V = Ah$ と表せることを示せ。
- (2) 気体がピストンに及ぼす力 F_1 は、

$$F_1 = PA \quad (3.26)$$

となることを示せ。

- (3) 外部からピストンにかかる力（それを外力という^{*4}）を F_2 とすると、

$$F_2 = -PA \quad (3.27)$$

^{*4} この外力が具体的に何によるものかは、ケースバイケースであり、ある場合は誰かが手で押さえ込んでいるのかもしれないし、ある場合はシリンダー外部に充滿する気体の圧力によるものかもしれない。この問題ではその詳細は気にしない。

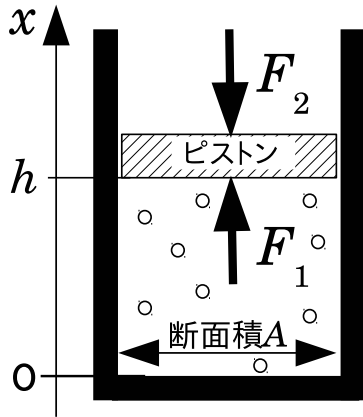


図 3.5 気体が入ったシリンダー。

となることを示せ。

- (4) 次に、ピストンをゆっくり動かして、 $x = h + dh$ の位置に移動させることを考えよう。 $dh > 0$ なら、気体は膨張し、 $dh < 0$ なら気体は圧縮される。 dh は微小であり、ピストンが $x = h$ から $x = h + dh$ まで動く間に F_1 や F_2 はほとんど一定であるとみなす。このとき、外力がなす仕事 dW は、

$$dW = F_2 dh = -PA dh \quad (3.28)$$

となることを示せ。

- (5) 体積の変化を dV とする。すなわち、ピストンの移動後に気体の体積は $V + dV$ になったとする。次式を示せ：

$$dV = A dh \quad (3.29)$$

- (6) 式 (3.28)、式 (3.29) より次式を示せ：

$$dW = -P dV \quad (3.30)$$

- (7) ピストンを大きく動かし、体積が V_1 から V_2 になるまで変化させることを考えよう。この間に外力がなす仕事 W は次式のようになることを示せ：

$$W = - \int_{V_1}^{V_2} P dV \quad (3.31)$$

- (8) ここで、気体は理想気体であるとしよう。つまり、理想気体の状態方程式：

$$PV = nRT \quad (3.32)$$

が成り立つとする (n はモル数、 R は気体定数、 T は絶対温度)。次式が成り立つことを示せ：

$$W = - \int_{V_1}^{V_2} \frac{nRT}{V} dV \quad (3.33)$$

- (9) ここでさらに、ピストンの移動は十分にゆっくりであり、その過程では温度 T は一定であるとする、次式が成り立つことを示せ：

$$W = nRT \ln \frac{V_1}{V_2} \quad (3.34)$$

- (10) 1 モルの理想気体を摂氏 0 度 (一定) で体積を半分まで圧縮するとき外力がなす仕事を求めよ。

式 (3.30) は、化学や熱力学で、非常によく出てくる式だ。ここでは外力がなす仕事を考えたが、気体 (の圧力) がなす仕事を考えると、それは外力がなす仕事の符号を逆にしたものである (なぜなら気体がピストンにおよぼす力は外力がピストンにおよぼす力の逆だから)。それを dW' とすると、 $dW' = -dW$ なので、

$$dW' = P dV \quad (3.35)$$

となる。この式もよく使われるので、式 (3.30) との違いをよく理解しておこう*5。

3.3 ポテンシャルエネルギー

さて、式 (3.20) をみると、仕事 W は、始点 a と終点 b の関数だ。特に、始点 a をどこかに固定して (それを基準点と呼ぼう)、 W を b だけの関数とみなし、改めて b を x と書けば、 W は x の関数 $W(x)$ だ。その意味は、「基準点から位置 x まで物体を運ぶときの仕事」である。この $W(x)$ の符号を変えたものを ポテンシャルエネルギー*6 という。すなわち、

ポテンシャルエネルギーの定義 (1)

$$U(x) = -W(x) \quad (3.36)$$

で定義される関数 $U(x)$ を、「ポテンシャルエネルギー」という。ここで $W(x)$ は、物体を基準点から位置 x まで運ぶときに、物体にかかっている力がなす仕事である。

例 3.5 上の例 3.3 で、地面を基準点とすれば、 $h_0 = 0$ となり、 h_1 を改めて h とおけば、 $W(h) = -mgh$ である。

*5 化学や熱力学では、教科書によって、外力のなす仕事を dW とするものと、気体がなす仕事 (すなわちここで dW' とあらわしたものを) dW とするものがあるので、気をつけよう。

*6 「位置エネルギー」とか、単に「ポテンシャル」と言うこともある。

このとき、ポテンシャルエネルギーは、式 (3.36) から、

$$U(h) = mgh \quad (3.37)$$

である。(例おわり)

つまり、物体を高く持ち上げるほど、重力によるポテンシャルエネルギーは、大きくなる。で、持ち上げられた物体は、てこや滑車を使えば、別の物体を持ち上げる「仕事」をすることができる。つまり、ポテンシャルエネルギーとは、力を受けている物体が、ある位置にあることによって持つエネルギー、つまり位置に付随するエネルギーである。

問 49 ポテンシャルエネルギーとは何か？

ところで、式 (3.36) の右辺の $W(x)$ は、物体にかかっている力がなす仕事だ。例えば例 3.5 では、重力がなす仕事がそれに相当する。ところが、現実的には、重力がかかっている物体が、ひとりでに重力に逆らって上に移動したりはしない。誰かが重力に逆らう力をかけて、その物体を持ち上げねば、物体は上に移動しない。そのような「誰かの力」がなす仕事 $W'(x)$ を考えると^{*7}、それは重力のなす仕事とは同じ大きさでありながら符号が逆である(力の向きが逆だから)。すなわち、 $W'(x) = -W(x)$ だ。それを使うと、ポテンシャルエネルギーは以下のように定義することもできる：

ポテンシャルエネルギーの定義 (2)

$$U(x) = W'(x) \quad (3.38)$$

で定義される関数 $U(x)$ を、「ポテンシャルエネルギー」という。ここで $W'(x)$ は、物体を基準点から位置 x まで運ぶときに、かかっている力に逆らって誰かがなす仕事である。

例 3.5 では、物体を地面から高さ h まで君が持ち上げるとすれば、君は物体に上向きに mg という大きさの力をかけ、上向きに h だけ移動させねばならないので、そのとき君がなす仕事は $W'(h) = mgh$ だ。従ってポテンシャルエネルギーは、式 (3.38) から、 $U(h) = mgh$ となり、それは式 (3.37) に一致する(つじつまが合っている)。

式 (3.36) と式 (3.38) は、互いに等価であり、どちらの定義を採用してもかまわない。これらの 2 つの定義は、

教育的な意味で、「わかりやすさ」に一長一短があるのだ。前者は、右辺にマイナスが出てくるのがちょっと不自然でわかりにくい。後者は、そこに実在している力とは別の力を誰かが発揮すると想定するという点でわかりにくい。そこで、これらの欠点を解消した第 3 の定義がある。すなわち、

ポテンシャルエネルギーの定義 (3)

$$U(x) = W''(x) \quad (3.39)$$

で定義される関数 $U(x)$ を、「ポテンシャルエネルギー」という。ここで $W''(x)$ は、物体を位置 x から基準点まで運ぶときに、物体にかかっている力がなす仕事である。

例 3.5 で、物体が高さ h から地面(基準点)まで落下することを考えれば、下向きに mg という大きさの重力がかかって、下向きに h だけ移動するので、そのとき重力がなす仕事は $W''(h) = mgh$ である。従ってポテンシャルエネルギーは、式 (3.39) から、 $U(h) = mgh$ となり、それは式 (3.37) に一致する(つじつまが合っている)。

もちろん、式 (3.36)、式 (3.38)、式 (3.39) は、互いに等価であり、どれを定義として採用してもかまわない(ちょっと考えれば、 $W''(x) = W'(x) = -W(x)$ であることがわかるだろう)。教科書や学者によって、どの定義を採用するかは、様々だ。しかし、物理学の実体としては、どれも同じことだ。

問 50 バネ定数 k のバネについての物体を考える。バネの自然状態を原点かつ基準点として、物体が位置 x にあるとき、バネの弾性力によるポテンシャルエネルギー $U(x)$ は次式のようになることを示せ。また、関数 $U(x)$ をグラフに描け。

$$U(x) = \frac{1}{2} kx^2 \quad (3.40)$$

問 51 質量 m の物体が、質量 M の物体から距離 R だけ離れているときの、万有引力によるポテンシャルエネルギー $U(R)$ を考える。無限遠 ($R = \infty$) を基準点とすると、 $U(R)$ は次式のようになることを示せ。また、関数 $U(R)$ をグラフに描け。

$$U(R) = -\frac{GMm}{R} \quad (3.41)$$

^{*7} ここで $W'(x)$ のダッシュは「微分」という意味ではない。単に $W(x)$ と区別するための印である。

実は、式 (3.41) は、式 (3.37) を一般化した式である。前者から後者を導出できるのだ。やってみよう。今、地球の質量を M 、地球の半径を R_0 、地表からの高さを h とすると、地表から高さ h にある、質量 m の物体のポテンシャルエネルギーは、式 (3.41) より、

$$\begin{aligned} U(R_0 + h) &= -\frac{GMm}{R_0 + h} = -\frac{GMm}{R_0} \frac{R_0}{R_0 + h} \\ &= -\frac{GMm}{R_0} \frac{1}{1 + h/R_0} \end{aligned} \quad (3.42)$$

となる。ここで、 $h \ll R_0$ 、すなわち、高さは地球の半径に比べて十分に小さいとすると、

$$\frac{1}{1 + h/R_0} \doteq 1 - \frac{h}{R_0} \quad (3.43)$$

である。これを上の式に代入すれば、

$$\begin{aligned} U(R_0 + h) &\doteq -\frac{GMm}{R_0} \left(1 - \frac{h}{R_0}\right) \\ &= -\frac{GMm}{R_0} + \frac{GMmh}{R_0^2} \end{aligned} \quad (3.44)$$

となる。ここで、地表での重力を考えれば、

$$\frac{GMm}{R_0^2} = mg \quad (3.45)$$

である。これを使って式 (3.44) を書き換えると、

$$U(R_0 + h) \doteq -\frac{GMm}{R_0} + mgh \quad (3.46)$$

となる。ここで、

$$U(R_0 + h) + \frac{GMm}{R_0} \quad (3.47)$$

を $U(h)$ と書き換えれば (これは基準点を地表面に変更することに相当する)、式 (3.37) を得る。

問 52 以下の値をそれぞれ求めよ。必要な数値は、各自、調べよ。

- (1) 地上 10 m の高さにある、質量 2 kg の物体に関する、重力のポテンシャルエネルギー。
- (2) 長さ 10 m、直径 2 mm の鉄線を 1 mm 伸ばしたとき、鉄線の弾性力のポテンシャルエネルギー。
- (3) 月に関する、地球の重力のポテンシャルエネルギー。

問 53 傾斜角 θ の滑らかな斜面に沿って、質量 m の物体を、斜距離 L だけ運びあげた。かかった仕事は？ また、ポテンシャルエネルギーの変化は？

ここでひとつ注意。ポテンシャルエネルギーという考え方は、物体にかかる力が保存力 (conservative force) という、ある種の力についてのみ、成り立つ。保存力とは、物体を移動させるとき、その力がなす仕事、移動の経路によらず、出発点と到達点だけで決まる、というような力である。

そもそも、ポテンシャルエネルギー $U(x)$ とは、ある特定の位置 (基準点) から位置 x まで物体を運ぶときに力がなす仕事を用いて定義された。力が保存力でなければ、この $W(x)$ が移動の経路によってまちまちの値を取りうるので、 $W(x)$ の値が x で一意的に定まらない。つまり、 $U(x)$ の値が一意的に定まらないのだ。

我々が考える力の多くは保存力である。数少ない例外は、摩擦力だ。摩擦力は保存力ではない。

問 54 保存力とは何か？

問 55 上の問について、以下のような回答があった。それぞれについて、正しいか、正しくないか、正しくないならどこがどのように間違っているかを述べよ。

- (1) 「物体を移動させるとき、どの経路をたどっても仕事が変わらないもの」
- (2) 「物体を移動させるとき、その力がなす仕事、移動の経路によらず、出発点と到達点だけで決まること」
- (3) 「物体を移動させるとき、その力がなす仕事、移動の経路によらず一定であるような力」
- (4) 「物体を移動させるとき、移動の経路によらず一定であるような力」

問 56 摩擦力が保存力でないことを証明しよう。

- (1) 物体を位置 x_0 から位置 x_1 に運ぶときの仕事を W_{01} とし、その逆戻り、つまり物体を位置 x_1 から位置 x_0 に運ぶときの仕事を W_{10} とする。もし力が保存力なら、 $0 = W_{01} + W_{10}$ となることを示せ (ヒント：物体を x_0 から x_0 まで運ぶ経路には、「何も動かさない」とか「 x_0 から x_1 までを往復する」などがある。)
- (2) 摩擦力では、上の式が成り立たないことを示せ。

問 57 傾斜角 θ の、動摩擦係数 μ' の斜面に沿って、質量 m の物体を、斜距離 L だけ運びあげた。かかった仕事は？ また、重力のポテンシャルエネルギーの変化は？

3.4 仕事率

単位時間あたりになされる仕事のことを、仕事率という。すなわち、時間 Δt の間に、仕事 ΔW が行われた場合、仕事率 P は、

$$P = \frac{\Delta W}{\Delta t} \quad (3.48)$$

と定義される。ここで、仕事率が時々刻々と変わるような場合についても対応できるように、 Δt として十分に短い時間をとると、

$$P = \frac{dW}{dt} \quad (3.49)$$

となる。つまり、仕事率は、仕事を時刻で微分したものである、と言ってもよい。

例 3.6 質量 m の物体を、 Δt の時間をかけて高さ Δh まで持ち上げる場合を考えよう。仕事 ΔW は $mg\Delta h$ となる。仕事率 P は、

$$P = \frac{\Delta W}{\Delta t} = \frac{mg\Delta h}{\Delta t} \quad (3.50)$$

となる。 Δt を 0 に近づけると、

$$P = mg \frac{dh}{dt} \quad (3.51)$$

となる。 dh/dt は物体を持ち上げる速度だ。これを v とおくと、

$$P = mgv \quad (3.52)$$

となる。(例おわり)

仕事率の単位は、SI 単位系で表すと、 $\text{kg m}^2 \text{s}^{-3}$ 、もしくは、同じことだが J s^{-1} だ。この単位をワットといい、 W とあらわす。

問 58 質量 2.0 kg の物体を、地表付近で、 3.0 m/s の速さで持ち上げる時の仕事率を求めよ。

式 (3.48) を見ると、ぶっちゃけ言えば仕事率は「仕事を時間でわったもの」であることがわかる。この関係を逆転すると、仕事率に時間をかけたら仕事になる、ということがわかる^{*8}。なので、仕事の単位として、「仕事率かける時間」という単位を使うこともできる。特によくあるのが、仕事率を W 、時間を h で表す、 W h (ワット時) という単位だ。これは仕事の単位、すなわちエネルギー

の単位だ。1 W の仕事率を 1 時間続けたときの仕事が、1 W h だ。

問 59 1 W h のエネルギーを、 J を単位として書きなおせ。

3.5 電位・電位差・電圧

小中学校理科で、よく「電圧」とか「ボルト」というのが出てきた。しかし実は、電圧の定義は、小学生や中学生が理解できるようなものではないのだ。あのときは電圧は「水路の高さ」とか「その差」とかいう喩え話で教えられたが、ここで本当の定義を君に教えよう。その前に以下の問題をやって欲しい:

問 60 原点に電荷 Q を持つ物体 1 があり、位置 x に、電荷 q を持つ物体 2 があるときの、クーロン力によるポテンシャルエネルギー $U(x)$ は次式になることを示せ:

$$U(x) = \frac{k Q q}{x} \quad (3.53)$$

ただし、無限遠を基準点とする。 k は式 (2.9) に現れる定数である。

前問のように、電氣的な力 (クーロン力) によるポテンシャルエネルギーは、電荷に比例する。そこで、電氣的なポテンシャルエネルギーについては、それをその場所の電荷で割った値で表現することが多い。それを電位と呼ぶ。つまり、電位とは「その場所の単位電荷あたりのポテンシャルエネルギー」と定義するのだ。

電位の単位は、SI 単位系では J C^{-1} である。これを V と書き、「ボルト」と呼ぶ。

空間の 2 点の間の、電位の差を電位差という。電位差の SI 単位は電位と同じく V である。

問 61 問 60 の続き。

- (1) 物体 1 が位置 x に作る電位を式であらわせ。
- (2) 100 年ほど前の理論 (ボーアの原子模型という) では、水素原子は、陽子から $0.529 \times 10^{-10} \text{ m}$ の付近に電子があると考えられていた。その付近の電位は何 V か?

空間の 2 つの点の間を仮想的に荷電粒子を移動させるとき、かかる仕事を電荷で割ったもの (単位電荷あたりの仕事) を、その 2 点間の電圧 とか 起電力 という (定

^{*8} 正確には、仕事率を時刻で積分したものが仕事になる。

義)。電圧や起電力の SI 単位も V である。

多くの場合、電位差と電圧（起電力）は同じだ。ただし、電位差と電圧が異なることもある。それは、電気的な力がクーロン力だけでなく、磁場の時間的变化によってももたらされる場合である。その場合は、電気的な力は保存力ではなくなる（経路によって仕事が変わる）。その詳細については、君の現在の数学力では理解できないので、本書では述べない。とりあえず、そういう場合は、電位差よりも電圧や起電力という言葉が用いられる、ということの頭の片隅に置いておこう。

問 62

- (1) 電位とは何か？
- (2) 電圧とは何か？
- (3) 電位の単位を SI 単位系で述べよ。
- (4) 2.0 V の電位に 0.30 C の電荷があるときのポテンシャルエネルギーを求めよ。
- (5) 1.0 V の電位に電子が 1 個あるときのポテンシャルエネルギーを求めよ。

問 62(5) で考えた、1 V の電位にある電子 1 個のポテンシャルエネルギーの絶対値である 1.602×10^{-19} J は、1 eV と呼ばれる。eV は エレクトロン・ボルト という新たな単位であり、電子や原子や分子の様々な形のエネルギーを表現するのによく使う。特に化学でよく使う。

問 63 原子核崩壊で出る放射線に、 α 線、 β 線、 γ 線というのがある。 α 線はヘリウム原子核が飛んでくるもの、 β 線は電子が飛んでくるもの、そして γ 線は光の一種（ただしとても波長が短い）だ。ヘリウム原子核の質量を m_{He} とし、電子の質量を m_e とする。

- (1) m_{He} を求めよ。ヒント：He の質量数は 4。つまり 1 mol の He の質量は 4 g だ。He 原子核は He 原子よりも、電子 2 個ぶん軽い、その差は無視してよい。
- (2) 放射性元素プルトニウム 239 の崩壊で発する α 線のエネルギーは、 α 粒子 1 個あたり 5.5 MeV である。このときの α 粒子の速さを求めよ。
- (3) 放射性元素セシウム 137 の崩壊で発する β 線のエネルギーは、電子 1 個あたり 510 keV である。このときの電子の速さを求めよ。なお $m_e = 9.1 \times 10^{-31}$ kg である。

ヒント：ここでいう「エネルギー」は運動エネルギーである。

3.6 電流・電力・電力量

P.12 で、電荷とは何かを学んだ。ここでは「電流」を学ぼう。導線の中などで、ある場所を多くの荷電粒子が次々と通り過ぎるとき、通り過ぎた荷電粒子の電荷の総量を、それにかかった時間でわったものを 電流 という（定義）。すなわち、単位時間あたりに通り過ぎる電荷が電流である。

定義から、電流は、C/s（クーロン毎秒）という単位で表現できることがわかる。C/s という単位を A（アンペア）という*9。

電気的な力によって行われる仕事の仕事率（単位時間あたりの仕事）を 電力 という（定義）。特に、電圧 V の 2 点間を電流 I が流れているときの仕事率は VI となる。なぜか？ 電荷 q が電圧 V の 2 点間を移動するときの仕事は qV である（それが電圧の定義!）。それを時間 Δt で行ったなら、仕事率は $qV/\Delta t$ だ。ところが、 $q/\Delta t$ は、移動した電荷を時間で割ったものだから、それは電流 I である。従って、仕事率は VI 。

V の単位は V、つまり J/C であり、 I の単位は A だから、 VI の単位は J A/C である（ここで出てきた、斜字体の V と立体の V は、互いに意味が違うことに君は気づいているだろうか？ SI 単位系の規定では、斜字体は変数、立体は単位を表す約束だった!）。ここで、 $C = A \cdot s$ であることを思い出すと、J A/C は結局、J/s、つまり W（ワット）になる。うまくつじつまが合っているではないか!

電気的な力によって行われる仕事を電力量という。電力量を時間で微分したもの（単位時間あたりの電力量；つまり電気的な力によって行われる仕事率）が電力である。電力を時間で積分すると電力量になる。電力量は仕事なので、その SI 単位は J（ジュール）である。しかし、一般社会では、先述の W h（ワットアワー）という単位がよく使われる。

問 64 電流・電力・電力量を、それぞれ簡潔に説明せよ。また、それぞれの SI 単位を述べよ。

問 65 電池の容量（電荷）を表すのに、A h という単位がよく使われる。ある自動車のバッテリー（8000 円くらい）は、36A h の容量だった。

*9 A は SI 基本単位のひとつなので、本来は $C = A \cdot s$ が C の定義なのだが、君は $A = C/s$ が A の定義だと思っておくほうがわかりやすいだろう。

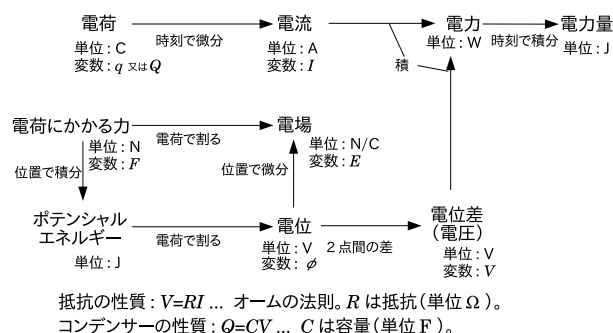


図 3.6 電気に関する概念の関係図。斜字体と立体の区別に注意せよ。斜字体は変数を、立体は単位を表す。変数には、よく使われる記号を示すが、人によって例外もあることに注意せよ。単位の読み方は、A: アンペア, C: クーロン, F: ファラド, J: ジュール, N: ニュートン, V: ボルト, W: ワット, Ω : オーム

- (1) このバッテリーが流すことのできる電荷の総量を求めよ。
- (2) このバッテリーができる仕事の総量を求めよ。ただし、このバッテリーも含めて、自動車のバッテリーはほとんどが電圧 12 V である。
- (3) ある車はこのバッテリーを積んでいる。この車のヘッドランプは LED であり、片方が 23 W の消費電力である。左右両方のヘッドランプをつけっぱなしにしたら、どのくらいの時間でバッテリーは空っぽになるか?

演習問題 7 昔は水田に水を入れるのに、足踏み水車というものを使った。足踏み水車を使って、灌漑水路から水田 (面積 1 a) に水を入れようと思う。灌漑水路の水面と水田の間には畦があり、畦は水路水面よりも 50 cm 高い。この水田に、水深 5 cm になるまで水を 5 時間で汲み上げる場合の仕事率を求めよ。

演習問題 8 頂角 60 度の円錐があり、その中腹に質量 100 g の円形の鎖が水平にかぶさっている。鎖にかかる張力の大きさを求めよ。ただし円錐表面と鎖の間には摩擦は無い (つるつるしている) とする。重力加速度は $g=9.8 \text{ m s}^{-2}$ とする。

演習問題 9 1 辺の長さが L のピラミッド (正八面体の上半分) を地表付近に建設するのに必要最小限のエネルギー E を求めよう。ピラミッドを構成する石の密度を ρ とする。ピラミッドは隙間なくびっちり石が詰まってできているものとする。ピラミッドの自重などで

石は変形したりしないとする。求める精度は有効数字 2 桁程度とする。(1) ピラミッドの高さ H を L を用いて表わせ。(2) 高さ h から $h + dh$ にある部分の体積 dV を、 H , h , dh を用いて表わせ ($h < H$ とし、 dh は微小量とする)。(3) その部分の質量 dM を求めよ。(4) その部分を地表面から持ち上げるのに必要な仕事 dE を求めよ。(5) 前小問の結果を、 $h = 0$ から $h = H$ まで積分して、 E を L, g, ρ を用いて表わせ。

3.7 解答

答 42

- (1) 力と、その力が働く点が力と同じ向きに動いた距離との、積。
- (2) $J = \text{N m} = \text{kg m}^2 \text{ s}^{-2}$ 。
- (3) 力がつりあっている系では、仮想的な微小変位に伴って外力のなす仕事の総和は 0 である。

答 43

- (1) 略 (ヒント: 直角三角形の高さを三角関数で表す)。
- (2) 物体 1 について、重力は鉛直下向きで $m_1 g$ である。その重力が働く点である物体 1 の、重力方向 (鉛直下向き) への変位^{*10}は h_1 であり、それは前問より $l_1 \sin \theta$ である。従って、重力が物体 1 にした仕事は $m_1 g h_1 = m_1 g l_1 \sin \theta$ 。

物体 2 については、重力は鉛直下向きで $m_2 g$ である。物体 2 の重力の方向 (鉛直下向き) への変位は $-h_2$ である (マイナスがつくのは、重力とは逆向きだから)。それは前問より $-l_2 \sin \theta$ である。従って、重力が物体 2 にした仕事は $-m_2 g h_2 = -m_2 g l_2 \sin \theta$ 。

- (3) 仮想仕事の原理より、前問の 2 つの仕事の和は 0 だから、 $m_1 g l_1 \sin \theta - m_2 g l_2 \sin \theta = 0$ 。従って、 $m_1 l_1 = m_2 l_2$ 。

答 44

- (1) ハンドルをまわす距離は $2\pi r$ 。ハンドルを回す力は、ハンドルの移動 (回転) の方向と常に一致しており、その大きさは F 。したがって、ハンドルを 1 回転させるときに回す手がなす仕事は、 $2\pi r F$ 。
- (2) ハンドルが 1 回転するときに、上載物は Δy だけ持ち上がる。このとき、上載物にかかる重力は、下向き (上載物の移動とは逆方向) に mg の大きさでかかるから、重力のなす仕事は、 $-mg \Delta y$ となる。

^{*10} 位置の変化量のことを変位 (displacement) という。

- (3) ハンドルが1回転することを微小な変位とみなせば、仮想仕事の原理より、ハンドルを回す手がなす仕事と重力がなす仕事の和は0である。従って与式が成り立つ。
- (4) 前小問の式を $F =$ のように変形すればよい。
- (5) 前小問の式に各数値を代入して、23 N。これは約2 kgの物体にかかる重力、つまり、2 リットル入りのペットボトルを直接持ち上げる程度の力である。ジャッキを使えば、それで1000 kgの上載物を持ち上げることができるのだ。

答 45 仕事が形を変えた量、もしくは仕事に形を変えることができる量。

答 46 (略解)

- (1) $E_1 = mgh$, $E_2 = GMm\{1/R - 1/(R+h)\}$
- (2) $h = 100 \text{ m}$ のとき, $E_1 = 9.82 \times 10^3 \text{ J}$, $E_2 = 9.82 \times 10^3 \text{ J}$ (有効数字3桁では同じ)。 $h = 10 \text{ km}$ のとき, $E_1 = 9.82 \times 10^5 \text{ J}$, $E_2 = 9.81 \times 10^5 \text{ J}$ 。 $h = 1000 \text{ km}$ のとき, $E_1 = 9.82 \times 10^7 \text{ J}$, $E_2 = 8.49 \times 10^7 \text{ J}$ 。
- (3) (略)

答 47 仕事の定義式 (3.20) で $F(x) = -kx$ とすれば,

$$W = \int_{x_0}^{x_1} (-kx) dx = -\frac{1}{2}k(x_1^2 - x_0^2) \quad (3.54)$$

答 48

- (1) シリンダーの内部は、底面積 A 、高さ h の筒形の空間である。従ってその体積は $V = Ah$ 。
- (2) 気体は圧力 P でピストンを押し上げようとする。一般に、一定の圧力がかかる面には、圧力かける面積という大きさの力がかかる。従って、この場合は気体はピストンを PA という力で押し上げようとする。いま、座標軸を鉛直上向きにとっているの、上向きが正。従って、 $F_1 = PA$ 。
- (3) ピストンは静止しているので、ピストンにかかる力はつりあっていなければならない。従って F_1 を打ち消す力が外から働いているはずである。従って外力は $F_2 = -F_1 = -PA$ 。
- (4) ピストンの移動がゆっくり (つまりほとんど静止しているということ) なので、力のつりあいは維持されと考えてよい。外力がなす仕事 dW は、力 F_2 と変位 dh の積である。従って、

$$dW = F_2 dh = -PA dh \quad (3.55)$$

- (5) 変化前の気体の体積は $V = Ah$ 、変化後の気体の体積は $V + dV = A(h + dh)$ である。これらの式より、 $dV = A dh$ を得る。
- (6) 略。
- (7) 略。(式 (3.30) を積分すればよい。)
- (8) 状態方程式より、 $P = nRT/V$ 。これを前小問の結果に代入すれば与式を得る。
- (9) 温度一定なので、前小問の式より、

$$\begin{aligned} W &= -nRT \int_{V_1}^{V_2} \frac{dV}{V} = -nRT [\ln |V|]_{V_1}^{V_2} \\ &= -nRT \ln \frac{V_2}{V_1} = nRT \ln \frac{V_1}{V_2} \end{aligned} \quad (3.56)$$

注: 体積 V_1, V_2 はいずれも正なので、対数の中の絶対値記号は結局は不要になる。

- (10) $n = 1 \text{ mol}$, $R = 8.31 \text{ J mol}^{-1} \text{ K}^{-1}$, $T = 273 \text{ K}$, $V_1/V_2 = 2$, $\ln 2 = \log_e 2 \doteq 0.693$ を前小問に代入し、 $W = 1570 \text{ J}$ 。(有効数字3桁)

答 49 ある基準点から任意の位置 x まで物体を運ぶときの仕事を $W(x)$ とするとき、 $U(x) = -W(x)$ で定義される関数 $U(x)$ をポテンシャルエネルギーという。

答 50 式 (3.25) で、 $x_0 = 0$, $x_1 = x$ とおきなおせば、

$$U(x) = -W(x) = \frac{1}{2}kx^2 \quad (3.57)$$

グラフは図 3.7 のようになる。

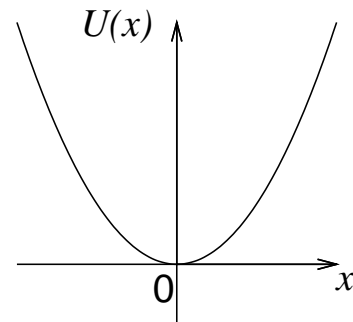


図 3.7 バネのポテンシャルエネルギー

答 51 式 (3.24) で、 $R_0 = \infty$, $R_1 = R$ とおきなおせば、

$$U(R) = -W(R) = -\frac{GMm}{R} \quad (3.58)$$

グラフは図 3.8 のようになる。

答 52

- (1) 式 (3.37) において、 $m = 2 \text{ kg}$, $g = 9.8 \text{ m s}^{-2}$,

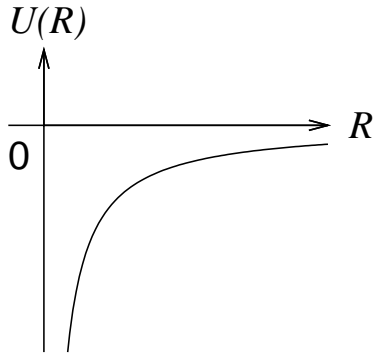


図 3.8 万有引力のポテンシャルエネルギー

$h = 10 \text{ m}$ とすれば, $U = 196 \text{ J} \approx 200 \text{ J}$

- (2) 問 35(3) より, バネ定数 k は, $k = 6.2 \times 10^4 \text{ kg s}^{-2}$.
また, $x = 0.001 \text{ m}$ として, これらを式 (3.40) に代入すれば, $U = 0.031 \text{ J}$.

- (3) 地球の質量を M , 月の質量を m , 地球と月の距離を x とすれば,

$$G = 6.7 \times 10^{-11} \text{ m}^3 \text{ kg}^{-1} \text{ s}^{-2}$$

$$M = 6.0 \times 10^{24} \text{ kg}$$

$$m = 7.3 \times 10^{22} \text{ kg}$$

$$x = 4.0 \times 10^8 \text{ m}$$

これらを式 (3.41) に代入して, $U = -7.3 \times 10^{28} \text{ J}$.
(ただし無限遠を基準点とする。)

答 53 物体にかかる重力を, 斜面に垂直な方向と, 斜面に平行な方向に分解して考える。前者は斜面から受ける垂直抗力と釣り合って打ち消しあう。後者は

$$mg \sin \theta \quad (3.59)$$

となる (θ は傾斜角)。誰かがこれと等しい大きさの力を斜面に平行で上向きにかけると物体が斜距離 L だけ移動する。そのとき「誰か」が行った仕事は,

$$mgL \sin \theta \quad (3.60)$$

となる。これはポテンシャルエネルギーの変化にも等しい。

答 54 保存力とは, 物体をある位置から別の位置に運ぶときにその力がなす仕事は, 移動の経路によらずに一定である, というような力である。

答 56

- (1) 物体を位置 x_0 から位置 x_1 に運んで位置 x_0 に戻す, という移動も, 物体を位置 x_0 に置いたまま動

かさない, というのも, とともに, 「物体を位置 x_0 から位置 x_0 に移動する」経路である。前者の仕事は $W_{01} + W_{10}$ であり, 後者の仕事は 0 である (移動距離が無いから)。従って, もし力が保存力なら, $W_{01} + W_{10} = 0$ である。

- (2) 動摩擦力の大きさを F_m とし, x_0 と x_1 の間の距離を X とすると, $W_{01} = -F_m X$ である。ここでマイナスがつくのは, 力の向きが移動方向と逆だからである。同様に, $W_{10} = -F_m X$ である。従って, $W_{01} + W_{10} = -2F_m X$ となり, 前小問の式は成り立たない。従って摩擦力は保存力でない (背理法)。

答 57 問 53 とほぼ同様だが, この場合, 物体には, 斜面平行・下向きに, $\mu' mg \cos \theta$ という摩擦力もかかる。そのぶん「誰か」はがんばらねばならない。結果的に, 「誰か」が斜面に平行で上向きにかけける力は,

$$mg \sin \theta + \mu' mg \cos \theta \quad (3.61)$$

となる。物体は斜距離 L だけ移動するので, 「誰か」が行った仕事は,

$$mgL \sin \theta + \mu' mgL \cos \theta \quad (3.62)$$

となる。ところが, 摩擦力は保存力ではないので, ポテンシャルエネルギーの増減には関与しない。従って, ポテンシャルエネルギーの増加は, $mgL \sin \theta$ 。

答 58 式 (3.52) に, $m = 2.0 \text{ kg}$, $g = 9.8 \text{ m s}^{-2}$, $v = 3.0 \text{ m s}^{-1}$ を代入すると, 有効数字 2 桁で $P = 59 \text{ W}$ 。

答 59 $1 \text{ W h} = 1 \text{ J s}^{-1} \times 3600 \text{ s} = 3600 \text{ J}$

答 60 原点に電荷 Q を固定し, x 軸上に電荷 q を動かす。位置 x に電荷 q があるとき ($0 < x$ とする), それに働く力 F は, 式 (2.9) より,

$$F = \frac{k Q q}{x^2} \quad (3.63)$$

である。無限遠から位置 x まで電荷 q を動かすときに, この力がなす仕事は,

$$W = \int_{\infty}^x F dx = \int_{\infty}^x \frac{k Q q}{x^2} dx = \left[-\frac{k Q q}{x} \right]_{\infty}^x = -\frac{k Q q}{x} \quad (3.64)$$

となる。式 (3.36) より,

$$U(x) = -W = \frac{k Q q}{x} \quad (3.65)$$

となる (証明終わり)。

注: 式 (3.64) で, 積分変数 x (つまり dx の x) と, 積分区間の上端の x (つまり \int_{∞}^x の x) が「かぶっている」が, これは別物と解釈する。すなわち積分変数 x は, ほんとうは X とか s とか, 何か適当に x 以外の記号で置くのが数学的には正しいところだが, それはめんどくさいしわかりにくくなるので, 横着して x のままにしておくのだ。このような書き方は物理学でよく出てくる。

答 61

- (1) 式 (3.53) を位置 x における電荷 q で割ればよい。

$$\frac{U(x)}{q} = \frac{kQ}{x} \quad (3.66)$$

- (2) $x = 0.529 \times 10^{-10} \text{ m}$ とする。陽子の電荷は電荷素量なので $Q = 1.602 \times 10^{-19} \text{ C}$ 。また, 式 (2.9) より, $k = 8.987 \times 10^9 \text{ N m}^2 \text{ C}^{-2}$ 。これらを式 (3.66) に代入すると, 27.2 V 。

答 62

- (1) 単位電荷あたりのポテンシャルエネルギー
 (2) 空間の 2 つの点の間を仮想的に荷電粒子を移動させるとき, かかる仕事を電荷で割ったもの。多くの場合, 2 点間の電位の差 (電位差)。
 (3) J C^{-1} , 言い換えると, V 。
 (4) 0.6 J
 (5) 電子の電荷は $-1.602 \times 10^{-19} \text{ C}$ なので, それが 1 V の電位にあると, $-1.602 \times 10^{-19} \text{ J}$ 。

答 63

- (1) $m_{\text{He}} = 4 \text{ g} / (6.0 \times 10^{23}) = \dots = 6.7 \times 10^{-27} \text{ kg}$ 。
 (2) α 線のエネルギーを E , 速さを v とすると, $\frac{1}{2} m_{\text{He}} v^2 = E$ 。従って, $v = \sqrt{2E/m_{\text{He}}} = \dots = 1.6 \times 10^7 \text{ m s}^{-1}$ 。
 (3) β 線のエネルギーを E , 速さを v とすると, 上と同様に, 従って, $v = \sqrt{2E/m_e} = \dots = 4.2 \times 10^8 \text{ m s}^{-1}$ 。ところが, これは光速 $c = 299792458 \text{ m/s}$ より大きい! 世の中には光より速く動くものは無いということがアインシュタインの特殊相対性理論で明らかにされている。従って, この結果はおかしい。このくらい速い運動になると, Newton 力学は通用しない。特殊相対性理論を使って計算し直すと (その詳細は今ではわからなくてよい), $v = 2.6 \times 10^8 \text{ m s}^{-1}$ となる。

注: eV を J に直して計算しないと, 正しい答にはならない。単位を埋め込んで計算すれば, それに気がつくはず!

答 65

- (1) $36 \text{ A h} = 36 (\text{C/s}) \times 3600 \text{ s} = 130000 \text{ C}$ 。
 (2) $12 \text{ V} \times 36 \text{ A h} = 12 \times 36 \times 3600 \text{ V A s} = 1.6 \times 10^6 \text{ J}$ 。
 (3) 左右両方で 46 W 。 12 V の電圧では, $46 \text{ W} / (12 \text{ V}) = 3.8 \text{ A}$ の電流が流れる。 $36 \text{ A h} / (3.8 \text{ A}) = 9.4 \text{ h}$ 。およそ 9 時間で空になる。これが LED でなく, 普通のハロゲンランプなら, もっと短い時間 (数時間) で空になってしまう。

よくある質問 48 本当なのかなーって疑いたくなる値が答えだったり, 物理ってなんなんだー... 皆さんの既成概念を壊すために, そういうのを狙って問題を作ってます。

よくある質問 49 代入する値がほしいです。... そのうち, 文字 (変数) だけの答えにも慣れますよ。そっちのほうが, いろんな量どうしの関係がわかりやすい。

よくある質問 50 「示せ」という問題は文も必要ですか? 言葉での説明が苦手です。... 言葉の定義をしっかりと把握してください。その上で, まずは自分自身で納得できる説明を探すことが重要。

よくある質問 51 なんとなくわかるけど, 問題解くときにわけわからなくなります。... だから問題演習は大事。しっかり考えて, わからなければ解答を読んで, また考えて下さい。

第4章

運動の三法則

注: この章を学ぶには「微分」「ベクトル」「微分方程式」を理解していることが必要である。

これから我々は物体の運動に関する物理学を学ぶ。「物体の運動」とは、物体の位置や向きや形状が時刻とともに変化する様子である。とはいっても、当面は「位置」だけに着目し、「向き」や「形状」については難しすぎるので後回しにする。そのために我々はまず物体を質点としてモデル化し、質点の運動を考える。

よくある質問 52 てことは、物体が変形したり回転したりする様子はわからない、ってことですか? そんなのしょぼ過ぎません? ... 大丈夫。質点の運動をきっちり理論化できたら、それを使って変形や回転なども理論化できます(そのうち学びます)。物事には順序というものがあるので。

というわけで、我々の当面の目標は、質点の位置を時刻の関数として表すことだ。それには、ベクトル、微分、積分という3つの数学を駆使する。まずその準備をしよう。

4.1 ベクトルとスカラー

中学校理科で学んだように、速度や力は、「向き」と「大きさ」を持つ。このように、向きと大きさを持つ量のことを「ベクトル」と呼ぶ(定義)。それに対して、大きさだけを持ち向きを持たない(ただしプラスとマイナスはあってもよい)ような量を「スカラー」と呼ぶ(定義)。例えば力はベクトルだが、「力の大きさ」はスカラーである。

ベクトルを記号で表すときは、高校では \vec{F} とか \vec{v} のように、「アルファベットに上付き矢印」を使っていたが、大学では、 \mathbf{F} とか \mathbf{v} のように、「アルファベットの太字」を使う(慣習)。それに対して、スカラーは、上矢印もつけず、太字でもない、普通の細字のアルファベットで表す(慣習)。

ベクトルとスカラーをきっちり区別しないと、数学的な取り扱いで大きなミスをする可能性がある。そこでこのように、

慣習

ベクトルの記号は太字
スカラーの記号は細字

で書き分けるのである。

物理学では、質点の位置もベクトルとして表す。すなわち、まず空間のどこかに「原点」を設定し、この原点から見た「向き」と「距離」で、位置を表す。そう考えるといういろいろ便利だからである。

そのようなベクトルを「位置ベクトル」という。位置ベクトルは、慣習的に \mathbf{r} で表すことが多い。

ベクトルは、3次元空間の中の座標軸の方向、すなわち x 方向、 y 方向、 z 方向のそれぞれの大きさ(の組み合わせ)として表すこともできる。そういうのを「成分」という。例えば、 \mathbf{F} を力のベクトルとすると、これは

$$\mathbf{F} = (F_x, F_y, F_z) \quad (4.1)$$

のように、3つの成分 F_x, F_y, F_z の組み合わせで表すことができる。

ベクトルの成分はスカラーである(向きがあらかじめ決められているので、大きさしか意味を持たない)。従って成分は細字で書かねばならない。つまり、式(4.1)の左辺の \mathbf{F} は太字であり、右辺の F_x, F_y, F_z は細字である。式(4.1)を、

$$\mathbf{F} = (F_x, F_y, F_z) \quad \text{と書いてはダメだし、}$$

$$\mathbf{F} = (\mathbf{F}_x, \mathbf{F}_y, \mathbf{F}_z) \quad \text{と書いてもダメ}$$

である。

よくある質問 53 力はベクトルなので、太字で書かなきゃダメなんですよ。でも、前の章では、 $F = -kx$ みたいに、細字で書いてましたが...? ... それはバネに関するフックの法則ですね。バネは普通、1方向にしか伸び縮みしません。その方向に x 軸をとり、それに垂直な方向に y 軸、 z 軸をとれば、力 \mathbf{F}

は

$$\mathbf{F} = (F_x, 0, 0) \quad (4.2)$$

と書けますね (x 軸方向以外の成分はいつもゼロ)。てことは、 y 方向や z 方向のことを気にする必要が無いから、改めて F_x を F と書いて、

$$\mathbf{F} = (F, 0, 0) \quad (4.3)$$

と書いても差し支えありません。で、この x 成分を取り出したのが、 $F = -kx$ の左辺の F なのです。すなわち、常にひとつの方向 (ひとつの直線の上) に限定された現象を考える場合は、その方向での成分だけをいきなり取り出して、細字で書くのが普通です。これは慣習的なことですが、学生がよく混乱するので、大きく書いておきましょう:

慣習

直線上に限定した議論や問題では、ベクトルであっても細字記号を使う。

4.2 位置・速度・加速度

位置を時刻で微分したものを速度という (定義)。また、速度を時刻で微分したものを加速度という (定義)。これらを数式で表現してみよう:

まず、時刻を t とし、質点の位置を

$$\mathbf{r}(t) = (x(t), y(t), z(t)) \quad (4.4)$$

とする。以後、 (t) は、「これは t の関数だ」というしるしであり、時には省略されることもある。

また、質点の速度を

$$\mathbf{v}(t) = (v_x(t), v_y(t), v_z(t)) \quad (4.5)$$

とし、質点の加速度を

$$\mathbf{a}(t) = (a_x(t), a_y(t), a_z(t)) \quad (4.6)$$

とする。そして速度と加速度を、それぞれ

$$\mathbf{v}(t) = \frac{d}{dt} \mathbf{r}(t) \quad (4.7)$$

$$\mathbf{a}(t) = \frac{d}{dt} \mathbf{v}(t) = \frac{d^2}{dt^2} \mathbf{r}(t) \quad (4.8)$$

と定義する。

よくある質問 54 この $\frac{d}{dt}$ って何ですか? ... 変数 t で微分する、という意味の記号です。

式 (4.7) を各成分にわけて書き改めると、以下のよう

になる:

$$v_x(t) = \frac{d}{dt} x(t) \quad (4.9)$$

$$v_y(t) = \frac{d}{dt} y(t) \quad (4.10)$$

$$v_z(t) = \frac{d}{dt} z(t) \quad (4.11)$$

また、式 (4.8) を各成分にわけて書き改めると、以下のようになる:

$$a_x(t) = \frac{d}{dt} v_x(t) = \frac{d^2}{dt^2} x(t) \quad (4.12)$$

$$a_y(t) = \frac{d}{dt} v_y(t) = \frac{d^2}{dt^2} y(t) \quad (4.13)$$

$$a_z(t) = \frac{d}{dt} v_z(t) = \frac{d^2}{dt^2} z(t) \quad (4.14)$$

さて、ここで、これからよく使う公式を導出しておこう。「解析学の基本定理」(数学の教科書参照)によれば、微分可能な関数 $f(t)$ について、

$$\int_a^x \frac{d}{dt} f(t) dt = f(x) - f(a) \quad (4.15)$$

が成り立つ。ここで、 $a = 0$ とおいて変形すると、

$$f(x) = f(0) + \int_0^x \frac{d}{dt} f(t) dt \quad (4.16)$$

となる。ここで、 x を形式的に t と置き直す。つまり、積分区間の上端の t と積分変数の t が「かぶる」ことになる (これが気持ち悪いという人は、答 60 の解説を参照しよう) とすると、

$$f(t) = f(0) + \int_0^t \frac{d}{dt} f(t) dt \quad (4.17)$$

となる。

さて、式 (4.17) で f を x で置き換えれば (これは式 (4.15) で出てきた x とは無関係)、

$$x(t) = x(0) + \int_0^t v_x(t) dt \quad (4.18)$$

となる。ここで式 (4.9) を使ったことに注意。

同様に、式 (4.17) で f を v_x で置き換えて考えれば、

$$v_x(t) = v_x(0) + \int_0^t a_x(t) dt \quad (4.19)$$

となる。ここで式 (4.12) を使ったことに注意。

式 (4.18)、式 (4.19) のような式は、 \mathbf{r} や \mathbf{v} の y 成分と z 成分についても成り立つので、まとめて以下の式が成

り立つ:

$$\mathbf{r}(t) = \mathbf{r}(0) + \int_0^t \mathbf{v}(t) dt \quad (4.20)$$

$$\mathbf{v}(t) = \mathbf{v}(0) + \int_0^t \mathbf{a}(t) dt \quad (4.21)$$

これらの式を駆使して、いくつかの典型的な運動を表してみよう。

よくある質問 55 x を t で置き換えて、また f を x で置き換えて、って、そんな勝手なことしていいのですか? ... いいのです。これらは形式的な置き換えに過ぎません。

4.3 等速直線運動

まず最もシンプルな運動を考えよう。

速度 $\mathbf{v} = (v_x, v_y, v_z)$ が (向きも含めて) 一定であるような運動^{*1}を「等速直線運動」という (定義)。この場合、 v_x は t によらない定数である。この場合は式 (4.18) の積分は簡単にできて、

$$\begin{aligned} x(t) &= x(0) + \int_0^t v_x dt \\ &= x(0) + [v_x t]_0^t \\ &= x(0) + v_x t \end{aligned} \quad (4.22)$$

となる。同様のことが y 成分, z 成分でも言えるので、

$$x(t) = x(0) + v_x t \quad (4.23)$$

$$y(t) = y(0) + v_y t \quad (4.24)$$

$$z(t) = z(0) + v_z t \quad (4.25)$$

となる。これらをまとめて、

$$\mathbf{r}(t) = \mathbf{r}(0) + \mathbf{v} t \quad (4.26)$$

と書くこともできる。この式から、 \mathbf{r} が、点 $\mathbf{r}(0)$ を通り、方向ベクトルが \mathbf{v} であるような直線を描くことがわかる。すなわち、等速直線運動は、確かに「直線」の上を運動する。

ここで、速度が $\mathbf{0} = (0, 0, 0)$ で一定の状況を考えよう。その場合も「速度一定」なのだから等速直線運動なのだが、実際は質点は静止している。つまり、「静止状態」は「等速直線運動」の一例なのだ。

よくある質問 56 $\mathbf{0} = (0, 0, 0)$ は、単位をつけなくてよいのですか? 「速度 0」は正しくは「速度 0 m/s」じゃないですか? ... 単位をつけたればつけてもよいですが、0 には単位は不要です。物理量は数値 \times 単位です。単位に 0 がかかるのだから単位も消えて 0 です。それに、0 m/s も 0 cm/s も 0 km/h も同じでしょ? なら、単位をつける意味、ないですよ?

4.4 等加速度直線運動

次にシンプルなのは、速度は変わるが加速度は一定、という運動である。そのような運動を「等加速度直線運動」という (定義)。

この場合、 a_x は t によらない定数であり、式 (4.19) の積分は「定数の積分」だから簡単にできる。その結果は、

$$\begin{aligned} v_x(t) &= v_x(0) + \int_0^t a_x dt = v_x(0) + [a_x t]_0^t \\ &= v_x(0) + a_x t \end{aligned} \quad (4.27)$$

となる。これを式 (4.18) に代入すると、

$$\begin{aligned} x(t) &= x(0) + \int_0^t v_x(t) dt \\ &= x(0) + \int_0^t (v_x(0) + a_x t) dt \\ &= x(0) + [v_x(0)t + \frac{1}{2}a_x t^2]_0^t \\ &= x(0) + v_x(0)t + \frac{1}{2}a_x t^2 \end{aligned} \quad (4.28)$$

となる。すなわち、加速度一定の運動は、時刻の 2 次関数で表されるのだ。この具体例を、後ほど学ぶ。さて上の式と同様のことが y 成分, z 成分でも言えるので、まとめて、

$$\mathbf{v}(t) = \mathbf{v}(0) + \mathbf{a} t \quad (4.29)$$

$$\mathbf{r}(t) = \mathbf{r}(0) + \mathbf{v}(0)t + \frac{1}{2}\mathbf{a} t^2 \quad (4.30)$$

と書くこともできる。これらの式は、高校物理でも出てくるが、実は「しょぼい」式である。なぜならば、これらは「加速度が一定」という特殊な条件でしか使えないのだ。普遍性・一般性に乏しいのだ。

ではもっと複雑な運動はどういう式になるだろう? それは加速度が時間とともに変わるような運動である。それを理解するには、次節の話が欠かせない。

^{*1} ここではあえて教育的に「向きも含めて」と書いたが、そもそも速度は、大きさと向きを持つベクトルなので、「速度が一定である」と言えば、向きも含めて一定であることを自動的に意味する。

よくある質問 57 高校物理では、式 (4.27) と式 (4.28) を公式として記憶させられました。やっぱ覚えるべきでしょうか? ... こんなしょぼい式を暗記しても仕方ないし、どうせ忘れま

す。それよりも、微積分の考え方を理解して、この式を自力で導けるようにする方が重要です。

問 66 以上の解説を参考にして、式 (4.27)、式 (4.28) の導出を再現せよ。

4.5 運動の三法則

前々章で、力に関する法則について述べた。ではそもそも力とは何なのだろうか？ 力は自然界に何をもたらすのだろうか？ 端的に言えば、力は、物体の運動に変化をもたらすものだ。それを支配するのが以下の、ニュートンの「運動の三法則」だ。これらは必ず記憶しなければならない。

運動の三法則

- 第一法則：質点に働く合力が 0 のとき、質点は等速直線運動をする。(慣性の法則)
- 第二法則：質量 m の質点に合力 F がかけると、質点は次式に従って運動する(運動方程式)：

$$F = ma \quad (4.31)$$

ここで、 a は質点の加速度である。

- 第三法則：2 つの質点 A、B において、A が B に力を及ぼすとき、A は B から、同じ大きさで逆向きの力を及ぼされる。(作用・反作用の法則)

この「運動の三法則」も、物理学における基本法則(根源的な原理)であり、なぜ成り立つのかは、誰も知らない。しかし、運動の三法則は、歴史的にも理論体系としても、科学の根幹である。運動の三法則が発見されたとき、人類は科学の扉を大きく開いたのだ。これは知識人の教養である。

第2章では、「物体が静止している場合、その物体に働く力(合力)はゼロである」と学んだ。注意して欲しいのは、その逆は必ずしも成り立たない、ということだ。すなわち、「物体に働く力がゼロなら物体は静止する」は成り立たないことがある。例えば、宇宙空間を飛んでいる隕石は、何かに引かれたり押されたりして飛んでいるわけではなく、それにかかる力が 0 でありながら、そのまま飛び続ける。そのように、「働く力がゼロ」でも物体が運動するケースがあるのだ。それを包含するのが、この第一法則(慣性の法則)だ。第一法則によれば、「働く力がゼロ」のときに実現するのは「等速直線運動」だ。前節で述べたように、静止状態は等速直線運動の一

例に過ぎない(速度 0 での等速直線運動)。

問 67 「物体が静止している」を条件 A、「物体が等速直線運動をしている」を条件 B、「その物体に働く力(合力)はゼロである」を条件 C とする。

- (1) A は C の必要条件？ 十分条件？ 必要十分条件？ いずれでもない？
- (2) B は C の必要条件？ 十分条件？ 必要十分条件？ いずれでもない？
- (3) B は A の必要条件？ 十分条件？ 必要十分条件？ いずれでもない？

ヒント：必要条件や十分条件がわからない人は、数学の教科書を見よう！

第一法則は中学校で習うが、これを正確に理解するのは簡単ではない。特に、

「力がかからなくても物体は動く」……… (*)

と言うと、多くの人が驚いた顔をする。これは多分に言葉の解釈の問題である。というのも、「動く」には、

- 「(止まっていたものが)動き始める」
- 「動いている状態にいる」

という2つの解釈がある。前者の意味に解釈すると、確かに(*)はおかしい、間違った命題だ。止まっている物体が動き始めるには、力が必要だ。第一法則が言っているのは、後者の意味だ。既に運動状態にある物体は、さらに押したり引いたりしてあげなくても、放っとしてもその運動状態(それは等速直線運動)を続けるのだ。

第一法則は、その対偶をとって「質点が等速直線運動以外の運動をするとき、質点に働く合力は 0 ではない」と言い換えることもできる(対偶とは何かがわからない人は、数学の教科書で調べよ)。

例 4.1 質点が、ある円の周上を、一定の速さ(速度ではない!)でまわるような運動を考える(それを「等速円運動」という)。そこでは、速度の大きさ(つまり速さ)は一定でも速度の方向が時々刻々と変化するので、「等速直線運動」ではない。従って、等速円運動では、必ず何らかの力(0 でない合力)が質点にかかっている。後に学ぶが、それを「向心力」という。(例おわり)

問 68 エスカレーターで「手すりにおつかまり下さい」と言われるのはなぜか？ 慣性の法則の観点で説明せよ。ヒント：手すりを持たないと、上りよりも下りの方

が危ない。

さて、等速直線運動以外の運動も扱うのが次の第二法則だ。第二法則（運動方程式）は、君が1学期の物理学で学ぶべき最も重要な法則だ。君はその威力を、これから少しずつ実感するだろう。

式(4.31)で \mathbf{F} と \mathbf{a} はベクトルである。つまり大きさと方向を持つ。成分で書いて、

$$\mathbf{F} = (F_x, F_y, F_z) \quad (4.32)$$

$$\mathbf{a} = (a_x, a_y, a_z) \quad (4.33)$$

とすれば、方程式(4.31)は、

$$F_x = ma_x, \quad F_y = ma_y, \quad F_z = ma_z \quad (4.34)$$

という3つの方程式と同じことだ。

式(4.31)は、左辺と右辺を入れ替えて次式のように表されることもあるが、正直、どちらでもよい:

$$m\mathbf{a} = \mathbf{F} \quad (4.35)$$

よくある質問 58 高校の先生は、 $\mathbf{F} = m\mathbf{a}$ ではなく $m\mathbf{a} = \mathbf{F}$ だ、と言っていました。。。... そういう人はいます。曰く、物理学では等号の左辺と右辺で意味は違うのだ、とのこと。でもそのような約束はその人が自分の世界観や物理観をもとに勝手に作ったものに過ぎません。数学では等号は左右を入れ替えても成り立つと約束されているし(等号の公理)、物理学の法則は数学で記述されるのだから、 $\mathbf{F} = m\mathbf{a}$ と $m\mathbf{a} = \mathbf{F}$ は厳密に同じであり、どちらも正しいです。

方程式(4.31)は、式(4.8)を使って、以下のように表されることも多い:

$$\mathbf{F} = m \frac{d\mathbf{v}}{dt} \quad (4.36)$$

$$\mathbf{F} = m \frac{d^2\mathbf{r}}{dt^2} \quad (4.37)$$

式(4.31)から、力は質量(SI単位はkg)と加速度(SI単位は m s^{-2})の積と同じ単位を持たねばならぬ。だから、力のSI単位が kg m s^{-2} になるのであり、この単位をN(ニュートン)と呼ぶのだ。

さて、式(4.36)(4.37)を見ると、運動方程式は、位置や速度に関する、微分方程式(関数の微分を含む方程式)だとわかる。一般に、微分方程式は、未知の関数の方程式であり、それを「解く」ことによって未知だった関数が具体的に求まる。今の場合は、力 \mathbf{F} と、初期値(ある時刻における位置と速さ)が具体的にわかれば、運動方程式が解ける。そしてその結果、速度 $\mathbf{v}(t)$ や位置 $\mathbf{r}(t)$ という、時刻 t に関する関数(ベクトル値関

数)が、全ての時刻 t において具体的に求まる。つまり、質点の運動の全てが数学的に決まってしまう。つまり、運動方程式は、あらゆる質点の運動を予測する能力を秘めているのだ*2。

ところで、式(4.31)で $\mathbf{F} = 0$ と置いてみよう。すると、 $0 = m\mathbf{a}$ となる。質量 m が0でなければ、結局、 $\mathbf{a} = 0$ だ。 \mathbf{a} は速度の微分なので、それが0ということは、速度が(向きも含めて)時刻によらず一定、ということだ。つまり、働く力がゼロなら質点は等速直線運動をする、ということだ。これは第一法則(慣性の法則)と整合する。つまり、質点に力がかかる場合とかからない場合のどちらの場合も、第二法則で表現することができるわけだ。ということは、第1章で学んだ「オッカムの剃刀」に従って、第一法則は削ってしまうべきではないだろうか?(運動の「二」法則の方が、「三」法則よりシンプルだ!)いや、それでもなお、第一法則は削ってはならないのだ。このあたりは、いずれ「慣性系」という概念を学ぶときに詳述する*3。

また、第三法則(作用・反作用の法則)は、既に述べた。

運動の三法則や万有引力の法則は、ニュートンが発見した。これらの法則から導かれる物理学(力学)を、ニュートン力学という。

以上で、力学の根源的な法則は終わりだ。あとは、これらの法則から導出される派生的な法則である。

問 69 運動の三法則を3回書いて記憶せよ。(それぞれの名前だけでなく内容を! \mathbf{F} と \mathbf{a} は太字であることに注意!)

問 70 運動の三法則について、以下の記述それぞれについて、正しいか、正しくないか、理由もつけて述べよ。

- (1) 質点Aが質点Bに力を及ぼすとき、AはBから、同じ力を受ける。
- (2) 質点が等速直線運動をしているとき、質点にかかる合力は0である。
- (3) 質量 m の質点に合力 F がかかるとき、質点の加速度を a とすると、 $F = ma$ が成り立つ。

ところで、唐突だが、ここで運動量というものを以下のように定義する:

*2 そのため、運動方程式は人類に運命論的な世界観を突きつけることになった。

*3 藤原邦男「物理学序論としての力学」東大出版、p. 36-37 参照。

運動量の定義

m を質点の質量, v を質点の速度とすると,

$$\mathbf{p} = m\mathbf{v} \quad (4.38)$$

を質点の運動量と呼ぶ。

すると, m を定数とみなせば, 運動方程式 (4.31) は,

$$\mathbf{F} = \frac{d\mathbf{p}}{dt} \quad (4.39)$$

$$\frac{d\mathbf{p}}{dt} = \mathbf{F} \quad (4.40)$$

などともあらわされる。これらはもちろん, 全て互いに同じ方程式である*4。運動量という概念は, 後に大変重要な働きをする。

問 71 運動量の定義を 5 回書いて記憶せよ。(p と v は太字であることに注意!)

よくある質問 59 サッカーで, 「長友佑都の驚異の運動量」とかよく言いますが, あれのことですか? ... わかります。長友選手は疲れ知らずでよく走り回る, という意味ですね。でも, 違います。物理学用語の「運動量」は, それとは全く違うことを意味します。

よくある質問 60 運動量の定義について。「p を運動量, m を質量, v を速度とする。p = mv が成り立つ」と書いたら, なんかダメっぽいことを言われました。なんで? ... これは, 「が成り立つ」がダメなのです。そこを「とする」とか「と定義する」と書けばOKでした。

「成り立つ」は「そうなる」ということです。ところが, ここでは定義を述べています。p = mv は「そうなる」のではなく, 「そうする」「そう決める」「そう約束する」「そう定義する」もののなのです。運動量 p の意味や正体が, この式によって初めて定まるのです。

こういうところで「成り立つ」を使ってしまうと, あたかも運動量 p が別のところで別の意味として定義され, そしてそれが, 何かの理論や奇跡によって, mv と等しいことが確かめられた! みたいに受け取られます。

言葉尻を捉えているように思うかもしれませんが, これは大事なことです。科学を体系的に理解する時, 定義(約束), 基本法則(理由なく認めざるを得ない自然現象のルール), 定理(定義や基本法則から理論的に導かれるもの)を, はっきりと区別しなければなりません。その際, まず重要なのは, それが「成り立つ」ようなもの(だとしたら基本法則か定理)なのか, そ

れとも「そう約束する」ようなものなのか(だとしたら定義), です。

では, 以下, 具体的な運動について運動方程式を解いてみよう。なお, この章で出てくる問はすべて一直線上の運動なので, 力や位置や速度や加速度はスカラーと考えてよい(あえて 3 成分のベクトルとして考える必要はない)。次章以降ではベクトルとして考える必要が出てくる。

4.6 力が一定の運動

まず, 力が時間と共に変わったりせず, 常に一定であるような状況で起きる運動を考えよう。その場合, 第二法則から, 加速度も一定であるということがわかる。そのような運動は, P.41 で学んだ「等加速度直線運動」になる。

その最も身近な例は, 重力に任せて落ちていく運動, すなわち「自由落下」である。

問 72 地表付近で重力だけを受けて上下運動をする, 質量 m の質点の運動を考える。重力加速度を g , 時刻を t とする。地表から鉛直上向きに x 軸をとる。時刻 t における質点の位置, 速度, 加速度を, それぞれ $x(t), v(t), a(t)$ とする。初期条件は

$$x(0) = x_0, \quad v(0) = v_0 \quad (4.41)$$

とする。空気抵抗は考えない。

- (1) この質点に関する運動方程式は,

$$-mg = ma \quad (4.42)$$

となることを示せ。

- (2) 式 (4.42) より, 鉛直方向の加速度は, $-g$ という一定値をとる。従って, この運動は, 等加速度直線運動である。次式を示せ:

$$v(t) = v_0 - gt \quad (4.43)$$

$$x(t) = x_0 + v_0 t - \frac{g}{2} t^2 \quad (4.44)$$

ヒント: 式 (4.27), 式 (4.28)

- (3) 特に, 初期位置 0, かつ初速度 0 の場合,

$$v(t) = -gt \quad (4.45)$$

$$x(t) = -\frac{1}{2}gt^2 \quad (4.46)$$

となることを示せ。

*4 ただし, m が一定でないような場合(光速に近い高速運動など)は, $\mathbf{F} = m\mathbf{a}$ は成り立たなくても $\mathbf{F} = d\mathbf{p}/dt$ は成り立つ。従って, $\mathbf{F} = m\mathbf{a}$ より $\mathbf{F} = d\mathbf{p}/dt$ のほうが, より一般性の高い記述である。

この結果は、質点の質量 m に無関係であることに注意せよ。つまり、重力による力を受けて行う運動は、質点の質量には依存しない。

よくある質問 61 重力の大きさは、式 (2.1) で表されるので、地球中心と質点との距離が小さいほど大きいはずです。ということは、質点が落ちていくと、だんだん重力は強くなっていくはずですが、なのに重力は一定、とみなしていいのですか？ ... 良い質問です。だから、問題の最初に「地表付近で」という但し書きがついているのです。「地表付近」の定義は微妙ですが、例えば高い方は旅客機が飛ぶあたり (高度 10 km 程度) から、低い方は最も深い海底のマリアナ海溝 (深さ 10 km 程度) としましょう。地球半径を 6400 km としたとき、 $r = 6410$ km のときと $r = 6390$ km でどのくらい式 (2.1) が違うか計算してご覧。違いは 0.6 % くらいしかありません。従って、有効数字 2 桁程度の精度の議論なら、この範囲では「重力は高さによらず一定」とみなしても差し支えないのです。

問 73 地表付近で、初速度 0 で質点を投下し、自由落下させる。空気抵抗は働かないとする。地面と質点の間には十分な空間があって、いま考える範囲では質点は地面には激突しないとする。

- (1) 投下の 10 秒後には、質点はどれだけの距離を落ち、どのくらいの速度になっているか？
- (2) 投下後、何秒たったらず質点の速度は音速 (1 気圧、常温で約 340 m s^{-1}) を超えるか？ そのとき、質点は初期位置からどのくらいの距離を落下しているか？ (実際はそうなる前に空気抵抗がだいぶ働くが)
- (3) 高度 10 km を飛ぶ旅客機のエンジンが突然故障し、旅客機が自由落下を始めた。地表に激突する前に、パイロットは機体を立てなおさねばならない。パイロットに与えられた時間的猶予はどのくらいか？

問 74 野球投手がボールを真上に投げ上げる。鉛直上向きに x 軸をとり、ボールの初期位置を $x = 0$ とし、初速度を $v_0 = 40 \text{ m s}^{-1}$ (約 140 km h^{-1} に相当) とする。ボールの運動を、横軸 t 、縦軸 $x(t)$ のグラフに描け。ボールは最大でどのくらいの高さまで届くか？ ヒント： $x_0 = 0 \text{ m}$, $v_0 = 40 \text{ m s}^{-1}$ として、式 (4.44) を考え、この $x(t)$ の最大値を求める。 t に関する二次関数とみなして平方完成すればよい。

次の問題は自由落下ではないが、同様に等加速度直線

運動である。

問 75 カーリングというスポーツでは、目標地点にうまく停止するように氷の上で石 (ストーン) を滑らせる。いま、君は氷の上で、質量 m のストーンを初速度 v_0 で滑らせて手放そうとしている。ストーンを手放す位置を原点とし、ストーンの進行方向に x 軸をとる。時刻を t とし、ストーンを手放す時点 $t = 0$ とする。ストーンは質点とみなしてよい。

- (1) ストーンと氷面の間に働く動摩擦力の大きさを F_m とし、ストーンの位置 $x(t)$ に関する運動方程式を立てよ。
- (2) その運動方程式を解いて、関数 $x(t)$ を求め、グラフにかけ。動摩擦力は位置や速度によらず一定とする。注：速度が 0 になった時点でストーンは停止する。
- (3) $v_0 = 1.5 \text{ m s}^{-1}$ のとき、ストーンは 20 m 進んで停止した。ストーンの質量は 20 kg であった。 F_m の大きさを求めよ。
- (4) このときの動摩擦係数の値を求めよ。
- (5) 次に、ストーンを $x = 25 \text{ m}$ の位置で停止させたいと思う。そのためには v_0 をどのくらいにすればよいか？
- (6) 同じ氷上で質量 30 kg のストーン (ただし 20 kg のストーンと同じ底面材質のもの) を同様に $x = 25 \text{ m}$ の位置で停止させるには、 v_0 をどのくらいにすればよいか？

以上の例や問題は、等加速度直線運動の公式、すなわち式 (4.28) を覚えておけば解ける。そして、高校物理で出てくるのはせいぜいこの程度の話である。だから、高校物理を学んだ人は、 $F = ma$ よりも式 (4.28) の方をよく覚えていたりする。しかし、世の中には、もっともっと複雑で多様な現象がある。それを次節で見よう。

4.7 力が変化していく運動

問 76 質量 2.0 kg の質点が、時刻 0 で、原点で静止している。この質点に、時刻に比例する力が、 x 軸の正方向にかかる。時刻 2.0 s のとき、質点にかかる力は 6.0 N である。この質点の、時刻 4.0 s での位置を求めよ。計算式には単位を埋め込むこと。ヒント：この問題では、式 (4.28) は使えない。式 (4.28) が使えるのは加速度が変化しないときだけ。この問題では加速度は変化する。

問 77 質量 m の物体（質点とみなす）が、速度 v_0 で x 軸上を正の向きに等速直線運動している。しかし突然、この物体にとりつけられたパラシュートが開き、物体は空気から受ける力（空気抵抗）のために減速をはじめた。その力を $-\alpha v$ とする。 α は適当な定数である。パラシュートが開いた位置を原点 ($x = 0$) とする。時刻を t とし、パラシュートが開いた時点を $t = 0$ とする (図 4.1)。

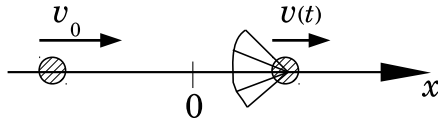


図 4.1 等速直線運動している物体に突然空気抵抗がかかる。

- (1) $t < 0$ では、次式が成り立つことを示せ：

$$0 = m \frac{dv}{dt} \quad (4.47)$$

- (2) $0 < t$ では、次式が成り立つことを示せ：

$$-\alpha v = m \frac{dv}{dt} \quad (4.48)$$

- (3) 上の式は、関数 $v(t)$ に関する微分方程式だ。数学の教科書を参考にして、この微分方程式を解け。結果は次式ようになるはずである：

$$v(t) = v_0 \exp\left(-\frac{\alpha}{m}t\right) \quad (4.49)$$

- (4) 関数 $v(t)$ のグラフを描け。

このように、空気や水などの流体^{*5}の中で物体が速度に比例して受ける抵抗を 粘性抵抗 という。しかしながら、物体が大きかったり速度が速いとき、速度の 2 乗に比例する抵抗をより強く受ける。それを 慣性抵抗 という^{*6}。

問 78 粘性抵抗とは何か？ 慣性抵抗とは何か？

問 79 問 77 において、パラシュートによる空気抵抗が粘性抵抗でなく慣性抵抗ならどうなるだろう？ いま、空気抵抗が $-\beta v^2$ であるとする (β は適当な定数)。

- (1) パラシュートが開いてから物体が停止するまでの

間、次式が成り立つことを示せ：

$$-\beta v^2 = m \frac{dv}{dt} \quad (4.50)$$

- (2) 上の微分方程式を変数分離すると、次式のようになることを示せ：

$$\beta dt = -\frac{mdv}{v^2} \quad (4.51)$$

- (3) これを不定積分すると、次式のようになることを示せ (C は積分定数)：

$$\beta t = \frac{m}{v} + C \quad (4.52)$$

- (4) 以下の式が成り立つことを示せ。

$$C = -\frac{m}{v_0} \quad (4.53)$$

- (5) 以下の式が成り立つことを示せ。

$$v(t) = \frac{mv_0}{v_0 \beta t + m} \quad (4.54)$$

- (6) 関数 $v(t)$ のグラフを描け：

よくある質問 62 問 77 で、なぜ最初は力 0 なのですか？ 力がないと進まないのでは？ ... 物体は、力がなくても動き続けるのです。等速直線運動をするのです。それが慣性の法則です。「力がないと物体は進まない」というのは間違いです。思い込みです。止まっている物体を動き出させるためには、確かに最初に力をかけてやる必要がありますが、いったん動き出せば、力をかけなくても物体は勝手に動き続けるのです。

よくある質問 63 物体が力を受けなくても等速で動くのなら止まっている物体は力を受けて止まっているのですか？ ... いいえ。「止まっている」も「等速で動く」ことの一種で、働く力は 0 です。

問 80 雨粒の落下を考えよう。雨粒は重力を受けて加速しながら落下するが、同時に空気抵抗も受けるので、際限なく加速することはあり得ない。また、雨粒が十分小さければ、空気抵抗は粘性抵抗とみなすことができる。いま、鉛直上向きに座標軸をとる。質量 m の雨粒が鉛直方向に直線的に落下するとし、時刻 t における雨粒の落下速度を $v(t)$ とする。 $v(0) = 0$ とする。雨粒にかかる空気抵抗（粘性抵抗）を $-\alpha v$ とする (α は適当な正の定数)。注：落下は下向きだから v は負であり、空気抵抗 $-\alpha v$ は v にマイナスがかかっているから正、つまり

^{*5} 気体と液体をまとめて流体と呼ぶ。

^{*6} このあたりの法則は、流体力学という物理学で説明されるが、流体力学のほとんどはニュートン力学を基本法則とする。

上向きである。

- (1) 雨粒に関する運動方程式は以下になることを示せ：

$$-mg - \alpha v = m \frac{dv}{dt} \quad (4.55)$$

- (2) これを変数分離すると次式になることを示せ：

$$\frac{dv}{g + \alpha v/m} = -dt \quad (4.56)$$

- (3) これを両辺を積分すると次式になることを示せ (C は積分定数)：

$$\frac{m}{\alpha} \ln \left| v + \frac{gm}{\alpha} \right| = -t + C \quad (4.57)$$

- (4) これを v について解き、特に $v(0) = 0$ に注意して、次式を示せ：

$$v(t) = \frac{mg}{\alpha} \left\{ \exp\left(-\frac{\alpha}{m}t\right) - 1 \right\} \quad (4.58)$$

- (5) $v(t)$ のグラフを描け。
 (6) 時間が十分にたつて速度が一定になったときの速度を 終端速度 という。この場合、終端速度は

$$v = -\frac{mg}{\alpha} \quad (4.59)$$

となることを示せ。

雨が降る時、雨粒は地表面に衝撃を与える。地表を植生が覆っていれば、葉やリター（落ち葉等）で雨滴衝撃を吸収してくれるが、地表に植生が無い場合は、雨滴衝撃で土壌侵食を起こすことがある。これは農地や、間伐が不十分なスギ・ヒノキ人工林などで問題になっている。

粘性抵抗を受ける落下の問題は、微粒子（穀物の粉とか、大気汚染源の粉塵など）の運動を議論する上で基礎的なものだ。また、微粒子の大きさを計測する上でもこの理論がよく利用される。

4.8 運動の三法則と哲学

本章の最後に、ちょっと哲学っぽいことを考えよう。運動の三法則は、物体の運動を正確に予測することができる、ということを世界に示した。それは、未来を占うのにオカルト的な力が必要だと信じていた人に、ちょっとしたショックを与えただろう。そこで生まれたのが「ラプラスの悪魔」という概念である。

問 81 「ラプラスの悪魔」とは何か？それは近代の宗教や思想にどのような影響を与えただろうか？それは

物理学的にはどのように反駁（はんぱく）されたか？

演習問題 10 質量 m の質点に、 x 軸の正の方向に $F = Ae^{-kt}$ という力がかかっている。ここで、 A, k は正の定数であり、 t は時刻。質点の速度 v を t の関数として表せ。ただし初速度を 0 とする。

演習問題 11 2 つの質点 A, B が、質量を持たないバネでつながれている。質点 A を水平方向に引っばることで、これらを摩擦の無い水平面上で、加速度 0.50 m s^{-2} で等加速度直線運動をさせる。質点 A, B の質量はそれぞれ 2.0 kg と 3.0 kg とし、バネ定数は 4.5 N/m とする。バネの伸びを求めよ。ヒント：2 つの質点のそれぞれについて運動方程式を立てる。

演習問題 12 ジャンボジェット機（ボーイング B747）が、成田空港の、幅 60 m の滑走路に、その中心線を目指して着陸しようとしている。あと 5 秒で車輪が滑走路につくというとき、突然、横から $v = 10 \text{ m/s}$ の突風が吹いてきた。この飛行機は無事に滑走路内に着陸できるか？根拠と共に示せ。ただし、物体が風から受ける力（慣性抵抗）の大きさ F は、 $F = \rho v^2 S C_D / 2$ と表せることが知られている。ここで ρ は空気密度であり、 S は風の方向に投影した物体の面積である。 C_D は「抗力係数」と呼ばれる無次元の数で、物体の形状や風の性質に依存するが、おおよそ 0.5 から 2 程度の値である。また、ジャンボジェットの質量は乗客も含めて約 300 t 、ジャンボ・ジェットの胴体は全長 70 m 、直径 8 m 程度である。

4.9 解答

答 67 (1) A は C の十分条件。必要条件ではない。静止していれば合力はゼロだが、合力がゼロであっても静止していない場合（0 以外の速度での等速直線運動）があり得る。(2) B は C の必要十分条件。(3) B は A の必要条件。十分条件ではない。静止は等速直線運動の一種（速度 0 での等速直線運動）。

答 70 (1) 間違い。「A は B から、同じ大きさで逆向きの力を受ける」(2) 正しい。質点が等速直線運動をしているとき、加速度 a は 0 である。従って、第二法則より、物体にかかる合力 F は 0 である。(3) 直線方向の運動（1 次元の運動）に限定すれば正しい。しかし一般には、力も加速度もベクトルなので、 F と a のかわりに \mathbf{F} と \mathbf{a} と書かねばならない。

答 72

- (1) 式 (2.4) より, 質点には鉛直下向きに大きさ mg の重力がかかる。座標系は鉛直上向きを正にとっている, この重力 F は $F = -mg$ と書ける^{*7}。重力以外の力は働いていない。従って運動方程式より,

$$-mg = ma$$
- (2) 式 (4.27), 式 (4.28) で, a_x を $-g$, v_x を v とすれば, 与式を得る。
- (3) $x_0 = 0$, $v_0 = 0$ とすればよい。

答 73 初期位置を原点とし, 鉛直上向きに x 軸をとる。時刻 t における位置と速度をそれぞれ $x(t)$, $v(t)$ とする。(1) 式 (4.45), 式 (4.46) で $t = 10$ s とすれば, $v = -98$ m s⁻¹, $x = -490$ m。従って落下距離は 490 m。(2) 加速度が $-g$ の等加速度直線運動なので $v(t) = -gt$ 。従って $t = -v(t)/g$ 。いま, $v(t) = -340$ m s⁻¹ なので, $t = 340$ m s⁻¹ / (9.8 m s⁻²) = 35 s。従って約 35 秒後。式 (4.46) で $t = 35$ s とすれば, $x = -6000$ m。従って, 約 6000 m 落下する。

答 74

式 (4.44) で, $x_0 = 0$ とすれば,

$$x(t) = v_0 t - \frac{1}{2} g t^2 = -\frac{1}{2} g \left(t^2 - \frac{2v_0}{g} t \right) \quad (4.60)$$

$$= -\frac{1}{2} g \left(t - \frac{v_0}{g} \right)^2 + \frac{v_0^2}{2g} \quad (4.61)$$

従って, $t = v_0/g$ のとき, 最高高度 $v_0^2/(2g)$ に到達する。ここで $v_0 = 40$ m s⁻¹ とすると, 最高高度は,

$$\frac{(40 \text{ m s}^{-1})^2}{2 \times 9.8 \text{ m s}^{-2}} = 82 \text{ m} \quad (4.62)$$

すなわち, 約 80 m の高さまで届く。(グラフは省略。)

答 75

- (1) 手放された後のストーンに働く力は, 氷面から受ける動摩擦力 F_m と, 重力である。重力は氷面から受ける垂直抗力と打ち消し合う。また, 摩擦力 F_m は x 軸の逆方向に働く。従って, ストーンに働く力の総和 F は, $F = -F_m$ となる。加速度を a とすると, 運動方程式は,

$$-F_m = ma \quad (4.63)$$

- (2) 前小問より, $a = -F_m/m$ となるが, これは時刻に

よらない一定値。すなわちこれは等加速度直線運動である。式 (4.27), 式 (4.28) で, a_x を $-F_m/m$, 速度 v_x を v とすれば,

$$v = v_0 - \frac{F_m}{m} t \quad (4.64)$$

$$x = v_0 t - \frac{F_m}{2m} t^2 \quad (4.65)$$

となる。ここで $x(0) = 0$, $v(0) = v_0$ を用いた。グラフは図 4.2 のようになる。

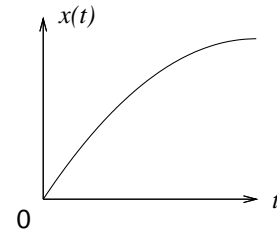


図 4.2 カーリングのストーンの運動。

- (3) ストーンが停止した時刻を t , そのときの位置を x とすると, そのとき速度 dx/dt は 0 になるから, 式 (4.64) より,

$$0 = -\frac{F_m}{m} t + v_0 \quad (4.66)$$

従って, $t = mv_0/F_m$ 。これを式 (4.65) に代入すると,

$$x = \frac{mv_0^2}{2F_m} \quad (4.67)$$

従って,

$$F_m = \frac{mv_0^2}{2x} \quad (4.68)$$

ここで, $x = 20$ m, $m = 20$ kg, $v_0 = 1.5$ m s⁻¹ とすれば, $F_m = 1.1$ N。

- (4) クーロンの摩擦法則 (式 (2.21)) より, 動摩擦係数 μ' について,

$$F_m = \mu' N \quad (4.69)$$

が成り立つ。ここで N はストーンと氷の接触面に垂直に働く力であり, 今の場合は $N = mg$ である。従って, $F_m = \mu' mg$ である。従って, 上の結果から, $\mu' = F_m/(mg) = 5.7 \times 10^{-3}$ 。(無次元なので単位は不要)

- (5) 式 (4.67) より, 停止するまでの距離 x は, 初速度 v_0 の 2 乗に比例する。 x を 20 m から 25 m にするとき, x は 1.25 倍になるが, そのためには

^{*7} 式 (2.4) は力の向きは考えず力の大きさだけを考えていたことに注意せよ。

v_0 が $\sqrt{1.25} = 1.12$ 倍になればよい。従って, v_0 は $\sqrt{1.25} \times 1.5 \text{ m s}^{-1} = 1.68 \text{ m s}^{-1}$ 。つまり, 約 1.7 m s^{-1} にすればよい。

- (6) 式 (4.67) と式 (4.69) で F_m を消去し, $F_m = \mu' mg$ を使えば,

$$x = \frac{v_0^2}{2\mu'g} \quad (4.70)$$

となる。従って x は質量に依存しない。従って, 30 kg だろうが何 kg だろうが, 摩擦の条件 (氷の表面状態とストーンの底面材質) が同じなら, 前小問で求めた初速度 (約 1.7 m s^{-1}) でよい。

よくある質問 64 問 75(6) に驚きました。重い物体が, 軽い物体と同じ初速度で同じ距離で止まるのですか? ... そうです。不思議ですね。これは, 力が摩擦力だからです。この場合の摩擦力は, 重力に比例します。重い物体にはそのぶん, 垂直効力が大きくなるため, 大きな摩擦力がかかるのです。つまり $F = ma$ の左辺の F が m に比例するため, 右辺の ma の m と打ち消し合って, 結果的に質量の影響はなくなるのです。

答 76 質量を m , 時刻を t , 力を $F(t)$ とする。力は時刻に比例するので,

$$F(t) = bt \quad (4.71)$$

と書ける (b は適当な定数)。運動方向に x 軸をとり, 位置を $x(t)$, 速度を $v(t)$, 加速度を $a(t)$ とする。運動方程式より, $F(t) = ma(t)$ 。これに式 (4.71) を代入して変形すると,

$$a(t) = \frac{bt}{m} \quad (4.72)$$

となる。式 (4.19) のように考えて (a_x, v_x はここでは a, v),

$$v(t) = v(0) + \int_0^t a(t) dt \quad (4.73)$$

である。ここで $v(0) = 0$ と, 式 (4.72) を代入して,

$$v(t) = \int_0^t \frac{bt}{m} dt = \frac{bt^2}{2m} \quad (4.74)$$

また, 式 (4.18) のように考えて,

$$x(t) = x(0) + \int_0^t v(t) dt \quad (4.75)$$

である。ここで $x(0) = 0$ と, 式 (4.74) を代入して,

$$x(t) = \int_0^t \frac{bt^2}{2m} dt = \frac{bt^3}{6m} \quad (4.76)$$

さて, 式 (4.71) で $t = 2.0 \text{ s}$ のときを考えると, $6.0 \text{ N} = b \times 2.0 \text{ s}$ だから, $b = 3.0 \text{ N/s}$ 。これと, $m = 2.0 \text{ kg}$, $t = 4.0 \text{ s}$ を式 (4.76) に代入すると,

$$x(4.0 \text{ s}) = \frac{(3.0 \text{ N/s})(4.0 \text{ s})^3}{6 \times 2.0 \text{ kg}} = 16 \text{ m} \quad (4.77)$$

答 77

- (1) $t < 0$ では等速直線運動をしているから, 慣性の法則より, 働く力 (の総和) は 0 である。従って, 運動方程式より, 式 (4.47) が成り立つ。
 (2) $0 < t$ ではパラシュートによる空気抵抗 $F = -\alpha v$ がかかる。従って, 運動方程式より, 式 (4.48) が成り立つ。
 (3) 式 (4.48) を変数分離すると,

$$-\alpha dt = m \frac{dv}{v} \quad (4.78)$$

さて, 上の式を両辺, 積分すると (C は積分定数),

$$-\alpha t = m \ln |v| + C \quad (4.79)$$

(C' は C とは別の定数) 従って,

$$v = \pm \exp\left(-\frac{\alpha}{m}t + C'\right) = \pm C' \exp\left(-\frac{\alpha}{m}t\right) \quad (4.80)$$

ここで $t = 0$ のとき $v = v_0$ だから,

$$\pm \exp C' = v_0 \quad (4.81)$$

従って,

$$v = v_0 \exp\left(-\frac{\alpha}{m}t\right) \quad (4.82)$$

- (4) 図 4.3 のようになる。

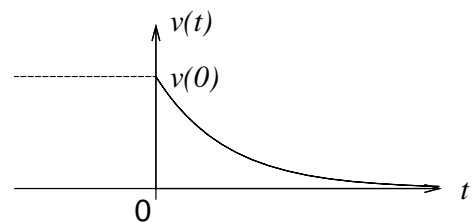


図 4.3 粘性抵抗を受けて減速する物体の運動。

- 答 79 (1) $0 < t$ ではパラシュートによる空気抵抗 $F =$

$-\beta v^2$ がかかる。従って、運動方程式より、式 (4.50) が成り立つ。(2), (3) 略。(4) 式 (4.52) で、 $t = 0$ とすれば、 $0 = m/v(0) + C$ 。従って $C = -m/v(0)$ 。(5) 式 (4.53) を式 (4.52) に入れて v についてとけば、式 (4.54) が成り立つ。(各自、計算してみよ)(6) 図 4.4 のようになる。

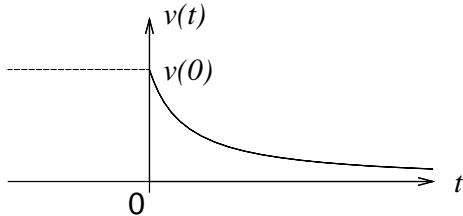


図 4.4 慣性抵抗を受けて減速する物体の運動。

答 80

- (1) 雨粒にかかる力は、重力 ($-mg$) と粘性抵抗 ($-\alpha v$) の和。従って、運動方程式より、式 (4.55) が成り立つ。

- (2) 式 (4.55) の両辺を m で割ると、

$$-g - \frac{\alpha v}{m} = \frac{dv}{dt} \quad (4.83)$$

両辺に dt をかけ、さらに両辺を $g + \alpha v/m$ で割ると、

$$-dt = \frac{dv}{g + \alpha v/m} \quad (4.84)$$

この左辺と右辺を入れ替えると、式 (4.56) を得る。

- (3) 式 (4.56) の両辺に積分記号 \int をつける：

$$\int \frac{dv}{g + \alpha v/m} = - \int dt \quad (4.85)$$

この左辺の不定積分は、

$$\begin{aligned} \int \frac{dv}{(\alpha/m)(v + gm/\alpha)} &= \frac{m}{\alpha} \int \frac{dv}{v + gm/\alpha} \\ &= \frac{m}{\alpha} \ln \left| v + \frac{gm}{\alpha} \right| + C_1 \end{aligned}$$

となる (C_1 は積分定数)。右辺の不定積分は、 $-t + C_2$ となる (C_2 は積分定数)。これらをまとめて、

$$\frac{m}{\alpha} \ln \left| v + \frac{gm}{\alpha} \right| + C_1 = -t + C_2 \quad (4.86)$$

となる。 C_1 を右辺に移項し、 $C_2 - C_1 = C$ とおけば、式 (4.57) を得る。

- (4) 式 (4.57) より、

$$\ln \left| v + \frac{gm}{\alpha} \right| = -\frac{\alpha}{m}(t - C) \quad (4.87)$$

従って、

$$v + \frac{gm}{\alpha} = \pm \exp \left[-\frac{\alpha}{m}(t - C) \right] \quad (4.88)$$

従って、

$$v = \pm \exp \left[-\frac{\alpha}{m}(t - C) \right] - \frac{gm}{\alpha} \quad (4.89)$$

ここで $t = 0, v = 0$ とおけば、

$$0 = \pm \exp \left[\frac{\alpha}{m}C \right] - \frac{gm}{\alpha} \quad (4.90)$$

従って、

$$\pm \exp \left[\frac{\alpha}{m}C \right] = \frac{gm}{\alpha} \quad (4.91)$$

となる (左辺の \pm も含めて右辺のように決まる)。

これを式 (4.89) に代入して、

$$v = \frac{gm}{\alpha} \exp \left[-\frac{\alpha}{m}t \right] - \frac{gm}{\alpha} \quad (4.92)$$

これを整理すると式 (4.58) を得る。

- (5) 図 4.5 のようになる。

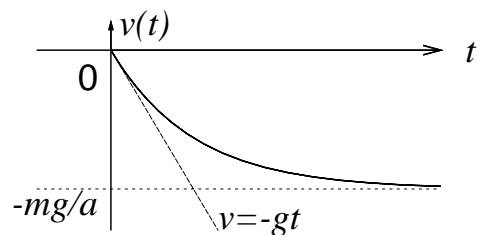


図 4.5 粘性抵抗を受ける落下。

- (6) 式 (4.58) において t の ∞ への極限で、 v は $-mg/\alpha$ に近づく。あるいは、終端速度では速度は時間とともに変わらないから、式 (4.55) の右辺を 0 とおけば、同じく $v = -mg/\alpha$ を得る。

答 81

略 (各自、調べよ)。

よくある質問 65 摩擦のない面に 10 t くらいの物体がのって静止しているとします。摩擦がなければ、この物体を面と平行な方向に動かし始めるには、ほんの少し力をかけてやるだけで良いのでしょうか。イメージできない。... はいそうです。実際、小惑星探査機「はやぶさ」は 500 kg ほどですが、それを動かすイオンエンジンは 1 円玉を持ち上げるくらいの力しかなかったらしいですよ。

第5章

さまざまな運動

注: この章を理解するには、三角関数を理解していることが必要である。

5.1 単振動

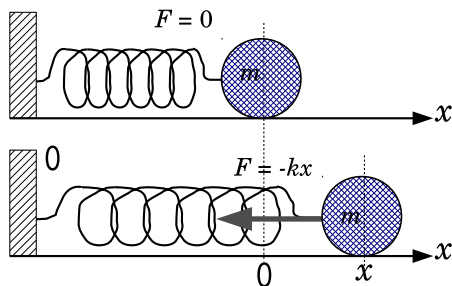


図 5.1 バネにつけられて振動する物体

図 5.1 のように、壁に一端が固定されたバネの、もう一端に質量 m の物体がとりつけられた系を考えよう。物体と床面の間に摩擦は無いものとする。バネ定数を k とし、バネ自体の質量は無視する。バネはこの図の左右方向にのみ伸び縮みし、物体もこの図の左右方向にしか動かないとする。バネが自然長にあるときの物体の位置を原点とし、左右方向に沿って x 軸をとる。バネの伸びる方向を x 軸の正の方向とする。

この物体を、右か左から指で弾いたり、右か左に少し動かして放すと、物体は左右に振動しはじめることは、君の日常経験から明らかだろう。ただし、日常経験だけで考えると、この振動運動はいつか止まってしまうように思われる。しかし、ここでは「物体と床面の間に摩擦は無い」と仮定しているので、他に何らかの外力が働かない限り、この振動運動は永遠に続く。この運動を物理的に考えよう。

物体の運動を考えると、いつでも運動方程式 (4.31) から出発する。運動方程式は、質量 m が一定であれば、力のベクトルと加速度のベクトルの関係式だ。従って、運動方程式を考えるということは、 x 方向、 y 方

向、 z 方向の各方向について、力と加速度の関係を考えるということだ。

ところが、いま考えている物体は左右方向しか動かないので、上下方向や奥行き方向について運動方程式を考える必要は無い*¹。そこで、左右方向の運動方程式だけを考える：いま、バネが自然長にある（伸びも縮みもない状態）では、バネが物体に及ぼす力は 0 だ（図 5.1 の上図）。このときの物体は原点にある。物体が座標 x にあるとき、バネの伸びも x なので、フックの法則により、物体にはバネから $-kx$ の力がかかる（図 5.1 の下図。 k はバネ定数）。従って、 x 方向の運動方程式は以下のようになる：

$$-kx = m \frac{d^2x}{dt^2} \quad (5.1)$$

これを変形すれば、

$$\frac{d^2x}{dt^2} = -\frac{k}{m}x \quad (5.2)$$

となる。

この微分方程式 (5.2) を数学的に解けば、その解 $x(t)$ が、時刻 t における物体の位置を与えてくれる。つまり物体の運動が決まるわけだ。ただし、それには大学レベルの数学力*²が必要だ。残念ながら、我々の数学の勉強は、まだそこまで進んでいない。

しかし我々は、この物体が振動運動するということを体験的に知っている。そこで、この物体の運動が、次式

*¹ とは言うものの、念のため、上下方向の運動も考えておこう：物体に上下方向（鉛直方向）に働く力は、重力（下向き）と、床からの垂直抗力（上向き）だ。これらは同じ大きさと逆向きだから互いに打ち消しあう。従って、物体に働く上下方向の力（合力）は 0 だ。従って、物体が最初に床にあって上下方向に運動していない限り、慣性の法則に従って、物体は床（高さ 0）にあり続ける。従って上下方向の加速度は 0 だ。従って、上下方向の運動方程式は、 $0 = 0$ となるにすぎない。

*² 「二階の線型常微分方程式」の理論。複素数の関数や行列などの基礎が必要。

のように書けると仮定しよう：

$$x(t) = A \cos \omega t \quad (5.3)$$

ここで A と ω は適当な (未知の) 正の定数である*3。この式 (5.3) のグラフは、図 5.2 のようになる。いかにも

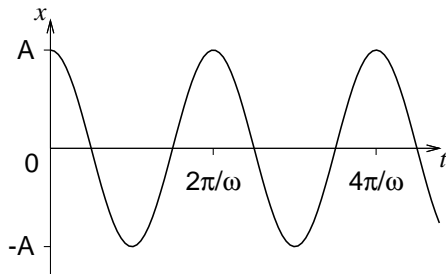


図 5.2 式 (5.3) のグラフ。

振動してそんなグラフではないか! このグラフを見ると、 A は振動の幅 (振幅) を表している。また、振動は、時間が $2\pi/\omega$ だけ経過するごとに同じパターンで繰り返す。この ω を 角速度 とか 角振動数 と呼ぶ*4。また、繰り返しの時間間隔を 周期 と呼んで T と表すことが多い。両者の関係はよく出てくるので、覚えておこう：

単振動の角速度 ω と周期 T の関係

$$T = \frac{2\pi}{\omega} \quad (5.4)$$

$$\omega = \frac{2\pi}{T} \quad (5.5)$$

角速度は時間の逆数の次元を持ち、通常、 s^{-1} 、つまり「毎秒」という単位であらわされる。「毎秒」のことを「ヘルツ」とよび、Hz と書くこともある (記憶せよ)。

さて、式 (5.3) が式 (5.2) を満たすのではないかという希望を持って、式 (5.3) を式 (5.2) に代入してみよう。すると、式 (5.2) の左辺は

$$-A\omega^2 \cos \omega t \quad (5.6)$$

となり、右辺は

$$-A \frac{k}{m} \cos \omega t \quad (5.7)$$

となる。これらが任意の時刻について一致する (つまり式 (5.2) が恒等的に成り立つ) には、 $A = 0$ か、 $\omega^2 = k/m$ であればよい*5。

$A = 0$ のときは、式 (5.3) が恒等的に 0 となる、つまり物体は原点でじっと静止したままだ。今は振動運動を考えているのでこれは除外しよう。

$\omega^2 = k/m$ のときは、

$$\omega = \sqrt{\frac{k}{m}} \quad (5.8)$$

となる (A の値はなんでも構わない)。式 (5.8) が成り立てば、式 (5.3) は運動方程式 (5.2) の解になる、つまり「運動の法則」を満たすのだ。従って、式 (5.3) はこの系で実現可能な運動 (のひとつ) である。

式 (5.8) が成り立つならば、式 (5.3) 以外にも、以下のような関数もそれぞれ式 (5.2) の解であることは、代入してみれば簡単にわかるだろう：

$$x(t) = A \sin \omega t \quad (5.9)$$

$$x(t) = A \cos(\omega t + \phi) \quad (5.10)$$

$$x(t) = A \sin(\omega t + \phi) \quad (5.11)$$

$$x(t) = A \cos \omega t + B \sin \omega t \quad (5.12)$$

(A, B, ϕ は任意の定数で、各々の式で違ってかまわない。)

式 (5.2) の解として、こんなにたくさんの関数があることはわかったが、よくよく考えると、現実の運動は単純な振動運動のはずだから、解としてそんなに多くの可能性は無いはずだ。実は、これらの関数は互いに完全に別物というわけではなく、「重複」があるのだ。

実際、例えば、式 (5.12) で $B = 0$ とおけば式 (5.3) になるし、式 (5.12) で $A = 0$ とおいて改めて B を A と置き換えれば式 (5.9) になる。つまり、式 (5.3) や式 (5.9) は、式 (5.12) の特殊なケースに過ぎない。

また、式 (5.10) において、 $\phi = \phi' - \pi/2$ とおけば、 \cos の性質*6 から、

$$x(t) = A \cos(\omega t + \phi' - \frac{\pi}{2}) = A \sin(\omega t + \phi')$$

となって、 ϕ' を改めて ϕ と置けば式 (5.11) の形になるし、式 (5.11) において、 $\phi = \phi' + \pi/2$ とおけば、 \sin の性質*7 から、

$$x(t) = A \sin(\omega t + \phi' + \frac{\pi}{2}) = A \cos(\omega t + \phi')$$

となって、 ϕ' を改めて ϕ と置けば式 (5.10) の形になる。つまり、式 (5.10) と式 (5.11) は、同じ関数を違った形で

それは t が特定の値、例えば $t = \pi/(2\omega)$ や $t = 3\pi/(2\omega)$ などをとるときに限られるので、式 (5.2) が恒等的に成り立つとは言えない。

*6 任意の角 θ について、 $\cos(\theta - \pi/2) = \sin \theta$

*7 任意の角 θ について、 $\sin(\theta + \pi/2) = \cos \theta$

*3 ω はギリシア文字の「オメガ」の小文字。

*4 角速度の正確な定義は、「単位時間あたりに進む位相」である。

*5 ほかにも、 $\cos \omega t = 0$ となるときにも式 (5.2) は成り立つが、

表現しているに過ぎない。

また、式 (5.12) に「三角関数の合成」(数学の教科書を参照せよ) を適用すれば、式 (5.11) の形に式変形できるし、逆に式 (5.11) や式 (5.10) に三角関数の加法定理を適用すれば式 (5.12) のように式変形できる。つまり、式 (5.10)、式 (5.11)、式 (5.12) の3つは、数学的には互いに等価である(もちろん、各々で A や ϕ の値は違う)。

このような、三角関数で表現できる周期的な振動現象のことを、「単振動」とか「調和振動」という。

ここで、代表的に、式 (5.12) に着目し、これで単振動を統一的に表現することを試みよう。まず、時刻 $t = 0$ での位置は $x(0)$ なので、式 (5.12) より、

$$x(0) = A \quad (5.13)$$

である。また、式 (5.12) を微分すると、

$$\frac{dx}{dt} = -A\omega \sin \omega t + B\omega \cos \omega t \quad (5.14)$$

である。時刻 $t = 0$ での速度は $x'(0)$ なので、

$$x'(0) = B\omega \quad (5.15)$$

である。従って、式 (5.12) は、

$$x(t) = x(0) \cos \omega t + \frac{x'(0)}{\omega} \sin \omega t \quad (5.16)$$

となる。この式は、図 5.1 のような系で起きる、あらゆる振動運動を、初期条件(つまり $x(0)$ と $x'(0)$ の値)だけで統一的に表現する(ただし ω は式 (5.8) を満たさねばならない)。

さて、式 (5.2) は、式 (5.8) を使うと、次式のようになる:

—— 単振動の微分方程式 ——

$$\frac{d^2x}{dt^2} = -\omega^2 x \quad (5.17)$$

このような方程式で表される現象は、どんなものであっても、単振動である。その例は、「バネについた物体」以外にも、以下のように様々である:

- 振り子(振幅が十分に小さいとき)
- コイルとコンデンサーからなる電気回路(電波を受けるアンテナ)
- 安定した大気の中で発生する、プラント・パイサラ振動
- 大気よりも遥か上空の電離層で起きるプラズマ振動

今のところ君はこれらの中身を詳しく知る必要は無い。単振動という現象は、いろんなところにある、という実感を持ってくれたら、とりあえずそれで十分だ。

問 82 図 5.1 のような系で、物体の質量を 2 倍にすると、角速度は何倍になるか? 振動の周期は何倍になるか?

問 83 図 5.1 のような系で、 $t = 0$ で物体を $x = X_0$ の位置に持ってきて、静かに(初速度 0 で)離すと、どのような運動になるか? その解を書き、そのグラフを描け。ヒント: 式 (5.16)。

問 84 図 5.1 のような系で、 $t = 0$ で物体を $x = 0$ の位置のままで、指でピンと弾いて初速度 V_0 を与えたら、どのような運動になるか? その解を書き、そのグラフを描け。

ここで、微分方程式 (5.17) について、もうすこし考えてみよう。これは、 t に関する二階微分を含む方程式(二階微分方程式)だから、それを解く、つまり微分を含まない形の関数(方程式)を得るには、微分の逆操作である、不定積分に相当することを 2 回やらねばならない。普通、不定積分を 1 回やると、積分定数と呼ばれる「任意の定数」が 1 つ現れる。従って、不定積分を 2 回やると、積分定数に相当する「任意の定数」が 2 つ現れるはずだ。従って、二階微分方程式を解くと、その一般解(どんな解もその形式で表されるような解)は、任意の定数を 2 つ含む。微分方程式 (5.17) の場合は、それが式 (5.12) における A, B である。で、それは (5.16) でわかったように、初期条件、つまりある時刻における位置と速度を与えることで、具体的に決まる。

もっと一般的に言うと、運動方程式 $F = ma$ は、位置 x に関する二階微分方程式なので、その一般解は 2 つの任意定数を含む。任意定数の値は、位置と速度に関する初期条件によって定まる^{*8}。

5.2 斜め投げ上げ

これまでは、ほとんど直線上に限って運動を考えてきた。しかし、運動の法則は、平面的な運動や空間的な運動にも成り立つ。といっても難しいことは何もない。座

^{*8} このように、初期条件を適切に与えることで、微分方程式の解を一意的に定めることを、「微分方程式の初期値問題」という。

標系を適切に設定して、 x, y, z の各方向について運動方程式を考えるだけだ。

次のような状況を考えよう：君は地表のある点から、空に向かって、斜め方向に質量 m のボールを投げ上げる (図 5.3)。空気抵抗は無視する。

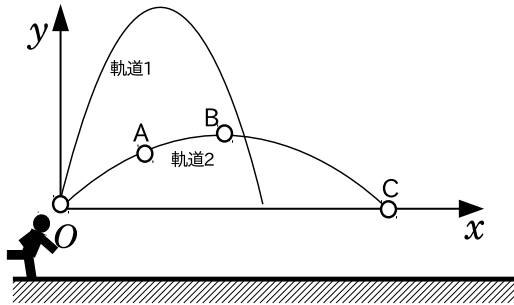


図 5.3 ボールの斜め投げ上げ

軌道 1 のようにかなり上向きに投げ上げたら、高くは上がるものの、遠くには飛ばない。軌道 2 のように、若干水平ぎみに投げ上げたら、高くは上がらないが、そこそこ遠くに飛ぶ。

問 85 軌道 2 で、A, B, C のそれぞれの位置にボールが来た時を考える。

- (1) 速さが最も大きいのは、A, B, C のうちのどの位置のときか？
- (2) A, B, C の各位置で、ボールにかかる合力を、矢印で図に描き込め。矢印の長さは適当でよいが、複数の矢印どうして長さはつじつまがあっていなければならない (大きい力は長く、小さい力は短く)。
- (3) A, B, C の各位置で、ボールの加速度を、点線矢印で図に描き込め。矢印の長さは適当でよいが、複数の矢印どうして長さはつじつまがあっていなければならない (大きい加速度は長く、小さい加速度は短く)。
- (4) 加速度の大きさが最も大きいのは、A, B, C のうちのどの位置のときか？

問 86 どのような角度で投げ上げたら、最も遠くまでボールを飛ばせるか、考えよう。君の位置を原点 O とし、水平方向に x 軸、鉛直方向に y 軸をとる。時刻を t とし、君がボールを手放した瞬間を $t = 0$ とする。 $t = 0$ のときにボールの速度は x 軸から角 θ の方向で、その大きさは v_0 であったとする。

時刻 t におけるボールの位置と速度をそれぞれ

$\mathbf{r}(t), \mathbf{v}(t)$ とする。重力加速度を g とする。

$$\mathbf{r}(t) = (x(t), y(t))$$

とする。

- (1) $\mathbf{r}(0) = (0, 0), \mathbf{v}(0) = (v_0 \cos \theta, v_0 \sin \theta)$ であることを示せ。
- (2) ボールが手を離れてから地上に落ちるまでのボールの運動方程式は、次式のようになることを示せ：

$$m \frac{d^2 x}{dt^2} = 0 \quad (5.18)$$

$$m \frac{d^2 y}{dt^2} = -mg \quad (5.19)$$

- (3) 上の微分方程式 (5.18), (5.19) を解くと、解はそれぞれ次式のようになることを示せ：

$$x = (v_0 \cos \theta)t \quad (5.20)$$

$$y = (v_0 \sin \theta)t - \frac{1}{2}gt^2 \quad (5.21)$$

- (4) 前問の結果から t を消去して次式を示せ：

$$y = (\tan \theta)x - \frac{g}{2v_0^2 \cos^2 \theta}x^2 \quad (5.22)$$

- (5) 前問の結果を、横軸 x 、縦軸 y のグラフに描け。これがボールの軌跡だ。
- (6) 投げ上げたボールが着地する場所の x 座標を X とすると、次式を示せ：

$$X = \frac{v_0^2 \sin 2\theta}{g} \quad (5.23)$$

- (7) v_0 が一定の時、投げ上げの角 θ がどのくらいのとき、 X は最大になるか？

問 87 ハンマー投は、ハンマー (ワイヤーの先に質量 7.26 kg の金属球がついたもの) を振り回して投げ上げ、飛ばした距離を競うスポーツである。世界記録は 86.7 m である。投げ上げの角度が、前問で求めた角に一致していたと仮定して、世界記録樹立時のハンマーの初速度を推定せよ。

5.3 円運動

一定の速さで円周上を一方方向に動く運動のことを、等速円運動という。

平面内の等速円運動を考えてみよう。 xy 座標系ので質量 m の質点が、原点を中心とする半径 r の円周上を

等速円運動しているとする (図 5.4)。

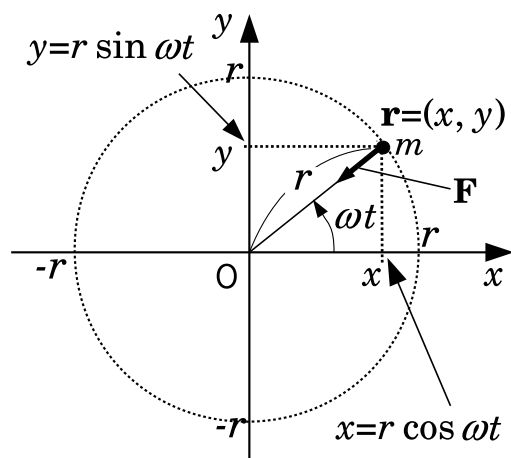


図 5.4 等速円運動

時刻 t における質点の位置, 速度, 加速度をそれぞれ

$$\mathbf{r}(t) = (x(t), y(t)) \quad (5.24)$$

$$\mathbf{v}(t) = (v_x(t), v_y(t)) \quad (5.25)$$

$$\mathbf{a}(t) = (a_x(t), a_y(t)) \quad (5.26)$$

とし^{*9}, $t = 0$ で質点は x 軸上の点 $(r, 0)$ にあるとする。
すなわち,

$$\mathbf{r}(0) = (x(0), y(0)) = (r, 0) \quad (5.27)$$

である。

問 88 (1) 質点を実際にこの円周上を一定の角速度 ω で回転するならば次式が成り立つことを示せ (ヒント: 極座標):

$$\mathbf{r}(t) = (r \cos \omega t, r \sin \omega t) \quad (5.28)$$

$$\mathbf{v}(t) = (-r\omega \sin \omega t, r\omega \cos \omega t) \quad (5.29)$$

$$\mathbf{a}(t) = (-r\omega^2 \cos \omega t, -r\omega^2 \sin \omega t) \quad (5.30)$$

$$\mathbf{a}(t) = -\omega^2 \mathbf{r}(t) \quad (5.31)$$

(2) 時刻 t のとき質点に働く力を $\mathbf{F}(t) = (F_x(t), F_y(t))$ とすると, 次式が成り立つことを示せ:

$$\mathbf{F}(t) = -m\omega^2 \mathbf{r}(t) \quad (5.32)$$

$$F_x(t) = -mr\omega^2 \cos \omega t \quad (5.33)$$

$$F_y(t) = -mr\omega^2 \sin \omega t \quad (5.34)$$

(3) $F = |\mathbf{F}|$, $v = |\mathbf{v}|$ とする。次式を示せ。

$$F = mr\omega^2 \quad (5.35)$$

$$v = r\omega \quad (5.36)$$

(4) 式 (5.35) は, 次式のようにもできることを示せ:

$$F = \frac{mv^2}{r} \quad (5.37)$$

(5) 質量と半径はそのまま, 速度の大きさ v が 2 倍になると, 力は何倍になるか?

(6) 質量と速度はそのまま, 半径 r が $1/2$ 倍になると, 力は何倍になるか?

式 (5.32) を満たすような何らかの力が質点に働いていると, その質点は等速円運動をする。式 (5.32) を「向心力」と言う。というのも, この \mathbf{F} は円運動の中心から質点へのベクトル \mathbf{r} とは真逆の向き, つまり質点から「中心への向き」だからである。

問 89 以下の等速円運動 (厳密にはそうとは言えないものもあるが, それも近似的に等速円運動とみなす) において, 向心力は何によって実現されているか?

- (1) 太陽の周りを地球がまわること。
- (2) 君が糸の先におもりをつけて, それをひゅんひゅんと回すこと。
- (3) 水平の広場で君が自転車を円形に走らせること。

問 90 車を運転する時に, なぜカーブの手前で減速せねばならないか, 述べよ。

「向心力」に似た言葉に「遠心力」がある (多くの人は, 向心力より遠心力の方が馴染み深いだろう)。両者は明確に別々の概念である。「遠心力」は P.114 で学ぶまで不用意に使わないようにしよう。

さて, 実は, 単振動と円運動は, 密接な関係がある。等速円運動の方程式のひとつである式 (5.31) を考えよう:

$$\mathbf{a}(t) = -\omega^2 \mathbf{r}(t)$$

この左辺は $d^2 \mathbf{r} / dt^2$ であり, さらに, $\mathbf{r} = (x, y)$ とおけば, 上の式は,

$$\frac{d^2 x}{dt^2} = -\omega^2 x \quad (5.38)$$

$$\frac{d^2 y}{dt^2} = -\omega^2 y \quad (5.39)$$

となる。これらは, 式 (5.17) と同じ形, すなわち単振動

*9 前章でも述べたが, 位置ベクトルは, \mathbf{r} と書くことが多い。

の微分方程式だ。従って、等速円運動は、2つの単振動 (x 軸方向と y 軸方向) の組み合わせと考えることができる。実際、等速円運動

$$(x(t), y(t)) = (r \cos \omega t, r \sin \omega t) \quad (5.40)$$

について、その x 座標だけを取り出した関数

$$x(t) = r \cos \omega t \quad (5.41)$$

は、式 (5.3) にそっくりだし、 y 座標だけを取り出した関数

$$y(t) = r \sin \omega t \quad (5.42)$$

は、式 (5.9) にそっくりだ。従って、角速度、周期などの概念は、円運動と単振動で共通だ。ただし、「角速度」の「角」は、円運動の場合は幾何学的な意味が直感的にわかりやすい。

問 91 ハンマー投の世界記録樹立時 (問 87 参照) に、投擲者の腕にはどのくらいの力がかかっただろうか？ それは何 kg の物体を持ち上げる力に相当するだろうか？ 回転の半径を 1.5 m と仮定せよ (有効数字 2 桁で十分)。ヒント：式 (5.37)。 m や v の値は問 87 から流用する。

問 92 太陽のまわりをまわる地球の円運動を考えよう。地球を質点とし、地球の公転軌道を半径 r の円とし (厳密には楕円だが)、その中心に太陽があると、太陽は動かないと仮定する。太陽と地球の質量をそれぞれ M , m とする。万有引力定数を G とする。

- (1) この円運動を維持するために地球が太陽から受ける力の大きさを、 r , ω , m であらわせ。
- (2) この力は万有引力によって実現される。このことから、次式を示せ。ただし ω は角速度である。

$$\omega = \sqrt{\frac{GM}{r^3}} \quad (5.43)$$

- (3) この円運動の周期 T は、次式のようになることを示せ：

$$T = 2\pi \sqrt{\frac{r^3}{GM}} \quad (5.44)$$

- (4) r , G , M に具体的な数値を代入して ω の値を求め、周期を求めよ。それは何日に相当するか？ (計算に必要な数値は、各自、調べよ)

問 93 以下の宇宙飛行体は、それぞれ何時間で地球

のまわりを一周するか？ 地球の半径を 6400 km とし、地球や以下の飛行体を質点とみなす。() 内は地表から飛行体への距離である。

- (1) 国際宇宙ステーション (約 400 km)
- (2) 気象衛星ひまわり (約 36000 km)

気象衛星ひまわりは、赤道上空の宇宙空間を、地球の自転と同じ角速度で地球のまわりをまわっているで、常に地表の同じ場所の雲の様子を時々刻々と観測できる。

よくある質問 66 自然界には、円運動だけでなく楕円運動もあるのですか？ もしあるなら、やはり運動方程式で表せるのですか？ ... はい。惑星の公転は、一般には円ではなく楕円であり、やはり運動方程式に従います。特に火星の楕円軌道は、「天体は真円運動をする」というオカルト的な中世の思い込みから脱皮してニュートン力学が生まれるための、重要な手がかりでした。また、GPS 衛星を補完して測量精度を上げるための「みちびき」という日本の人工衛星 (その信号が農地のトラクターの自動運転などで使われている) は、気象衛星ひまわりの近くだけ楕円の軌道を動いています。

よくある質問 67 公式がごちゃごちゃになってしまいます。。。 ... どの式がどの法則から派生するのか、という体系性を意識することが重要。物理学は公式の羅列ではなく、法則の体系ですから。

よくある質問 68 高校の物理の先生が「物理ができるかどうかは絵が上手に描けるかどうかで決まる」と言っていました。確かに絵が上手に描けるとちょっとやる気もです。。。 ... 絵や文など、自分を表現するツールを豊かに持っている人は、知的な成長が早いと思います。

よくある質問 69 そもそも物の動きとか、わかって何が嬉しいのですか？ そういうのって、病気を治す薬とか、バイオ燃料を作る微生物とか、乾燥に強い植物とかの研究開発に関係あるのでしょうか？ ... そう短絡的に考えてはダメです。薬の働き方はタンパク質の構造や、それが酸性度や温度でどう変わるか、などで決まります。それを知るには、結局は分子を構成する原子の「動き」が大事なのです。微生物の中の生体反応も同じ。植物が水を吸い上げるときは、結局は水分子が「どう動くか」が大事でしょ。結局、科学の本質は「動き」に代表される物理現象に帰着するのです。ここで学んでいるのは、それらの

基礎中の基礎です。

よくある質問 70 そんなの屁理屈にしか聞こえませんが ...
屁理屈ではありませんよ。実際、薬の分子の動態を、膨大な数の方程式で表してコンピュータで解析することが、既に行われています。そうすることで、試験管で実験するよりも効率的に、たくさんの分子を調べることができるのです。

演習問題 13 以下の問に答えよ。ただし「遠心力」という言葉を使ってはならない(というか、本来、使う必要は無いのに使おうとする人が多い... 泣)

- (1) 自転車競技場(競輪場)のトラックのカーブ部分は斜面になっている。その理由を物理学的に説明せよ。
- (2) 飛行機(旅客機)に乗ったことのある人は、飛行機が旋回するとき、機体を傾けるということを知っているだろう。飛行機が左に旋回するとき、左の翼は上げるか、下げるか? その理由を物理学的に説明せよ。(1)とは違う理由であることに注意!
- (3) 無重力だが空気はある、という環境(国際宇宙ステーションの中など)で紙飛行機を飛ばしたら、どのような運動をするか?

5.4 解答

答 82 $\omega = \sqrt{k/m}$ より、質量 m が 2 倍になると、角速度 ω は $1/\sqrt{2} \doteq 0.71$ 倍になる(つまり振動はゆっくりになる)。また、周期を T とすると、 $T = 2\pi/\omega$ だから、 T は $\sqrt{2} \doteq 1.4$ 倍になる。

答 83 式 (5.16) で、 $x(0) = X_0$ 、 $x'(0) = 0$ とすると、 $x(t) = X_0 \cos \omega t$ 。グラフは図 5.5 のようになる。

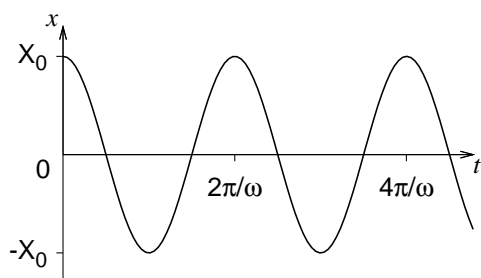


図 5.5 単振動する質点の位置の経時変化

答 84 式 (5.16) で、 $x(0) = 0$ 、 $x'(0) = V_0$ とすると、

$$x(t) = \frac{V_0}{\omega} \sin \omega t \quad (5.45)$$

となる。グラフは図 5.6 のようになる。

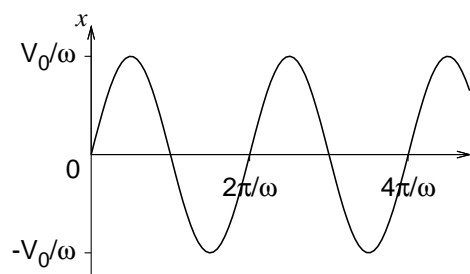


図 5.6 単振動する質点の速度の経時変化

答 85 略。ヒント: 飛行中のボールに働く力は重力のみ(空気抵抗は無視している)。

答 86 $\mathbf{r}(t) = (x(t), y(t))$ 、 $\mathbf{v}(t) = (x'(t), y'(t))$ となることに注意せよ。

- (1) ボールは時刻 $t = 0$ で原点(君の位置)にあるから $\mathbf{r}(0) = (0, 0)$ 。また、 $|\mathbf{v}(0)| = v_0$ で、 $\mathbf{v}(0)$ が x 軸からなす角が θ であることから、

$$\mathbf{v}(0) = (v_0 \cos \theta, v_0 \sin \theta) \quad (5.46)$$

- (2) x 方向には力が働かないので、式 (5.18) が成り立つ。 y 方向には重力つまり $-mg$ が働くので、式 (5.19) が成り立つ。
- (3) 式 (5.18) を 2 回積分すると、

$$x(t) = C_1 t + C_2 \quad (5.47)$$

となる。ここで C_1, C_2 は積分定数。 $x(0) = 0$ より $C_2 = 0$ 。 $x'(0) = v_0 \cos \theta$ より、 $C_1 = v_0 \cos \theta$ 。従って、

$$x(t) = (v_0 \cos \theta)t \quad (5.48)$$

式 (5.19) を 2 回積分すると、

$$y(t) = -\frac{gt^2}{2} + C_3 t + C_4 \quad (5.49)$$

となる。ここで C_3, C_4 は積分定数。 $y(0) = 0$ より $C_4 = 0$ 。 $y'(0) = v_0 \sin \theta$ より、 $C_3 = v_0 \sin \theta$ 。従って、

$$y(t) = (v_0 \sin \theta)t - \frac{gt^2}{2} \quad (5.50)$$

(4) 略(各自計算せよ)

(5) 図 5.7

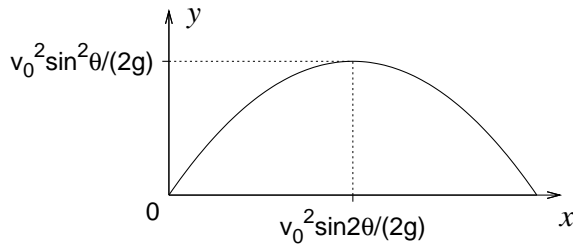


図 5.7 斜めに投げ上げられたボールの軌跡

(6) 略(式(5.22)で $y = 0$ となるのは, $x = 0$ と式(5.23)の場合であり, 前者は投げ上げの瞬間, 後者は着地の瞬間に対応する。 $2 \cos \theta \sin \theta = \sin 2\theta$ に注意せよ。)

(7) 式(5.23)が最大になるのは, $\theta = \pi/4$, つまり 45 度のとき。

答 87 前問より, $\theta = \pi/4$ が, ハンマー投擲の最適角度。このとき式(5.23)は $X = v_0^2/g$ となる。従って $v_0 = \sqrt{gX}$ 。 $X = 86.7 \text{ m}$, $g = 9.8 \text{ m s}^{-2}$ とすれば, $v_0 = 29.1 \text{ m s}^{-1}$ 。

答 88

- (1) 略(「大学1年生のための数学入門」参照)
- (2) 略(運動方程式 $F = ma$ に式(5.31)を代入)
- (3) 略(式(5.32), 式(5.29)のそれぞれの大きさを求める)
- (4) 略(式(5.35)と式(5.36)で ω を消去)
- (5) 式(5.37)より, 4 倍。
- (6) 式(5.37)より, 2 倍。

答 90 タイヤは高速で転がっていても, 地面との接触面は常に地面と噛み合っているため, 接触面ではタイヤと地面は静止しているため, 摩擦力は静止摩擦力である。

さて, 車がカーブに入ると, その回転運動を維持するには, 前問の結果から, 速度の二乗に比例した横向き力を, 車のタイヤと地面の間での摩擦力で実現しなければならない。従って, 高速度でカーブに入ると, 激しく大きな静止摩擦力が要求される。それに耐えきれないと, タイヤと地面の間で滑りが起き, 突然, 摩擦力は静止摩擦力から, より小さな動摩擦力に代わるので, 車はカーブを続けることができなくなる。カーブに入ってから慌てて急ブレーキを踏むと, さらに大変なことになる。ブレーキによってタイヤの回転が急に止まるので, 地面

とタイヤの間での滑りが, より早い段階(車が減速する前)で起きてしまう。そのような事態になっては遅い。それを避けるには, カーブへ進入する前に十分に減速する必要がある。万一, 高速度でカーブに入ってしまったら, タイヤがスリップしないように気をつけてブレーキをじんわり踏みながら, 幸運を祈るしかない。

答 91 投擲者がハンマーを手放す直前まで, ハンマーは回転運動している。その速度を v とすると, 式(5.37)より, $F = mv^2/r$ の力が投擲者の腕にかかったはずである。問 87 の問題文と結果より, $m = 7.26 \text{ kg}$, $v = 29.1 \text{ m s}^{-1}$, $r = 1.5 \text{ m}$ とすると, $F = 4100 \text{ N}$ 。これに相当する重力を受ける物体の質量は, この値を $g = 9.8 \text{ m s}^{-2}$ で割って, 約 420 kg。つまり約 420 kg の物体を地上で持ち上げるのに必要な力に相当する。

答 92

- (1) 式(5.35)より, $mr\omega^2$
- (2) 万有引力は GMm/r^2 。従って,

$$mr\omega^2 = \frac{GMm}{r^2} \quad (5.51)$$

これを ω について解けば与式を得る。

- (3) $T = 2\pi/\omega$ より与式を得る。
- (4) $G = 6.67408 \times 10^{-11} \text{ N m}^2 \text{ kg}^{-2}$, $M = 1.9891 \times 10^{30} \text{ kg}$, $r = 1.4960 \times 10^{11} \text{ m}$ とすると, $\omega = 1.99125 \times 10^{-7} \text{ Hz}$ 。周期は, $2\pi/\omega = 3.15539 \times 10^7 \text{ s} = 365.207 \text{ 日} = 365.21 \text{ 日}$ 。注: 実際の公転周期 365.25 日と少しずれたのは, 地球は厳密には楕円軌道をしているため。これを補正するには r の値に修正が必要。注: 与えられた数値は有効数字 5 桁であっても, 途中計算は 1 桁余分にとって行い, 最後に 5 桁に丸める。

答 93 式(5.44)において M を地球の質量とすればよい。

- (1) $r = 6800 \text{ km}$ とすると, $T = 5580 \text{ s} \approx 1.6 \text{ 時間}$ 。
- (2) $r = 42000 \text{ km}$ とすると, $T = 87000 \text{ s} \approx 24 \text{ 時間}$ 。

第6章

力学的エネルギー保存則(1)

運動の3法則、特に運動方程式を使えば、原理的には、どんな物体のどんな運動も予測できる。しかし現実的には、必要な計算量が膨大で手に負えなかったり、必要な情報が足りなかったりで、運動方程式を解くのがめんどくさかったり無理だったりすることが多い。そのような場合に便利なのが、本章で学ぶ「力学的エネルギー保存則」である。

この法則は、運動方程式が姿を変えたものだが、特定の状況下では、運動方程式を直接考えるよりも、ずっと簡単に運動の様子を教えてくれる(ことがある)。

もう少し詳しく説明しよう。本章では話を簡単にするために、運動を直線(x 軸上)に限定する。運動の第二法則、すなわち運動方程式によれば、質量 m の質点が力 F を受けて運動するとき、その運動は、必ず以下のような運動方程式に従う：

$$F = ma \quad (6.1)$$

a は質点の加速度である(力と加速度はベクトルなので本来は \mathbf{F} , \mathbf{a} と太字で書くべきところだが、ここでは運動が1次元に限定されているので、 F と a は細字で書いた)。加速度は速度を時刻で微分したもののなので、この式は、以下のようにも書ける：

$$F = m \frac{dv}{dt} \quad (t \text{ は時刻, } v \text{ は質点の速度}) \quad (6.2)$$

式(6.1)と式(6.2)は、加速度の表現が形式的に違うだけで、互いに等価な方程式であり、式(4.31)を直線運動(1次元の運動)に書き直したものだ。以下、式(6.2)を議論の出発点としよう。

いま、直線(x 軸)上を、力 $F(t)$ を受けて、質量 m の質点が、時刻 t_0 から t_1 の間で何らかの運動をしている状況を考えよう。この運動は、もちろん式(6.2)に従うので、式(6.2)を解いて、位置と速度を時々刻々と追跡すれば、運動の全体像が判明する。でも、微分方程式を解くのは、たいてい、めんどくさい。

もっと楽ができないだろうか？例えば、物騒な話だが、砲弾やミサイルをどこかに命中させたい場合は、「時々刻々」でなくてよいから、最初と最後だけでの位置(と、できれば速度... 衝撃の大きさを知りたいから!)がわかれば十分である。

そこで、運動方程式の経過の詳細に立ち入ることなしに、運動の最初($t = t_0$)と最後($t = t_1$)の間に何らかの関係を見いだせないだろうか？実は、式(6.2)をうまく数学的に変形すれば、そのような関係を見出すことができるのだ。

これを理解するのには、先に学んだ「ポテンシャルエネルギー」という概念と、今から学ぶ「運動エネルギー」という概念である。

6.1 運動エネルギー

— 1次元運動における運動エネルギーの定義 —

質量 m の質点が速度 v で運動するとき、次式をその質点の運動エネルギー(kinetic energy)という。

$$\frac{1}{2}mv^2 \quad (6.3)$$

問 94 式(6.3)を5回書いて記憶せよ。

上の式は速度 v の関数である(質量 m の関数でもあるが、多くの場合、質点の質量は不変なので、ここでは m は定数としておこう)。そこで、慣習的には運動エネルギーを関数 $T(v)$ と表すことが多い：

$$T(v) = \frac{1}{2}mv^2 \quad (6.4)$$

この「運動エネルギー」なるものがどのように活躍するかをこれから説明する。まず、質点の位置を x とする。速度 v は位置 x を時刻 t で微分したもの(それが速

度の定義!) だから,

$$\frac{dx}{dt} = v \quad (6.5)$$

である。両辺に dt をかけると,

$$dx = v dt \quad (6.6)$$

となる。つまり, x の微小変化 dx は, 速度 v に時間の微小変化 dt をかけたものである。

さて, 式 (6.2) の両辺に dx をかけてみよう:

$$F dx = m \frac{dv}{dt} dx \quad (6.7)$$

この右辺の dx を, 式 (6.6) で書き換えれば, 次式を得る:

$$F dx = m \frac{dv}{dt} v dt \quad (6.8)$$

ここで, 時刻 t_0 から t_1 までの運動を, たくさんの短い断片に分割し, それぞれの断片で式 (6.8) を考えて足し合わせる。つまり, 時刻 t_0 から t_1 までの間で, 式 (6.8) を積分すると,

$$\int_{x_0}^{x_1} F dx = \int_{t_0}^{t_1} m \frac{dv}{dt} v dt \quad (6.9)$$

となる。 $x_0 = x(t_0), x_1 = x(t_1)$ とした。ここで置換積分によって右辺の積分変数を t から v に変換すると^{*1},

$$\int_{x_0}^{x_1} F dx = \int_{v_0}^{v_1} mv dv \quad (6.10)$$

となる。 $v_0 = v(t_0), v_1 = v(t_1)$ とした。この左辺は, 質点が x_0 から x_1 に移動する際に力がなす仕事 W_{01} である (わからない人は式 (3.20) を見よ)。一方, 右辺は,

$$= \left[\frac{1}{2} mv^2 \right]_{v_0}^{v_1} = \frac{1}{2} mv_1^2 - \frac{1}{2} mv_0^2 \quad (6.11)$$

となる。以上より,

$$W_{01} = \frac{1}{2} mv_1^2 - \frac{1}{2} mv_0^2 \quad (6.12)$$

である。右辺に運動エネルギーが出てきたではないか!

式 (6.12) を, 式 (6.4) を使って書き換えると,

$$W_{01} = T(v_1) - T(v_0) \quad (6.13)$$

あるいは, 同じことだが,

$$T(v_1) = T(v_0) + W_{01} \quad (6.14)$$

となる。この式は味わい深い。質点にかかる力がなした仕事は, 質点の運動エネルギーの変化に等しい。つま

り, 仕事がされるぶんだけ, 運動エネルギーが増えるのだ。そう考えると, 運動エネルギーは仕事と等価な物理量, つまり「エネルギー」の名にふさわしい。運動エネルギーは, 「質量を持つ物体の運動」という姿をまとったエネルギーである。

ここで, 運動エネルギーの定義式 (6.3) を再度よく見よう。速度 v が 2 乗の形で入っている。従って, 運動エネルギーは, 速度 v の符号 (つまり方向) によらず, 速度 v の大きさ, つまり「速さ」だけで決まる。つまり, 運動エネルギーは, 大きさは持つが向きは持たない量, つまりスカラーである。質点がどのような方向に進んでいようが, 運動エネルギーは速さ (と質点の質量) だけで決まるのだ。

問 95 式 (6.12) を導出せよ。ヒント: 式 (6.5) 以下の議論を整理して再現すればよい。

さて, 式 (6.12) は, 運動方程式を位置 (変位) で積分したものにはすぎない (高校物理では式 (6.12) を「エネルギーの原理」と呼ぶらしいが, 大学ではそのような呼び方はほとんどしない)。しかし, その有用性はハンパではない。式 (6.12) を使えば, 運動の過程を気にすることなく, 運動の最初の状態から最後の状態を直接的に導くことができるのだ。以下の例でそれを学ぼう。

問 96 質量 m の質点が, 一定の力 F を受けて, 一定の加速度 a で直線 (x 軸) 上を運動している。時刻 t における位置と速度をそれぞれ $x(t), v(t)$ とする。

- (1) 時刻 t_0 から時刻 t_1 の間に, 力 F がなした仕事 W_{01} は次式のようになることを示せ:

$$W_{01} = F\{x(t_1) - x(t_0)\} \quad (6.15)$$

- (2) 次式を示せ:

$$W_{01} = ma\{x(t_1) - x(t_0)\} \quad (6.16)$$

- (3) 以上と式 (6.12) より, 次式を示せ^{*2}:

$$v(t_1)^2 - v(t_0)^2 = 2a\{x(t_1) - x(t_0)\} \quad (6.17)$$

問 97 カーリングの問題 (問 75) をもう一度考えて

^{*1} 形式的には右辺の dt を約分することに相当する。

^{*2} これは高校物理で「 $v^2 - v_0^2 = 2ax$ 」と言われる公式だ。高校では暗記させられる式だが, 実はこのように簡単に導出できる公式なので, 諸君はもちろん暗記する必要は無い。本当に重要で記憶すべきなのは運動の三法則だ。もしも, 式 (6.17) を覚えていながら運動の三法則を言えないという人がいたとしたら, その人は, 物理学の学びかたをなんか間違えている。

みよう。初速度 v_0 で放されたストーンが距離 x だけ進んで停止したとすると、

- (1) ストーンが放されてから止まるまでの間に摩擦力がした仕事は $-F_m x$ であることを示せ。
- (2) ストーンが放されてから止まるまでの間の運動エネルギーの変化は

$$0 - \frac{1}{2} m v_0^2 \quad (6.18)$$

であることを示せ。ヒント：止まったとき速度は 0。

- (3) 以上より、次式を導け：

$$F_m = \frac{m v_0^2}{2x} \quad (6.19)$$

これは式 (4.68) に一致する。

- (4) ストーンの到達距離が、初速度の 2 乗に比例することを示せ。

問 98 地球のはるか遠方に静止している質量 m の隕石が、地球の重力に引かれて徐々に加速しながら一直線に地球に向かってきたとする。我々は、隕石を迎撃する計画を立てねばならない。そのためには、隕石が地球に衝突する直前の速さ v_1 を求めねばならない。地球の質量を M 、半径を R とし、万有引力定数を G とし、隕石を質点とみなす。

- (1) 隕石が、無限遠方から、地球の表面（中心から距離 R ）まで、地球の重力に引かれてやってくるとき、地球の重力がなす仕事 W は、

$$W = \frac{GMm}{R} \quad (6.20)$$

となることを示せ。

- (2) 隕石が無限遠方から地球表面までやってくるとき、隕石の運動エネルギーの変化は次式であることを示せ。

$$\frac{m v_1^2}{2} \quad (6.21)$$

ヒント：初速度は 0 である。

- (3) このことから、地球衝突直前の隕石の速さ v_1 は次式のようになることを示せ：

$$v_1 = \sqrt{\frac{2GM}{R}} \quad (6.22)$$

- (4) 上の式の定数に、適切な数値を代入し、 v_1 の値を求めよ。

6.2 力学的エネルギー保存則

前節の式 (6.13), 式 (6.14) で、「運動エネルギー T は、される仕事のぶんだけ増える」ことを学んだ。さて、ここで以前学んだ、ポテンシャルエネルギーを思い出そう：ある特定の位置（基準点）から位置 x まで質点を運ぶときに保存力がなす仕事を $W(x)$ とすると、ポテンシャルエネルギー $U(x)$ は、 $U(x) = -W(x)$ と定義された。ここで、 $W(x_1)$ は、基準点からまず x_0 まで運んだときの仕事 $W(x_0)$ と、そこからさらに x_1 まで運ぶときの仕事 W_{01} の総和である、と考えれば、

$$W(x_0) + W_{01} = W(x_1) \quad (6.23)$$

である。従って、

$$W_{01} = W(x_1) - W(x_0) \quad (6.24)$$

である。ところが、ポテンシャルエネルギーの定義から、

$$W(x_0) = -U(x_0), \quad W(x_1) = -U(x_1) \quad (6.25)$$

とできるので、結局、

$$W_{01} = -U(x_1) + U(x_0) \quad (6.26)$$

である。これを式 (6.12) に代入すれば、

$$-U(x_1) + U(x_0) = \frac{1}{2} m v_1^2 - \frac{1}{2} m v_0^2 \quad (6.27)$$

となる。これを整理すると、

$$\frac{1}{2} m v_0^2 + U(x_0) = \frac{1}{2} m v_1^2 + U(x_1) \quad (6.28)$$

となる。あるいは、運動エネルギー $T(v)$ を使って書き換えれば、

$$T(v_0) + U(x_0) = T(v_1) + U(x_1) \quad (6.29)$$

となる。これらの式は味わい深い。左辺は質点が x_0 にあるときの、運動エネルギーとポテンシャルエネルギーの和であり、右辺は質点が x_1 にあるときの、運動エネルギーとポテンシャルエネルギーの和である。これらが等しいということは、つまり、「運動エネルギーとポテンシャルエネルギーの和」（これを 力学的エネルギー という）は運動の始めから終わりまで一定である、ということである（ x_0 や x_1 は運動の最中のどこの位置を選んでもよいことに注意せよ）。これを「力学的エネルギー保存則」と呼ぶ。ただし、既に述べたように、仕事とポテンシャルエネルギーの変化がきちんと対応するのは、働く力が「保存力」のときだけだ。摩擦力のような非保存力が働く場合は、仕事とポテンシャルエネルギーの変化

が対応しないために、力学的エネルギー保存則が成り立つ保証は無い。まとめると、

—— 力学的エネルギー保存則 ——

保存力だけが働く場合（非保存力が働かない場合）、力学的エネルギー（運動エネルギーとポテンシャルエネルギーの和）は運動の初めから終わりまで常に一定である。

問 99

- (1) 力学的エネルギーとは何か？
- (2) 力学的エネルギー保存則とは何か？
- (3) 力学的エネルギー保存則が成り立たないのはどういう場合か？

問 100 鉛直線上を自由落下する質点の運動（空気抵抗無し）を例にとって、力学的エネルギー保存則が成り立つことを確かめよう。問 73 の状況を考える。 $t = 0$ で $v = 0$, $x = 0$ とすると、

$$v(t) = -gt \quad (6.30)$$

$$x(t) = -\frac{1}{2}gt^2 \quad (6.31)$$

である。

- (1) 時刻 t のときの質点の運動エネルギー T と（重力による）ポテンシャルエネルギー U はそれぞれ、

$$T = \frac{1}{2}mg^2t^2 \quad (6.32)$$

$$U = -\frac{1}{2}mg^2t^2 \quad (6.33)$$

となることを示せ。

- (2) 力学的エネルギー保存則を知らなかったことにして、次式が恒等的に成り立つことを示せ：

$$T + U = 0 \quad (6.34)$$

問 101 バネにつけられて振動する質点の運動（単振動）を例にとって、力学的エネルギー保存則が成り立つことを確かめよう。前章の図 5.1 の状況を考える。時刻 t での質点の位置と速度をそれぞれ $x(t)$, $v(t)$ とする。 $t = 0$ で $v = 0$, $x = x_0$ とすると、

$$x(t) = x_0 \cos \omega t \quad (6.35)$$

である。ここで $\omega = \sqrt{k/m}$ である。

- (1) 時刻 t のときの質点の速度 $v(t)$ は次式になること

を示せ（ヒント： $x(t)$ を t で微分）：

$$v(t) = -x_0\omega \sin \omega t \quad (6.36)$$

- (2) 時刻 t のときの質点の運動エネルギー T と（バネの力による）ポテンシャルエネルギー U はそれぞれ、

$$T = \frac{1}{2}mx_0^2\omega^2 \sin^2 \omega t \quad (6.37)$$

$$U = \frac{1}{2}kx_0^2 \cos^2 \omega t \quad (6.38)$$

となることを示せ。ただしポテンシャルエネルギーの基準点として、ばねが自然状態のときの質点の位置（つまり $x = 0$ ）を考える。ヒント： $U = kx^2/2$ の x に $x(t)$ の式を代入。

- (3) 力学的エネルギー保存則を知らなかったことにして、次式が恒等的に成り立つことを示せ：

$$T + U = \frac{1}{2}kx_0^2 \quad (6.39)$$

問 100, 問 101 では、力学的エネルギー保存則が成り立った。そうになったのは、これらの間で働く力が保存力だけだったからだ。しかし、以下のように、非保存力が働くような場合は力学的エネルギー保存則は成り立たない（というか適用されない）：

問 102 カーリングの問題、すなわち問 75, 問 97 で、力学的エネルギー保存則が成り立たないことを示せ。成り立たないのはなぜなのだろうか？

6.3 問題の解答の作り方

ところで、物理学の問題で、解答を作るにはルールと何かコツがある。それをここで学んでおこう。

例題 某国の弾道ミサイルは、高度 2000 km まで達した後、ほぼ垂直に落下してくる。ミサイルは、地表に到達するときにはどのくらいの速さになると考えられるか？有効数字 2 桁で答えよ。ただし、ここでは空気抵抗を無視する。地球の半径を $R = 6400$ km, 重力加速度を $g = 9.8 \text{ m s}^{-2}$ とする。

（解答例）

ミサイルを質点とみなし、質量を m , 地表近くでの速さを v , 最高到達点の高さを h とする。 G を重力定数, M を地球質量とする。重力によるポテンシャルエネルギーを、最高到達点と地表のそれぞれで、 U_h, U_0 とする。（必要な記号を定義した！）

最高到達点で速さ 0 とすると、力学的エネルギー保存則から、

$$U_h = U_0 + \frac{1}{2}mv^2, \quad \text{従って,} \quad U_h - U_0 = \frac{1}{2}mv^2$$

となる (1)。無限遠を基準点とすると、重力の法則より、

$$U_h = -\frac{GMm}{R+h}, \quad U_0 = -\frac{GMm}{R} \quad \text{と書ける。}$$

(必要な基本法則を、この問題に合わせて書き出した！)*3

ここから、 $U_h - U_0 = \frac{GMmh}{R(R+h)}$ となる。ところで地表での重力は $\frac{GMm}{R^2}$ だが、これは mg に等しい。従って、 $\frac{GM}{R} = gR$ 。これを使うと、 $U_h - U_0 = \frac{gRmh}{R+h}$ となる。これと (1) より、 $\frac{gRmh}{R+h} = \frac{mv^2}{2}$ 。従って、 $v^2 = \frac{2ghR}{h+R}$ 、従って、

$$v = \sqrt{\frac{2ghR}{h+R}}$$

(値の代入はせずに、欲しい量をギリギリまで他の記号で表す努力をした！)

これに $R = 6400 \text{ km}$, $g = 9.8 \text{ m s}^{-2}$, $h = 2000 \text{ km}$ を代入すると、(ここでようやく一気に代入！)

$$v = \sqrt{\frac{2 \times 9.8 \text{ m s}^{-2} \times 2000 \text{ km} \times 6400 \text{ km}}{2000 \text{ km} + 6400 \text{ km}}}$$

(単位換算などはせずに、そのまま数値と単位を放り込んだ！)

$$= \sqrt{\frac{2 \times 9.8 \times 2000 \times 6400 \text{ m s}^{-2} \text{ km}^2}{8400 \text{ km}}}$$

(数値は数値、単位は単位で寄せて整理した。)

$$= \sqrt{\frac{2 \times 9.8 \times 2000 \times 16 \text{ m s}^{-2} \text{ km}}{21}}$$

(数値と単位のそれぞれで、約分可能なものは約分した。)

$$= \sqrt{\frac{2 \times 9.8 \times 2000 \times 16 \text{ m s}^{-2} \times 10^3 \text{ m}}{21}}$$

(接頭辞 (km の k など) を処理して SI 基本単位に揃えた。)

$$= \sqrt{\frac{2 \times 9.8 \times 2.0 \times 16 \text{ m}^2 \text{ s}^{-2} \times 10^6}{21}}$$

(10 のべき乗を整理して位取りを片付けた。単位も再整理。)

$$= \sqrt{\frac{2 \times 9.8 \times 2.0 \times 16}{21}} \times 10^3 \text{ m s}^{-1}$$

(10 のべき乗と単位について、根号の外に出せるものは出した。)

$$= 5.5 \times 10^3 \text{ m s}^{-1}$$

(電卓を叩いて数の掛け算と割り算をして根号を外した。)

解答のポイント:

- まず必要な記号を定義する。後から「これも必要だった!」と気づくときに備えて、多少スペースをとって書くといよい。
- 答えの直前まで、記号だけの式変形で粘る。値の代入はギリギリまで我慢する。
- 上の、 $v =$ の後の計算は、教育的にまわりくどく書いた一例。多少順序が変わったり、手順を省いたりしても構わない。
- 値を代入するときは単位も代入しよう!! まずは素直に与えられた単位で代入し、後から式の中で単位換算する。
- 数値 (有効数字)、位取り (10 のべき乗)、単位をわけて、それぞれで整理する。ごっちゃにしない。
- 掛け算・割り算の計算は、最後の最後に一気にまとめて行う。そうすれば有効数字の処理も簡単。
- 答の単位は式変形の結果として自然に出てくる。そうすれば「単位換算のし忘れ」は絶対に起きない。
- 「高さを h [m] とする」のような書き方をしている人がいるが、[m] は蛇足である。なぜか? $h = 2000 \text{ km}$ は $h = 2000000 \text{ m}$ と書き換えても構わない。てことは、「高さを表す記号」の定義には、単位は不要である。
- 高校までの参考書等で、「高さを h [m] とする」みたいに書いたり、単位を式に埋め込まずに数値だけで計算したりするものがあるが、それは科学的に合理的ではない。単位は「その量を数値で表す時」には必要だが、「その量を記号で表す時」は (原則的に) 不要である。なんでもかんでも単位をつければよいというものではない。必要な時につけ、不要なときにはつけないことが大事。

問 103 夏休みに南の島に行った君は、なぜか筑波大生の勇気を証明するために、バンジージャンプをする羽目になった。深い渓谷の上につけられた橋から、ゴムバンドが垂れ下がっている。橋から渓谷の底までの高さは 50 m、ゴムバンドの長さ L は 20 m くらいある。ゴムバンドは十分に軽い。ゴムバンドの先端が、質量 60 kg の君の体につけられたとき、君の脳裏に、「こんなにゴムバンドが長ければ、自分の体は途中で止まらずに渓谷の底に叩きつけられるのではないか?」という不安がよぎった。

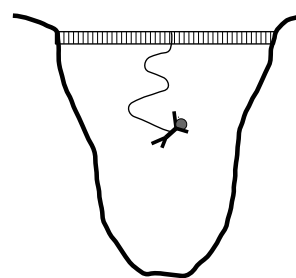


図 6.1 問 103 のバンジージャンプ。

*3 (注: この式は基本法則ではないので答案の中で導出が必要だという考え方もあろう。それについては「正解」は無い。君と読者の間の信頼関係が決まることである。)

そこで本番前に、試しに、このゴムバンドを 1.0 m だけ橋から出して、静かに自分の体を吊り下げてみたら、0.20 m だけ伸びた。

- (1) この 1.0 m のゴムバンドのバネ定数 k_0 は?
- (2) 20 m のゴムバンドは均一の素材・太さであるとする、20 m のゴムバンドのバネ定数 k は?

橋から初速度 0 で飛び降りるとき、君の運動エネルギー T は 0 だ。重力のポテンシャルエネルギー U も 0 であるとする（つまり、飛び降りる地点を基準点とする）。このとき、当然ながら力学的エネルギー E_0 は 0 だ。また、橋から高さ x だけ落ちたとき、重力のポテンシャルエネルギーは $-mgx$ である。そのときの速度を v とする。

- (3) 落下距離 x がゴムバンドの長さ未満のとき、力学的エネルギー E_1 は、

$$E_1 = \frac{mv^2}{2} - mgx \quad (6.40)$$

であることを示せ。このとき、ゴムバンドには全く力がかかっていないことに注意せよ。

- (4) 落下距離 x がゴムバンドの長さを越えたら、力学的エネルギー E_2 は、

$$E_2 = \frac{mv^2}{2} - mgx + \frac{k(x-L)^2}{2} \quad (6.41)$$

であることを示せ。

- (5) 君の体が運よく谷底の手前で停止したとするなら、停止の瞬間の力学的エネルギー E_3 は

$$E_3 = -mgx + \frac{k(x-L)^2}{2} \quad (6.42)$$

であることを示せ。

- (6) 以上を利用し、力学的エネルギー保存の法則 ($E_0 = E_3$) から、停止点までの落下距離 x を求めよ。この結果から、君はこのバンジージャンプを安全と判断するか? (注: 実際には実験したいと思った人へ: やめとけ。)

6.4 物理学における保存則

力学的エネルギー保存則は保存力だけが関与するような運動に限って成立するが、実は、「エネルギー保存則」は、もっと一般的・普遍的な法則である。例えば、氷上を滑るカーリングのストーンは、氷とストーンの間の摩擦力（非保存力）の仕事によって、いずれ停止してしまう

が、このとき力学的エネルギーは一定ではない。ストーンの運動エネルギーはポテンシャルエネルギーに転換されないのだ。しかし、そのかわりに、ストーンの運動エネルギーは氷とストーンの界面の摩擦によって熱に変わる。熱はエネルギーのひとつの形態だ。そして熱エネルギーとストーンの運動エネルギーの合計は、運動の最初・途中・最後のどの時点でも一定である。つまり、力学的エネルギーだけでは一定でないが、「力学的エネルギー + 熱エネルギー」は一定なのだ。

熱エネルギー以外にも、化学エネルギーや電氣的・磁氣的なエネルギーなど、様々なエネルギーの形態がある。実は質量もエネルギーの形態のひとつだ。ここでは詳述しないが、

$$E = mc^2 \quad (6.43)$$

という式が、質量とエネルギーの関係を表す（ E はエネルギー、 m は質量、 c は光の速さ）。それらをすべて勘案すれば、エネルギーは決して無くなることはない。これをエネルギー保存則という。エネルギー保存則は、ニュートン力学だけでなく、様々な物理法則に対して成り立つ、普遍的な法則である。

物理学では、エネルギーのように、様々な複雑な運動や反応の過程で最初から最後まで一定であるような量をととても大切にする。万物流転、栄枯盛衰の世にあって、変わらない何かを求めようとするのは人間の普遍的な心理なのかもしれないが、実際、自然現象の中には、そのような「総和は変わらない（どこかで減った分はどこかで増えるような）特別な量」（不変量）というものが、いくつが存在する。そのような事実（法則）を「保存則」と呼ぶ。エネルギー保存則はその例だが、それ以外にも、以下のような例がある（理由や背景は今では理解しなくてもよい。そのようなものがある、ということを頭の片隅に留めておこう）:

- 質量保存則
- 電荷保存則
- 運動量保存則
- 角運動量保存則

ただし、非保存力が働くときに力学的エネルギー保存則が破れるのと同様に、これら保存則の中には、条件次第で「破れる」ものもある^{*4}。

^{*4} 例えば質量保存則は、核分裂や核融合等の反応では成り立たない。その過程では質量がエネルギーに変わってしまうのだ。ただし、質量保存則をエネルギー保存則と組み合わせてしまえば、その場合でも保存則は成り立つ。

なぜ物理学では保存則を大切にするのか？ それは、君が勉強を進めて、保存則の持つ威力を知るに従って、おのずと明らかになるだろう。

問 104 自動車の運転免許講習では、ことあるごとに「スピードを控えめに」と言われるが、なぜだろう？ ひとつは、高速での運動は制御が難しい、ということだ。運転者が危険を察知してからブレーキを踏んだりハンドルを切ったりするまでには時間がかかり、その間にも車は進んでしまう、というやつだ。しかしそれだけではない。スピードを控えめにすべき理由を、エネルギー保存則の観点で説明せよ。

演習問題 14 バネじかけのおもちゃの鉄砲を作った。銃身の中に仕込まれたバネのバネ定数は 40 N/m である。バネを 10 cm だけ縮めて、 4.0 g の砲弾を仕込み、引き金を引いた。砲弾はどのくらいの速さで鉄砲から飛び出るか？ ただし砲身は水平に固定され、バネの質量や、砲身と砲弾の間の摩擦は無視する。ヒント：バネのポテンシャルエネルギーの式は、導出せずに使ってよい。

演習問題 15 直径 4.0 mm 、長さ 10 cm の鉄製の釘を、木材に打ち込む。質量 1.0 kg のハンマーを、釘の頭から 30 cm だけ高い位置から振り下ろして釘を叩くことを 10 回行ったら、釘の頭は木の表面まで届いた。このとき、釘の頭を触ると熱かった。釘の温度は、当初よりどれだけ上がったか？ ただし、ハンマーを振り下ろすとき手は力を加えない（ハンマーの自由落下に任せる）。また、木の熱伝導率は鉄のそれよりもはるかに小さいので、生じた熱の全ては釘に蓄えられ、木には行かないとする。鉄の密度を $\rho = 7.8 \text{ g cm}^{-3}$ 、鉄の比熱を $460 \text{ J kg}^{-1} \text{ K}^{-1}$ とする。

6.5 解答

答 94 式 (6.4) で定義される T のこと（レポートではその式をきちんと書くこと!）。

答 96

(1) 質点を受ける力は一定値 F なので、

$$W_{01} = \int_{x(t_0)}^{x(t_1)} F dx = \left[Fx \right]_{x(t_0)}^{x(t_1)} = F \{x(t_1) - x(t_0)\}$$

(2) $F = ma$ を上の式に代入すればよい。

(3) 式 (6.12) を用いて W_{01} を消去する:

$$\frac{1}{2}mv(t_1)^2 - \frac{1}{2}mv(t_0)^2 = ma\{x(t_1) - x(t_0)\}$$

両辺を 2 倍して m で割れば、与式を得る。

答 97 注意：手放されて滑っているストーンにかかる力は、重力と、氷面から受ける垂直抗力、そして動摩擦力だ。このうち、重力と、氷面から受ける垂直抗力は互いに逆向きで同じ大きさであり、打ち消しあう。従って、ストーンの運動には、動摩擦力だけを考えれば良い。

- (1) 摩擦力（動摩擦力）はストーンの動く向きと逆方向で、 $-F_m$ 。これを F として問 96(1) の結果に入れば、仕事は $-F_mx$ 。
- (2) ストーンが放たれた直後の運動エネルギーは $mv_0^2/2$ であり、停止時には 0 。従って与式が成り立つ。
- (3) 式 (6.12) によれば、小問 (1) の式と小問 (2) の式は互いに等しい。従って与式を得る。
- (4) 小問 (3) の結果から、

$$x = \frac{mv_0^2}{2F_m} \quad (6.44)$$

従って、 x は v_0^2 に比例する。

答 98

- (1) 式 (3.24) で、 $R_0 = \infty$ 、 $R_1 = R$ とすればよい。
- (2) 略。
- (3) 式 (6.13) より、式 (6.20) と式 (6.21) が等しい。従って、

$$\frac{GMm}{R} = \frac{1}{2}mv_1^2 \quad (6.45)$$

従って、

$$v_1 = \sqrt{\frac{2GM}{R}} \quad (6.46)$$

- (4) $G = 6.67 \times 10^{-11} \text{ N m}^2 \text{ kg}^{-2}$,
 $M = 5.97 \times 10^{24} \text{ kg}$,
 $R = 6.38 \times 10^6 \text{ m}$ とすると,
 $v_1 = 1.12 \times 10^4 \text{ m s}^{-1}$ 。これは約 40000 km/h 。
 注：これを第二宇宙速度という。

答 99

- (1) 運動エネルギーとポテンシャルエネルギーの和を力

学的エネルギーという。

- (2) 力学的エネルギーは運動の初めから終わりまで一定である、という法則。ただし、力は保存力に限る。
 (3) 例えば摩擦力は保存力ではないから、摩擦力が関与する運動では力学的エネルギー保存則は成り立たない。

答 100

- (1) 式 (6.4) に式 (6.30) を代入すると、式 (6.32) を得る。また、式 (3.37) で、 h を x と書き換えると、 $U(x) = mgx$ である。この式に式 (6.31) を代入すると、式 (6.33) を得る。
 (2) 式 (6.32) と式 (6.33) の辺々を加えると与式を得る。

答 101

- (1) 略 (式 (6.35) を t で微分するだけ)。
 (2) 式 (6.4) に式 (6.36) を代入すると、式 (6.37) を得る。また、式 (3.40) に式 (6.35) を代入すると、式 (6.38) を得る。
 (3) 式 (6.37) と式 (6.38) の辺々を加えると、

$$T + U = \frac{1}{2} m x_0^2 \omega^2 \sin^2 \omega t + \frac{1}{2} k x_0^2 \cos^2 \omega t$$

ここで、問題より $\omega = \sqrt{k/m}$ なので、上の式は、

$$T + U = \frac{1}{2} k x_0^2 \sin^2 \omega t + \frac{1}{2} k x_0^2 \cos^2 \omega t$$

となる。これを変形すると、

$$T + U = \frac{1}{2} k x_0^2 (\sin^2 \omega t + \cos^2 \omega t) = \frac{1}{2} k x_0^2$$

となり、与式を得る。

答 102 ストーンが放たれた直後とストーンが停止したときのそれぞれで、運動エネルギーは $mv_0^2/2$ と 0 である。一方、ポテンシャルエネルギーは、摩擦力についてはストーンが放たれた直後とストーンが停止したときで互いに等しい (どちらも水平面にあるから)。従って、力学的エネルギーは、ストーンが放たれた直後の方が、ストーンが停止したときよりも $mv_0^2/2$ だけ大きい。従って、力学的エネルギー保存則は成り立たない。それは、ストーンの運動に関与する力が摩擦力であり、摩擦力は非保存力であり、非保存力が関与する場合は力学的エネルギー保存則は成り立たないからである。

答 103 君の質量 (体重) を m 、重力加速度を g とする。

- (1) ゴムバンドの弾性力と重力が釣り合う (合力が 0) か

ら、 $-k_0\delta + mg = 0$ である (ここで δ はゴムバンドの伸びで、0.2 m)。従って、

$$k_0 = \frac{mg}{\delta} = \frac{60 \text{ kg} \times 9.8 \text{ m/s}^2}{0.2 \text{ m}} = 2940 \text{ N/m}$$

- (2) バネ定数はバネの長さに反比例する。今の場合、ゴムがのびる長さが 20 倍になるから、 $k = k_0/20 = 147 \text{ N/m}$ 。
 (3) 運動エネルギーは $mv^2/2$ 。ポテンシャルエネルギーは、重力によるもののみであり、 $-mgx$ 。両者の和から、 $E_1 = mv^2/2 - mgx$ 。
 (4) ゴムバンドの伸びは $x - L$ である。従って、ゴムバンドの弾性力によるポテンシャルエネルギーは $k(x - L)^2/2$ 。これを前小問の式に加えれば良い。
 (5) 停止する瞬間は、速度が 0。従って、前小問の式で $v = 0$ とすればよい。
 (6) $E_0 = E_3$ より、

$$0 = -mgx + \frac{k(x - L)^2}{2} \quad \text{従って、}$$

$$x^2 - 2\left(L + \frac{mg}{k}\right)x + L^2 = 0$$

2 次方程式の解の公式から、

$$x = L + \frac{mg}{k} \pm \sqrt{\frac{2mgL}{k} + \frac{m^2g^2}{k^2}} \quad (6.47)$$

これに適当な数値を代入すれば、 $x = 37.3 \text{ m}$ 、 10.7 m となる。このうち、求める解は少なくともゴムバンドの長さ $L = 20 \text{ m}$ 以上のはずなので、結局、 $x = 37.3 \text{ m}$ となる。谷底までの深さは 50 m あるから、君の体は谷底までは到達しない。従って、このバンジージャンプは (ゴムがぶちっと切れたりしない限り) 安全だろう。

答 104 高速で運動する物体の運動エネルギーは大きい。運動エネルギーは速度の 2 乗に比例するので、例えば 40 km/h と 60 km/h では速さは 1.5 倍だが、運動エネルギーは $1.5^2 = 2.25$ 倍にもなる。そして、事故で急停止したときは、エネルギー保存則のために、その運動エネルギーは車や搭乗者の身体の破壊に使われる。「事故ったときのダメージを小さくする」ためにも、スピードは控えめにすべきであり、また、高速で運転するときほど、事故のリスクを (低速での運転時よりも) 低くするように務めるべきなのだ。

よくある質問 71 なぜカーリングのときに U が 0 になるのですか? ... まず摩擦力は非保存力なので U は無い。また、ストーンは水平方向に動くので重力のする仕事は 0。したがって、 U の変化は 0。したがって、もし重力による U をストーンの出発点で 0 と置けば、 U は氷面上のどこに行っても 0。

第7章

運動量保存則

前章で学んだ「力学的エネルギー保存則」は、うまく使えば、運動方程式を解かなくても、物体の運動について多くのことを簡単に教えてくれる。しかし、あの法則にも弱点がある。ひとつは、摩擦力などの非保存力が働いてたら使えない、ということ。もうひとつは、物体の「速さ」は教えてくれても「運動の方向」は教えてくれないことである。

そこで、それらを補ってくれるような、もうひとつの保存則をここでは学ぶ。それは「運動量保存則」である。この法則もいくつか弱点があるが、力学的エネルギー保存則が使えない時にも使える（ことがある）し、力学的エネルギー保存則と組み合わせることができれば、さらに威力を発揮する。

特に強力なのは、複数の物体どうしが衝突するような状況である。

7.1 運動量保存則

図 7.1 のような、2 つの質点 A, B が近づいてきて衝突し、一体化する運動を考える。質点 A, B それぞれの質量を m_A, m_B とする。時刻 t_0 のとき（衝突前）、質点 A, B はそれぞれ速度 $\mathbf{v}_A, \mathbf{v}_B$ で xy 平面上を別の方向に等速直線運動しているとしよう。時刻 t_1 に 2 つは衝突して合体する。そして時刻 t_2 では（衝突後）、合体した物体が新たな方向に速度 \mathbf{v} で進んでいるとしよう。この速度 \mathbf{v} を求めよ、と言われたらどうすればよいだろう？

極微の世界や高速の世界を除けば、どんな運動も運動方程式に従うので、この件も運動方程式を解けば完璧に予測・解明できるはずだ。しかし、この件に関しては、運動方程式を正面から解くのは難しい。というのも、そもそも「衝突して合体」は、時刻 t_1 の「瞬間」で起きるのではなく、衝突が始まって物体が徐々につぶれて、その間、弾性力や摩擦力が複雑に働き、やがてお互いがくっ

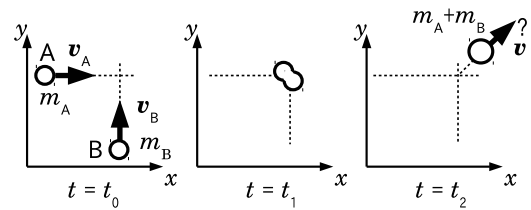


図 7.1 2 つの質点の衝突合体

つきあって一体化するまで、短い時間だが複雑な現象が起きるのだ。その各時刻に、2 つの物体の間にどのように力が働くのかを解明するのは大変難しい作業だ。

というわけで、この時刻 t_1 付近で起きる「衝突して合体」という複雑な現象を運動方程式で直接扱うことは避けたい。君子危うきに近寄らず、と言うではないか。

そこで有用なのが、これから学ぶ、以下の法則である：

運動量保存則

外力が働かない系では、全運動量（各質点の運動量の総和）は不変である。

外力とは、考察の対象になっている物体どうしに働く力（それを内力という）以外の力だ。本件でも外力は働いていない^{*1}。全運動量とは、各物体の運動量の（ベクトルとしての）和である。運動量とは、式 (4.38) で定義されたように、質量と速度の積である。

この法則がなぜ成り立つかは、後で説明するとして、とりあえずこの法則が正しいと信じてみよう。本件では、時刻 t_0 （つまり衝突前）の全運動量は、

$$m_A \mathbf{v}_A + m_B \mathbf{v}_B \quad (7.1)$$

である。ここで、添字の A, B は、それぞれ質点 A, 質点

^{*1} 衝突して合体するまでに生じる複雑な力は、具体的にその力がどんなものなのかというのは置いて、「考察の対象になっている物体どうしに働く力」なので内力である。

Bの属性であることを示す。時刻 t_2 (つまり衝突後)では質点はひとつに合体しており、その運動量は、

$$(m_A + m_B)\mathbf{v} \quad (7.2)$$

である。運動量保存則は、式(7.1)と式(7.2)が等しい、と主張するのだ。すなわち、

$$m_A\mathbf{v}_A + m_B\mathbf{v}_B = (m_A + m_B)\mathbf{v} \quad (7.3)$$

が成り立つはずだ。それを認めるなら、

$$\mathbf{v} = \frac{m_A\mathbf{v}_A + m_B\mathbf{v}_B}{m_A + m_B} \quad (7.4)$$

となって、衝突後の質点の速度が求まる。実際、実験してみると、確かにこうなるのだ。

問105 図7.1の問題において、 $m_A = m_B = 1.0 \text{ kg}$ とし、時刻 t_0 でAは x 軸方向に 1.0 m s^{-1} 、Bは y 軸方向に 1.0 m s^{-1} で動いているとする。

- (1) 衝突合体後の速度 \mathbf{v} を求めよ。
- (2) $|\mathbf{v}|$ を求めよ。

では、運動量保存則を証明しよう。まず運動方程式に戻る(運動の話は全て運動方程式から始まるのだ!)。質量 m の質点が力 \mathbf{F} を受けて運動しているとき、その運動は、どんなものでも以下の運動方程式に従う：

$$\mathbf{F} = m\mathbf{a} = m \frac{d\mathbf{v}}{dt} = m \frac{d^2\mathbf{r}}{dt^2} \quad (7.5)$$

t は時刻である。 $\mathbf{r}, \mathbf{v}, \mathbf{a}$ はそれぞれ、質点の位置、速度、加速度。さて、上の式は、以下のように書ける：

$$m \frac{d\mathbf{v}}{dt} = \mathbf{F} \quad (7.6)$$

両辺に dt をかけると次式になる：

$$m d\mathbf{v} = \mathbf{F} dt \quad (7.7)$$

これを時刻 $t = t_0$ から時刻 $t = t_1$ まで t で積分すれば、

$$\int_{\mathbf{v}(t_0)}^{\mathbf{v}(t_1)} m d\mathbf{v} = \int_{t_0}^{t_1} \mathbf{F} dt \quad (7.8)$$

となる。左辺は、

$$\left[m\mathbf{v} \right]_{\mathbf{v}(t_0)}^{\mathbf{v}(t_1)} = m\mathbf{v}(t_1) - m\mathbf{v}(t_0) \quad (7.9)$$

となるから、式(7.8)は、

$$m\mathbf{v}(t_1) - m\mathbf{v}(t_0) = \int_{t_0}^{t_1} \mathbf{F} dt \quad (7.10)$$

となる。この式の左辺は「時刻 t_0 から t_1 の間に運動量がどれだけ変わったか」だ。一方、右辺は力積(りきせき、と読む)という量である。

力積の定義

時刻を t とする。質点に、力 $\mathbf{F}(t)$ が働くとき、

$$\int_{t_0}^{t_1} \mathbf{F} dt \quad (7.11)$$

を、時刻 t_0 から t_1 までに質点に働く力積と呼ぶ。

問106 力積の定義を5回書いて記憶せよ。

すなわち、式(7.10)は、「運動量の変化は力積に等しい」と解釈できる。これはこれで大切な法則である。そして、この法則をもとに、運動量保存則が証明される(ちなみに、この法則のことを運動量保存則と呼ぶこともある)。

よくある質問72 「運動エネルギーの変化は仕事に等しい」という法則と似てますね... 似てるけど違います。両者の違いをきちんと認識しよう。運動エネルギーや仕事はスカラーで、その法則は運動方程式を位置で積分して得られました。一方、運動量や力積はベクトルで、ここで述べた法則は運動方程式を時刻で積分することで得られたのです。

さて、いま、A、Bという2つの質点が互いに力を及ぼしあいながら時刻 $t = t_0$ から時刻 $t = t_1$ まで運動する状況を考えよう。各質点は外力を受けることがないとする。質点Aが質点Bから受ける力を \mathbf{F}_{AB} 、とし、質点Bが質点Aから受ける力を \mathbf{F}_{BA} とする。それぞれの質点に関して、式(7.10)と同様の式が成り立つはずである：

$$m_A\mathbf{v}_A(t_1) - m_A\mathbf{v}_A(t_0) = \int_{t_0}^{t_1} \mathbf{F}_{AB} dt \quad (7.12)$$

$$m_B\mathbf{v}_B(t_1) - m_B\mathbf{v}_B(t_0) = \int_{t_0}^{t_1} \mathbf{F}_{BA} dt \quad (7.13)$$

これらを辺々足し合わせると、

$$\begin{aligned} & m_A\mathbf{v}_A(t_1) - m_A\mathbf{v}_A(t_0) + m_B\mathbf{v}_B(t_1) - m_B\mathbf{v}_B(t_0) \\ &= \int_{t_0}^{t_1} \mathbf{F}_{AB} dt + \int_{t_0}^{t_1} \mathbf{F}_{BA} dt \\ &= \int_{t_0}^{t_1} (\mathbf{F}_{AB} + \mathbf{F}_{BA}) dt \end{aligned} \quad (7.14)$$

となる。ここで作用反作用の法則から、

$$\mathbf{F}_{AB} = -\mathbf{F}_{BA} \quad (7.15)$$

である。従って、

$$\mathbf{F}_{AB} + \mathbf{F}_{BA} = 0 \quad (7.16)$$

である。従って、式 (7.14) の最後の行は 0 になる (0 の積分は 0)。従って、

$$m_A \mathbf{v}_A(t_1) - m_A \mathbf{v}_A(t_0) + m_B \mathbf{v}_B(t_1) - m_B \mathbf{v}_B(t_0) = 0$$

となる。書き換えれば、

$$\begin{aligned} m_A \mathbf{v}_A(t_1) + m_B \mathbf{v}_B(t_1) \\ = m_A \mathbf{v}_A(t_0) + m_B \mathbf{v}_B(t_0) \end{aligned} \quad (7.17)$$

となる。この式は、2つの質点の運動量の和は時刻 t_1 と時刻 t_0 で変わらない、ということだ。以上から、「2つの質点が、外力の影響を受けずに運動する場合、全運動量は不変である」ということが示された。次の問で証明するように、質点が3つになっても、同様の式が成り立つ。この証明を、任意の個数の質点に拡張することも容易にできる。つまり、前述の運動量保存則が成り立つ!

問 107 3つの質点 A, B, C が互いに内力のみを受けて運動する系でも、全運動量が保存することを示せ。
ヒント：式 (7.12) のような式を、A, B, C のそれぞれについて考え、足し合わせればよい。ただし、A に働く力は $\mathbf{F}_{AB} + \mathbf{F}_{AC}$ であることに注意。

問 108 2つの質点 A, B が、 x 軸上を互いに逆向きに等速直線運動で運動し、接近し、いずれ衝突する。質点 A, B の質量はそれぞれ 2.0 kg と 3.0 kg であり、衝突前の質点 A, B の速度はそれぞれ -4.0 m s^{-1} , 5.0 m s^{-1} である。衝突後、2つの質点はくっついて1つの質点になる場合、衝突後のこの質点の速度を求めよ。

7.2 衝突のときエネルギーはどうなるのか?

この「運動量保存則」は、前章までに学んだ「力学的エネルギー保存則」になんとなく似ているが、正直なところ、どう違うのだろうか? そこで、以下の問を考えよう:

問 109 問 105 の続きを考える。

- (1) 衝突前の運動エネルギーの総和を求めよ。
- (2) 衝突合体後の運動エネルギーを求めよ。

この現象では、衝突合体で運動エネルギーが減ってしまった。では、この減ったぶんのエネルギーはどこに行ってしまったのだろうか?

まず考えられるのは、ポテンシャルエネルギーである。既に学んだ「力学的エネルギー保存則」では、運動エネルギーとポテンシャルエネルギーの総和は一定なのだから、運動エネルギーが減った分、ポテンシャルエネルギーが増えていれば、つじつまは合う。

しかし! この衝突ではポテンシャルエネルギーは変化していない。ていうか、外力が無いからそもそもポテンシャルエネルギーは 0 である。もし外力 (ボールの衝突における重力など) があつたらどうだろう? 外力が仕事をすれば、それはポテンシャルエネルギーを変化させるだろう。ところが、衝突の短い瞬間だけに注目すると、物体の運動は小さい空間領域で発生するので、たとえ外力があっても、外力による仕事はほとんど無視できる (仕事 = 力 \times 変位の「変位」が小さいから!)。従って、外力がある場合でも、衝突の前後で外力によるポテンシャルエネルギーの変化はほぼ 0 だ。従って、外力があろうがなかろうが、衝突の前後でポテンシャルエネルギーは変化しない。

ならば外力以外の力によるポテンシャルエネルギーはどうだろう? 例えば、ボールどうしが衝突するとき、ボールは変形する。その変形は、ボールを構成する各部分の弾性力に逆らって行われる (仕事がされる) ものなので、弾性力によるポテンシャルエネルギーを増加させる。しかもこの変形は、衝突終了後も、ボールをぐにゃぐにゃと振動させることによって継続する。弾性力によるポテンシャルエネルギーは、この振動の運動エネルギーにも転化するだろう。

そのような振動は、やがて収まるだろう。それは、ボール内部の摩擦によるものである。そのとき、振動のエネルギーは、最終的にはボールの温度を上げる熱エネルギーとなるだろう。

このように、衝突の際に減った運動エネルギーは、物体内部の振動のエネルギーや熱になるのである。

このようなことのない衝突、すなわち、衝突によって全運動エネルギーが変化しない (減らない) ような衝突を、弾性衝突 とか、完全弾性衝突 という。弾性衝突でない衝突現象 (全運動エネルギーが減る衝突) を、非弾性衝突 という。上の例は、非弾性衝突である。

よくある間違い 2 弾性衝突を「エネルギーが失われない衝突」のことだと思っている... 定義としては間違いです。非弾性衝突でも、熱エネルギーまで含めて全てのエネルギーを考えれば、エネルギーは失われません。

よくある間違い 3 弾性衝突を「運動量が失われない衝突」のことだと思っている... 定義としては間違いです。非弾性衝突でも運動量は変化しません。それは式 (7.17) であなた自身が証明したことです。

問 110 弾性衝突とは何か?

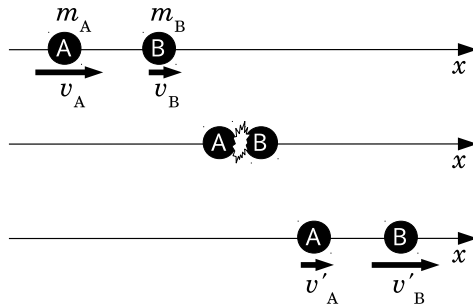


図 7.2 1 直線上を運動する 2 つの質点どうしの衝突。
上: 衝突前, 中: 衝突の瞬間, 下: 衝突後

問 111 x 軸上で, 2 つの質点 A, B が, それぞれ速度 v_A, v_B で運動し (図 7.2 上), やがて互いに弾性衝突を起こし (図 7.2 中), 衝突後はそれぞれ速度 v'_A, v'_B で (ここではダッシュ'は微分ではなく, 「衝突後」を表すしるし), 再び x 軸上で運動をする (図 7.2 下)。質点 A, B のそれぞれの質量を m_A, m_B とする。2 つの質点に外力は働いておらず, 2 つの質点どうしに働く力 (内力) は衝突時だけに働くとする。

- (1) 運動量保存則と力学的エネルギー保存則より, 以下の 2 つの式が成り立つことを示せ:

$$m_A v_A + m_B v_B = m_A v'_A + m_B v'_B \quad (7.18)$$

$$\frac{1}{2} m_A v_A^2 + \frac{1}{2} m_B v_B^2 = \frac{1}{2} m_A v'^2_A + \frac{1}{2} m_B v'^2_B \quad (7.19)$$

- (2) 式 (7.18), 式 (7.19) から次式を示せ:

$$m_A (v'_A - v_A) = -m_B (v'_B - v_B) \quad (7.20)$$

$$m_A (v'^2_A - v_A^2) = -m_B (v'^2_B - v_B^2) \quad (7.21)$$

- (3) 式 (7.21) から次式を示せ:

$$m_A (v'_A - v_A)(v'_A + v_A) = -m_B (v'_B - v_B)(v'_B + v_B) \quad (7.22)$$

- (4) 式 (7.22) の両辺を式 (7.20) で割って次式を示せ:

$$v'_A + v_A = v'_B + v_B \quad (7.23)$$

- (5) 式 (7.23) を変形して次式を示せ:

$$v'_B - v'_A = -(v_B - v_A) \quad (7.24)$$

- (6) 式 (7.24) を変形して次式を示せ:

$$\frac{|v'_B - v'_A|}{|v_B - v_A|} = 1 \quad (7.25)$$

式 (7.24) によって, ぶつかる前後で相対速度は, 向きが逆になることがわかった。つまり, ぶつかる前には互いに近づいて来たが, ぶつかった後では互いに遠ざかっていく。これは直感的にも明らかだ。

ぶつかった後の相対速度の大きさ $|v'_B - v'_A|$ を, ぶつかる前の相対速度の大きさ $|v_B - v_A|$ で割ったものを 反発係数 とか跳ね返り係数と呼び, 慣習的には e と表す。すなわち,

$$e = \frac{|v'_B - v'_A|}{|v_B - v_A|} \quad (7.26)$$

である。弾性衝突では, 式 (7.25) からわかるように, $e = 1$ である。非弾性衝突では, e は 0 から 1 の間の値をとる。 $e = 0$ は, 物体 B が物体 A にべちゃっとくっついてしまう場合だ。例えばゴルフボールとゴルフクラブの衝突に関する反発係数は 0.8 程度である。

よくある質問 73 e って, ネイピア数 (自然対数の底) じゃないんですか? ... 記号がかぶってて, 紛らわしいけど, ここでは違います。 e は反発係数で, 0 から 1 までの間の値をとります。ネイピア数は $e = 2.718 \dots$ だもんね。

問 112 問 111 の続きを考える。

- (1) 式 (7.23) を使って, 式 (7.20) から v'_B を消去することによって次式を示せ:

$$v'_A = \frac{m_A - m_B}{m_A + m_B} v_A + \frac{2m_B}{m_A + m_B} v_B \quad (7.27)$$

- (2) 式 (7.23) を使って, 式 (7.20) から v'_A を消去することによって次式を示せ:

$$v'_B = \frac{m_B - m_A}{m_A + m_B} v_B + \frac{2m_A}{m_A + m_B} v_A \quad (7.28)$$

- (3) $m_A = m_B$ のとき, 次式を示せ:

$$v'_A = v_B \quad (7.29)$$

$$v'_B = v_A \quad (7.30)$$

- (4) $m_A \gg m_B$ のとき, 次式を示せ:

$$v'_A \doteq v_A \quad (7.31)$$

$$v'_B \doteq -v_B + 2v_A \quad (7.32)$$

式 (7.29), 式 (7.30) から, 2 つの質点の質量が等しければ, 弾性衝突によって速度が入れ替わる (図 7.3), ということがわかった。追いついた方は追いつかれた方の速度になり, 追いつかれた方は追いついた方の速度になる。この極端な場合は, 片方が静止してもう片方がぶつかっ

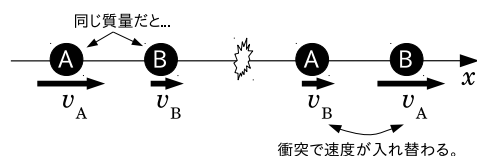


図 7.3 1 直線上を等速直線運動する 2 つの質点どうしの衝突。質量が等しく, なおかつ弾性衝突なら, 速度が入れ替わる。

てくる場合だ。ぶつかってきた方は衝突後に静止し, ぶつかられた方がすっとんでいく。ビリヤードの経験がある人は, それを知っているだろう。

ところで, 式 (7.31), 式 (7.32) から, 片方の質量が極端に大きいときは, 大きい方はほとんど速度を変えず (痛くも痒くもない), 小さい方は激しく速度を変える (ふっとばされる), ということがわかった (図 7.4)。小さな軽自動車と大きなトラックの衝突事故で, 軽自動車に乗っていた人の方がダメージが大きいのはそのためだ。

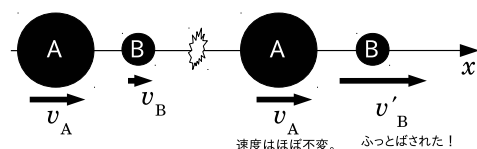


図 7.4 1 直線上を等速直線運動する 2 つの質点どうしの衝突。片方が極端に大きいときは, 小さいほうがふっとばされる。

問 113 ボールを高さ h_0 から初速度 0 で真下に落として, バウンドさせる。ボールと地面の間の反発係数を e としよう。空気抵抗やボールの回転は無視する。

- (1) ボールが地面につく直前の速度を v_0 とする。力学的エネルギー保存則から次式を示せ:

$$v_0^2 = 2gh_0 \quad (7.33)$$

- (2) ボールが地面で跳ね返った直後の速度を v_1 とする。次式を示せ:

$$|v_1| = e|v_0| \quad (7.34)$$

- (3) ボールは地面で跳ね返ったあと上向きに運動し, いずれある点 (それを到達点と呼ぼう) に達してまた

落ち始める。そのときの到達点の高さを h_1 とし, 次式を示せ:

$$v_1^2 = 2gh_1 \quad (7.35)$$

- (4) 次式を示せ:

$$h_1 = e^2 h_0 \quad (7.36)$$

- (5) そのまま放っておけば, またボールは地面に衝突して跳ね返り, また落ちて地面に衝突して跳ね返り, ... ということを繰り返すだろう。 n を 1 以上の整数として, ボールが n 回バウンドしたあとの到達点の高さを h_n とすると, 次式を示せ:

$$h_n = e^{2n} h_0 \quad (7.37)$$

- (6) $e = 0.8$, $h_0 = 10$ m のとき, 到達点の高さが 0.1 m 以下になるまでに, 何回バウンドするか?

問 114 2 つのボールを, わずかに隙間をあけて縦に重ねて, 高さ h から (初速度 0 で) 真下の地面に落とし, バウンドさせる。下のボールを「ボール A」とし, その質量を m_A とする。上のボールを「ボール B」とし, 質量を m_B とする。ボール B はボール A よりはるかに小さく, $m_A \gg m_B$ とする。ボール A と地面の衝突や, ボール A とボール B の衝突は弾性衝突であるとする。重力加速度を g とする。上向きに座標軸をとる。

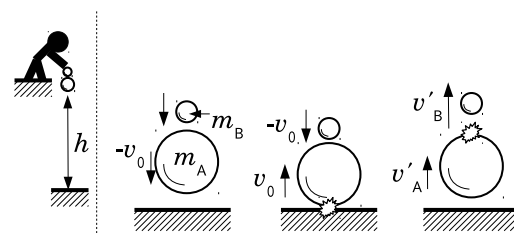


図 7.5 2 段のボールの落下と跳ね返り。問 114。

- (1) 地面に衝突する直前 (図 7.5 中左) のボール A の速度の大きさを v_0 とする。 $v_0 = \sqrt{2gh}$ であることを示せ。
- (2) ボール A が地面に衝突して跳ね返った直後は, ボール B はまだボール A の上空にあるとする (図 7.5 中右)。このときのボール A の速度を v_A , ボール B の速度を v_B とする。次式を示せ:

$$v_A = v_0 \quad (7.38)$$

$$v_B = -v_0 \quad (7.39)$$

- (3) その直後に, ボール B はボール A に衝突して跳ね

返る(図 7.5 右端)。衝突直後のボール B の速度を v'_B とする。これらの一連の衝突は、地面付近の狭い範囲で起きるので、重力によるポテンシャルエネルギーの変化を無視しよう。すると式 (7.32) が成り立つことから、次式を示せ:

$$v'_B \doteq 3v_0 \quad (7.40)$$

- (4) ボール B は、ボール A に衝突して跳ね返ったあと、もとの落下開始点(高さ h)の何倍の高さまで飛び上がるか?

7.3 回転運動再考

ところで、太陽のまわりを地球が円運動(公転)している系を考えよう。太陽と地球だけの系には外力は働かないので、運動量保存則から、全運動量は一定のはずだ。さて、地球の速度は、大きさこそ一定であっても、円軌道に沿って時々刻々と向きを変える。すると、地球の運動量は、大きさこそ一定であっても、時々刻々と向きが変わるはずだ。一方、太陽は静止しているから運動量は無い。ということは、全運動量は地球の運動量だけだ。ということは、全運動量が時々刻々と変化している、ということになる!! これは運動量保存則に矛盾している。どこが間違っているだろうか?

実は、この考察は、「太陽は静止しているから運動量は無い」から後が間違っている。地球が太陽から引力を受けるように、太陽も地球から引力を受ける(「作用・反作用の法則」)。その力によって、太陽も、小さいながらも円運動するのだ。しかもその運動量は、絶えず地球の運動量とは逆向きで大きさが同じであるため、太陽と地球の全運動量は 0 で一定なのである^{*2}。

演習問題 16 さっきはボールを 2 段にして落としたが、こんどはボールをもっとたくさん用意して重ねて落としてみよう。 n 個のボールを縦に重ねて、前問と同じように高さ h から落とす。ボールは上のもので軽く、隣りあう上下のボールは、上のボールのほうが下のボールよりはるかに小さい(軽い)とする。最下部のボールが地面に弾性衝突して跳ね返ったあと、ボール同士は多段階に弾性衝突する(図 7.6)。最後に最上部のボールが跳ね上がるときのそのボールの速度を v'_n とする。

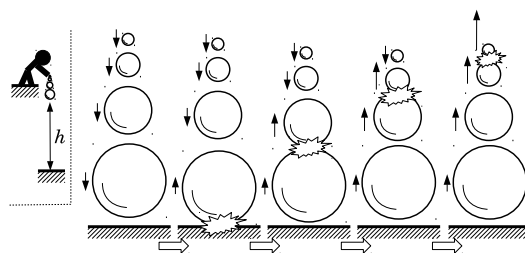


図 7.6 多段のボールの落下と跳ね返り。問 16。

- (1) 次式を示せ:

$$v'_n \doteq (2^n - 1)v_0 \quad (7.41)$$

- (2) 最上部のボールは、もとの落下開始点(高さ h)の何倍の高さまで飛び上がるか?
 (3) ボール群を $h = 5 \text{ m}$ から落下させ、最上部のボールを宇宙の彼方まで飛ばすには、ボールを 10 段程度にすればよいことを示せ。(ヒント: 第 2 宇宙速度)

演習問題 17 テニスのトップ選手の打つボールの速さは 200 km/h 程度である。フェデラー選手が 200 km/h のサーブを打ち、それを錦織圭選手が 200 km/h で打ち返した。その際、錦織選手のラケットとボールが接触している時間は 3.0 ms だった。その間、ボールに働いた力の大きさを見積もれ。また、そのような大きな力が発生するにもかかわらず、錦織選手の右腕が壊れないのはなぜだろう? ただしテニスボールの質量を 60 g とする。

演習問題 18 質量 50 kg の学生が、質量 10 kg の台車の上に乗って、台車から見て 1.0 m s^{-1} の早さで歩き始めた。そのとき台車は、学生が歩く方向とは逆方向に動き始めた。台車の外から見た台車の動く速さを求めよ。

演習問題 19 宇宙空間で直線上を加速しながら進むロケットの運動を考えよう。ロケットにはたくさんの燃料が積まれている。燃料込みでのロケットの質量を M とする。ロケットは、相対速度 u で、燃料を後方に噴射することによって加速していく。と同時に、噴射した燃料のぶんだけ質量 M は減る。すなわち、ロケットは質量が減るほど、速度が増す。ロケットの初期速度を 0、初期の質量を M_0 とする。ロケットの速度 v と質量 M の関係を求めよ。ヒント: ある瞬間と、そこから少し経った瞬間での、運動量保存則を考える。ロケットの質量 M は、 $M + dM$ に変わる ($dM < 0$)。 dM は出て行った微小な燃料の質量(にマイナスをつけたもの)。燃料は、 $v - u$ という速度でロケットから離れる。

^{*2} ただし太陽と地球の重心に対して静止している座標系で見た場合。

7.4 解答

答 105

- (1) $m_A = m_B = 1 \text{ kg}$, $\mathbf{v}_A = (1 \text{ m s}^{-1}, 0 \text{ m s}^{-1})$,
 $\mathbf{v}_B = (0 \text{ m s}^{-1}, 1 \text{ m s}^{-1})$ として式 (7.4) に代入すると, $\mathbf{v} = (0.5 \text{ m s}^{-1}, 0.5 \text{ m s}^{-1})$ 。
 (2) $|\mathbf{v}| = |(0.5 \text{ m s}^{-1}, 0.5 \text{ m s}^{-1})| = 0.71 \text{ m s}^{-1}$ 。

答 106 略。

答 107 (略証)

$$\begin{aligned} m_A \mathbf{v}_A(t_1) - m_A \mathbf{v}_A(t_0) &= \int_{t_0}^{t_1} (\mathbf{F}_{AB} + \mathbf{F}_{AC}) dt \\ m_B \mathbf{v}_B(t_1) - m_B \mathbf{v}_B(t_0) &= \int_{t_0}^{t_1} (\mathbf{F}_{BA} + \mathbf{F}_{BC}) dt \\ m_C \mathbf{v}_C(t_1) - m_C \mathbf{v}_C(t_0) &= \int_{t_0}^{t_1} (\mathbf{F}_{CA} + \mathbf{F}_{CB}) dt \end{aligned}$$

これらの式を辺々加える。作用反作用の法則から $\mathbf{F}_{AB} + \mathbf{F}_{BA}$ などは 0 になるので, 結局,

$$\begin{aligned} m_A \mathbf{v}_A(t_1) + m_B \mathbf{v}_B(t_1) + m_C \mathbf{v}_C(t_1) \\ = m_A \mathbf{v}_A(t_0) + m_B \mathbf{v}_B(t_0) + m_C \mathbf{v}_C(t_0) \end{aligned}$$

答 109

- (1) A, B ともに同じ運動エネルギー: 0.5 J をもつ。
 従って全運動エネルギーは, 1 J 。
 (2) $(m_A + m_B)|\mathbf{v}|^2/2 = 0.5 \text{ J}$ 。

答 110 略。

答 111 略。

答 112 (1), (2), (3) は略 (実直に計算すれば導出できる)。(4) 式 (7.27), 式 (7.28) の分子分母を m_A で割ると,

$$\begin{aligned} v'_A &= \frac{1 - m_B/m_A}{1 + m_B/m_A} v_A + \frac{2m_B/m_A}{1 + m_B/m_A} v_B \\ v'_B &= \frac{m_B/m_A - 1}{1 + m_B/m_A} v_B + \frac{2}{1 + m_B/m_A} v_A \end{aligned}$$

となる。ここで, $m_A \gg m_B$ なので, $m_B/m_A \doteq 0$ とすると, 上の 2 つの式は,

$$\begin{aligned} v'_A &\doteq \frac{1-0}{1+0} v_A + \frac{2 \times 0}{1+0} v_B = v_A \\ v'_B &\doteq \frac{0-1}{1+0} v_B + \frac{2}{1+0} v_A = -v_B + 2v_A \end{aligned}$$

となり, 与式を得る。

答 113

- (1) 地面を基準点とする。ボールを手放した瞬間は, 重力によるボールのポテンシャルエネルギーは mgh_0 で, 運動エネルギーは初速度 0 なので 0。従って力学的エネルギーは mgh_0 。一方, 地面につく直前は, ボールのポテンシャルエネルギーは 0 で, 運動エネルギーは $mv_0^2/2$ 。従って力学的エネルギーは $mv_0^2/2$ 。力学的エネルギー保存則より, $mgh_0 = mv_0^2/2$ 。ここから与式を得る。
 (2) 略。(e の定義から)
 (3) 略。(式 (7.33) と同様)
 (4) 略。(式 (7.33), 式 (7.34), 式 (7.35) より v_0, v_1 を消去)
 (5) 前小問と同様に, $h_n = e^2 h_{n-1}$ 。これは公比 e^2 の等比数列。従って与式を得る。
 (6) $h_0 = 10 \text{ m}$ で, $h_n = e^{2n} h_0 < 0.1 \text{ m}$ より, $e^{2n} < 0.01$ となる。 $e = 0.8$ だから, $0.8^{2n} < 0.01$ 。 $n = 10$ のとき $0.8^{2n} = 0.0115 > 0.01$ 。 $n = 11$ のとき $0.8^{2n} = 0.0074 < 0.01$ 。従って, $n = 11$, つまり 11 回バウンドする。

答 114 (1) ボール A について, 落下から地面での衝突の直前までを考えると, 力学的エネルギー保存則より,

$$\frac{1}{2} m_A v_0^2 = m_A gh \quad (7.42)$$

これを v_0 について解けば与式を得る。(2), (3) は略 (誘導に従って実直に計算すれば導出できる)。(4) ボール B について, (1) と同様に考えれば, 次式のようになる:

$$\frac{1}{2} m_B v_0^2 = m_B gh \quad (7.43)$$

一方, 最高到達点の高さを H とし, 衝突直後から最高点到達までを考えると, 力学的エネルギー保存則より,

$$\frac{1}{2} m_B v_B'^2 = m_B gH$$

ここで (3) より, $v_B' = 3v_0$ だから,

$$\frac{9}{2} m_B v_0^2 = m_B gH \quad (7.44)$$

となる。式 (7.44) の辺々を式 (7.43) の辺々で割ると, $9 = H/h$ となる。すなわち, $H = 9h$ 。すなわち, もとの高さの 9 倍まで上がる。

7.5 補遺: 量子のエネルギー

実は、我々が学んでいる力学 (ニュートン力学) は、分子や原子などの小ささでは効力を失う。そのようなスケールを支配するのは「量子力学」という全く別な理論だ。量子力学は物理現象や物理的存在の捉え方がニュートン力学とはまるきり違う。ニュートン力学では、「速度」とか「力」とかが大事な概念だったが、量子力学では、それらにあまりこだわらない。というか、量子力学のスケールでは、そういうことにこだわっても仕方ないようなふうに物体や現象が存在し、振る舞うのである^{*3}。

それを理解するには、どうしても高度な数学が必要だ。ある物理学者は「神は非常に高度な数学者であり、宇宙を作る時に極めて高級な数学を使ったのだ」と言ったほどだ。我々は神ほど高度な数学者ではないのでどうしてもないが、それでも「化学 II」「化学結合論」等の授業で量子力学が出てくるので、そのほんの入り口をここで学ぼう。以下の話では「なぜそうなるのか」は説明できない。自然はともかくそのように振る舞うのだ。

まず、量子力学では、物体や現象を「量子」という概念で捉える。電子や原子や光は、いずれも「量子」として振る舞う。量子は、1 個 2 個と数えられるような離散的な存在であり、そのありかたは「状態ベクトル」という数学的概念で表現される。その「ベクトル」という言葉から、平面ベクトルや空間ベクトルのような「大きさと向きを持つもの」(矢印)を君は想像するだろうが、状態ベクトルは、そういうものとは違う、もっと抽象的な概念だ。その「状態ベクトル」を、位置 (x, y, z) の関数として表現したものを「波動関数」と言う^{*4}。波動関数は、「シュレーディンガー方程式」という小難しい微分方程式に従うことがわかっている。

量子が、ある特定のエネルギーを持つ状態にある時、シュレーディンガー方程式は「行列の固有値と固有ベクトルを求める問題」(数学の教科書を参照せよ)に帰着する。その「固有値」がエネルギーに、「固有ベクトル」が状態ベクトル(それを位置で表現するならば波動関数と言っても良い)に対応する(従ってそのような状態とエネルギーを「固有状態」「固有エネルギー」と呼ぶ)。このとき状態ベクトルは時刻 t に対して振動的に依存する。その振動の角速度を ω とすると、量子のエネルギー

E は (それは行列の固有値でもあるのだが)

$$E = \frac{h}{2\pi} \omega \quad (7.45)$$

となる。ここで h は「プランク定数」と呼ばれる定数で、

$$h = 6.626068 \times 10^{-34} \text{ J s} \quad (7.46)$$

である。 $h/(2\pi)$ は量子力学で頻繁にあらわれるので、 2π をいちいち書くのがめんどくさくなって、物理学者達は、それを \hbar と書き表すことにした(これを「エイチバー」と読む)。すなわち、

$$\hbar := \frac{h}{2\pi} \quad (\text{定義}) \quad (7.47)$$

である。すると、式 (7.45) は次式のように書ける:

$$E = \hbar \omega \quad (7.48)$$

さて、数学的な理由から、波動関数は、空間の中を振動しながら広がっていく性質を持つ。だから量子は「粒子の性質と波の性質の両方を持つ」と言われる。

特に、光はそもそも電場と磁場の振動が空間を伝わる波なので、そのようなイメージと整合する。実際、光の状態ベクトル (波動関数) の振動の角速度 ω は、電場や磁場の振動の角速度 ω そのものである。波としての光は、周期 $2\pi/\omega$ の間に「光の速さ」 c で波長 λ だけ進むので、

$$\frac{2\pi}{\omega} c = \lambda \quad (7.49)$$

という式が成り立つ。この式を使って式 (7.45) の ω を消去すると、光の量子 (それを光量子とか光子という) のエネルギーは次式のようになる:

$$E = \frac{hc}{\lambda} \quad (7.50)$$

この式はよく教科書に出てくるが、注意すべきは、この式 (7.50) は光子にしか成り立たない、ということだ。光子以外にも、様々な量子が世の中には存在し (電子とか)、各々が波動関数の角速度や波長という特徴を持つが、式 (7.50) は必ずしも成り立たなくても、式 (7.45) や式 (7.48) は光子も含めていかなる量子にも成り立つ。

^{*3} 量子力学では、速度のかわりに運動量、力のかわりにポテンシャルエネルギーが、それぞれ重要な役割を担う。

^{*4} 「ベクトル」が「関数」になる? どういうこと? と君は思うかもしれないが、「関数もベクトルの一種だ」という話をどこかで小耳に挟まなかっただろうか。

第8章

熱力学入門

熱力学は「化学 I」や秋学期「物理学 II」で学ぶ。しかし、それらは力学と多くの接点を持つので、ここで概略を学んでおこう。

8.1 温度の定義

物質や物体は、膨大な数の原子や分子から構成される。それらの粒子どうしは引力や斥力を及ぼしあい、時には衝突しつつ共存する。その様子を知るには、原理的には全粒子のそれぞれについて運動方程式を解いて追跡すればよい。そのように個々の粒子の挙動に注目する観点を微視的（ミクロ）な観点という。

しかし、現実的にはそれは大変だし、そこまでのくわしい様子を知る必要も少ない。むしろ、興味があるのは、粒子集団が、全体として、平均的にどのような性質を持つか、ということだ。そのような観点を巨視的（マクロ）な観点という。

熱力学は、物質や物体の巨視的な性質を検討する。そのときに最初に便利な指標が温度だ。温度とは何だろう？ 温度には様々な定義があるが、わかりやすいのは以下である^{*1}：

— 絶対温度の定義（エネルギー等分配則とも言う） —

物体を構成する粒子について、ひとつの粒子・ひとつの自由度における平均的な運動エネルギー K が

$$K = \frac{1}{2} k_B T \quad (8.1)$$

と書けると、 T をその物体の絶対温度と呼ぶ。 k_B は ボルツマン定数 と呼ばれる定数で、

$$k_B = 1.38065... \times 10^{-23} \text{ J K}^{-1} \quad (8.2)$$

式 (8.1)、式 (8.2) をもとに定義される温度の単位を、 K （ケルビン）という^{*2}。

^{*1} ここで温度を T と表すことに注意。これまで T は運動エネルギーを表していたが、慣習的には温度を表す方が多い。そこで、この章では運動エネルギーは T ではなく K で表す。

^{*2} 温度の単位を表す K の記号は、他の単位の記号と同じように、

ここで 自由度 とは、独立した「運動の仕方」の数である。例えば単原子分子からなる気体（図 8.1）では、ひとつの分子（＝原子）は 3 つの各方向（ x 方向、 y 方向、 z 方向）に自由に直線運動ができ、各方向の運動は互いに独立である（ x 方向に大きな速度で飛ぶからといって y 方向にはゆっくり飛ばねばならない、というような制約は存在しない）。従って、自由度は 3 である。

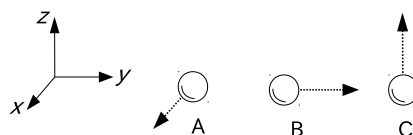


図 8.1 単原子分子気体の自由度。A: x 方向の直線運動、B: y 方向の直線運動、C: z 方向の直線運動。

式 (8.1) は、粒子の運動エネルギーが、平均的には、各自由度に等しく割り当てられることも主張している。例えば、ある物質の中で、多くの粒子が同じ特定の方向にだけ激しく運動して、その方向の自由度だけに大きな運動エネルギーを持つ、というような「偏った状態」にはならない、ということだ^{*3}。その事情を表して、式 (8.1) のことを エネルギー等分配則 と呼ぶこともある。

式 (8.1) は「温度の定義」なので、とりあえずその由来や正当性に疑問を持つ必要はない。むしろ不思議なのは、式 (8.1) のように定義される温度が、我々の感覚である熱さ・冷たさや、温度計の指す値にきちんと対応していることだ。そのあたりは化学や物理学 II などでもらうとしよう。

式 (8.1) は、粒子の平均的な運動エネルギーは物体の温度に比例することを主張している。その比例係数に

立体（正体）である。それに対して、式 (8.1) の左辺に出てくる、運動エネルギーを表す変数 K は、斜体で書いていることに注意。これらは全く別物だ。

^{*3} それにはちゃんとした理由があるのだが、難しいのでここでは述べない。興味ある人は、「統計力学」という分野を勉強してみよう！

「ボルツマン定数」という怪しげな数とか「 $1/2$ 」とかが現れているが、これらは「ケルビン」という「温度の単位」を人類が採用してしまったことに対応するつじつま合わせ（単位換算）のための数に過ぎない。実際、運動エネルギーと温度が比例するのなら、いっそ（粒子の1自由度あたりの平均的な）運動エネルギーそのものを温度としてしまえばよかったのだが、今さらそれもめんどくさいので、人類はこれからも、温度とエネルギーを別の次元の物理量として扱っていくのだろう。

問 115 絶対温度の定義を5回書いて記憶せよ。

問 116 質量 m の気体分子の運動を考える。各分子が速度 (v_x, v_y, v_z) で空間を飛ぶとき、エネルギー等分配則によって、 v_x に関する運動エネルギー、つまり $mv_x^2/2$ の平均は、 $k_B T/2$ となる。従って、平均的には^{*4}

$$|v_x| = \sqrt{\frac{k_B T}{m}} \quad (8.3)$$

となる。 $|v_y|$, $|v_z|$ についても同様である。すると、速度の大きさ（つまり速さ） v は、

$$v = \sqrt{v_x^2 + v_y^2 + v_z^2} \quad (8.4)$$

なので、 v は平均的には、

$$v = \sqrt{3 \frac{k_B T}{m}} \quad (8.5)$$

となる。以下、 $T = 300 \text{ K}$ （摂氏 27 度）で考える：

- (1) 水素分子 H_2 の x 方向の平均的な速さを求めよ。
- (2) 水素分子 H_2 の平均的な速さを求めよ。
- (3) 窒素分子 N_2 の平均的な速さを求めよ。

ところで、「化学」で、「グラハムの法則」というのを習った人もいるだろう。それは、気体分子の速さ v が、その質量 m の平方根に反比例する、という法則だ。これは、式 (8.5) で明らかだ。

8.2 理想気体の状態方程式（気体分子運動論）

これまで学んだことを使って、気体の温度・圧力・体積の間の関係を理論的に導いてみよう。

今、簡単のため、一辺の長さが L の立方体の箱を考える。図 8.2 のように、立方体の中心を原点 O とし、 x , y ,

z 軸のそれぞれに立方体の面が直交するように座標軸を設定する。点 $(L/2, 0, 0)$ で x 軸と直交する面を面 A と呼ぶ。

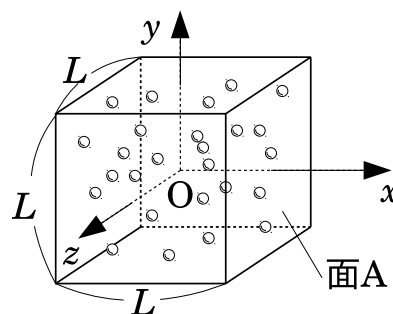


図 8.2 気体分子の運動を考える座標系と箱。

この箱の中に、 N 個の気体分子が入っているとします。ここで、以下の仮定を置く：

理想気体の仮定

- 気体分子の大きさは十分に小さい。
- 気体分子同士に働く力は無視できる。

この2つの仮定を満たす分子からなる気体を「理想気体」という^{*5}。今、立方体の中には理想気体が入っているとします。

箱の内側では気体分子が飛び交っており、絶えずその一部が面 A に内側から衝突し、跳ね返されている。この衝撃が、面 A を外に押し出そうとする。従って、それを打ち消すように、外側から適当な圧力 (P とする) をかけないと、この箱は壊れてしまうだろう (図 8.3)。

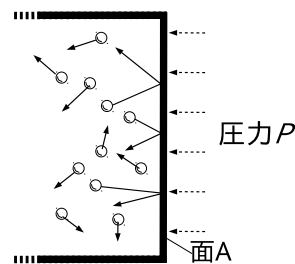


図 8.3 面 A の付近 (z 軸の正の方向から見たところ)。分子が面 A にひっきりなしにぶつかるので、面 A を外側から圧力 P で支えていないといけない。

^{*4} 厳密には、 v_x の二乗平均平方根 (root-mean-square)。

^{*5} 理想気体は厳密な意味では現実には存在しない。現実の気体は多かれ少なかれ、理想気体とは違った性質を持つ。現実の気体のめんどくさい性質を忘れて、単純化して理論的に扱いやすくなったのが理想気体である。つまり、理想気体は一種の「モデル」である。とはいえ、多くの場合で、現実の気体を理想気体として扱っても概ね OK である。理想気体は優れたモデルなのだ。

その事情を詳しく見てみよう: 今, 簡単のために, どの気体分子も, x 軸に沿った方向 (x 軸の正の方向か負の方向) に一定値 $|v_x|$ という速さで動いているとしよう。つまり, x 軸方向の速度は, $|v_x|$ か $-|v_x|$ であるとする (実際は気体分子の速度はもっといろいろな可能性があり, x 軸に沿った速度の二乗平均平方根が $|v_x|$ に等しいだけだが, 仮にそういうのを考慮して厳密に理論展開しても, 以下と同じ結論に至る)。従って, どの気体分子も, 時間 Δt の間に, $|v_x|\Delta t$ だけ x 軸に沿って移動する。従って, 時間 Δt の間に, 内側から面 A に衝突する気体分子は, 面 A から距離 $v_x\Delta t$ までの領域にいるはずだ。その領域の体積は

$$L^2 v_x \Delta t \quad (8.6)$$

である。箱の中の気体分子は均等に分布すると考えれば, 上述の領域の中の分子数は, 領域の体積に比例するので,

$$\frac{L^2 v_x \Delta t}{L^3} N \quad (8.7)$$

となる^{*6}。この個数のうち, 半部分が x 軸の正方向, 半部分が x 軸の負の方向に進むので, 面 A に衝突する個数は,

$$\frac{1}{2} \frac{L^2 v_x \Delta t}{L^3} N = \frac{N v_x \Delta t}{2L} \quad (8.8)$$

となる。

さて, 気体分子 1 個が面 A にぶつかって跳ね返る状況を考えよう。気体分子が跳ね返る時, 面 A との間に摩擦が働かず, 分子の運動エネルギーは変化しない (弾性衝突) とすると, 面 A に平行な速度成分 (v_y と v_z) は変化せず, 面 A に垂直な成分 (v_x) が, 大きさを変えずに符号だけ反転する。すると, x 方向の運動量は, 衝突前は mv_x , 衝突後は $-mv_x$ になるので, 結局, 1 個の気体分子の衝突前後の運動量変化は次式になる:

$$-mv_x - (mv_x) = -2mv_x \quad (8.9)$$

実際は 1 個でなく, 式 (8.8) で表される個数が Δt の間に面 A にぶつかるので, それらの運動量変化の合計は次式になる:

$$\frac{N v_x \Delta t}{2L} \times (-2mv_x) = -\frac{N m v_x^2 \Delta t}{L} \quad (8.10)$$

この運動量変化は, 面 A に外側からかかる力がもたらす力積に等しいはずだ (運動量変化=加えられた力積)。

面にかかる力は, 圧力 \times 面積であり, 面 A の面積は L^2 だ。従って, 面 A に (外側から) かかる力は $-PL^2$ である (マイナスは, 力の向き, つまり x 軸の負の方向を表すためにつけた)。その力による力積は,

$$-PL^2 \Delta t \quad (8.11)$$

となる。式 (8.10) と式 (8.11) が一致することが, 面 A が静止する条件である:

$$-PL^2 \Delta t = -\frac{N m v_x^2 \Delta t}{L} \quad (8.12)$$

これを整理すると,

$$PL^3 = N m v_x^2 \quad (8.13)$$

となる。いま, L^3 は箱の体積 V なので, 式 (8.13) は

$$PV = N m v_x^2 \quad (8.14)$$

となる。さらに, 式 (8.3) より,

$$v_x^2 = \frac{k_B T}{m} \quad (8.15)$$

なので, 式 (8.14) は, 以下ようになる:

理想気体の状態方程式

$$PV = N k_B T \quad (8.16)$$

ここで, 分子数を「個」でなくて「モル」で数えよう。すなわち, N 個が n モルに相当するとすれば, $N = n N_A$ である (N_A はアボガドロ定数)。従って, 式 (8.16) は,

$$PV = n N_A k_B T \quad (8.17)$$

となる。ここで, 物理学の慣習として, 以下の定数を導入する:

気体定数の定義

以下で定義される定数 R を, 気体定数 (gas constant) と呼ぶ:

$$R = N_A k_B \quad (8.18)$$

その値は, $8.314472... \text{ J mol}^{-1} \text{ K}^{-1}$ である。

すると, 式 (8.17) は, 以下のように書ける:

理想気体の状態方程式 (モルで表す場合)

$$PV = nRT \quad (8.19)$$

^{*6} 箱の体積は L^3 であり, その中に N 個の気体分子が均等に分布している。従って, 箱の中の気体分子の数密度 (単位体積当たりの分子数) は, N/L^3 だ。これに, いま考えている領域の体積 (式 (8.6)) をかければ, その領域内の気体分子数が得られるはずだ。それが式 (8.7) である。

問 117 理想気体とは何か?

問 118 理想気体の状態方程式を導出せよ (上記の解説を整理して再現すればよい)。

問 119

- (1) ボルツマン定数 k_B の値を, 有効数字 3 桁で述べよ。
- (2) 気体定数 R の値を, 有効数字 3 桁で述べよ。
- (3) ボルツマン定数と気体定数の関係を, 式で述べよ。

8.3 理想気体の内部エネルギーと温度

さて, 物質や物体を構成する全ての粒子のエネルギー (運動エネルギーとポテンシャルエネルギー) を合計したものを, その物質や物体の「内部エネルギー」という (定義)。ここで, 理想気体を考えよう。理想気体では, 気体分子が相互に及ぼす力は無視できるので, 気体分子同士が及ぼし合う力によるポテンシャルエネルギーは無視してもかまわない。また, 非常な低温でもない限り, 重力によるポテンシャルエネルギーは, 運動エネルギーよりはるかに小さい。従って, 理想気体の内部エネルギーは, 大部分が構成粒子 (気体分子) の運動エネルギーの総和であると考えてよい。また, 化学反応等が気体内で起きる状況はとりあえず今は考えない (後で考察する)。

エネルギー等分配則によれば, 運動エネルギーは 1 粒子あたり・1 自由度あたり, 平均的に $k_B T/2$ だ。すると, 自由度 F を持つ気体分子が N 個からなる気体の内部エネルギーを $U_{\text{理想気体}}$ とするとは*7,

$$U_{\text{理想気体}} = \frac{F}{2} N k_B T \quad (8.20)$$

となる。すなわち, 理想気体の内部エネルギーは, 温度に比例し, 圧力や体積とは直接には無関係である*8。

さて, 式 (8.20) において分子が n モルあるとすると, $N = nN_A$ だから,

$$U_{\text{理想気体}} = \frac{F}{2} n N_A k_B T \quad (8.21)$$

*7 力学では, U は多くの場合, ポテンシャルエネルギーを表す記号として慣習的に使われる。しかし, 熱力学では慣習的に U は内部エネルギーを表す。ここでは熱力学の慣習に従う。

*8 もちろん, 圧力と体積は温度と関係があるから, 圧力や体積は, 温度を介して間接的な関係はある。

となる。式 (8.18) を使うと,

$$U_{\text{理想気体}} = \frac{F}{2} n R T \quad (8.22)$$

となる。特に, 分子数を 1 モルとすると,

$$U_{\text{理想気体}} = \frac{F}{2} R T \quad (8.23)$$

となる。

では, 自由度 F はどう決まるのだろうか? 前述のように, 単原子分子気体 (He, Ne 等) は 3 方向の直線運動の自由度を持つので $F = 3$ である。ところが, 2 原子分子 (H_2 , O_2 , N_2 等) は直線運動だけでなく, 回転運動も行う*9。直線状の棒を回すのには独立した (つまり互いに直交した) 軸が 2 つある*10ので, これらの回転の自由度は 2 である。従って, これらの分子の自由度 F は, 直線運動に 3, 回転運動に 2 で, 合計 5 となる (図 8.4)。

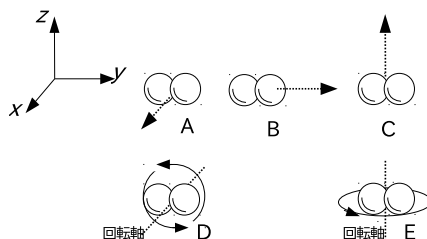


図 8.4 2 原子分子気体の自由度。A: x 方向の直線運動, B: y 方向の直線運動, C: z 方向の直線運動, D: x 軸まわりの回転運動, E: z 軸まわりの回転運動。

従って,

$$\text{単原子分子理想気体では, } U_{\text{理想気体}} = \frac{3}{2} n R T \quad (8.24)$$

$$\text{2 原子分子理想気体では, } U_{\text{理想気体}} = \frac{5}{2} n R T \quad (8.25)$$

となる*11。

このように, 同じ温度, 同じモル数であっても, 分子が単原子分子か, 2 原子分子かによって, 内部エネルギーは違うのである。分子が複雑な運動をする可能性があるほど (つまり自由度が大きいほど), 気体は大きな内部エ

*9 回転運動にも運動エネルギーが与えられることは, 後の章で学ぶ。

*10 一般に, 物体を回転させる独立な回転軸は 3 つある。しかし, 直線状の分子の場合は, 直線の断面は大きさを持たない点とみなしてよい。従って, 直線を軸にする回転は考えなくてよい。同様に, 1 原子分子は点とみなしてよいので, いずれの方向を軸とする回転も, 考えなくてよい。

*11 高校で化学や物理学を学んだ人は, この $3/2$ や $5/2$ は「定積モル比熱」と「定圧モル比熱」の話か, と思うかもしれないが, そうではない。その話はこの後に出てくる。

エネルギーを持つのである。^{*12}。

ただし、これらの式は（たとえ理想気体に対しても）厳密には成り立たない。特に、低温になると、回転の自由度が意味を持たなくなる（自由度が減る）とか、高温になると振動の自由度が加わってくる（自由度が増える）などの、不思議な現象が起きる。それらは量子力学を使わないと説明できない。

よくある質問 74 水 H_2O みたいな 3 原子分子はどうなるのですか？ ... 水は V 字型の分子なので、3 つの軸の全てについて回転運動を考える必要があります。従って回転の自由度が 3。直線運動の自由度が 3 なので、合わせて自由度は $F = 6$ 。式 (8.23) より、 $U = (6/2)nRT = 3nRT$ になります。ただし、二酸化炭素 CO_2 のような直線状の分子なら、3 原子分子であっても回転の自由度は 2 で、2 原子分子のように $F = 3 + 2 = 5$ で $U = (5/2)nRT$ です。

8.4 熱容量と比熱

ある物体の熱容量とは、その物体の温度を単位温度だけ上げるのに必要な熱のことである。すなわち、ある物体に熱 dQ を加えた時の温度の変化が dT のとき、 dQ/dT を 熱容量 と呼ぶ（定義）。熱容量は温度によって変わることがあるので、この dQ や dT は、できるだけ小さい値（微量量）であるべきである。

単位量の物質の熱容量を「比熱」という。すなわち、ある物体の物質量が X であり、その物質に熱 dQ を加えた時の温度の変化が dT のとき、 $dQ/(X dT)$ のことを 比熱 と呼ぶ（定義）。特に、物質質量 X を質量で表すときに「比熱」と呼び、物質質量 X をモルで表すときには「モル比熱」と呼ぶ。

熱容量は「物体」に関する量であり、比熱は「物質」に関する量である。

問 120 熱容量、比熱、モル比熱のそれぞれの SI 単位は、 J K^{-1} 、 $\text{J K}^{-1} \text{kg}^{-1}$ 、 $\text{J K}^{-1} \text{mol}^{-1}$ であることを確認せよ。

よくある質問 75 熱と熱量はどう違うのですか?... 同じ意味です。強いていえば、後者はその大きさを定量的に考えるとき

^{*12} 理想気体では分子の大きさは無視できるはずなのに、「2 原子」分子を考えるのは変ではないか、と思う人もいるかもしれない。実は、理想気体で「分子の大きさを無視する」としたのは、分子の大きさによって容器（分子が自由に飛び交うことのできる空間）の体積が実質的に目減りするようなことがない、という意味だ。それに対して、2 原子分子を考えるのは、分子の回転運動が運動エネルギーを持つという性質を勘案するためであり、それは理想気体の仮定とは無関係である。

に使われがちかもしれません。

8.5 理想気体の定積モル比熱

では、理想気体の比熱について学ぼう。ここではモル比熱を考える。

気体に熱を加えたら、普通、気体はあたたまるだろう。しかし、同時に、気体は膨張もする。このとき、問 48 で見たように、気体は仕事をする。その仕事のぶんだけ、どこからエネルギーが必要である（エネルギー保存則!）。それは、気体に加えられた熱かもしれないし、気体がもともと持っていた内部エネルギーかもしれない。

とりあえずそういう面倒なことを考えるのは避けたいので、温めても気体は膨張しない条件、すなわち気体をガッチリした容器に入れて体積が変わらないようにして温めることを考えよう。このように体積一定での変化を定積変化とか定積過程と呼ぶ。定積変化でのモル比熱を「定積モル比熱」と呼び、 C_v と書く（添字の v は、volume の v 。volume が変わらないよ、という意味）。

体積が変わらないなら、加えた熱は全部内部エネルギーに変わる。 n モルの理想気体の内部エネルギー U は、式 (8.22) より、

$$U_{\text{理想気体}} = \frac{F}{2}nRT \quad (8.26)$$

である。ここで熱 dQ を加えて温度が dT だけ上がったとすると、内部エネルギーは $U_{\text{理想気体}} + dQ$ 、温度は $T + dT$ になるから、

$$U_{\text{理想気体}} + dQ = \frac{F}{2}nR(T + dT) \quad (8.27)$$

である。式 (8.27) から式 (8.26) を辺々引くと、

$$dQ = \frac{F}{2}nR dT \quad (8.28)$$

となる。従って、定積モル比熱は、

$$C_v = \frac{dQ}{n dT} = \frac{F}{2}R \quad (8.29)$$

となる。特に、

$$\text{単原子分子理想気体では、} C_v = \frac{3}{2}R \quad (8.30)$$

$$\text{2 原子分子理想気体では、} C_v = \frac{5}{2}R \quad (8.31)$$

である。そして、式 (8.29) と式 (8.22) を見比べれば、

$$U_{\text{理想気体}} = n C_v T \quad (8.32)$$

であることがわかる。この式は、明らかに、定積変化と

いう条件とは無関係に成り立つ。つまり、理想気体の内部エネルギーは、一般的に、モル数と定積モル比熱と絶対温度の積である。

では、「体積一定」という条件を外したら、理想気体のモル比熱はどうなるだろうか？ それを検討するには、気体の内部エネルギーと熱と仕事について、ここでしっかり考え方を固めておかねばならない。それが次節の内容である。

8.6 熱力学第一法則

ここでいったん理想気体の話から離れて、すごく一般的な話をする。

我々は既に「力学的エネルギー保存則」を学んだが、エネルギーは、熱も含めて、より広い範囲で保存する（どこかに消えたりどこから湧いて出たりしない）。熱力学的には、以下の法則である：

$$\Delta U = Q + W \quad (8.33)$$

ただし、 U は系（今は一般的な話をしているので、それは理想気体であってもなくても構わない）の内部エネルギー、 ΔU は内部エネルギーの変化、 Q は外から系に与えられた熱、 W は外から系になされた仕事である。これを「熱力学第一法則」という。要するに「熱と仕事を与えられたぶんだけエネルギーが増える」というわけだ。

問 121 熱力学第一法則（式 (8.33)）を 5 回書いて記憶せよ。「ただし書き」もちゃんと書くこと！

ここで、 ΔU は微小量でなくても構わない。普通、 Δ なんちゃらというと、（有限な）微小量を考えることが多いが、熱力学で出てくる Δ は「微小」ではない、単なる「差」とか「変化」を表す。微小を意味するときは、 Δ でなく d を使うことが多い。微小量で式 (8.33) を表現すると、

$$dU = dQ + dW \quad (8.34)$$

となる（ dQ は外から系に加えられた微小な熱、 dW は外から系になされた微小な仕事）。ところが、式 (3.30) で学んだように、気体の体積の微小な変化 dV に伴って、系が外界からされる仕事は、

$$dW = -P dV \quad (8.35)$$

である。これを使うと上の式は、

$$dU = dQ - P dV \quad (8.36)$$

と書ける。これを变形すると、次式になる：

$$dU + P dV = dQ \quad (8.37)$$

これは微小量での式だが、もし圧力 P が一定ならば、容易に積分できて、

$$\Delta U + P \Delta V = Q \quad (8.38)$$

となる。

これらの話は、本章の後半、そして、熱力学や化学の大変重要な基礎である。

8.7 理想気体の定圧モル比熱

では、理想気体の話に戻って、もう少し理想気体の性質を調べていこう。前々節では「体積一定」という条件で、理想気体のモル比熱を調べた。こんどはその条件を外して、かわりに「圧力一定」という条件で考えよう。そのような条件での変化を「定圧変化」とか「定圧過程」という。定圧過程でのモル比熱を「定圧モル比熱」と呼び、 C_p と表す（添字の p は、pressure の p 。pressure が変わらないよ、という意味）。

C_p を求めるには、熱力学第一法則から出発する。ここでは式 (8.37) から出発しよう。この式の左右を入れ替え、式 (8.32) を使えば、

$$dQ = nC_v dT + P dV \quad (8.39)$$

である。

ところで、理想気体の状態方程式から、 $PV = nRT$ である。 P と n は一定であり、 R は定数なので、 $P dV = nR dT$ である。これを上の式に代入すれば、

$$dQ = nC_v dT + nR dT = n(C_v + R) dT \quad (8.40)$$

となる。従って、 $dQ/(n dT) = C_v + R$ となる。これが C_p なので、結局、

$$C_p = C_v + R \quad (8.41)$$

である。つまり、定圧モル比熱は、定積モル比熱に気体定数を加えたものである。

問 122 以下を示せ：

$$\text{単原子分子理想気体では、} C_p = \frac{5}{2}R \quad (8.42)$$

$$\text{2 原子分子理想気体では、} C_p = \frac{7}{2}R \quad (8.43)$$

8.8 内部エネルギーとは？

ここまで「内部エネルギー」がたくさん出てきたが、そのほとんど（熱力学第一法則の話題を除く）が理想気体を仮定したものだった。それは系を構成する分子が十分小さく、分子同士に働く力を無視できるというケースだった。そういう場合は、各分子の運動エネルギーの総和が内部エネルギーである、とみなせるのだった。

では、そうでない場合は内部エネルギーはどうなるだろう？

例えば気体でなく固体の系なら？ その場合、固体を作る分子同士は、互いに力（共有結合やイオン結合、分子間力など）を及ぼし合って、強く束縛しあっている。実は、そのような状況は各粒子（原子）はバネにつけられて振動する質点としてモデル化できるのだ。

バネにくっついて振動する質点は、運動エネルギーとポテンシャルエネルギーを持つことは既に学んだ。従って、内部エネルギーとして運動エネルギーだけでなくポテンシャルエネルギーも考慮しなければならない。ところが、バネについた質点がたくさんあるときの振動の運動エネルギーとポテンシャルエネルギーは、ともに（平均的には）絶対温度に比例することが（物理学者達の研究によって）わかっている。従って、固体の内部エネルギーはも絶対温度に比例するとみなせる（ただしこれは低温のときは破綻する。興味のある人は「デュロン・ブティの法則」で検索！）。

では液体なら？ 固体のときと同様に、分子同士が力を及ぼし合っていることが無視できない。かといって、バネについた質点としてモデル化することもできない（固体と違って液体の分子は自由に移動できる）。すると、分子同士の距離に応じてポテンシャルエネルギーを考える必要がある。液体に何か（溶質）が溶け込んでいて、それらが電離してイオンになっていたりしたら、それら同士の間に働く電気的な力（クーロン力）も考えねばならない。これ以上の詳細には立ち入らないが、状況は簡単ではないことがわかるだろう。

では理想気体以外の気体なら？ この場合も、分子同士の及ぼし合う力が作るポテンシャルエネルギーなどを考えねばならない。しかし、資源生の諸君が気体を扱うほとんどのケースでは、理想気体を仮定してもおそらく大丈夫だろう。

それよりももっと重要なのは、系の中で化学反応が起きる場合だ。例えば水素と酸素の 2:1 の混合気体が反応

（燃焼）すると、水（水蒸気）の気体になる（反応後は高温低圧のため、水は凝結しないものとする）。このとき内部エネルギーはどうなるのだろうか？

反応前の水素・酸素混合気体も、反応後の水蒸気も、それぞれ理想気体として近似できるので、それぞれの内部エネルギーは式 (8.32) で表すことができそうである^{*13}。しかし、それらの差（反応後－反応前）を ΔU としてしまうと、それは式 (8.33) とは整合しない。というのも、もしこの反応を体積一定で外部と断熱された容器の中で行えば、式 (8.33) から $\Delta U = 0$ のはずだ。ところが実際は燃焼熱によって容器の温度 T は大きく上昇し（爆発的な反応だ！）、その結果、式 (8.32) で表される U は、反応後の方が反応前よりも実際は大きい^{*14}。従って $\Delta U = 0$ ではなくなり、矛盾する。

これを読んで、「なら熱力学第一法則が間違っているのでは？」と思った人、つまり、「化学反応が内部で起きるなら、外部から仕事や熱を加えられなくても内部エネルギーは変化するのは？」と思った人もいるかもしれないが、そうではない。熱力学第一法則は正しいのだ。内部エネルギーの変化は、あくまで外との熱や仕事のやりとりでしか生じない。従って、上の例では、やはり内部エネルギーの変化 ΔU は 0 なのだ。間違っていたのは、このような場合にも内部エネルギーを式 (8.32) で考えようとしたことなのだ。

そもそもこの「燃焼熱」はどこから来たのだろうか？ それは主に、分子内の原子同士の結合（水素原子同士や酸素原子同士、そして水素原子と酸素原子同士の共有結合）におけるポテンシャルエネルギーである。水素同士と酸素同士の共有結合より、水素と酸素の共有結合の方がポテンシャルエネルギーが低いので、反応によってその差のぶんだけエネルギーが出てきて気体を温めるのである。つまり、化学結合のポテンシャルエネルギーの形で分子内に蓄えられていたエネルギーが分子の運動エネルギーに変化したのだ。従って、分子の運動エネルギー（つまり熱）と化学結合のポテンシャルエネルギーの両方をあわせて内部エネルギーとみなせば、この反応の前後で内部エネルギーは変わっていないのだ。

このように、扱う対象が理想気体であっても、化学反応の前後では、式 (8.32)（気体分子の運動エネルギー）

^{*13} 前述したように、水蒸気は V 字型の 3 原子分子なので、その C_V は $3R$ 。

^{*14} 反応によって分子数が減ったり C_V の値が変わったりもするが、その影響を打ち消すくらい T の上昇によって式 (8.32) の U は上がる。

だけを考えていてはダメなのだ。

そもそも、気体の中には、分子の運動エネルギーだけでなく、分子内のエネルギーや、分子を構成する原子の原子核内のエネルギーなどもある。それらも全部考えないと真の意味で「内部エネルギー」とは言えない。しかし、それらは化学反応が起きない限り、あるいは原子核反応が起きない限り、表には出てこない。出てこないってことは、とりあえず忘れていても構わない。理想気体の内部エネルギーを式 (8.32) で表すのは、そういう「他にもいろいろあるけどとりあえず忘れて、分子の運動エネルギーだけ考えておこう」という立場での話である。

それは例えて言えば、君が友人に「いまいくらお金持ってる?」と聞いて彼が「5000 円くらいかな」と答えた時、それは財布の中の現金だけであって、実は銀行に 10 万円くらいの普通預金と 30 万円くらいの定期預金があるのだが、それらは今、昼ごはんをどの店で食べようと相談している状況では無関係なので考えていない、というのと似ている。

このように、エネルギーは、「実は他にもあるけど今は話題になってないので考えない」という扱いをすることが多い。例えば野球のボールの運動を考える時、ボール（の重心）の速さに伴う運動エネルギーは考えるが、ボールの熱エネルギー（ボールを構成する分子や原子の運動エネルギー）は考えない。また例えば、重力によるポテンシャルエネルギーは、質量 m 、重力加速度 g 、高さ h とすると mgh だが、この高さ h は、その物体を動かすことのできる範囲で適当な基準点をとって決める。ところが、そこに深い穴を掘って、その底を基準にすれば、 h の値は変わり、 mgh の値も変わるではないか!! しかしそれは、「穴を掘ってまでポテンシャルエネルギーを取り出そうとは思わない」という人にとっては、忘れてよい話である。

よくある質問 76 式 (8.38) がピンと来ません。「加えられた熱」 Q が「内部エネルギーの変化」 ΔU に等しいのはわかります。でも、仕事 $P\Delta V$ というのがわかりません... では例を挙げましょう。純粋なエタノール（液体）と純水（液体）をまぜると、できた「エタノール水溶液」は暖かくなります（やったことがなければやってみてください!!）。この熱はどこから来るのでしょうか？ エタノール分子は水分子と引き合いますから、それらどうしがくっつく（水和すると）、互いの引力のポテンシャルエネルギーが、熱として放出されるのです。これが ΔU にあたります。ここでは U は小さくなるので、 ΔU はマイナスです。つまり、系に熱を「加える」のではなく系から熱が「出る」のです。だから温かくなるのです。

しかし! それだけではないのです! エタノール水溶液の体積

は、元のエタノールの体積と水の体積を足したものよりも、わずかに小さくなります。縮むのです! このとき、体積が縮む分、周囲の大気は水溶液に対して仕事をします。それが $P\Delta V$ です。ここでは ΔV はマイナスですので、 $P\Delta V$ もマイナスです。つまり、その仕事も外に熱として出るのです。

従って、水溶液が温かくなるのは、分子同士の引力によるポテンシャルエネルギーと、水溶液の体積が小さくなることに伴う外部（大気）による仕事の両方が寄与するのです。

このように、反応熱を考えるには、単に分子同士の引力や斥力だけでなく、まわりの環境からの仕事も考慮する必要があります。それをうまく整理してくれるのが、次節の「エンタルピー」です。

8.9 エンタルピー

生物資源学類では、1 年次「化学 I」で、エンタルピーという概念を習う。エンタルピーは、化学反応や相変化を予測したり制御するのに必要な概念であり、特に、「反応熱」に関わっている。

ところが、多くの 1 年生は「エンタルピーって結局何?」と悩む。おまけに、そのあとに「エントロピー」という紛らわしい概念が出てきて混乱する。

そのような悩みは、定義を覚えていないことから発する。くどいようだが、まず定義をきちんと覚えないと何も話が始まらない。

エンタルピーの定義

系の内部エネルギーを U 、圧力を P 、体積を V とすると、

$$H := U + PV \quad (8.44)$$

をエンタルピーという (定義)。

問 123 エンタルピーの定義 (式 (8.44)) を 5 回書いて記憶せよ。

さて、定義を覚えたら、エンタルピーの意味を少しずつ考えていこう。まず、この H の変化を考えてみよう。すなわち、ある状態 (内部エネルギー U 、圧力 P 、体積 V 、エンタルピー H) から変化した状態 (内部エネルギー $U + \Delta U$ 、圧力 $P + \Delta P$ 、体積 $V + \Delta V$ 、エンタルピー $H + \Delta H$) を考え、そのときのエンタルピーの変化を考えよう。変化前は、

$$H = U + PV \quad (8.45)$$

変化後は,

$$H + \Delta H = (U + \Delta U) + (P + \Delta P)(V + \Delta V) \quad (8.46)$$

後者から前者を引くと,

$$\Delta H = \Delta U + P\Delta V + V\Delta P + \Delta P\Delta V \quad (8.47)$$

となる。もしこの変化が、圧力は不変(一定)の状態で行われたら、 $\Delta P = 0$ なので、上の式は,

$$\Delta H = \Delta U + P\Delta V \quad (8.48)$$

となる。この右辺は式 (8.38) の左辺と同じだ。従って,

$$\Delta H = Q \quad (8.49)$$

となる。つまり、定圧変化では、系に加えられた熱は、エンタルピーの変化(増加分)に等しい。これがエンタルピーの「意味」だ。

よくある質問 77 これがエンタルピーの意味だと言われても、ピンと来ません。なんで定圧に限定するのですか? それで何が嬉しいのですか? 「系に加えられた熱」がわかって何が嬉しいのですか? ... まず、世の中の現象の多く、特に地上で起きる現象の多くは圧力一定のもとで起きます。例えば君が料理を作る時、圧力釜などを使わない限り、煮る・焼く・蒸す・混ぜる・凍らす・解凍するなどは、一定の圧力(大気圧)のもとで起きます。従って、定圧を仮定しても、理論の適用範囲はそんなに限定されません。むしろ、定圧を仮定することで、現象の記述や解析は単純になり、楽になります。「系に加えられた熱」は、言葉を変えれば、「その変化を起こすのに外から加えねばならない必要な熱」とも言えます。また、これがマイナスの場合は、「系から外に出る熱」(要するに反応熱)です。化学反応を制御したり、その反応熱を利用したりするとき、こういうのって、めっちゃ大事じゃないですか!

ここで注意して欲しいことがある。エンタルピーは化学反応の理解や予測によく使われる。その場合、エンタルピーの定義の中の内部エネルギー U は、分子の運動エネルギーだけでなく、分子内の化学結合のポテンシャルエネルギーも含めて考えるのだ。実際、前節の水素・酸素の燃焼の例(そこでは化学結合のポテンシャルエネルギーが重要だった)も、そこで出てくる「燃焼熱」は化学では「エンタルピーの変化」として考えるのだ。

8.10 エントロピー

次に学ぶのは「エントロピー」である。エントロピーは、たくさんの分子や原子からなる集団が、全体として

どのように自発的にふるまうかを説明するときに必要な概念である。

エントロピーはエンタルピーに名前が似ているので、初学者は混同しやすいが、両者は全く異なる量である。名前が似ているのは偶然に過ぎない。そもそも名前が似ているからといって、実体どうしも似ているとか互に関係があるとはかぎらない。例えば、福井県の小浜市と米国元大統領のオバマ氏は名前が似ているが実体は全く違う。エントロピーとエンタルピーもそういうものだと思うっておけばよい。

まずエントロピーのその定義を述べよう。系には各状態において「エントロピー」という量があり、状態 1 のときのエントロピーを S_1 、状態 2 のときのエントロピーを S_2 とし、エントロピーの差、すなわち $S_2 - S_1$ を ΔS とすれば、 ΔS は次式を満たす、と約束する:

$$\Delta S = \int_{\text{状態 1}}^{\text{状態 2}} \frac{dQ_{\text{rev}}}{T} \quad (8.50)$$

ここで、積分は、系が状態 1 から状態 2 まで可逆的に変化したときに関するものであり、 Q_{rev} は外から系に可逆的に与えられる熱、 T は絶対温度である。これがエントロピーの定義である。「可逆的」の意味は次節で述べる。

もし、状態 1 と状態 2 が互いに非常に近い状態であるとき、すなわち変化の量が微小であるとき、 ΔS は微小量 dS と書くことができ、また、微小変化の間で温度 T はほとんど変わらないと考えてよいので、上の式は、

$$dS = \frac{dQ_{\text{rev}}}{T} \quad (8.51)$$

と書いてもよい。

このように、エントロピーは、それ自体ではなく、その「変化」が先に定義される。

と言われても、「わかりにくい!」というのが正直なところだろう。そう、エントロピーは初学者にはなかなかわかりにくいのだ。諸君はまず、式 (8.50)、式 (8.51) をしっかり頭に叩き込もう。そして、それをもとに、いろんな話について行けば、次第にエントロピーが何なのか、わかってくるだろう。

問 124 上のエントロピーの定義(式 (8.50))を 5 回書いて記憶せよ。

8.11 可逆過程

以後、少しずつ、エントロピーの「意味」を理解していこう。

まず、エントロピーの定義で、「可逆的に」という言葉が出てきた。これはとても大切なキーワードである。

ある系の状態が変化するとき、(その気になれば) 変化後の状態から変化前の状態に戻すことができ、しかも外部に何の影響も残さないようにそれができる場合、そのような変化を「可逆的な変化」あるいは「可逆過程」という(定義)。

例 8.1 物体を重力に逆らってゆっくり持ち上げるといふ操作を考えよう。持ち上げるときにエネルギー (= 仕事 = 重さ × 持ち上げた高さ) が必要だが、それを電池でまかなったとしよう。持ち上がった後に、物体を元の高さまで戻すとき、物体にヒモをつけてそれで発電機を回して電池に充電すれば、持ち上げるときに使ったエネルギーを埋めもどし、結果的に何の影響も残らない。従って、「ものを重力に逆らって持ち上げる」のは可逆過程である(これは重力が「保存力」であることに関係する)。

例 8.2 ある速さで地面を滑っていた物体が、地面との摩擦によって止まる、という動作を考えよう。このとき、物体が持っていた運動エネルギーは摩擦によって熱エネルギーに変えられてしまう。この変えられた熱エネルギーをもういちど集めて、物体の運動エネルギーに変えて、物体を滑らせるというのは、どう考えても無理である。従って、運動する物体が摩擦力によって止まる、というのは可逆過程ではない(これは摩擦力が「非保存力」であることに関係する)。

熱力学では、理想気体の状態変化がよく例に使われるので、以後はそういう話に絞ろう。

まず、外部に熱が出入りしないように理想気体を圧縮させたり膨張させたりする過程、すなわち断熱変化は、可逆過程だろうか? 気体を圧縮する仕事に必要なエネルギーは例 8.1 のように電池から得たり(発電機を使って)戻したりできるので、外部に何も影響を残さないことが可能である。従って、理想気体の断熱変化は可逆過程である!

理想気体の断熱変化は可逆過程なので、そのエントロピー変化は式 (8.50) で求められる。ところが、そもそも「断熱」なので、外と系の間で熱の出入りが無い。つまり式 (8.50) の dQ_{rev} は 0 である。従って、この積分も 0

であり、従って、エントロピーの変化も 0 である。要するに、理想気体の断熱変化ではエントロピーは変化しない。

では、温度が変わらずに理想気体が膨張したり収縮する変化(等温変化)はどうだろうか?

例 8.3 理想気体を、温度を一定に保ったまま、体積を膨張または圧縮させることを考える。このとき、気体をピストン付きの容器に入れ、その容器を、同じ温度を持つ大きな環境(熱容量が無限に大きなもの、例えば大きなお風呂)に浸しながら変化させよう。もしピストンを速く動かすと、気体の膨張や収縮が急激に起きて、気体の温度が大きく変わってしまうだろう。それを避けるために、ピストンはゆっくり動かす。すると、気体のごくわずかでも温まったら、その熱が周囲に逃げるし、ごくわずかでも冷えたら、それを埋め合わせる熱が周囲から流れ込む。そうすれば気体の温度と周囲の温度の差が限りなく 0 に近い状態を維持できる。ゆっくり気体を膨張させたとき、気体は環境に対して仕事をするが、それに必要な仕事と同じだけの熱が、環境から気体に流れ込む。逆に、気体をゆっくり圧縮したときは、環境は気体に仕事をするが、その仕事と同じだけの熱が、気体から環境に流れ出す。このように、変化を元に戻すときに、外部(環境)に何も影響を残さない。従って、理想気体の等温変化は可逆過程である。

このときのエントロピー(の変化)はどうなるだろう? まず、熱力学第一法則から、熱の出入りを見積もろう。式 (8.37) より、次式がなりたつ:

$$dU + P dV = dQ \quad (8.52)$$

理想気体の内部エネルギー U は温度だけに依存し、圧力 P や体積 V には無関係なので、等温変化の前後では U は変わらないため、 $dU = 0$ 。従って $P dV = dQ$ 。等温変化は可逆的なので dQ は dQ_{rev} であり、式 (8.50) より、次式がなりたつ:

$$\Delta S = \int_{\text{状態 1}}^{\text{状態 2}} \frac{dQ_{\text{rev}}}{T} = \int_{V_1}^{V_2} \frac{P dV}{T} \quad (8.53)$$

ここで、 V_1 と V_2 は、それぞれ状態 1 (最初の状態)、状態 2 (膨張または圧縮が終わったときの状態) のときの体積を意味する。理想気体の状態方程式から、 $P = nRT/V$ であるので (n はモル数)、

$$\Delta S = \int_{V_1}^{V_2} \frac{nR dV}{V} = nR \ln \frac{V_2}{V_1} \quad (8.54)$$

となる。(例おわり)

問 125 温度 300 K で 2.0 mol の気体を考える。この気体を、体積 50 L から体積 100 L まで、等温過程で膨張させる。このときのエントロピーの変化はどのくらいか？ 単位もちゃんと付けて、有効数字 2 桁で答えよ。

8.12 不可逆過程

可逆的でない変化を不可逆変化とか不可逆過程という。理想気体の不可逆過程には、次のような例がある：

例 8.4 体積 V_2 の容器があり、その内部が壁で仕切られて、体積 V_1 の小部屋がある。その小部屋の中に、モル数 n 、温度 T の理想気体が入っており、小部屋の外の容器内は真空である（それを状態 1 と呼ぶ）。容器は形や体積を変えず、外との熱の交換も無いとする。小部屋を仕切る壁には扉がある。突然、扉が開くと、小部屋の中の気体が容器全体に広がる（それを状態 2 と呼ぶ）。この状態 1 から状態 2 への変化は可逆変化だろうか？ 小部屋から容器全体に気体が広がったときは、気体は何も仕事をしていない。ところが、容器全体に広がった気体を小部屋に押し戻すには気体を圧縮する仕事が必要である。つまり、この変化を元に戻すのに外部からエネルギーを得る必要がある（従って外部には影響が残らざるを得ない）。従って、この変化は不可逆変化である。(例おわり)

この場合、エントロピー変化 ΔS はどうなるだろう？ 容器と外部との熱のやりとりは 0 なので、式 (8.50) で $dQ_{\text{rev}} = 0$ 、だから $\Delta S = 0$ ？ いや、それは違う。この変化は不可逆的なので、外との熱のやりとり（それは 0 である）を dQ_{rev} とはみなせない。従って式 (8.50) を直接使用することはできないのだ。

ではどうするか？ 状態 1 と状態 2 を、可逆過程でつなぐストーリーを仮想的に考えるのである。今の例では、気体は何にも邪魔されずに勝手に広がっていったのだから、気体分子は何も仕事をしないしされない。従って気体分子の運動エネルギーは変化しない。従って状態 2 と状態 1 で温度も変化しない（式 (8.22) で、 U が変わらないなら T も変わらない）。ということは、状態 1 から状態 2 への変化は、その気になれば等温変化でも実現できただろう。実際、小部屋が接する容器の壁の一部を熱が伝わりやすい素材にとりかえて、外界との熱のやりとりを可能にし、また、「突然扉を開く」かわりに、扉の前にビニール袋が何かをつけて、徐々にそれを広げること、例 8.3 のような等温変化を実現できる（なんかわざ

とらしい設定だが、変化がおわったときに、壁を再び断熱にして、ビニール袋を取り去れば、少なくとも容器とその内部に起きる結果は「扉が突然開く」場合と同じである）。等温変化は可逆過程なので、それに伴うエントロピー変化は式 (8.50) で定義も計算もできる。その結果は式 (8.54) で与えられ、それは

$$\Delta S = \int_{V_1}^{V_2} \frac{nR dV}{V} = nR \ln \frac{V_2}{V_1} \quad (8.55)$$

である。これが、例 8.4 におけるエントロピーの変化である。このように、不可逆過程におけるエントロピーの変化は、同じ結果をもたらす可逆過程を仮想的に考えたときのエントロピー変化で定義するのである。

8.13 熱力学第二法則

ではいよいよエントロピーの意味を探っていこう。

例 8.3 では、系のエントロピーは、式 (8.54) の分だけ変化する。もし $V_2 > V_1$ なら、 $\Delta S > 0$ なので、エントロピーは増える。もし $V_2 < V_1$ なら、 $\Delta S < 0$ なので、エントロピーは減る。このように、エントロピーは、状態の変化に応じて、増えることも減ることもある。

ところが、ちょっと見方を変えてみると、話は変わる。気体が等温変化で膨張するときは、気体だけに着目すれば、確かにエントロピーは増える。それは外部から気体に熱が（可逆的に）流れこんだからである。そのとき、「外部」すなわち気体の入ったピストンを取り囲む世界のエントロピーは、熱が流れだすために減る。その変化は、ちょうど、気体のエントロピーが増えたぶんを打ち消すだけの負の値である。このように、外部まで考えに入れるとき、可逆過程ではエントロピーの総和は変化しない。

では、例 8.4 のような不可逆過程ではどうだろう？ 常識的に考えれば、外から介入しない限り、必ず $V_2 > V_1$ 、つまり小さな部屋から大きな容器へ気体は広がっていく。 $V_2 < V_1$ という状況、すなわち、大きな容器から小さな部屋に気体が勝手に集まってくるような変化は起きない。従って、式 (8.55) は必ず 0 より大きな値である。つまり、容器内のエントロピーは必ず増大する。ところがこれらのドラマは全て容器内だけで起きるので、容器外は何も変わらない。そのため、容器外のエントロピーの変化は 0 である。すると、容器の外部まで考えに入れても、エントロピーの総和は増える。このように、外部

まで考えに入れるとき、不可逆過程ではエントロピーの総和は増大する。

よくある質問 78 扉をあけるのは外部からの仕事があるというわけではないのですか? ... そのように思う気持ちはわかりますが、扉をあけるには小さなドアノブを回すだけでよいので、その仕事は無視できます。

そして、驚くべきことに、これは例 8.4 だけでなく広く一般化できることが経験的に知られているのだ。それが以下に述べる、熱力学第二法則である:

熱力学第二法則

孤立系では、変化が不可逆的であるとき、エントロピーの総和は増え、エントロピーの総和が増えるとき、変化は不可逆的である。

問 126 熱力学第二法則を 3 回書いて記憶せよ。

ここで「孤立系」とは、現象がその中だけで完結している系のことである。例 8.3 では、気体の入ったピストンと、それを包む一定温度のお風呂をあわせたものであり、例 8.4 では、容器の内部のことである。

よくある質問 79 例 8.4 ではエントロピーを計算するとき、外部との熱のやりとりがあるじゃないですか! それでも孤立系なのですか? ... エントロピーを求めるときのストーリーは、エントロピーを求めるために考えた「仮想的」なものです。実際に起きたのはストーリーではありません。

不可逆的な変化というのは、「放っといたらそうなる」ような、自発的な変化である。熱力学第二法則から、「孤立系はエントロピーが増大するように自発的に変化する」とも言える。エントロピーは、このように、自発的な変化の有様を教えてくれる量である。それがエントロピーの「意味」(のひとつ)である。

よくある質問 80 例 8.4 では確かに熱力学第二法則が成り立ちますが、ひとつの例について成り立つからといって、それが普遍的に成り立つとは限らないじゃないんですか? ... もっともな指摘です。実は、熱力学第二法則は、一種の仮説です。しかし、これに矛盾するような事例はひとつも見つかっていません。つまり、これは運動の法則と同じように「基本法則」であり、「それが普遍的に正しいと信じれば全てがうまくつじつまがあう」というものなのです。その正しさは、論理的ではなく、経験的に受け入れられているのです。

8.14 ギブスの自由エネルギー

熱力学第二法則は、どんな現象にも成り立つのだから、当然、化学反応にも成り立つ。ということは、この法則を使えば、「何と何をまぜて温度このくらい、圧力このくらいにすると、自発的に何が起きるか?」が予想できるし、それを利用して化学反応を制御できるはずだ。スバラシイ!!

しかし、実際に化学反応では、目の前のフラスコの中のできごとを追跡できても、フラスコの中と外との間での熱や仕事のやりとりまで追跡するのはしんどい。従って、エントロピーの変化を直接的に時々刻々と追跡するのは無理である。そういうときに便利なのは、次に示すギブスの自由エネルギーという量である(単に「ギブスエネルギー」ともいう)。

ギブスの自由エネルギーの定義

$$G := U + PV - TS$$

ここで、 U は内部エネルギー、 P は圧力、 V は体積、 T は絶対温度、 S はエントロピー

問 127 ギブスの自由エネルギーの定義を 3 回書いて記憶せよ。

これが何を意味するかを理解するために、ある系を考えよう。この系は孤立系ではないとする(外と熱や仕事のやりとりがありえる)。この系のギブスの自由エネルギーの変化を考えてみる。すなわち、式 (8.47) を導いた時と同様に、ある状態(内部エネルギー U 、圧力 P 、体積 V 、温度 T 、ギブスの自由エネルギー G) から変化した状態(内部エネルギー $U + \Delta U$ 、圧力 $P + \Delta P$ 、体積 $V + \Delta V$ 、温度 $T + \Delta T$ 、ギブスの自由エネルギー $G + \Delta G$) を考え、そのときのギブスの自由エネルギーの変化を考える。変化前は、

$$G = U + PV - TS \quad (8.56)$$

変化後は、

$$G + \Delta G = (U + \Delta U) + (P + \Delta P)(V + \Delta V) - (T + \Delta T)(S + \Delta S) \quad (8.57)$$

後者から前者を引くと、

$$\Delta G = \Delta U + P\Delta V + V\Delta P + \Delta P\Delta V - T\Delta S - S\Delta T - \Delta T\Delta S \quad (8.58)$$

となる。もしこの変化が、圧力が一定(不変)、なおかつ、温度も一定(不変)の状態で行われたら、 $\Delta P = 0$ か

つ $\Delta T = 0$ なので、上の式は、

$$\Delta G = \Delta U + P\Delta V - T\Delta S \quad (8.59)$$

となる。この右辺の第 1 項と第 2 項をあわせたものは、式 (8.38) の左辺と同じだ。従って、

$$\Delta G = Q - T\Delta S \quad (8.60)$$

となる。ここで、変化が小さい状況を考える。すると、この式は、

$$dG = dQ - TdS \quad (8.61)$$

となる。 dQ は外部から系に流れ込む微小な熱である。

このとき、外部は dQ という熱を失うが、その過程が可逆過程であるとしよう (系の内部での変化は不可逆かもしれないが、系を取り囲む外部の変化は可逆過程で行われるものとみなす)。すると、系の外部のエントロピーの変化は $-dQ/T$ である。一方、系の内部のエントロピーの変化は dS である。よって、系の内外のエントロピーの変化の総和 (あるいは総和の変化と言っても同じこと) は、

$$dS - \frac{dQ}{T} \quad (8.62)$$

である。熱力学第二法則より、これは 0 以上である。従って、

$$dS - \frac{dQ}{T} \geq 0 \quad (8.63)$$

この両辺に T をかける。 T は絶対温度 (よって 0 以上) なので、これを掛けることで不等号の向きは変わらない:

$$TdS - dQ \geq 0 \quad (8.64)$$

$$\text{従って、} \quad dQ - TdS \leq 0 \quad (8.65)$$

である。これをもとに、式 (8.61) は、

$$dG \leq 0 \quad (8.66)$$

となる。式 (8.63) に戻って考えれば、この等号が成り立つのは、系の中での変化が可逆過程のときだけだ。系の中での変化が不可逆過程のとき、つまり自発的な変化では、等号は成り立たず、不等号になる、すなわち、系のギブスの自由エネルギーの変化は負、つまり、必ず減っていくのだ。といっても、際限なく減っていくわけではなく、ある状態に達したら、 $dG = 0$ になってしまい、 G はそれ以上は減らない。このとき、系は平衡状態にある、という。このことは大切なので大きく書いておこう:

— 系の自発的な変化とギブスの自由エネルギー —

圧力と温度が一定の系では、ギブスの自由エネルギーが減るように自発的な変化が進行する。平衡状態に達した時、ギブスの自由エネルギーは一定値 (最小値) をとる。

以下の 3 つの演習問題では、理想気体分子のモル数を n とする。温度、圧力、体積、エントロピーをそれぞれ T, P, V, S とする。気体定数を R 、定圧モル比熱を C_p 、定積モル比熱を C_v とする。変化前の状態を状態 1 とし、変化終了後の状態を状態 2 とする。それぞれの状態での量を、下付きの数字で表す。

演習問題 20 状態 1 から状態 2 まで断熱変化するとき、 $P_1 V_1^\gamma = P_2 V_2^\gamma$ であること (つまり PV^γ が一定であること) を証明せよ。ここで $\gamma := C_p/C_v$ である。ヒント: 式 (8.36) で $dQ = 0$ とする (断熱変化だから) と、 $dU = -P dV$ 。一方、式 (8.32) より、 $dU = n C_v dT$ 。従って、 $-P dV = n C_v dT$ 。この式の P に $P = nRT/V$ (状態方程式) を代入し、整理すると、 $dV/V = -(C_v/R) dT/T$ 。この両辺を状態 1 から状態 2 まで積分すると (C_v/R は定数とみなしてよい。対数の計算がちょっとめんどい)、 $V_1 T_1^{C_v/R} = V_2 T_2^{C_v/R}$ が出てくる。ここで T_1, T_2 を状態方程式で消去し、最後に式 (8.41) を使うと、 $P_1 V_1^\gamma = P_2 V_2^\gamma$ が得られる。

演習問題 21 状態 1 から状態 2 まで定圧変化 (圧力一定の下で変化) するときのエントロピーの変化を求めよう (定圧なので、 $P_1 = P_2$ である)。定圧過程は可逆過程かどうかまだ不明なので、状態 1 から状態 2 を、別の可逆過程でつなごう。すなわち、状態 1 からまず等温過程で状態 3 という状態に持っていく。次に、状態 3 から断熱過程で状態 2 に持っていく。このような 2 段階の可逆過程を考えるのである。

- (1) $P_1 V_1 = P_3 V_3$ であることを示せ。
- (2) $P_3 V_3^\gamma = P_2 V_2^\gamma$ であることを示せ。
- (3) 次式が成り立つことを示せ:

$$V_3 = \left(\frac{V_1}{V_2^\gamma} \right)^{\frac{1}{1-\gamma}} \quad (8.67)$$

- (4) 次式が成り立つことを示せ:

$$S_3 - S_1 = n(C_v + R) \ln \frac{V_2}{V_1} \quad (8.68)$$

- (5) $S_2 - S_3 = 0$ が成り立つことを示せ。

- (6) 次式が成り立つことを示せ (これが定圧過程のエントロピー変化):

$$S_2 - S_1 = n C_p \ln \frac{V_2}{V_1} \quad (8.69)$$

- (7) 状態 1 から状態 2 へ, 直接, 定圧過程で変化するとき, 気体に流入する熱を Q とするとき, 次式が成り立つことを示せ:

$$dQ = n C_p dT \quad (8.70)$$

- (8) 状態 1 から状態 2 へ, 直接, 定圧過程で変化するとき, 以下の量を計算せよ:

$$\int_{\text{状態 1}}^{\text{状態 2}} \frac{dQ}{T} \quad (8.71)$$

- (9) 式 (8.71) の結果を式 (8.69) と比較せよ。

演習問題 22 状態 1 から状態 2 まで定積変化 (体積一定の下で変化) するときのエントロピーの変化を求めよう (定積なので, $V_1 = V_2$ である)。定積過程は可逆過程かどうかまだ不明なので, 状態 1 から状態 2 を, 別の可逆過程でつなごう。すなわち, 状態 1 からまず等温過程で状態 3 という状態に持っていく。次に, 状態 3 から断熱過程で状態 2 に持っていく。このような 2 段階の可逆過程を考えるのである。

- (1) $P_1 V_1 = P_3 V_3$ であることを示せ。
 (2) $P_3 V_3^\gamma = P_2 V_2^\gamma$ であることを示せ。
 (3) 次式が成り立つことを示せ:

$$V_3 = V_1 \left(\frac{P_2}{P_1} \right)^{\frac{1}{\gamma-1}} \quad (8.72)$$

- (4) 次式が成り立つことを示せ:

$$S_3 - S_1 = n C_v \ln \frac{P_2}{P_1} \quad (8.73)$$

- (5) $S_2 - S_3 = 0$ が成り立つことを示せ。
 (6) 次式が成り立つことを示せ (これが定積過程のエントロピー変化):

$$S_2 - S_1 = n C_v \ln \frac{P_2}{P_1} \quad (8.74)$$

- (7) 状態 1 から状態 2 へ, 直接, 定積過程で変化するとき, 気体に流入する熱を Q とするとき, 次式が成り立つことを示せ:

$$dQ = n C_v dT \quad (8.75)$$

- (8) 状態 1 から状態 2 へ, 直接, 定積過程で変化すると

きの, 以下の量を計算せよ:

$$\int_{\text{状態 1}}^{\text{状態 2}} \frac{dQ}{T} \quad (8.76)$$

- (9) 式 (8.76) の結果を式 (8.74) と比較せよ。

演習問題 21, 22 でわかったように, 理想気体の定圧変化や定積変化におけるエントロピー変化は, それらをあたかも可逆過程とみなして計算したエントロピー変化に等しい。このことから推測されるように, 実は, 理想気体の定圧変化と定積変化は可逆過程とみなせるのだ。

8.15 解答

答 116 (1) H_2 の分子量は 2。従って H_2 の 1 分子の質量 m は, $(2 \times 10^{-3} / N_A) \text{ kg}$ である。ここで N_A はアボガドロ定数。式 (8.3) に代入して, $|v_x| = 1.1 \times 10^3 \text{ m s}^{-1}$ 。
 (2) 式 (8.5) より, 平均的な v は, 平均的な $|v_x|$ の $\sqrt{3}$ 倍。従って, $v = 1.9 \times 10^3 \text{ m s}^{-1}$ 。
 (3) 式 (8.5) より, 平均的な v は, 分子量の平方根に反比例する。 N_2 の分子量 (28) は H_2 の分子量 (2) の 14 倍。従って, N_2 の平均的な v は, H_2 の平均的な v の $1/\sqrt{14} = 0.27$ 倍。従って, $v = 5.2 \times 10^2 \text{ m s}^{-1}$ 。

答 119 (1) $k_B = 1.38 \times 10^{-23} \text{ J K}^{-1}$ 。(2) $R = 8.31 \text{ J mol}^{-1} \text{ K}^{-1}$ 。(3) $R = N_A k_B$ 。ここで N_A はアボガドロ定数。

第9章

力学的エネルギー保存則(2)

第6章では、「力学的エネルギー保存則」が直線上(1次元)での質点の運動について、成り立つことを確かめた。本章では、この法則を、3次元空間に拡張する。それによって、より多くの様々な現象を、「力学的エネルギー保存則」で説明できるのだ。

まず、これまで1次元の直線上での運動に限定して考えてきた「仕事」「ポテンシャルエネルギー」「運動エネルギー」を、3次元空間で再定義しよう。とりあえずいちばん簡単なのは「運動エネルギー」だ。

9.1 3次元空間における運動エネルギー

第6章を振り返ると、質量 m の質点が速度 v で直線的な運動(1次元の運動)をしているとき、その運動エネルギー $T(v)$ は、

$$T(v) = \frac{1}{2}mv^2 \quad (9.1)$$

と定義された(式(6.4))。速度は本来、ベクトルなので、質点の運動が3次元的ならば、式(9.1)の v^2 は速度ベクトル \mathbf{v} によって、 $|\mathbf{v}|^2$ と置き換えたい。ここで、 $\mathbf{v} = (v_x, v_y, v_z)$ とすると、 $|\mathbf{v}|^2 = \mathbf{v} \bullet \mathbf{v} = v_x^2 + v_y^2 + v_z^2$ である。多くの教科書では、 $|\mathbf{v}|^2$ のことを単に \mathbf{v}^2 と書く慣習がある。ここでもその慣習に習おう。すなわち、

$$\mathbf{v}^2 = v_x^2 + v_y^2 + v_z^2 \quad (9.2)$$

である(約束)。そこで、3次元では、式(9.1)のかわりに、

$$T(\mathbf{v}) = \frac{1}{2}m\mathbf{v}^2 = \frac{1}{2}m(v_x^2 + v_y^2 + v_z^2) \quad (9.3)$$

を運動エネルギーの定義としよう。これは運動が1次元のときには、式(9.1)に帰着する。つまり、式(9.1)を内包した定義になっている。

9.2 3次元空間における仕事

次に、仕事を3次元に拡張する。仕事とは、「力と、その力が働く質点が“力と同じ向き”に動いた距離との掛け

算」であった。3次元空間でも、この定義を採用する:

ある質点にかかる力を \mathbf{F} とし、その質点が動いた距離と方向を表すベクトル(これを変位ベクトルという)を $\Delta\mathbf{r}$ とする。 \mathbf{F} と $\Delta\mathbf{r}$ のなす角を θ とすると、「その力が働く質点が“力と同じ向き”に動いた距離」は、

$$|\Delta\mathbf{r}| \cos \theta \quad (9.4)$$

となる。従って、仕事 W は、

$$W = |\mathbf{F}| |\Delta\mathbf{r}| \cos \theta \quad (9.5)$$

となる。ところが、内積の定義から、これは

$$W = \mathbf{F} \bullet \Delta\mathbf{r} \quad (9.6)$$

ということと同じである*1。式(9.6)は、式(3.13)を3次元に拡張した式でもある。

よくある質問 81 ベクトルの内積なんてどうして勉強するのかと思ってましたが、こういうことだったんですね。...他にも内積の用途はいろいろあります。

式(9.6)は、質点動く範囲で \mathbf{F} が一定であるときにしか成り立たない。一般には、 \mathbf{F} は場所によって異なりうる。そこで、質点の移動の経路をたくさんの細かい区間に刻んで、各区間では \mathbf{F} がほとんど一定であるとみなそう。つまり、式(3.16)から式(3.20)までと同じように考えればよい。

いま、位置ベクトル \mathbf{r}_0 の位置から位置ベクトル \mathbf{r}_n の位置まで、質点が力を受けて動くとしよう。この経路を細かく細かく刻み、途中の点の位置ベクトルを $\mathbf{r}_1, \mathbf{r}_2, \dots$ とする。いま、 k を1以上 n 以下の整数とし、 \mathbf{r}_{k-1} と \mathbf{r}_k という隣接する2つの点を結ぶ変位ベクトルを

$$\Delta\mathbf{r}_k = \mathbf{r}_k - \mathbf{r}_{k-1} \quad (9.7)$$

とする。この2点の間で力は \mathbf{F}_k でほぼ一定とする(図

*1 式(9.6)の中の「 \bullet 」は、ベクトルの内積を表す。内積とは何か、わからない人は、数学の教科書を参照せよ。

9.1) この2点の間で力がなす仕事 ΔW_k は、式 (9.6)

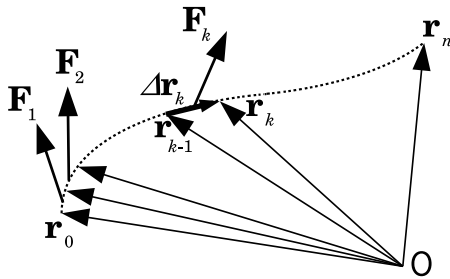


図 9.1 質点の動く経路を細かく分割する。

より $\Delta W_k \equiv \mathbf{F}_k \cdot \Delta \mathbf{r}_k$ となる。これを全区間について合計すれば、 \mathbf{r}_0 から \mathbf{r}_n までの移動でなされる仕事 W になる:

$$W \equiv \sum_{k=1}^n \Delta W_k \equiv \sum_{k=1}^n \mathbf{F}_k \cdot \Delta \mathbf{r}_k \quad (9.8)$$

これは式 (3.18) を 3 次元に拡張した式でもある。ここで刻みをどんどん小さくしていけば、

$$W = \lim_{\substack{n \rightarrow \infty \\ \Delta \mathbf{r}_k \rightarrow 0}} \sum_{k=1}^n \mathbf{F}_k \cdot \Delta \mathbf{r}_k \quad (9.9)$$

となる。これは積分の定義より (Σ は \int になり、 Δ は d になる!)、

$$W = \int_{\mathbf{r}_0}^{\mathbf{r}} \mathbf{F} \cdot d\mathbf{r} \quad (9.10)$$

となる (\mathbf{r}_n を改めて \mathbf{r} とおいた)。

よくある質問 82 何ですかこの積分!? 普通の積分は、 \int なんちゃら dx とか \int なんちゃら dt みたいに、 d がつくのは x や t などです。でも、これは $d\mathbf{r}$ って、ベクトルに d がついてます。しかも内積!? ... 初めて見たらちょっとびっくりしますよね。でも、これはそんなに不思議なことではありません。積分の定義を思い出して下さい。「関数と微小量の掛け算」が、ここでは力 (位置の関数で、ベクトル) と変位 (位置の変化を表す微小量で、ベクトル) の内積 (掛け算をベクトルに拡張したもの) になっているだけです。

この式は式 (3.20) を 3 次元に拡張した式だ。この積分は、始点 \mathbf{r}_0 と終点 \mathbf{r} のみならず、移動の経路にも依存するから、その経路を Γ と名づければ、以下のように言える: 経路 Γ を移動する質点にかかる力 \mathbf{F} のなす仕事

を、次式で定義する:

$$W = \int_{\Gamma} \mathbf{F} \cdot d\mathbf{r} \quad (9.11)$$

ここで、 \mathbf{r} は位置ベクトル。この式は、最も一般的な仕事の定義式である。

ここで出てきた積分は、君にとって目新しいものだろう。ここでは被積分関数も積分変数もベクトルであり、「関数と微小量の掛け算」がここではベクトルの内積であり、しかも積分区間が「経路 Γ 」であるのだ。このように、ある経路に沿って、ベクトルと微小ベクトルの内積を足し合わせるような積分を、線積分 という。3 次元では、仕事は線積分で定義されるのだ。

問 128 仕事を 3 次元空間で定義せよ。

9.3 3 次元空間におけるポテンシャルエネルギー

次に、「ポテンシャルエネルギー」の定義を 3 次元空間に拡張しよう。といっても、仕事の定義を上述のように改めること以外は、ポテンシャルエネルギーの定義は 1 次元のときと同じだ。式 (3.36)、つまり、式 (3.38)、式 (3.39) の位置 x を位置ベクトル \mathbf{r} に置き換えたものが、3 次元空間におけるポテンシャルエネルギーだ。すなわち、ポテンシャルエネルギーを $U(\mathbf{r})$ とすると、

$$\text{定義 1': } U(\mathbf{r}) := -W(\mathbf{r}) \quad (9.12)$$

ここで $W(\mathbf{r})$ は、物体を基準点から点 \mathbf{r} まで運ぶときに、物体にかかっている保存力がなす仕事。

$$\text{定義 2': } U(\mathbf{r}) := W'(\mathbf{r}) \quad (9.13)$$

ここで $W'(\mathbf{r})$ は、物体を基準点から点 \mathbf{r} まで運ぶときに、かかっている保存力に逆らって誰かがなす仕事。

$$\text{定義 3': } U(\mathbf{r}) := W''(\mathbf{r}) \quad (9.14)$$

ここで $W''(\mathbf{r})$ は、物体を点 \mathbf{r} から基準点まで運ぶときに、物体にかかっている保存力がなす仕事。

無論、これらの 3 つの定義は互いに同値だ。力が保存力でなければならない、ということに注意しよう。

問 129 物体が保存力 \mathbf{F} を受けて、ある点 \mathbf{r}_0 から別の点 \mathbf{r}_1 まで移動するとき、 \mathbf{F} がなす仕事 W_{01} は、

$$W_{01} = U(\mathbf{r}_0) - U(\mathbf{r}_1) \quad (9.15)$$

であることを示せ。ここで U はポテンシャルエネルギーである。

問 130 保存力が, 3次元空間の任意の閉曲線(始点と終点一致する曲線)に沿ってなす仕事は, 必ず 0 になることを示せ。

9.4 3次元空間における力学的エネルギー保存則

役者は揃った。ではいよいよ, 力学的エネルギー保存則が3次元でも成り立つことを確認していこう。1次元で力学的エネルギー保存則を導いたとき, 式(6.7)から式(6.9)にかけて, 運動方程式を位置で積分した。3次元でも同じ事をやるのだ。まず, 運動方程式:

$$\mathbf{F} = m \frac{d\mathbf{v}}{dt} \quad (9.16)$$

を考える。 \mathbf{F} , \mathbf{v} , m , t はそれぞれ質点に働く力, 質点の速度, 質点の質量, そして時刻である。質点の位置ベクトルを $\mathbf{r}(t)$ とする。時刻 t と, そこから微小時間 dt だけ経過した $t + dt$ で, 質点は少し違う位置にいる(移動している)。その差, つまり変位を $d\mathbf{r}$ と書こう。つまり,

$$d\mathbf{r} = \mathbf{r}(t + dt) - \mathbf{r}(t) \quad (9.17)$$

である。この両辺を dt で割ったもの(つまり位置を時刻で微分したもの)が速度 \mathbf{v} だ。つまり, $\mathbf{v} = d\mathbf{r}/dt$ だ。従って, 次式が成り立つ:

$$d\mathbf{r} = \mathbf{v} dt \quad (9.18)$$

式(9.16)に式(9.18)を辺々, 内積すると次式を得る:

$$\mathbf{F} \cdot d\mathbf{r} = m \frac{d\mathbf{v}}{dt} \cdot \mathbf{v} dt \quad (9.19)$$

これはちょうど, 式(6.8)を3次元に拡張した式だ。

ここで, 時刻 t_0 から t_1 までの運動を考える。 $\mathbf{r}_0 = \mathbf{r}(t_0)$, $\mathbf{r}_1 = \mathbf{r}(t_1)$, $\mathbf{v}_0 = \mathbf{v}(t_0)$, $\mathbf{v}_1 = \mathbf{v}(t_1)$ とし, \mathbf{r}_0 から \mathbf{r}_1 までの質点の運動の軌跡を Γ とする。 Γ をたくさんの短い区間に分割し, それぞれの区間で式(9.19)を考えて足し合わせる。つまり, 時刻 t_0 から t_1 までの間で, 式(9.19)を積分すると,

$$\int_{\Gamma} \mathbf{F} \cdot d\mathbf{r} = \int_{t_0}^{t_1} m \frac{d\mathbf{v}}{dt} \cdot \mathbf{v} dt \quad (9.20)$$

となる。左辺は式(9.11)の右辺と同じ形になっている。つまり, 質点に働く力がなす仕事 W_{01} である。

ここで, $\mathbf{v} = (v_x, v_y, v_z)$ とすれば,

$$\frac{d\mathbf{v}}{dt} = \left(\frac{dv_x}{dt}, \frac{dv_y}{dt}, \frac{dv_z}{dt} \right) \quad (9.21)$$

である。これらを使って式(9.20)の右辺を成分で書くと, 次のようになる:

$$\int_{t_0}^{t_1} m \left(\frac{dv_x}{dt}, \frac{dv_y}{dt}, \frac{dv_z}{dt} \right) \cdot (v_x, v_y, v_z) dt \quad (9.22)$$

$$= \int_{t_0}^{t_1} m \left(v_x \frac{dv_x}{dt} + v_y \frac{dv_y}{dt} + v_z \frac{dv_z}{dt} \right) dt \quad (9.23)$$

$$= \int_{t_0}^{t_1} m v_x \frac{dv_x}{dt} dt + \int_{t_0}^{t_1} m v_y \frac{dv_y}{dt} dt + \int_{t_0}^{t_1} m v_z \frac{dv_z}{dt} dt$$

$$= \int_{v_x(t_0)}^{v_x(t_1)} m v_x dv_x + \int_{v_y(t_0)}^{v_y(t_1)} m v_y dv_y + \int_{v_z(t_0)}^{v_z(t_1)} m v_z dv_z$$

$$= \left[\frac{1}{2} m v_x^2 \right]_{v_x(t_0)}^{v_x(t_1)} + \left[\frac{1}{2} m v_y^2 \right]_{v_y(t_0)}^{v_y(t_1)} + \left[\frac{1}{2} m v_z^2 \right]_{v_z(t_0)}^{v_z(t_1)}$$

$$= \frac{1}{2} m (v_x^2(t_1) + v_y^2(t_1) + v_z^2(t_1)) - \frac{1}{2} m (v_x^2(t_0) + v_y^2(t_0) + v_z^2(t_0)) \quad (9.24)$$

$$= \frac{1}{2} m \mathbf{v}_1^2 - \frac{1}{2} m \mathbf{v}_0^2 \quad (9.25)$$

となる。従って, 式(9.20)は次式のようになる:

$$W_{01} = \frac{1}{2} m \mathbf{v}_1^2 - \frac{1}{2} m \mathbf{v}_0^2 \quad (9.26)$$

ここで式(9.3)を使うと, 式(9.26)は

$$W_{01} = T(\mathbf{v}_1) - T(\mathbf{v}_0) \quad (9.27)$$

となる。ここで, $T(\mathbf{v})$ は質点の運動エネルギーである。

式(9.27)は, 1次元で導いた式(6.13)と同じ形の式だ。つまり, 3次元の運動でも, 力がなした仕事は運動エネルギーの変化に等しい, ということが成り立つ。

ところで, 力が保存力の場合は, 式(9.27)の左辺を式(9.15)で書き換えると,

$$U(\mathbf{r}_0) - U(\mathbf{r}_1) = T(\mathbf{v}_1) - T(\mathbf{v}_0) \quad (9.28)$$

となる。あるいは,

$$T(\mathbf{v}_0) + U(\mathbf{r}_0) = T(\mathbf{v}_1) + U(\mathbf{r}_1) \quad (9.29)$$

となる。すなわち, 運動の最初(時刻 t_0)と運動の最後(時刻 t_1)で, 「運動エネルギーとポテンシャルエネルギーの和」は等しいのだ。1次元のときと同様に, 「運動エネルギーとポテンシャルエネルギーの和」のことを, 「力学的エネルギー」と呼ぼう(定義)。すなわち, 式(9.29)によって, 3次元における力学的エネルギー保存則が確かめられた!

問 131 運動方程式から式 (9.29) を導出せよ (上の議論を整理・再現すればよい)。

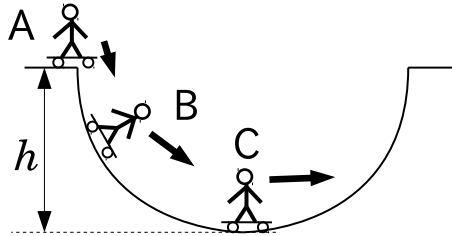


図 9.2 スケートボードのハーフパイプ

問 132 スケートボードで、ハーフパイプを降りる人 (スケートボードとあわせて質量 m) の運動を考えよう (図 9.2)。ハーフパイプの縁 A にいるときは速さ 0 である。そこから静かにハーフパイプの側面を降りはじめ、重力にまかせて加速しながら降りていき (点 B)、ハーフパイプの底 (点 C) に至る。点 C に至ったときは、速さ v で水平方向に動いている。ハーフパイプの底と縁の高度差は h であるとする。ただし摩擦や空気抵抗や車輪の回転に伴うエネルギーなどは無視する。

(1) 重力加速度を g とする。次式を示せ:

$$\frac{1}{2}mv^2 = mgh \quad (9.30)$$

(2) $h = 5.0 \text{ m}$ のとき、 v を求めよ。

(3) ハーフパイプの断面が半円だとすると、点 C でその人が受ける垂直抗力の大きさは重力の何倍か?

9.5 振り子の運動

振り子の運動を考えてみよう。天井に固定された点 P から長さ l の糸が垂れており、その先に質量 m の質点がついている (図 9.3)。質点が最も下に来たとき (糸が鉛直になったとき) の位置を O とする。糸をびんと張ったまま質点を少し持ち上げたときの位置を Q とする。Q から静かに質点を手放すと、質点は P, O, Q を含む鉛直平面内で振動運動をする。

時刻 t で質点は点 $X(t)$ にあるとし、角 OPX をラジアンであらわしたものを θ としよう。当然、 θ は時間の関数だ。以下、糸の質量は 0 とする。空気抵抗は無視する。

問 133 この質点の運動について、

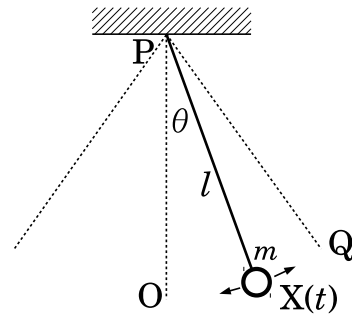


図 9.3 振り子

(1) 時刻 t における質点の速度を $\mathbf{v}(t)$ とすると、

$$|\mathbf{v}(t)| = \left| l \frac{d\theta}{dt} \right| \quad (9.31)$$

であることを示せ。ヒント: t から $t + dt$ の間に X が移動するのは、扇形の弧の部分である。その弧の長さ (つまり移動距離) は、「半径」かける「角度の変化」であり、「角度の変化」は $\theta(t + dt) - \theta(t)$ である。また、速度の絶対値 (つまり速さ) とは、 t から $t + dt$ の間に X が移動した距離を時間間隔 dt で割ったものだ。

(2) 時刻 t における質点の運動エネルギー T とポテンシャルエネルギー U は、それぞれ次のようになることを示せ:

$$T = \frac{1}{2}ml^2 \left(\frac{d\theta}{dt} \right)^2 \quad (9.32)$$

$$U = mgl(1 - \cos \theta) \quad (9.33)$$

ただし、質点が点 O にあるとき $U = 0$ と定める。

(3) 働く力は重力と張力だけだが、重力は保存力であり、張力は仕事をしない (移動方向と力の方向が直交している)。従って力学的エネルギー保存則が成り立つ。すなわち、 $T + U$ は時刻 t によらず一定である。従って、 $T + U$ を t で微分すると、0 にならねばならない。このことから、次式を導け:

$$ml^2 \frac{d\theta}{dt} \frac{d^2\theta}{dt^2} + mgl \sin \theta \frac{d\theta}{dt} = 0 \quad (9.34)$$

(4) その結果、次式 (振り子の運動をあらわす微分方程式) を得ることを示せ:

$$\frac{d^2\theta}{dt^2} = -\frac{g}{l} \sin \theta \quad (9.35)$$

(5) θ が 0 に近い場合、振り子の運動方程式は、近似的に次のようになることを示せ:

$$\frac{d^2\theta}{dt^2} = -\frac{g}{l} \theta \quad (9.36)$$

この近似式が成り立つとして、以下の小問に答えよ：

(6) $\omega = \sqrt{g/l}$ とすると式 (9.36) は次式になることを示せ (これは関数 $\theta(t)$ に関する微分方程式)：

$$\frac{d^2\theta}{dt^2} = -\omega^2\theta \quad (9.37)$$

(7) $\theta(t) = \theta_0 \cos \omega t$ は上の微分方程式の解であることを示せ。ただし θ_0 は定数とする。

(8) 振り子の周期 τ を、 g と l であらわせ*2。

(9) $l = 1.0 \text{ m}$ のとき、振り子の振動の角速度と周期は？

(10) l を何倍にすれば振り子の周期は半分になるか？

問 134 前問で見たように、振幅が十分に小さいときに限れば (すなわち θ が 0 に近ければ)、振り子の周期は糸の長さ l と重力加速度 g だけで決まってしまう、質点の質量 m や、振幅 θ_0 などには依らない。これは、振り子の重要な性質である (これを「振り子の等時性という」)。

- (1) これを利用して、重力加速度 g を測定する。つまり、長さ l の糸の先に適当な重りをつけて振動させ、その周期 τ を測ったとする。では、 l と τ から g を求める式は？
- (2) 月面では、地球上に比べて振り子の周期は何倍になるか？

問 135 2 つの互いに同仕様の振り子時計がある。これらの時刻を互いに合わせた後、東京 (重力加速度 9.798 m s^{-2}) と札幌 (重力加速度 9.805 m s^{-2}) のそれぞれに置いた。1 日たつと、札幌の時計は東京の時計より何秒、進んでいる (もしくは遅れている) か？

よくある質問 83 振り子といえばフーコーですね。振り子で地球の自転を証明したんですよね ... そうです。自転によって生じる「コリオリ力」という見かけの力を実証しました。

9.6 ポテンシャルエネルギーと力の関係

(本節は後の話に関係しないので読み飛ばしてもよい。秋学期に電磁気学を学ぶ時に復習すると役立つだろう。)

さて、力学的エネルギー保存則の話から少し外れるが、ここで力とポテンシャルエネルギーの関係をもう少し深

くみておこう。いま、符号を無視しておおまかに言えば、力の (線) 積分がポテンシャルエネルギーを与えるわけだから、積分と微分は互いに逆の操作であることを考えれば、ポテンシャルエネルギーの微分が力を与えるのではないだろうか？ 実は、この発想は正しい。以下にそれを説明しよう：

いま、ある質点に働く力が保存力であり、しかも場所だけによって一意的に定まり、時刻や速度などには陽に依存しない*3としよう。

とりあえず、簡単のため、物体の移動は直線上 (x 軸の上) に制限され、働く力もその直線に沿った方向に限定されるとしよう。物体が位置 x_0 から x_1 まで動くときに、力 F がなす仕事 W_{01} は、式 (6.26) より、

$$W_{01} = -U(x_1) + U(x_0) \quad (9.38)$$

である (U はポテンシャルエネルギー)。ここで、 x_0 を x とし、 x_1 を x から非常に近い位置 $x + dx$ とすると (dx は 0 に近い量)、

$$W_{01} = -U(x + dx) + U(x) \quad (9.39)$$

となる。ところで、仕事の定義から、 W_{01} は $W_{01} = F dx$ である。これらから、 $F dx = -U(x + dx) + U(x)$ となる。両辺を dx で割って、

$$F = -\frac{U(x + dx) - U(x)}{dx} \quad (9.40)$$

ここで dx が十分に 0 に近いことを思い出せば、

— ポテンシャルエネルギーと力の関係 (1 次元) —

$$F = -\frac{dU}{dx} \quad (9.41)$$

である。つまり、力は、ポテンシャルエネルギーを微分してマイナスをつけたものに等しい。

この話は 3 次元空間に拡張できる。物体が力 \mathbf{F} を受けながら位置 \mathbf{r} から、わずかだけ離れた位置 $\mathbf{r} + d\mathbf{r}$ に移動することを考える。

$$d\mathbf{r} = (dx, dy, dz) \quad (9.42)$$

は十分に小さいベクトルである。すると、力がなす仕事

*2 普通は周期は T で表す慣習が多いが、ここでは T は運動エネルギーの記号に使っているため、周期は τ (ギリシア文字のタウ) を使う。

*3 この「陽に」(explicit) という言葉は科学ではよく使う。「あからさまに」とか「直接的に」という意味。今の場合は、時間と共に場所が変われば力も変わるかもしれないが、それは場所が変わったからであり、時間の変化が直接的に力を変えたわけではない、ということ。

W は、式 (9.39) と同じように考えれば、

$$W = -U(\mathbf{r} + d\mathbf{r}) + U(\mathbf{r}) \quad (9.43)$$

である (U はポテンシャルエネルギー)。ここで全微分^{*4}を使うと、 $U(\mathbf{r} + d\mathbf{r}) = U(x + dx, y + dy, z + dz)$

$$\begin{aligned} &= U(x, y, z) + \frac{\partial U}{\partial x} dx + \frac{\partial U}{\partial y} dy + \frac{\partial U}{\partial z} dz \\ &= U(\mathbf{r}) + \frac{\partial U}{\partial x} dx + \frac{\partial U}{\partial y} dy + \frac{\partial U}{\partial z} dz \end{aligned} \quad (9.44)$$

である。これを式 (9.43) に代入すると次式になる：

$$\begin{aligned} W &= -U(\mathbf{r}) - \frac{\partial U}{\partial x} dx - \frac{\partial U}{\partial y} dy - \frac{\partial U}{\partial z} dz + U(\mathbf{r}) \\ &= -\frac{\partial U}{\partial x} dx - \frac{\partial U}{\partial y} dy - \frac{\partial U}{\partial z} dz \\ &= -\left(\frac{\partial U}{\partial x}, \frac{\partial U}{\partial y}, \frac{\partial U}{\partial z}\right) \cdot (dx, dy, dz) \\ &= -\left(\frac{\partial U}{\partial x}, \frac{\partial U}{\partial y}, \frac{\partial U}{\partial z}\right) \cdot d\mathbf{r} \end{aligned} \quad (9.45)$$

一方、仕事の定義から W は $W = \mathbf{F} \cdot d\mathbf{r}$ なので、

$$\mathbf{F} \cdot d\mathbf{r} = -\left(\frac{\partial U}{\partial x}, \frac{\partial U}{\partial y}, \frac{\partial U}{\partial z}\right) \cdot d\mathbf{r} \quad (9.46)$$

である。 dx, dy, dz は 0 に近い任意の量なので、上の式が成り立つには、

— ポテンシャルエネルギーと力の関係 (3 次元) —

$$\mathbf{F} = -\left(\frac{\partial U}{\partial x}, \frac{\partial U}{\partial y}, \frac{\partial U}{\partial z}\right) \quad (9.47)$$

でなければならない^{*5}。ここで、"grad" という記号を、

$$\text{grad } U = \left(\frac{\partial U}{\partial x}, \frac{\partial U}{\partial y}, \frac{\partial U}{\partial z}\right) \quad (9.48)$$

と定義する^{*6}。この記号を使うと、式 (9.47) は次式のよ

うに書ける：

$$\mathbf{F} = -\text{grad } U \quad (9.49)$$

演習問題 23 アインシュタインの相対性理論によると、重力によるポテンシャルエネルギーが高い位置ほど時間は速く進む (とても不思議!)。すなわち、ある 2 つの位置 A, B があって、重力によるポテンシャルエネルギーが、位置 B では位置 A よりも $m\phi$ だけ高いとし (m は質点の質量)、位置 A に置かれた時計が時間 T だけ進む場合、位置 B に置かれた時計は、以下のぶんだけ進む。

$$T\left(1 + \frac{\phi}{c^2}\right) \quad (9.50)$$

ここで、 $c = 299792458 \text{ m/s}$ は光の速さである。以後、地球の半径を $R = 6400 \text{ km}$ とする。

(1) GPS 衛星は地表から約 20,000 km の高さを飛んでいる。地上の時計が 1 秒進む間に、GPS 衛星に搭載された時計は、1 秒よりどれだけ多くの時間を進むか? (他の要因のために、実際に起きるのは、ここで計算される値よりも、若干小さい値である)

(2) 高精度の時計が 2 つあれば、これらの時計が示す時刻の差から、これらの時計の置かれた高さの差がわかる。つまり、時計を高度計として使うことができるだろう。ところで、東大の香取秀俊博士が開発した「光格子時計」は、300 億年に 1 秒しか狂わないという、世界的にもブッチギリな高精度を持つ。この時計を高度計として使う場合、地表付近 (海面から高さ ± 数 km の範囲) では、どのくらいの誤差で高度を計測できるか?

なお、この「高度計」が素晴らしいのは、GPS のような衛星からの電波が入ってこない水中や地下、屋内などでも原理的には利用可能ということである。

9.7 解答

答 128 略。

答 129 物体を基準点から点 \mathbf{r}_0 まで運ぶときに保存力 \mathbf{F} がなす仕事を $W(\mathbf{r}_0)$ とすると、定義から、

$$U(\mathbf{r}_0) = -W(\mathbf{r}_0) \quad (9.51)$$

である。同様に、物体を基準点から点 \mathbf{r}_1 まで運ぶときに保存力 \mathbf{F} がなす仕事を $W(\mathbf{r}_1)$ とすると、

$$U(\mathbf{r}_1) = -W(\mathbf{r}_1) \quad (9.52)$$

^{*4} 数学の教科書を参照。

^{*5} $\mathbf{F} = (F_x, F_y, F_z)$ とする。式 (9.46) で $dx \neq 0$ として $dy = dz = 0$ とすると、

$$F_x dx = -\frac{\partial U}{\partial x} dx, \quad \text{したがって、} F_x = -\frac{\partial U}{\partial x}$$

を得る。 $dy \neq 0$ で $dx = dz = 0$ の場合や、 $dz \neq 0$ で $dx = dy = 0$ の場合も同様に考えれば、

$$F_y = -\frac{\partial U}{\partial y}, \quad F_z = -\frac{\partial U}{\partial z}$$

を得る。したがって式 (9.47) が成り立つ。

^{*6} この grad とは、"gradient" の略であり、日本語では「勾配」と言う。その意味は、いずれ基礎数学や秋学期の物理学で学ぶだろう。

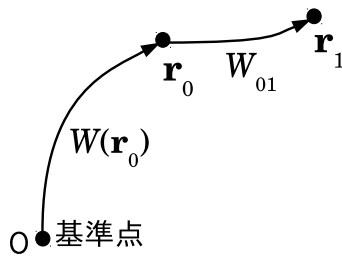


図 9.4 問 129 の仕事の経路。

である。ここで、基準点から点 r_1 へ物体を運ぶときの経路を、点 r_0 を経由するようにとれば (図 9.4), 保存力ゆえに仕事は経路によらず一定なので, $W(r_1) = W(r_0) + W_{01}$ となる。ここで W_{01} は物体を点 r_0 から点 r_1 に運ぶときの仕事。この式の $W(r_0), W(r_1)$ を, 式 (9.51), 式 (9.52) を使って置き換えると, $-U(r_1) = -U(r_0) + W_{01}$ となる。従って, $U(r_0) - U(r_1) = W_{01}$ 。

答 130 閉曲線 Γ に沿う移動によってなす仕事を W とする。移動の開始点を r_0 とすると, 移動の終了点も r_0 である。保存力だから, 式 (9.15) で, $r_1 = r_0, W_{01} = W$ として, $W = U(r_0) - U(r_0)$ となる。右辺は 0 だから, 結局, $W = 0$ となる。

答 132 (1) 点 C をポテンシャルエネルギーの基準点とする。点 A では, 運動エネルギーは 0, ポテンシャルエネルギーは mgh である。従って力学的エネルギーは mgh となる。点 C では, 運動エネルギーは $mv^2/2$, ポテンシャルエネルギーは 0 である。従って力学的エネルギーは $mv^2/2$ となる。働く力は重力と垂直抗力だけだが, 重力は保存力であり, 垂直抗力は仕事をしない (移動方向と力の方向が直交している)。従って力学的エネルギー保存則が成り立つ。すなわち, 点 A と点 C で力学的エネルギーは等しいことから, 与式を得る。

(2) 前小問より,

$$v = \sqrt{2gh} = \sqrt{2 \times 9.8 \text{ m s}^{-2} \times 5 \text{ m}} = 9.9 \text{ m s}^{-1}$$

(3) 半円形ハーフパイプの高さが h なのだから, この円の半径は h である。式 (5.37) より, C 点では人は円の中心に向かって (つまり上向きに), mv^2/h という合力を受けるはず。一方, 垂直抗力を N とする。人には下向きに mg という重力も働くから, 上向きの力は, 垂直抗力と重力の合力であり, その大きさは $N - mg$ である。従って, $N - mg = mv^2/h$ である。従って,

$$N = \frac{mv^2}{h} + mg \quad (9.53)$$

である。小問 (1) より $mv^2 = 2mgh$ だから,

$$N = 2mg + mg = 3mg \quad (9.54)$$

となる。よって垂直抗力は, 半径 h によらず, 重力の 3 倍。だからハーフパイプ走者は重力の 3 倍の力に耐える頑丈な肉体を持っていなければならない。

答 133 (1) t から $t + dt$ の間に X が移動する距離は, $l|\theta(t+dt) - \theta(t)|$ である。微分の定義から, これは $l|\theta' dt|$ に等しい。これを dt で割ったものが速度の大きさになる。したがって与式が成り立つ。(2) 略 ($T = mv^2/2$ の v に前小問の結果を代入すると, 運動エネルギー T の与式を得る。また, O に比べて X は $l(1 - \cos \theta)$ だけ高い位置にある。従って, 重力によるポテンシャルエネルギー U の与式を得る。)(3), (4) 略。(5) 略。($\sin \theta \triangleq \theta$ とすればよい)(6) 略。(7) 略 (式 (9.37) の左辺と右辺に代入して, それらが等しくなることを示せばよい)。(8) $\tau = 2\pi/\omega$ より (式 (5.4) 参照),

$$\tau = 2\pi\sqrt{l/g} \quad (9.55)$$

(9) 角速度は, $\omega = \sqrt{g/l} = \sqrt{9.8 \text{ m s}^{-2}/(1.0 \text{ m})} = 3.1 \text{ s}^{-1}$ 。周期は (計算略), $\tau = 2\pi/\omega = 2.0 \text{ s}$ 。

(10) 式 (9.55) より, τ は \sqrt{l} に比例するから, τ を半分にするには, \sqrt{l} を半分にすればよい。従って l を $1/4$ 倍にすればよい。

答 134 (1) 式 (9.55) を変形して $g =$ の式にすると, $g = 4\pi^2 l/\tau^2$ 。(2) 月面では重力加速度が地表の $1/6$ 倍になる。式 (9.55) より, τ は $1/\sqrt{g}$ に比例するから, g が $1/6$ 倍になると τ は $\sqrt{6} = 2.4$ 倍 (ゆっくり振動)。

よくある質問 84 ポテンシャルエネルギーは, 力学的エネルギー保存則を見やすくするために定義されたもの, と考えてよいのですか? ... それだけではありません。まず, 力はベクトルだけどポテンシャルエネルギーはスカラーなので, 力を直接考えるよりも, 数学的に取扱いがシンプルで楽になります。また, 量子力学では力よりもポテンシャルエネルギーの方が直接的に重要な働きをします。

よくある質問 85 力学的エネルギー保存則とエネルギー保存則は違うんですね? ... 違うというより, 前者は後者の一種 (特別なケース) ですね。

よくある質問 86 「保存力は径路に依存しない」というフレーズが頭にしっかりとこない。... ちょっと省略しすぎですね。「保存力がなす仕事は, 径路によらず, 始点と終点だけで決まる」というのが正しい表現です。例えば話でいうと, 山を登る

のに、きつい勾配の坂をまっすぐ登るのと、ジグザグになった緩やかな道を登るのとでは、全体の仕事（力かける距離）は同じということです。きつい道では大きな力が（移動方向に）かかるけど、そのぶん短くてすみます。

コラム: ベクトルは太字、スカラーは細字なのはなぜか?

「ベクトルは太字で書く」が、ちゃんとできない人が多い。そもそもなぜベクトルは特別な書き方（太字で書く）をするのだろう?それは、スカラーとベクトルは、本質的に違う量であり、計算ルールも異なるからだ。

例えば「スカラーでの割り算」は（0で割る以外は）許されるが、「ベクトルでの割り算」は許されない。スカラー同士やベクトル同士は足せるが、スカラーとベクトルは足せない。スカラーとベクトルの大小関係は比べられないし、スカラーとベクトルが等号で結ばれることもない。それらの「ルール破り」を防ぐための「要注意記号」として、ベクトルを太字や上付き矢印で書くのだ。

ベクトルは太字という慣習を守らない人は、そもそも何がベクトルで何がスカラーかをわかっていない可能性がある。それはかなりヤバイ。ベクトルを太字で書かないと減点されるのは、「わかっている風を装っているだけで、実はわかっていない」のではないかと思われているのだ。逆に言えば、「自分はどれがベクトルでどれがスカラーなのかちゃんとわかっているぜ!」ということをアピールするために、ベクトルを太字で書くのだ。

ところが、ひとつの直線上に限定された現象（直線運動）では、ベクトルとスカラーを区別する必要はないので、本来ベクトルである量もスカラーとして扱い、細字で書く。このような場合も、力や速度や加速度には向きがあるが、それは符号（正か負か）で表現できるので、スカラーで十分であり、わざわざベクトルとして扱う必要は無い。ベクトルとして扱っても、数値で表現するときは、ひとつの数値（成分）しかない。

数学や物理では、「区別すべきものは区別せねばならないが、区別する必要のないものは、理由もないのに区別したりしてはいけない」という慣習がある（例外もあるが）。これに照らせば、直線上に限定されることが最初からわかっている運動では $F = ma$ のように書いてよいし、むしろそう書かねばならない（ F, m, a は力、質量、加速度）。この場合は F や a はスカラーと同様に扱うことができ、 $m = F/a$ と書けるからでもある（ $a \neq 0$ の場合）。

コラム: 問題を解くコツ

物理学の問題を解くには、いくつかのコツがある。

1. 値の代入は最後にやる!

既に述べたが、答を数値で求める問題も、できるだけぎりぎりまで、数値ではなく文字の式変形で攻めよう。そして、求めたい量を既知の量で表す式が求まった段階で、既知の量の数値

を代入して一気にまとめて数値計算をするのである。最初や途中から数値を代入してしまうと、式変形と数値計算が混在してしまい、ミスを起こしやすく、また、ミスの発見がやりにくくなる。一方、最後にまとめて計算すれば、約分の組み合わせがたかさんでできるので、計算が効率よく、正確にできる。

2. ベクトルかスカラーかを考える。

今扱っている量がベクトル（向きを持つ量）なのかスカラー（向きは持たず、大きさだけを持つ量）なのかを意識しよう。速度、加速度、力、運動量はベクトル。エネルギー、仕事、質量はスカラー。ベクトル＝スカラーみたいな等式（方程式）は絶対に成り立たない。そんな変な式を立てていないかチェックしよう。そのためには、ベクトルは太字で書く、ということを徹底しよう。

3. 次元をチェック!

式変形の途中や最終結果の次元をチェックしよう。例えば運動方程式を解いて、質点の速度 v に関する式を得たら、それが速度の次元を持っているかをチェックする。 $v = \exp(-\alpha t/m) - mg$ のような式を見たら、一瞬で「これは違う!」と気づかねばならない（ \exp は必ず無次元である... わからない人は「大学1年生のための数学入門」を見よう!）。次元をチェックしていれば、単位を忘れる、ということはない。

4. 初期条件をチェック!

運動方程式を解く場合は、たいてい、初期条件が与えられている。式変形の最後に得た式に、 $t = 0$ を入れてみよう。それが初期条件が満たすかどうかをチェックしよう。

5. $t \rightarrow \infty$ をチェック!

与えられた問題は、時間が十分たてばどうなるかが常識的にわかることがある。例えば、摩擦を受けて運動する物体は、いずれ止まったり、一定速度に落ち着いたりすることが多い。運動方程式を解いて得た式で時刻 t を ∞ にしてみても、実際にはそうなるかどうかを確認しよう。

6. $x = 0$ や $t = 0$ のまわりで線形近似!

方程式を解いて得た式について、0のまわりで線形近似してみよう。それは多くの場合、得た式よりもシンプルになり、直感的に解釈しやすい。例えば空気抵抗つきの自由落下の問題では、 $t = 0$ のまわりでの線形近似は $v = -gt$ のように簡単な式になる。それが君の物理的直感に整合するかを考えよう。

7. 保存則をチェック!

物理は、運動方程式を解くのが正攻法だが、それを迂回するのが「保存則」である。条件設定によって、保存する量とそうでない量がある。保存量があれば、それに着目して問題を考えるとシンプルに解けることが多い。運動方程式を立てたり解いたりする前に、保存則が使えないかを考えよう。

第10章

角運動量保存則

10.1 外積

以下の話で、「外積」という概念が必要になる。詳しいことは数学の教科書を読んでもらうとして、ここでは外積の概略だけを述べておく。

3次元空間中の正規直交座標系^{*1}で表された2つの幾何ベクトル $\mathbf{a} = (a_1, a_2, a_3)$, $\mathbf{b} = (b_1, b_2, b_3)$ について、

$$(a_2b_3 - a_3b_2, a_3b_1 - a_1b_3, a_1b_2 - a_2b_1) \quad (10.1)$$

というベクトルを与えるような演算を 外積 と呼び、 $\mathbf{a} \times \mathbf{b}$ と表す (この \times を省略したり \bullet と書き換えたりしてはいけない!)。すなわち、

$$\begin{aligned} \mathbf{a} \times \mathbf{b} &= (a_1, a_2, a_3) \times (b_1, b_2, b_3) \\ &:= (a_2b_3 - a_3b_2, a_3b_1 - a_1b_3, a_1b_2 - a_2b_1) \end{aligned} \quad (10.2)$$

である。

外積には、以下のような幾何学的性質がある (ここでは証明はしない):

- 性質 1. $|\mathbf{a} \times \mathbf{b}|$ は、 \mathbf{a}, \mathbf{b} が張る平行四辺形の面積に等しい^{*2}。
- 性質 2. $\mathbf{a} \times \mathbf{b}$ は、 \mathbf{a} と \mathbf{b} の両方に垂直である。
- 性質 3. $\mathbf{a} \times \mathbf{b}$ は、 \mathbf{a} から \mathbf{b} に右ネジをまわすときにネジが進む側にある。
- 性質 4. $\mathbf{a} \times \mathbf{b}$ と $\mathbf{b} \times \mathbf{a}$ は、互いに等しい大きさで逆向きである。すなわち、

$$\mathbf{a} \times \mathbf{b} = -\mathbf{b} \times \mathbf{a} \quad (10.3)$$

- 性質 5. 互いに平行なベクトルどうしの外積はゼロである。特に、同じベクトルどうしの外積はゼロである。すなわち、

$$\mathbf{a} \times \mathbf{a} = \mathbf{0} \quad (10.4)$$

性質 4 は、性質 2, 性質 3 から示すことができる。性質 5 は、性質 1 から示すことができる。

問 136 以下の各場合について、 $\mathbf{a} \times \mathbf{b}$ を求め、 \mathbf{a}, \mathbf{b} の張る平行四辺形の面積を求めよ。

- (1) $\mathbf{a} = (1, 2, 0)$, $\mathbf{b} = (1, 1, -1)$
- (2) $\mathbf{a} = (1, 0, 1)$, $\mathbf{b} = (-1, 1, 2)$

問 137 2つのベクトル:

$$\mathbf{a}(t) = (a_1(t), a_2(t), a_3(t)), \mathbf{b}(t) = (b_1(t), b_2(t), b_3(t))$$

が、ともに変数 t の関数であるとする。次式を示せ (ダッシュは t による微分を表す):

$$(\mathbf{a} \times \mathbf{b})' = \mathbf{a}' \times \mathbf{b} + \mathbf{a} \times \mathbf{b}' \quad (10.5)$$

10.2 角運動量

これからしばらく我々は、物体の回転運動について考察しよう。物体の運動を考察するときのよりどころは、いつも運動の3法則だ。運動の3法則は、様々な運動を統一的に支配・説明する力を持っている。回転運動も、例外ではない。

しかし、回転運動を扱う際は、運動の3法則を直接的に使うよりも、角運動量 という概念 (物理量) を導入する方が、実際上はすっきりして便利である^{*3}。

角運動量の定義

質点の運動量を \mathbf{p} 、質点の位置ベクトルを \mathbf{r} とするとき、位置ベクトルと運動量の 外積、つまり

$$\mathbf{L} = \mathbf{r} \times \mathbf{p} \quad (10.6)$$

を角運動量 (angular momentum) と呼ぶ (図 10.1)。

^{*1} x, y, z の3つの座標軸が互いに直交しており長さのスケールが同じ座標系。まあいわば「普通の座標系」のことである。厳密には、「右手系」という性質を満たす必要がある。そのことは今、理解できなくてもよい。

^{*2} それは $|\mathbf{a}||\mathbf{b}|\sin\theta$ である。ここで、 θ は \mathbf{a}, \mathbf{b} のなす角。

^{*3} この事情は、ちょうど、衝突という現象を扱う際に運動量という概念を導入すると便利であったことに似ている。

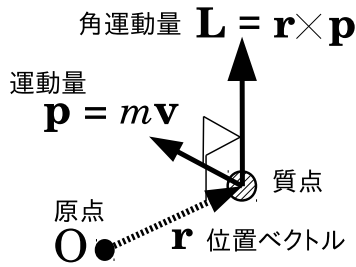


図 10.1 角運動量の定義。 m は質点の質量, \mathbf{v} は質点の速度, \mathbf{r} は質点の位置ベクトル。 $\mathbf{r}, \mathbf{v}, \mathbf{p}, \mathbf{L}$ はいずれもベクトル (だから太字)。 m はスカラー (だから細字)。

よくある間違い 4 $\mathbf{L} = \mathbf{p} \times \mathbf{r}$ と覚えてしまう ... ダメです。外積は順序が逆になると結果が異なる (向きが逆になる) ので, $\mathbf{p} \times \mathbf{r}$ と $\mathbf{r} \times \mathbf{p}$ は違います。

問 138 角運動量の定義を確認しよう。

- (1) 角運動量とは何か?
- (2) 角運動量の SI 単位は?
- (3) 角運動量は, 位置ベクトルと運動量の両方に垂直であることを示せ。

この「角運動量」なる奇妙な物理量がどのように便利なのかは後回しにして, とりあえずいくつかの系の角運動量を考えてみることで角運動量に慣れよう。

問 139 3 次元空間に, 座標軸 (x, y, z 軸; 各軸は互いに直交している) を設定する。 xy 平面上で, 原点を中心とする半径 r の円周上を, 質量 m の質点が角速度 ω で等速円運動している。時刻 $t = 0$ で質点は x 軸上にある。

- (1) 時刻 t のときの質点の位置ベクトル \mathbf{r} は次式になることを示せ。

$$\mathbf{r} = r(\cos \omega t, \sin \omega t, 0) \quad (10.7)$$

(ただし, これと逆向きの回転のことは考えないでしょう。)

- (2) 時刻 t のときの質点の運動量 \mathbf{p} は次式になることを示せ。

$$\mathbf{p} = mr\omega(-\sin \omega t, \cos \omega t, 0) \quad (10.8)$$

- (3) この質点の角運動量 \mathbf{L} は次式になることを示し, 時刻 t によらず一定値であることを確認せよ (図 10.2

参照)。

$$\mathbf{L} = (0, 0, mr^2\omega) \quad (10.9)$$

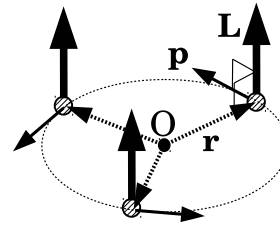


図 10.2 等速円運動する質点の角運動量

この問題の結果から, 原点を中心とする等速円運動をする質点の角運動量は, 時刻によらず一定であることがわかった。

ちなみに角運動量は, 回転以外の運動についても考えることができる。そもそも, 角運動量の定義, つまり式 (10.6) には, 運動が回転であるというような前提は存在しない。

問 140 xyz 空間の中で, 質量 m の質点が, 時刻 t のときに位置ベクトル $\mathbf{r} = (Vt, y_0, 0)$ の位置にいたとしよう。 V と y_0 は定数である。

- (1) この質点の速度 \mathbf{v} を求め, この運動が等速直線運動であることを示せ。
- (2) この質点の運動量 \mathbf{p} を求めよ。
- (3) この質点の角運動量 \mathbf{L} は次式のようになることを示し, 時刻 t によらず一定値であることを確認せよ (図 10.3 参照)。

$$\mathbf{L} = (0, 0, -mVy_0) \quad (10.10)$$

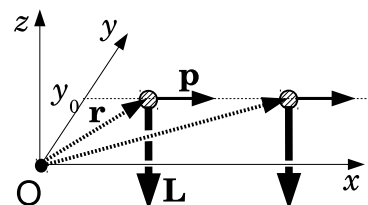


図 10.3 等速直線運動する質点の角運動量

この問題の結果から, 等速直線運動をする質点の角運動量は, 時刻によらず一定であることがわかった。

しかし, ちょっと変な気がしないだろうか? 問 140 では, 式 (10.10) のように, 角運動量が, y_0 に依存した。 y_0 は, 質点が運動する直線 (この場合は x 軸に平行な直線)

が原点からどれだけ離れているかを示す定数である。ということは、角運動量は、同じ運動についても、原点をどこに置くかで、違った値を持つのだ。原点をどこに置くかは人間が勝手に決めることなので、結局、角運動量の値は、人間の恣意的な判断に依存してしまうのだ！

回転運動などを考えるときは、原点は回転の中心に置くのが普通だし便利だが、必ずしもそうでなければならないという必然性は無い。ならば原点の置き方によって変わる角運動量って、何なんだ？ と思うかもしれない。実は、角運動量は、その値だけで意味を持つのではなく、次節に述べる考え方によって意味を持つのだ。そしてこの考え方は、原点の選択には依存しないのだ。つまり、どこに原点を置いてもいいし、その結果として角運動量の値がどのように変わってもかまわないが、それでもなお、以下の話は成り立つのだ^{*4}。

10.3 角運動量保存則

式 (10.6) の両辺を、時刻で微分してみよう。質量 m を一定とすれば、

$$\frac{d}{dt}\mathbf{L} = \frac{d}{dt}(\mathbf{r} \times \mathbf{p}) \quad (10.11)$$

$$= \frac{d}{dt}(m\mathbf{r} \times \mathbf{v}) \quad (10.12)$$

$$= m \frac{d}{dt}(\mathbf{r} \times \mathbf{v}) \quad (10.13)$$

$$= m \left(\frac{d\mathbf{r}}{dt} \times \mathbf{v} + \mathbf{r} \times \frac{d\mathbf{v}}{dt} \right) \quad (10.14)$$

$$= m\mathbf{v} \times \mathbf{v} + m\mathbf{r} \times \frac{d\mathbf{v}}{dt} \quad (10.15)$$

ここで、式 (10.13) から式 (10.14) の変形において、式 (10.5) の性質を使った。

式 (10.15) について第 1 項の $\mathbf{v} \times \mathbf{v}$ は恒等的に $\mathbf{0}$ である（性質 5 より）。従って、式 (10.15) は、

$$m\mathbf{r} \times \frac{d\mathbf{v}}{dt} \quad (10.16)$$

となる。さらに、運動方程式

$$m \frac{d\mathbf{v}}{dt} = \mathbf{F} \quad (10.17)$$

を使うと (\mathbf{F} は質点にかかる力)、式 (10.16) は、

$$\mathbf{r} \times \mathbf{F} \quad (10.18)$$

^{*4} これはちょうど、ポテンシャルエネルギーの値が基準点（原点）のとりかたによって異なる、という事情に似ている。原点のとりかたによってポテンシャルエネルギーは異なっても、ポテンシャルエネルギーの空間微分は保存力に一致するし（式 (9.47)）、力学的エネルギー保存則は成り立つ。

となる。従って、式 (10.11) 左辺から式 (10.15) に至る方程式は、結局、

$$\frac{d}{dt}\mathbf{L} = \mathbf{r} \times \mathbf{F} \quad (10.19)$$

となる。この右辺に現れた物理量には特別な名前が付けられている：

トルク（力のモーメント）の定義

$\mathbf{r} \times \mathbf{F}$ 、つまり位置ベクトルと力の外積のことを、トルク (torque) とか 力のモーメント と呼ぶ。

そして、式 (10.19) が表すのは、

質点に関する角運動量保存則

質点の角運動量の、単位時間あたりの変化は、質点に働くトルクに等しい。

という重要な物理法則である^{*5}。

問 141 式 (10.19) の導出を再現せよ。

この法則を複数の質点に拡張しよう。いま、 n 個の質点が互いに力を及ぼしあいながら運動する状況を考えよう。 k 番目 ($k = 1, 2, \dots, n$) の質点のことを「質点 k 」と呼び、その質量、位置、速度、角運動量をそれぞれ m_k , \mathbf{r}_k , \mathbf{v}_k , \mathbf{L}_k とする。質点 k にかかる力 \mathbf{F}_k は、その他の質点から受ける力（内力）と、それ以外から受ける力（外力）の和である：

$$\mathbf{F}_k = \mathbf{F}_{k1} + \mathbf{F}_{k2} + \dots + \mathbf{F}_{kn} + \mathbf{F}_k^e \quad (10.20)$$

ここで \mathbf{F}_{k1} , \mathbf{F}_{k2} , ... は、それぞれ、質点 1 が質点 k に及ぼす力、質点 2 が質点 k に及ぼす力、... である。質点 k が自分自身に及ぼす力は考えなくてよいので、 \mathbf{F}_{kk} は考えなくてよいのだが、ここでは形式的に残しておいて、そのかわり $\mathbf{F}_{kk} = \mathbf{0}$ としよう。また、 \mathbf{F}_k^e は、外力が質点 k に及ぼす力である。例として、図 10.4 に、3 個の質点からなる質点系に働く力を示す：

さて、質点 k について、式 (10.19)、式 (10.20) を考えると、

$$\frac{d}{dt}\mathbf{L}_k = \mathbf{r}_k \times \mathbf{F}_k \quad (10.21)$$

$$= \mathbf{r}_k \times (\mathbf{F}_{k1} + \mathbf{F}_{k2} + \dots + \mathbf{F}_{kn} + \mathbf{F}_k^e) \quad (10.22)$$

^{*5} ただし、これは導出過程から明らかなように、運動の 3 法則（特に $\mathbf{F} = m\mathbf{a}$ ）から派生する法則なので、基本法則とは言えない。

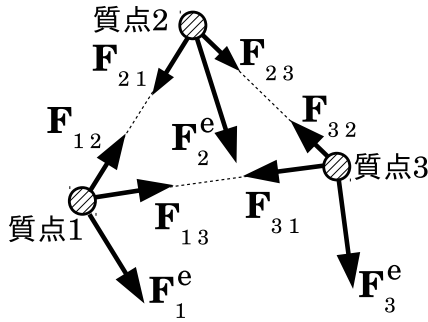


図 10.4 質点系に働く力。この図では内力どうし (F_{12} と F_{21} など) が中心力 (後述) である (同一直線上にある) ことを仮定している。

である。同様の式を、全ての質点に関して考えて、

$$\begin{aligned}\frac{d}{dt}\mathbf{L}_1 &= \mathbf{r}_1 \times (\mathbf{F}_{11} + \mathbf{F}_{12} + \cdots + \mathbf{F}_{1n} + \mathbf{F}_1^e) \\ \frac{d}{dt}\mathbf{L}_2 &= \mathbf{r}_2 \times (\mathbf{F}_{21} + \mathbf{F}_{22} + \cdots + \mathbf{F}_{2n} + \mathbf{F}_2^e) \\ &\vdots \\ \frac{d}{dt}\mathbf{L}_n &= \mathbf{r}_n \times (\mathbf{F}_{n1} + \mathbf{F}_{n2} + \cdots + \mathbf{F}_{nn} + \mathbf{F}_n^e)\end{aligned}$$

これらを辺々足し合わせると、

$$\begin{aligned}\sum_{k=1}^n \frac{d}{dt}\mathbf{L}_k &= \sum_{k=1}^n \mathbf{r}_k \times (\mathbf{F}_{k1} + \mathbf{F}_{k2} + \cdots + \mathbf{F}_{kn}) \\ &\quad + \sum_{k=1}^n \mathbf{r}_k \times \mathbf{F}_k^e\end{aligned}\quad (10.23)$$

この式の右辺の最初の \sum に注目しよう。この和を分解して考えると、その中には、1 以上 n 以下の任意の j, k について ($j \neq k$ とする)、1 つの $\mathbf{r}_j \times \mathbf{F}_{jk}$ と 1 つの $\mathbf{r}_k \times \mathbf{F}_{kj}$ が存在する。これらをひとまとめにすると、

$$\mathbf{r}_j \times \mathbf{F}_{jk} + \mathbf{r}_k \times \mathbf{F}_{kj}\quad (10.24)$$

となる。ところが、作用反作用の法則から、

$$\mathbf{F}_{kj} = -\mathbf{F}_{jk}\quad (10.25)$$

である。従って、式 (10.24) は、以下ようになる：

$$(\mathbf{r}_j - \mathbf{r}_k) \times \mathbf{F}_{jk}\quad (10.26)$$

$\mathbf{r}_j - \mathbf{r}_k$ は質点 k から質点 j へのベクトルである。

ところで、質点どうしが及ぼし合う力が、互いを結んだ直線上にある場合、すなわち互いの方向 (もしくは逆方向) をまっすぐに向いているような場合、そのような力を 中心力 という^{*6}。もし、 \mathbf{F}_{kj} が中心力であると仮定すれば、 $\mathbf{r}_j - \mathbf{r}_k$ と \mathbf{F}_{jk} は互いに平行だから、その外積

は 0 になる (性質 5 より)。従って、式 (10.26) は恒等的に 0 になる。そのことと、 $\mathbf{F}_{kk} = 0$ を使えば、式 (10.23) は、右辺の最初の \sum が 0 になってしまって、

$$\sum_{k=1}^n \frac{d}{dt}\mathbf{L}_k = \sum_{k=1}^n \mathbf{r}_k \times \mathbf{F}_k^e\quad (10.27)$$

となる。ここで左辺の t による微分を \sum の前に出せば、

$$\frac{d}{dt} \sum_{k=1}^n \mathbf{L}_k = \sum_{k=1}^n \mathbf{r}_k \times \mathbf{F}_k^e\quad (10.28)$$

となる。この式は味わい深い。左辺の \sum は全質点の角運動量の和であり、全角運動量という。右辺は、各質点に働く外力によるトルクの和だ。すなわち、以下の法則が成り立つことが証明された：

—— 質点系に関する角運動量保存則 (1) ——

内力が中心力であるような質点系 (質点の集合) については、その全角運動量の、単位時間あたりの変化は、各質点に働く外力によるトルクの総和に等しい。

問 142 式 (10.28) の導出を再現せよ。

ここで、特に、全ての質点が静止していれば、当然ながら全ての k について $\mathbf{L}_k = 0$ が恒等的に成り立つ。従って、そのとき全角運動量 $\sum_{k=1}^n \mathbf{L}_k$ も恒等的に 0 である。従って、それを t で微分したもの (式 (10.28) の左辺) も恒等的に 0 である。従って、式 (10.28) の右辺も恒等的に 0 である：

$$\sum_{k=1}^n \mathbf{r}_k \times \mathbf{F}_k^e = 0\quad (10.29)$$

この式の意味するのは、「内力が中心力であり、静止状態にある質点の集まりでは、外力によるトルクの和は 0」ということだ。物体とは無数の原子や電子 (質点と考えられる) の集まりなので、上の文章の「質点の集まり」は「物体」であっても差し支えない。これが物体の静止状態における、「(力の) モーメントのつりあい」である。その特別な場合が「てこの原理」だ。第 3 章では、仮想仕事の原理から「てこの原理」つまり式 (3.7) を導いたが、このように、運動方程式から導くこともできるのだ^{*7}。

さて、式 (10.28) に戻ろう。こんどは、質点は静止し

^{*6} 重力や静電気力 (クーロン力) は中心力である。

^{*7} 力学の法則は全て運動の法則から導かれるという立場からすると、これはむしろ自然である。不思議なのは、仮想仕事の原理という考えから出発しても、同じ結論が導かれたことである。

ていない (運動している) が, 外力は働かない (内力は中心力だけが働く) ような状況を考えよう。その場合, 式 (10.28) の右辺は 0 だ。従って,

$$\frac{d}{dt} \sum_{k=1}^n \mathbf{L}_k = 0 \quad (10.30)$$

である。この式は, 全角運動量は時刻 t にらず一定である, ということだ。従って, 次の法則が成り立つことがわかった:

—— 質点系に関する角運動量保存則 (2) ——

外力が無く, 内力が中心力である場合は, 全角運動量は時刻によらず一定である。

問 143

- (1) トルクとは何か?
- (2) トルクは, 別名, 何というか?
- (3) トルクの SI 単位は?
- (4) 中心力とは何か?
- (5) モーメントのつりあいとは何か?
- (6) 角運動量保存則とは何か?

問 144 質量 m の質点が 2 つあって, 伸縮可能な軽い棒でつながっている。棒の長さを $2r$ としよう。さて最初は, 棒の長さが一定で, 2 つの質点は棒の真ん中を中心とする等速円運動をしている。そのときの角速度を ω とする。なお, 中心は静止している。質点どうしに働く力は中心力であるとする。

- (1) 1 つの質点の運動量 \mathbf{p} の大きさ $|\mathbf{p}|$ は, $mr\omega$ であることを示せ。
- (2) 1 つの質点の角運動量 \mathbf{L} の大きさ $|\mathbf{L}|$ は, $mr^2\omega$ であることを示せ。
- (3) それぞれの質点の角運動量は, どのような方向を向いているか?
- (4) 全角運動量の大きさは $2mr^2\omega$ であることを示せ。
- (5) 全運動エネルギー (各質点の運動エネルギーの和) T は $T = mr^2\omega^2$ であることを示せ。
- (6) ある時点で, 棒が急に縮んで長さが半分になったとする。角速度はどうなるか?
- (7) そのとき, 運動エネルギーはどうなるか?
- (8) 棒が縮む前と後で運動エネルギーが違うが, それはエネルギー保存則と矛盾しないのだろうか?

10.4 解答

答 136 略 (「大学 1 年生のための数学入門」に同じ問題が載っている。))

答 137 略 (「大学 1 年生のための数学入門」に同じ問題が載っている。))

答 138 (1) 略。(2) \mathbf{r} の SI 単位は m , \mathbf{p} の SI 単位は kg m s^{-1} 。従って, $\mathbf{r} \times \mathbf{p}$ の SI 単位は $\text{kg m}^2 \text{s}^{-1}$ 。注: 外積は単なる「積」ではないが, その定義を見れば, 2 つの物理量の外積の単位は, 元の物理量の単位の積になることがわかるだろう。(3) 外積の性質 2 より, $\mathbf{r} \times \mathbf{p}$ は \mathbf{r} と \mathbf{p} の両方に垂直。

答 139 (1) 題意より, 質点の位置は xy 平面に限定されるので, z 座標は常に 0 である。また, xy 平面内では, 原点から距離 r で x 軸から角度 ωt だけ回転した位置に質点はあるので, その位置は式 (10.7) のようになる。(2) 式 (10.7) を t で微分すると速度になる。それに m をかければ与式を得る。(3) $\mathbf{L} = \mathbf{r} \times \mathbf{p}$

$$\begin{aligned} &= mr^2\omega(\cos\omega t, \sin\omega t, 0) \times (-\sin\omega t, \cos\omega t, 0) \\ &= (0, 0, mr^2\omega) \end{aligned}$$

これは t を含まない式なので, t にらず一定。

答 140 (1)

$$\frac{d}{dt} \mathbf{r} = \frac{d}{dt} (Vt, y_0, 0) = (V, 0, 0)$$

この式は, この質点が x 軸方向に一定の速度で運動することを示している。従って等速直線運動。(2) $\mathbf{p} = m\mathbf{v} = (mV, 0, 0)$ 。(3) $\mathbf{L} = \mathbf{r} \times \mathbf{p} = (Vt, y_0, 0) \times (mV, 0, 0) = (0, 0, -mVy_0)$ 。これは t を含まない式なので, t にらず一定。

答 143 略。トルクの SI 単位は $\text{N m} = \text{kg m}^2 \text{s}^{-2}$ 。なんと, これは J, すなわちエネルギーの単位ではないか! しかし, 書き方の慣習として, トルクは J で書くことはほとんどなく, N m で書くことの方が圧倒的に多い。もちろん J と N m は本質的に全く同じ単位なのだが, あくまで慣習としてである。

答 144 適当に座標をとれば, 1 つの質点の位置は $\mathbf{r} = (r \cos \omega t, r \sin \omega t, 0)$ と書ける。

(1) $\mathbf{p} = m\mathbf{r}' = m(-r\omega \sin \omega t, r\omega \cos \omega t, 0)$ 従って, $|\mathbf{p}| = mr\omega$ 。

$$(2) \mathbf{L} = \mathbf{r} \times \mathbf{p}$$

$$\begin{aligned} &= (r \cos \omega t, r \sin \omega t, 0) \times m(-r\omega \sin \omega t, r\omega \cos \omega t, 0) \\ &= mr^2\omega(\cos \omega t, \sin \omega t, 0) \times (-\sin \omega t, \cos \omega t, 0) \\ &= mr^2\omega(0, 0, \cos^2 \omega t + \sin^2 \omega t) \\ &= mr^2\omega(0, 0, 1) \end{aligned}$$

従って, $|\mathbf{L}| = mr^2\omega$

(3) ともに z 軸の正方向を向いている。

(4) 小問 (2) の解答より, 2 つの質点は, 同じ大きさで同じ向きの角運動量を持っている。従って, 全角運動量の大きさは, 1 つの質点の角運動量の 2 倍, すなわち $2mr^2\omega$ である。

(5) 1 つの質点の運動エネルギーは,

$$\frac{1}{2}mv^2 = \frac{1}{2}m(r\omega)^2 = \frac{mr^2\omega^2}{2}$$

である。全質点の運動エネルギーは, この 2 倍なので, $T = mr^2\omega^2$ となる。

(6) 縮んだ後の角速度を Ω とすると, 小問 (4) と同様に考えれば, 縮んだ後の全角運動量の大きさは

$$2m\left(\frac{r}{2}\right)^2\Omega$$

である。質点系の角運動量保存則より, これは縮む前の全角運動量の大きさに等しいはず (もちろん全角運動量の方向も変わらないはずだが, ここではそれを使う必要はない)。従って,

$$2mr^2\omega = 2m\left(\frac{r}{2}\right)^2\Omega$$

従って, $\Omega = 4\omega$ 。すなわち, 角速度は 4 倍になる。

(7) 縮んだ後の運動エネルギーは, 小問 (5) と同様に考えて

$$m\left(\frac{r}{2}\right)^2\Omega^2 = m\left(\frac{r}{2}\right)^2(4\omega)^2 = 4mr^2\omega^2$$

すなわち, 運動エネルギーは 4 倍になる。

(8) エネルギー保存則によれば, 物体の運動エネルギーは, なされた仕事のぶんだけ増加する。この場合も, 運動エネルギーが増加しているが, それは, 棒が縮む際に, 2 つの質点どうしを近づけるために力が必要だったのであり, その力がなした仕事は, 2 つの質点の回転に関する運動エネルギーを増加させたのである。

10.5 補遺: 熱放射

我々の身の回りは, 光に満ち溢れているが, その光はどこでどのように発生するのだろうか? 例えば太陽, 白熱電球, 蛍光灯, レーザー, 発光ダイオードなどの光源はどのような仕組みで光るのだろうか?

物体を構成する分子や原子は, 前述したように固有エネルギーを持つ。そのエネルギーとは, もとをたどれば, 分子・原子・電子等の持つ運動エネルギーやポテンシャルエネルギーだ。

固有エネルギーは, 低いものから高いものまで, 離散的に (階段状に) 存在する。それらをエネルギー準位と呼ぶ。そして, 個々の分子や原子のエネルギーが, 高い順位から低い順位に移り変わることがある。これを「遷移」と言う。原子や分子が遷移するとき, そのエネルギーの差は, 何らかの形で原子や分子から放出される (でなければエネルギー保存則が成り立たない)。その「何らかの形」のひとつとして光を出すのが, 蛍光灯, レーザー, 発光ダイオード等だ。

太陽や白熱電球も, 結局はそのような仕組みで光るのだが, 他とはちょっと違う。太陽や白熱電球は, 「熱が光に転化する」という仕組みで光るのだ。

先述のように, 物体を構成する粒子は, その温度に応じたエネルギーを, 平均的に持つ。「平均的」ということは, 実際にはそれよりも大きなエネルギーを持つ粒子も多少あれば, それよりも小さなエネルギーを持つ粒子も多少はある。その状況で, 粒子が遷移すると, 光が放出され, 粒子のエネルギーは若干下がる。そしてエネルギーが下がった粒子は周囲の粒子と衝突したり光を吸収したりして, 再びもとのエネルギーに戻る。このようなことが無数に発生することで, その物体から光が出続けるのだ。このような仕組みを「熱放射」と呼ぶ。

実は, 太陽や白熱電球だけでなく, ほとんど全ての物体は, それぞれの温度に応じて熱放射している。例えば, 君の体も熱放射している。君の体も光っているのだ!! ただし, その光は, 人の肉眼で見える光 (可視光) ではなく, 赤外線だ。だから, 赤外線を検知できるセンサーで人体を調べれば, 君の体表面の温度がわかるのだ。赤外線体温計はそれを利用している。また, 夜行性の動物を観察するのに赤外線カメラというものをよく使う (NHK の番組「ダーウィンが来た!」を見よ)。が, それも同じ事だ。動物は体温が高いため, 周囲よりも多くの赤外線を出す。それを検出するのだ。

第11章

慣性モーメント

これまでの質点単体や、複数の質点（質点系）について、運動を考えてきた。この章では、さらに進んで、大きさや形を持つ物体の運動を考えよう。

11.1 剛体というモデル

第1章で述べたように、大きさや形をもつ物体は、質点の集まりとしてモデル化できる。ただし、物体自体の変形（大きさや形が変わること）まで考えると話が複雑になるので、ここでは、

- 物体は質点の集まりで構成される。
- 物体は大きさや形を持つ。
- 物体は変形しない（ひとつの物体を構成する質点どうしの距離は変わらない）。

というようなモデルを考える。このような物体のモデルを **剛体**(rigid body) という。

我々の身の回りの物体の多くは、剛体とみなせる。カーリングストーンや、ボールなどは、これまでは質点とみなしてきたが、その大きさや形が関与する運動（ボールの回転や、それによる軌道の変化等）を考えると剛体として扱わねばならない。例えば地球は、太陽との位置関係を議論するときは質点でよいが、地球の自転の様子を議論するときは剛体とみなさねばならない。

ただし、剛体も、質点ほどではないが、一種の単純化・抽象化されたモデルであり、問題設定によってはそれは不適切なこともある。例えば地球に起きる地震を考えるときは、地球を剛体とみなしてはダメであり、わずかながらも変形する弾性体として扱わねばならない^{*1}。

^{*1} さらに言えば、起きた振動（地震）が減衰して収まることを表現するためには弾性体ではダメで、摩擦も考慮した「粘弾性体」という物体としてモデル化しなければならない。また、物体が変形して元に戻らないことを表現するには、塑性というものも考えねばならず、粘性や弾性も一緒に考慮するには「粘弾塑性体」として考えねばならない。また、水や空気のように流れる性質を持った物体は、「流体」として考えねばならない。このように、扱う物体の性質や運動のスケール、本質的に関与する現象などによって、物体をどのようにモデル化すべきかは様々

さて、ここでは理由は詳述しないが、剛体の運動は、2つの要素にわけて考えることができる。ひとつはその「重心」の運動であり、もうひとつはその重心のまわりの回転運動である（図 11.1）。

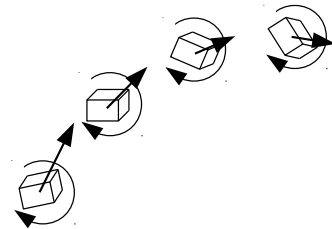


図 11.1 空中に投げられたレンガ。このような剛体の運動は、重心の運動と、重心まわりの回転で表現される。

11.2 剛体の回転運動

ここでは剛体の回転運動について考えよう。

まず、最も単純な場合として、前章の問 144 で見たような、2つの質点がペアになって等速円運動（回転）することを考えよう（図 11.2）：

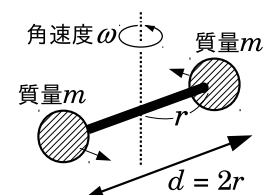


図 11.2 棒でつながれた2つの質点からなる剛体の等速円運動。

2つの質点どうしの距離 d が変わらないとき、この2つの質点からなる質点系は、剛体である。さて、このと

だ。複雑なモデルであればあるほどいいというわけではない。一般に、様々な性質を取り入れれば取り入れるほど、その問題を解くことは難しくなる。従って、本質を失わない範囲で、扱う物体をできるだけ単純なモデルで考える必要がある。

き、各質点の運動の速さ（速度の大きさ） v は、式 (5.36) より

$$v = r\omega \quad (11.1)$$

となる。従って、各質点の運動エネルギーは、式 (6.4) より

$$\frac{1}{2}mv^2 = \frac{1}{2}m(r\omega)^2 = \frac{1}{2}mr^2\omega^2 \quad (11.2)$$

となる。従って、この剛体の運動エネルギー（つまり 2 つの質点の運動エネルギーの和） T は、

$$T = mr^2\omega^2 \quad (11.3)$$

となる。式 (11.2) のように、各質点の（回転運動の）運動エネルギーが角速度の 2 乗に比例するから、式 (11.3) のように、全質点の運動エネルギーの和も角速度の 2 乗に比例する。同様に考えれば、3 個以上の質点がある固定点のまわりを同じ角速度で等速円運動をしている場合についても、その回転による運動エネルギーは角速度の 2 乗に比例すると類推できるだろう。

11.3 慣性モーメント

そこで、一般的に、剛体がある軸のまわりに角速度 ω で回転することを考えよう。剛体を、 n 個の微小な部分に分割し、それぞれを質量 m_1, m_2, \dots, m_n の質点とみなす。回転軸からそれぞれの質点への距離を r_1, r_2, \dots, r_n とする。 k 番目の質点の速さ（速度の大きさ）は $r_k\omega$ だから、 k 番目の質点の運動エネルギー T_k は次式のようになる：

$$T_k = \frac{1}{2}m_k r_k^2 \omega^2 \quad (11.4)$$

全体の回転の運動エネルギー T は、これらの全ての和であり、

$$\begin{aligned} T &= T_1 + T_2 + \dots + T_n \\ &= \frac{1}{2}m_1 r_1^2 \omega^2 + \frac{1}{2}m_2 r_2^2 \omega^2 + \dots + \frac{1}{2}m_n r_n^2 \omega^2 \\ &= \frac{1}{2}(m_1 r_1^2 + m_2 r_2^2 + \dots + m_n r_n^2) \omega^2 \\ &= \frac{1}{2} \left(\sum_{k=1}^n m_k r_k^2 \right) \omega^2 \end{aligned} \quad (11.5)$$

となる。式 (11.5) の $()$ 内を抜き出して以下のように定義する：

慣性モーメントの定義

質量がそれぞれ m_1, m_2, \dots, m_n であるような n 個の質点について、

$$I = \sum_{k=1}^n m_k r_k^2 \quad (11.6)$$

で定義される物理量 I を、慣性モーメント (moment of inertia) もしくは 慣性能率 と呼ぶ。ただし、 r_1, r_2, \dots, r_n は回転軸から各質点までの距離である。

すると、式 (11.5) は以下のように書ける：

$$T = \frac{1}{2} I \omega^2 \quad (11.7)$$

問 145

- (1) 慣性モーメントの定義を述べよ。
- (2) 慣性モーメントの SI 単位は？

問 146 問 144 では、慣性モーメントは $2mr^2$ であることを示せ。

式 (11.7) を、質点の運動エネルギー T の式（式 (6.4) で学んだ）：

$$T = \frac{1}{2}mv^2 \quad (m \text{ は質量, } v \text{ は速度}) \quad (11.8)$$

と比べてみよう。形式的によく似ている。実際、形式的には、式 (11.8) における速度 v と質量 m は、式 (11.7) における角速度 ω と慣性モーメント I に対応する。つまり、形式的に言えば、慣性モーメントとは「回転運動における質量みたいなもの」である*2。質量が物体の「動きにくさ」を表すとしたら、慣性モーメントは物体の「回りにくさ」を表す、と言ってもよからう*3。

問 147 半径 r の円周上に、質量 m の質点が 3 個、等間隔に並んで互いに固定されている（図 11.3）。このとき、円の中心を貫く垂線を軸とする回転の慣性モーメント I は？

問 148 半径 r の円周上に、質量 m の質点が n 個、

*2 注意：同じ物体についても、回転軸の位置や向きが違えば慣性モーメントも違う。ここでは深入りしないが、一般的に、物体の慣性モーメントを任意の回転軸に関して完全に表現するには、行列（テンソル）を使う必要がある。何のこともよくわからぬ、という人は、とりあえず「ふーん...」と思っておいってください。

*3 もちろん、既に動いている物体については、むしろ質量は「止まりにくさ」であり、慣性モーメントは「回転の止まりにくさ」である。

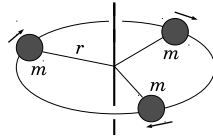
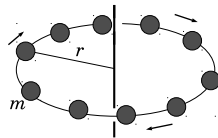


図 11.3 3 個の質点の回転

等間隔に並んで互いに固定されている (図 11.4)。このとき、円の中心を貫く垂線を軸とする回転の慣性モーメント I は?

図 11.4 n 個の質点の回転

問 149 前問で、質量の合計、すなわち nm を M としよう。 M を一定として m を小さくしながら n を無数に増やせば、これは質量 M の円環になるだろう。そのように考えて、半径 r の円環 (太さは無視できるほど小さいとする) の慣性モーメントは

$$I = Mr^2 \quad (11.9)$$

となることを示せ (図 11.5)。

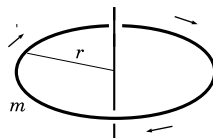


図 11.5 円環の回転

問 150 密度 ρ 、厚さ b の鉄板でできた、半径 r 、幅 Δr の円環盤について、中心を貫く垂線を軸とする回転の慣性モーメント ΔI は、

$$\Delta I = 2\pi \rho b r^3 \Delta r \quad (11.10)$$

であることを示せ (図 11.6)。ただし Δr は r に較べて十分に小さいものとする。ヒント: Δr が十分に小さいから円環盤は円環とみなせる。また、円環盤の質量は、 $2\pi r \rho b \Delta r$ である。

問 151 密度 ρ 、厚さ b の鉄板でできた、半径 r の円盤について (図 11.7)、中心を貫く垂線を軸とする回転の

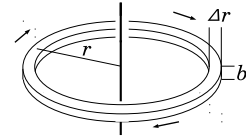


図 11.6 円環盤の回転

慣性モーメント I は、

$$I = \frac{\pi \rho b r^4}{2} \quad (11.11)$$

となることを示せ。ヒント: 円盤は円環盤のあつまりとみなして、前問の結果を様々な r について適用して足しあわせる。 Δr を十分小さくすれば、足し合わせは積分になる。

また、この円盤の質量を M とすると、

$$I = \frac{Mr^2}{2} \quad (11.12)$$

となることを示せ。これは、同じ質量と半径を持つ円環の何倍か?

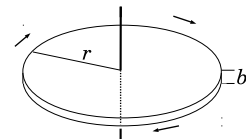


図 11.7 円盤の回転

上の慣性モーメントの計算法をもう少し一般化しよう。任意の形状の連続的な剛体 V について、それがひとつの軸の回りに回転することを考える。回転軸を z 軸とし、それに直交するように x 軸と y 軸を設定しよう。剛体 V を x 軸、 y 軸、 z 軸に沿ってメッシュ状に分割し、横 Δx_i 、縦 Δy_j 、高さ Δz_k の小さな直方体 (その中心の座標を (x_i, y_j, z_k) とする。 i, j, k は整数) のあつまりとみなす。個々の部分の体積は $\Delta x_i \Delta y_j \Delta z_k$ となり、その質量は $\rho \Delta x_i \Delta y_j \Delta z_k$ となる (ρ は密度)。

さて、回転軸 (z 軸) からの距離 r_{ijk} の二乗は、

$$r_{ijk}^2 = x_i^2 + y_j^2 \quad (11.13)$$

となる (z_k^2 は入らないことに注意せよ!)。すると慣性モーメント I は、式 (11.6) より、

$$I = \sum_i \sum_j \sum_k \rho (x_i^2 + y_j^2) \Delta x_i \Delta y_j \Delta z_k \quad (11.14)$$

となる。ここで $\Delta x_i, \Delta y_j, \Delta z_k$ を限りなく小さくする

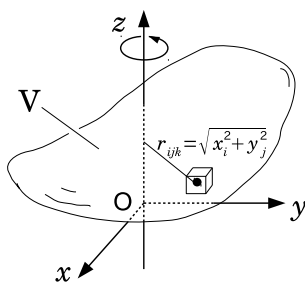


図 11.8 連続的な剛体の回転

と、それぞれの和は積分に置き換えられ、次式のようになる:

—— 連続的な剛体の慣性モーメントの定義 ——

$$I = \iiint_V \rho (x^2 + y^2) dx dy dz \quad (11.15)$$

この積分は「体積分」であり（わからない人は数学の教科書を参照せよ）、積分区間は、剛体 V の隅から隅までである。

問 152 上の式 (11.14) や式 (11.15) において、カッコの中（つまり r^2 ）が $x^2 + y^2 + z^2$ でないのはなぜか？（ z^2 を入れてはいけないのはなぜか？）

問 153 問 151 で扱ったのと同じ円盤について、ある直径を軸とする回転の慣性モーメント（図 11.9）が次式のようになることを示せ。

$$I = \frac{Mr^2}{4} \quad (11.16)$$

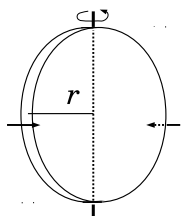


図 11.9 円盤の回転。ただし縦回転。

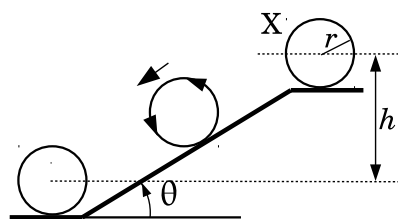
式 (11.12) と式 (11.16) を比べればわかるように、同じ物体であっても、回転軸をどのように設定するかによって、慣性モーメントは異なる値をとる。ここでは詳述しないが、互いに直交する 3 つの回転軸を適切に定めてそれらのまわりの慣性モーメントを求めれば、それ

をもとに、どんな方向の回転軸についても慣性モーメントを自動的に計算することができる。数学的には、その「適切な 3 つの回転軸」と「そのまわりの慣性モーメント」を求めることは、行列（対称行列）の固有ベクトルと固有値を求めることに対応する。興味のある人は、しっかりした力学の教科書を参照してみよう。

慣性モーメントは、農業機械の設計などで重要だ。耕運機は、どのような形・質量のロータリーを搭載するかで大きく性能が決まるが、そのロータリーを駆動するのにどのくらいの出力のエンジンが必要か、などという判断は、慣性モーメントを含む力学的見地からの設計にかかっている。出力の大きなエンジンならどんな慣性モーメントを持つロータリーも動かせるが、その反面、重くなるので操作性が悪くなるし、燃費も悪くなる。

大きな慣性モーメントを持つ物体、例えば大きな鉄の円盤などが回転すると、大きな運動エネルギーを持つ。これは、エネルギーの貯蔵装置として利用できる。例えば太陽光や風力などの不安定なエネルギー源でも、エネルギーが得られるときには大きな鉄円盤を回すことができる。いったんまわり始めた鉄円盤は、角運動量保存則でまわり続けるので、エネルギーが欲しいときに鉄円盤の回転で発電機を回してエネルギーを取り出すことができる。このようなエネルギー貯蔵装置をフライホイールと呼ぶ。

問 154 傾斜 θ 、高さ h の坂の上から、半径 r 、質量 M 、慣性モーメント I の丸い物体 X を転がそう（図 11.10）。坂と物体の間に摩擦は生じないものとする。重力加速度を g とする。

図 11.10 斜面を転がり下る丸い物体 X 。

- (1) X のポテンシャルエネルギーを U とする。 X が坂の下にあるとき $U = 0$ とする。 X が坂の上にあるときの U は？ ただし、一般的に、一様な外力（重力など）による剛体（変形しない物体）のポテンシャルエネルギーは、質量が全て重心（この場合は X の

中心) に集中すると仮想したときの質点のポテンシャルエネルギーに等しいことがわかっている。

- (2) X は坂の上から初速度 0 で転がり出す。X が転がり出したとき (速度は 0) の力学的エネルギー E_0 は?
- (3) X が坂の下まで到達したとき、重心 (X の中心) の速度は v 、回転の角速度は ω であった。このとき、

$$v = r\omega \quad (11.17)$$

が成り立つことを示せ。ヒント：ごく短い時間間隔 Δt の間 (v や ω が一定とみなせるくらいに短い時間間隔) に、X は $r\omega\Delta t$ だけ進む。

- (4) X が坂の下まで到達したとき、X の力学的エネルギー E_1 は、

$$E_1 = \frac{Mv^2}{2} + \frac{I\omega^2}{2} \quad (11.18)$$

となることを示せ。ただし、運動エネルギーは重心の運動エネルギー (全質量が重心に集中した仮想的な質点の運動エネルギー) と重心まわりの回転の運動エネルギーの和であることがわかっている。

- (5) 力学的エネルギー保存則 ($E_0 = E_1$) から、以下の式を導け：

$$Mgh = \frac{Mv^2}{2} + \frac{I\omega^2}{2} \quad (11.19)$$

- (6) (3) で得た関係と前問から、以下の式を導け：

$$2gh = v^2 \left(1 + \frac{I}{Mr^2} \right) \quad (11.20)$$

- (7) 前問から、以下の式を導け：

$$v = \sqrt{\frac{2gh}{1 + I/(Mr^2)}} \quad (11.21)$$

- (8) 慣性モーメント I が 0 の場合、 $v = \sqrt{2gh}$ となることを示せ。これは質量 M の質点が坂を滑り降りる時の速度に等しい。
- (9) X が、質量 M が縁に集中している円環の場合、 $v = \sqrt{gh}$ となることを示せ。
- (10) X が、質量 M が一様に分布している円盤の場合、 v はどうなるか?

問 155 坂の上から、同じ半径の 2 つの鉄球を転がす。鉄球 A は、内部が空洞であり、鉄球 B は、内部までびっちり鉄が詰まっている。どちらが速く転がるか? 理由も述べよ。

11.4 分子の運動と慣性モーメント

慣性モーメントは化学でも重要だ。多原子分子は、温度に応じて、並進と振動と回転という 3 種類の運動をする^{*4}。この回転運動の性質を解析することで、分子の様子を調べることができる。

例として、質量 m の原子 2 個からなる 2 原子分子を考える。原子間の距離を d とする。重心は原子どうしの中点にある。2 つの原子を結ぶ直線に垂直で重心を通るひとつの直線を軸とする、回転運動を考える (図 11.11)。重心から各原子までの距離を r とする。当然、 $d = 2r$ だ。

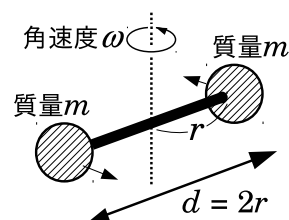


図 11.11 2 原子分子の回転。

P.75 で学んだエネルギー等分配則によれば、一般に、絶対温度 T の気体の 1 分子は、ひとつの自由度につき、 $k_B T/2$ という運動エネルギーを平均的に持つ。今考えている回転運動も 1 つの自由度を持った運動といえるので、この回転に関する平均的な運動エネルギー K は、

$$K = \frac{1}{2} k_B T \quad (11.22)$$

である^{*5}。一方、この原子の慣性モーメント I は、問 146 より、 $I = 2mr^2$ だ。従って、次式が成り立つ：

$$K = \frac{1}{2} I \omega^2 = mr^2 \omega^2 \quad (11.23)$$

問 156 この 2 原子分子について、

- (1) 次式を示せ：

$$\omega = \frac{1}{r} \sqrt{\frac{k_B T}{2m}} \quad (11.24)$$

- (2) 窒素原子 ^{14}N と ^{15}N の質量をそれぞれ m_1 , m_2 とする。これらを求めよ。
- (3) 窒素分子の原子間距離は、 $d = 0.11 \text{ nm}$ である。常温 (300 K) における、 $^{14}\text{N}_2$ 分子の回転の角速度 ω_1

^{*4} ただし常温では、振動運動は熱にあまり関係しない。

^{*5} これまで運動エネルギーは T で表すことが多かったが、この問題では T は温度を表すので、それとの混乱を避けるために、運動エネルギーを K と書いた。

と, $^{15}\text{N}_2$ 分子の回転の角速度 ω_1 を調べよ。両者にはどのくらいの差があるか?

諸君は、元素の同位体は化学的特性が同じなので、化学的に分別することは難しいと習っただろう。しかし、この問題でわかるように、異なる同位体は、同じ温度のもとでも異なる回転速度を持つ。ちなみに、この問題で扱った方法は、ニュートン力学に基づくものであり、古典的と言われる。実際は、分子の回転運動をこのように古典的に扱うことは適当ではなく、量子力学を使わねばならない。その違いを手短かに言うと、量子力学的な扱いでは、回転運動の角速度という概念は意味を持たない。そのかわりに、角運動量をもとに理論を組み立てる。その際、古典的な意味での角運動量では考えられないようなことが起きる。しかし、このような古典的な扱いでも、いろんなことがわかるし、量子力学的な扱いをするときに考え方の出発点となる。

11.5 剛体振り子

2 学期の「物理学実験」では、振り子を利用して重力加速度を測る実験が行われる。そこでは、問 133 で学んだ、糸に質点がつるされた振り子でなく、剛体の振り子を使う。ここではその予習をしておこう。

問 157 質量 M の剛体に穴が開けられ、その穴に軸を通して、その軸が定点 P に固定されている (図 11.12)。剛体は軸のまわりに自由に回転することができる。軸のまわりの回転の慣性モーメントを I とする。剛体の重心を G とする。 P から G の距離は l である。 G が最も下に来たときの位置を O とする。剛体を少し持ち上げて静かに手放すと、重心 G は鉛直平面内で振動運動をする。時刻 t における重心の位置を $G(t)$ とし、角 OPG を $\theta(t)$ としよう。空気抵抗は無視する。

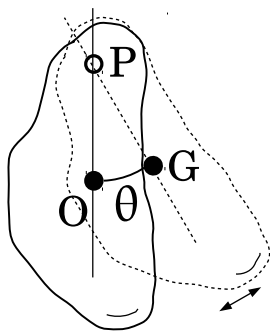


図 11.12 剛体振り子。

- (1) 時刻 t における剛体の運動エネルギー $T(t)$ は次のようになることを示せ:

$$T(t) = \frac{1}{2} I \left(\frac{d\theta}{dt} \right)^2 \quad (11.25)$$

- (2) 時刻 t におけるこの剛体のポテンシャルエネルギー $U(t)$ は次のようになることを示せ。

$$U(t) = M g l (1 - \cos \theta) \quad (11.26)$$

ただし、 G が点 O にあるとき $U = 0$ と定める。

- (3) 力学的エネルギー保存則から、次式 (剛体振り子の運動をあらわす方程式) を得よ:

$$I \frac{d^2 \theta}{dt^2} = -M g l \sin \theta \quad (11.27)$$

- (4) ここで「等価振り子の長さ」というものを、

$$\bar{l} = \frac{I}{M l} \quad (11.28)$$

と定義し、 \bar{l} を使って上の方程式を書き換えると、質点の振り子の方程式 (式 (9.35)) と同じ形

$$\frac{d^2 \theta}{dt^2} = -\frac{g}{\bar{l}} \sin \theta \quad (11.29)$$

となることを示せ。

- (5) 角 θ が十分に 0 に近い範囲で変化するならば、式 (11.29) は次のように近似できることを示せ:

$$\frac{d^2 \theta}{dt^2} = -\frac{g}{\bar{l}} \theta \quad (11.30)$$

- (6) 上の方程式について、 $\theta = \theta_0 \cos \omega t$ という式を仮定して代入し、振動の角速度 ω を求め、振動の周期 T が次式のようになることを示せ:

$$T = 2\pi \sqrt{\frac{\bar{l}}{g}} \quad (11.31)$$

- (7) 次式を導け (これは「物理学実験」テキストのテーマ 3 の (2) 式と同じ):

$$g = \left(\frac{2\pi}{T} \right)^2 \bar{l} \quad (11.32)$$

慣性モーメント I は、剛体の回転運動の運動エネルギーを式 (11.7) のように表すために定義された。しかし、慣性モーメントの効用は、もうひとつある: 理由は詳述しないが、剛体の角運動量の大きさ L は、

$$L = I \omega \quad (11.33)$$

と表すことができる*6。

問 158 2011 年 3 月に発生した、東北太平洋沖地震の後、地球の自転周期が 1.8 マイクロ秒だけ短くなった（自転が早くなった）ことが観測された。この現象を慣性モーメントの考え方を使って定性的に説明せよ。

よくある質問 87 私はクラシック・バレエをやっています。バレエでも、フィギュアスケートで言うスピンと同じことを地表で行い（踊り）ますが、腕をうまくタイミング良く体の中心に引き寄せると速く且つ安定して回れます。… これは問 158 と同じ原理です。回転現象は本当に不思議ですね。

よくある質問 88 物体の運動をここまで数式で予測できるなんて凄いです、実際に自分では思いつける気がしません。やはり私に物理は無理って感じです… 大丈夫。ここまで物理学が発展するのに何千年間もかかったのです。20 歳くらいの若者がすぐに理解したり思いつけるようなものではありません。先人の業績をもとに、真理を謙虚に学べばそれでよいのです。

11.6 解答

答 145 (1) 略。(2) 式 (11.6) より、 I の単位は $m_k r_k^2$ の単位なので、 kg m^2

答 146 式 (11.6) で $n = 2$, $r_1 = r_2 = r$, $m_1 = m_2 = m$ とすればよい。 $I = m r^2 + m r^2 = 2m r^2$

答 147 式 (11.6) で $n = 3$, $r_k = r$, $m_k = m$ とすればよい。 $I = 3m r^2$

答 148 式 (11.6) で、 $r_k = r$, $m_k = m$ とすればよい。 $I = nm r^2$

答 149 前問で $nm = M$ とすれば与式を得る。

答 150 円環盤も円環の一種だ。この円環盤をどこか 1 箇所まで切ってまっすぐに伸ばしたら、断面積は $b\Delta r$ 、長さは $2\pi r$ の鉄棒になる。その体積は $2\pi br\Delta r$ 。密度が ρ なので、質量は $2\pi\rho br\Delta r$ 。これを M として式 (11.9) に代入すると与式を得る（ただしここでは慣性モーメント

を I でなく ΔI と書いていることに注意）。

答 151 円盤を Δr の幅の n 個の円環盤に分割し、式 (11.10) で与えられる各円環盤の慣性モーメントを足し合わせると、円盤の慣性モーメント I になるはずだ。すなわち、次式のように書ける：

$$I = \sum_{k=1}^n 2\pi\rho b r_k^3 \Delta r \quad (11.35)$$

ここで r_k は k 番目の円環盤の半径である。分割をどんどん細かくして Δr を十分に 0 に近づけ、円環の数をどんどん増やすならば、この式は次式ようになる：

$$I = \int_0^R 2\pi\rho b r^3 dr \quad (11.36)$$

ここで R は円盤の半径である。この積分を実行すると、 $I = \pi\rho b R^4/2$ 。ここで改めて R を r に置き換えると、式 (11.11) を得る。ところで、この円盤の質量 M は、 $M = \pi\rho b r^2$ なので、式 (11.11) より $I = M r^2/2$ となり、式 (11.12) を得る。これは同質量の円環の慣性モーメント、つまり式 (11.9) の半分である。

答 152 慣性モーメントの本来の定義、つまり式 (11.6) では、 r_k は原点からの距離ではなく、回転軸からの距離だった。連続的な剛体に関する慣性モーメントも事情は同じだ。従って、剛体の各部分について、 r として原点からの距離つまり $\sqrt{x^2 + y^2 + z^2}$ ではなく、回転軸 (z 軸) からの距離つまり $\sqrt{x^2 + y^2}$ を考えねばならない。

答 153 回転軸を z 軸、それに直交して円盤の直径方向に x 軸、厚さ方向に y 軸をとる。円盤の中心を原点とする。円盤の厚さを b とする。密度を ρ とする。円盤上の点 (x, y, z) と z 軸との距離は $\sqrt{x^2 + y^2}$ だ。慣性モーメント I は、式 (11.15) より

$$I = \int_{-r}^r \int_{-b/2}^{b/2} \int_{-\sqrt{r^2-z^2}}^{\sqrt{r^2-z^2}} \rho(x^2 + y^2) dx dy dz$$

である。ここで円盤が十分に薄いとなれば、 $x^2 + y^2 \doteq x^2$ であり、その近似のもとに、 y について先に積分すれば、

$$I = b \int_{-r}^r \int_{-\sqrt{r^2-z^2}}^{\sqrt{r^2-z^2}} \rho x^2 dx dz \quad (11.37)$$

となる。これを x について積分すれば、

$$I = b \int_{-r}^r \left[\rho \frac{x^3}{3} \right]_{-\sqrt{r^2-z^2}}^{\sqrt{r^2-z^2}} dz = \frac{2b\rho}{3} \int_{-r}^r (r^2 - z^2)^{3/2} dz$$

*6 以下、参考までに述べておく（今は理解できなくてもよい）。式 (11.33) は、実はベクトルの方程式に拡張できるのだ。すなわち、角運動量は本来はベクトルなので \mathbf{L} と表そう。角速度は、回転軸の方向を向いているベクトル量とみなすことができ、それを $\boldsymbol{\omega}$ とおこう。慣性モーメントは、先述のように、実は行列で表現できる。それを改めて I とおこう。すると、式 (11.33) は、

$$\mathbf{L} = I\boldsymbol{\omega} \quad (11.34)$$

となるのだ。

となる。この被積分関数は z に関する偶関数だから、

$$I = \frac{4b\rho}{3} \int_0^r (r^2 - z^2)^{3/2} dz \quad (11.38)$$

となる。ここで $z = r \sin \theta$ と置換すると (置換積分), $dz = r \cos \theta d\theta$ であり, 積分区間は $0 \leq \theta \leq \pi/2$ であり, 被積分関数は $(r^2 - z^2)^{3/2} = (r^2 - r^2 \sin^2 \theta)^{3/2} = \{r^2(1 - \sin^2 \theta)\}^{3/2} = (r^2 \cos^2 \theta)^{3/2} = r^3 \cos^3 \theta$. 従って, $I =$

$$\frac{4b\rho}{3} \int_0^{\pi/2} r^3 \cos^3 \theta r \cos \theta d\theta = \frac{4br^4\rho}{3} \int_0^{\pi/2} \cos^4 \theta d\theta$$

ところで, オイラーの公式から,

$$\begin{aligned} \cos^4 \theta &= \left(\frac{e^{i\theta} + e^{-i\theta}}{2} \right)^4 \\ &= \frac{e^{4i\theta} + 4e^{2i\theta} + 6 + 4e^{-2i\theta} + e^{-4i\theta}}{16} \\ &= \frac{e^{4i\theta} + e^{-4i\theta}}{16} + \frac{e^{2i\theta} + e^{-2i\theta}}{4} + \frac{3}{8} \\ &= \frac{\cos 4\theta}{8} + \frac{\cos 2\theta}{2} + \frac{3}{8} \end{aligned} \quad (11.39)$$

従って,

$$\begin{aligned} I &= \frac{4br^4\rho}{3} \int_0^{\pi/2} \left(\frac{\cos 4\theta}{8} + \frac{\cos 2\theta}{2} + \frac{3}{8} \right) d\theta \\ &= \frac{4br^4\rho}{3} \left[\frac{\sin 4\theta}{32} + \frac{\sin 2\theta}{4} + \frac{3\theta}{8} \right]_0^{\pi/2} \\ &= \frac{4br^4\rho}{3} \frac{3\pi}{16} = \frac{\pi br^4\rho}{4} = \frac{Mr^2}{4} \end{aligned} \quad (11.40)$$

ここで, $M = \pi br^2\rho$ を使った。

答 154 (1) $U = Mgh$. (2) 速度が 0 なので, 運動エネルギーは 0. 従って力学的エネルギー E_0 はポテンシャルエネルギー U だけだ. (1) より, $E_0 = Mgh$ (3) $rw\Delta t/\Delta t = rw$ (4) 重心の運動エネルギーは, $Mv^2/2$ であり, 回転の運動エネルギーは $I\omega^2/2$ である。これらを足すと, 与式を得る. (5) (1) と (4) より, 与式を得る. (6) 前小問の式に (3) の結果を代入して v を消すと,

$$Mgh = \frac{Mr^2\omega^2}{2} + \frac{I\omega^2}{2} \quad (11.41)$$

となる。両辺を 2 倍して M で割ると, 与式を得る. (7) 略 (式 (11.20) を $v =$ の形に式変形すればよい). (8) 略 (式 (11.21) に $I = 0$ を代入するだけ). (9) 式 (11.9) を式 (11.21) に代入して与式を得る. (10) 式 (11.12) を式 (11.21) に代入して, $v = \sqrt{4gh/3}$

答 155 式 (11.21) より, 慣性モーメント I と質量 M の比 (I/M) が小さいほど転がる速さは大きい. I/M は,

質量が回転軸に近い部分に集中するほど小さい。鉄球 A は内部が空洞なので, 質量は回転軸から遠い部分に分布するが, 鉄球 B は質量が回転軸に近いところにも (鉄球 A に比べると) 多く分布する。従って, I/M は鉄球 B の方が小さい。従って, 鉄球 B の方が速く転がる。

答 156 略. (3) は $10^{12}/s \sim 10^{13}/s$ 程度の量になる。

答 157 (1) 剛体の振動運動は, ごく短い時間を切り出して考えれば, 軸を中心とする回転運動の一部とみなすことができる。その角速度 ω は, 単位時間あたりに変化する角なので, θ を時刻 t で微分したものに等しい。従って, $\omega = d\theta/dt$ である。これを式 (11.7) に代入して, 与式を得る. (2) 剛体の (重力による) ポテンシャルエネルギーは, 基準点からの重心の高さと全質量, そして重力加速度をかけたものに等しい。題意より, 定点 (軸の位置) P から原点 O までの距離は l である。P から重心 G までの距離も l だが, 剛体が角 θ だけ傾いているときは, P と G の高さの差は, $l \cos \theta$ となる。従って, 原点 O と重心 G の高さの差は $l - l \cos \theta$ となる。従って, ポテンシャルエネルギーは与式ようになる. (3) 力学的エネルギー保存則より, $T(t) + U(t)$ は時刻によらず定数である。従って, $T(t) + U(t)$ を t で微分したら恒等的に 0 になる。従って,

$$\begin{aligned} &\frac{d}{dt}\{T(t) + U(t)\} \\ &= \frac{d}{dt}\left\{\frac{1}{2}I\left(\frac{d\theta}{dt}\right)^2 + Mgl(1 - \cos \theta)\right\} \\ &= I\left(\frac{d\theta}{dt}\right)\left(\frac{d^2\theta}{dt^2}\right) + Mgl \sin \theta \frac{d\theta}{dt} = 0 \end{aligned}$$

この式から与式を得る. (4) 略 (式 (11.28) を使って式 (11.27) から I を消去すると式 (11.29) を得る). (5) $\sin \theta = \theta$ と近似すれば与式を得る. (6) 注: 以下の ω は (1) で出てきた ω とは別物である。 $\theta = \theta_0 \cos \omega t$ を式 (11.30) に代入すると,

$$-\omega^2 \theta_0 \cos \omega t = -\frac{g}{l} \theta_0 \cos \omega t \quad (11.42)$$

となる。これが全ての t について成り立つから, $\omega^2 = g/l$. 振動の周期 T は, $T = 2\pi/\omega$ より, 与式を得る. (7) 式 (11.31) を $g =$ の形に式変形すれば与式を得る。

答 158 地球の角運動量 L は一定なので, 自転の角速度 ω が大きくなったということは, 式 (11.33) より, 自転軸まわりの地球の慣性モーメント I が小さくなっているはず。おそらく, 地震に伴う地殻変動によって地球がわずかに変形し, I がわずかに小さくなったと考えられる。

第12章

慣性系と慣性力

車がカーブする時には搭乗者は回転の外側にひっぱられる力を感じる。エレベーターが動き始めたり止まったりするときに、中にいる人は身体が重くなったり軽くなったり感じる。このような力を慣性力という。慣性力は、地球の気象を司る「コリオリ力」の源であり、農業機械の自動運転に欠かせない「慣性計測装置」の原理でもある。この章では、慣性力について学ぼう。

12.1 慣性系と慣性の法則

質点の位置 (x, y, z) とは、どこかにある「原点」 $(0, 0, 0)$ と、どちらかに向かう座標軸 (x 軸, y 軸, z 軸) の組み合わせ、つまり座標系を定めることによって初めて定量的に定まる概念だ。つまり、座標系が無ければ位置は定まらない。位置の (時刻による) 微分が速度であり、速度の (時刻による) 微分が加速度なのだから、位置が定まらなければ速度も加速度も定まらない。加速度が定まらねば運動方程式は意味を持たない。すなわち、座標系が無ければ運動の法則も無いのだ。

では、「座標系」というのは、どのようにして与えられるのだろうか？ 例えばつくば市のどこかの地点を「原点」と定めて、そこから東西南北と上下に座標軸を張れば、それはひとつの座標系だが、それ以外にも座標系はあり得る。ハワイやフランクフルトあたりに原点を置くこともできるだろう。あるいはつくばエクスプレスの、走行中の快速電車の先頭車両の真ん中に原点を定めて、進行方向に x 軸、右方向に y 軸、などと定めることもできるだろう。そんなのありか!?と思うかもしれないが、座標系は静止していなくてもよいのだ。そもそも「静止」という考え方が、何か特定の座標系を基準にしたときにのみ成り立つ概念であり、どれかの座標系で見れば静止している質点も、別の座標系で見れば動いている、ということは十分にありえるのだ。

そういうわけで、座標系の与え方には任意性があるし、座標系の与え方によって運動の様子も違って見える。実は、我々がこれまで学んだ「運動の3法則」が成り立つ

ように見えるのは、そのような多種多様な座標系の中でも一部の、特別な座標系である。そのような座標系を、慣性系という。

よくある質問 89 えっ!? 運動の3法則が成り立たないなんてことがあるのですか!? なら運動の3法則は「基本法則」とは言えないじゃないですか! ... 運動の3法則は、「慣性系で考える」ことが前提条件です。慣性系でない座標系で運動の3法則が成り立たないことがあっても、それは運動の3法則が不完全であるとか、間違っているとか、普遍性に欠けるということではなく、単に前提条件を満たしていないだけです。

よくある質問 90 でも運動の3法則には、「慣性系で考えるなら...」みたいな前提条件は無かったように思いますが... いえ、ちゃんと入っていますよ。第1法則、つまり「慣性の法則」がそれです。「前提条件」でなく「法則」という形で入っているので読み取りにくいですけどね。もう少しこの続きを読んでみて下さい。

実は、運動の3法則の中でも、慣性の法則が成り立つかどうかが鍵である。つまり、

慣性系の定義

「力がつりあっていれば、質点が等速直線運動をする」ように見える座標系、つまり、慣性の法則が成り立つ座標系を 慣性系 という。

後に示すように、慣性の法則が成り立たない座標系も存在する。それを 非慣性系 という。

慣性の法則は、この世の中には、どこかに慣性系が存在する、ということを保証する法則なのだ。つまり、「力がつりあっていれば、質点が等速直線運動をする」ように見える座標系が、この世のどこかに必ず存在する、というのが、慣性の法則の本当の意味（物理学における位置づけ）なのだ。そして、そういう座標系で見れば、あとの2つの法則（運動方程式・作用反作用の法則）も成り立つよ、ということを言っているのだ。そういう意味

で、慣性の法則は、運動の 3 法則の「舞台」を設定する法則だと言えよう。

12.2 複数の慣性系

君は幼いころ、「走っている電車の中でジャンプしたら、自分が空中にいる間に電車が進むから、自分は電車の後ろのほうに着地するんじゃないか?」と思わなかっただろうか? 実際に試すと、そうはならない。等速で走る電車の中では、ジャンプしても、あたかも電車が動いていないときと同じように、飛び上がったときと同じ場所に着地する。不思議なことだ。

電車の外にいる人から見れば、君はジャンプする直前まで、電車と同じ速度で水平に動いている。そこで君が電車内でジャンプすれば、確かに君は電車内の空中に浮くのだが、君の体は単に垂直方向に上がって下がるのではなく、同時に水平方向にも動いている。その結果、君の体の軌跡は、斜めに投げ上げられたボールと同じように放物線を描く。で、君が着地するとき、電車の床も同じタイミングでそこに来ている、というわけだ。

このように、電車の中で起きていることを電車の外で見れば、違って見えるのだが、それらはそれぞれでつつまが合っており、いずれも運動方程式で説明できる。電車の中での立場（電車とともに動く座標系）では、君の体は鉛直の投げ上げの運動として運動方程式を満たすのであり、電車の外の立場（地面に貼り付いてる、動かない座標系）では、君の体は斜めの投げ上げの運動として運動方程式を満たすのだ。

このように、ひとつの物理現象が、異なる座標系で見れば互いに違って見えるかもしれないが、いずれの見え方も、運動方程式を満たすことがある。それは、それぞれの座標が慣性系である場合だ。この例では、電車の外の座標系（地面に貼り付いた座標系）と電車の中の座標系（電車の床かどこかに貼り付いた座標系）がそれぞれで慣性系である、ということだ。

よくある質問 91 えっ!? 慣性系ってひとつじゃないんですか? ... 違います。慣性系はたくさんあります。非慣性系もたくさんあります。

では、どのような座標系が慣性系なのだろうか? 答えを先に言ってしまうと、「ある慣性系に対して、別の座標系が、座標軸の向きを変えずに、原点が等速直線運動をするならば、その座標系も慣性系である」ということが理論的に証明できる。例えば、地面に貼り付いた座標系は慣性系であり（厳密な意味では違ふのだが今はそう

だとする）、地面から見て等速直線運動をしている電車内に原点と座標軸が貼り付いた座標系は上の条件を満たすので、それも慣性系である。

では、その証明をしよう。まず、ある慣性系 O を考える（その存在は慣性の法則で保証されている）。いま、 O とは別の座標系 O' が存在し、 O から見て O' の原点は、当初（つまり時刻 $t = 0$ で）、 (p_x, p_y, p_z) にあり、その後は一定の速度 (u_x, u_y, u_z) で等速直線運動をしているとする。すると、 O' の原点 $(0, 0, 0)$ は、慣性系 O では

$$(p_x + u_x t, p_y + u_y t, p_z + u_z t) \quad (12.1)$$

と表せる。

よくある質問 92 式 (12.1) がよくわかりません... 簡単ですよ。 O' がつくばエクスプレスに乗っかっており、 O' の原点がその先頭車両の真ん中だとしましょう。つくばエクスプレスが速度 (u_x, u_y, u_z) で等速直線運動をしているとき、「先頭車両の真ん中」が時刻 t どこにあるかを表すのが式 (12.1) です。要するに単なる等速直線運動の式です。

簡単のため、3 つの座標軸は、慣性系 O と座標系 O' で互いに同じ向きであるとしよう。

さて、ある質点（質量 m ）の位置が、慣性系 O で、

$$(x(t), y(t), z(t)) \quad (12.2)$$

とあらわされ、座標系 O' において、

$$(X(t), Y(t), Z(t)) \quad (12.3)$$

とあらわされるとしよう。このとき、次式が成り立つ:

$$\begin{cases} x(t) = p_x + u_x t + X(t) \\ y(t) = p_y + u_y t + Y(t) \\ z(t) = p_z + u_z t + Z(t) \end{cases} \quad (12.4)$$

よくある質問 93 式 (12.4) がよくわかりません... これも簡単ですよ。さきほどのつくばエクスプレスの例で考えましょう。慣性系の原点は、研究学園駅のホームとしましょう。研究学園駅からつくば駅に向かって走っている快速電車（快速だから時刻 $t = 0$ で研究学園駅を減速せずに素通りした!）の 2 号車に座っている A 君の位置は、座標系 O' すなわち電車に貼り付いた座標系で見れば $(X(t), Y(t), Z(t))$ です。A 君が同じ座席にずっと座っているならば、 $(X(t), Y(t), Z(t))$ は t によらない一定のベクトルですが、せっかちな A 君はつくば駅につく前に、少しでも改札口に近い方に移動しようとして、車内を歩きはじめるかもしれません。そのときは $(X(t), Y(t), Z(t))$ は t とともに変わっていきます。いずれにせよ、A 君の位置は、研究学園駅のホームにいる B 君から見たら、列車自体の位置と、車内での A 君の位置の合成です。前者は式 (12.1) であ

り、後者は式 (12.3) です。その和が式 (12.4) です。

式 (12.4) の各式の両辺を二階微分すれば、

$$\begin{cases} x''(t) = X''(t) \\ y''(t) = Y''(t) \\ z''(t) = Z''(t) \end{cases} \quad (12.5)$$

となる (p_x や $u_x t$ などは t で二階微分すると 0 になって消える)。つまり、慣性系 O と座標系 O' では、位置や速度が違って見えても、加速度は同じに見える。

さて、 O は慣性系だから運動方程式が成り立つ：

$$\begin{cases} F_x = mx''(t) \\ F_y = my''(t) \\ F_z = mz''(t) \end{cases} \quad (12.6)$$

ここで、(F_x, F_y, F_z) は質点にかかる力である。ところが式 (12.6) は、式 (12.5) によって、

$$\begin{cases} F_x = mX''(t) \\ F_y = mY''(t) \\ F_z = mZ''(t) \end{cases} \quad (12.7)$$

とできる。つまり、座標系 O' でも運動方程式は成り立つ。運動方程式が成り立てば、力が 0 のときに、加速度は 0 だから速度は一定（等速直線運動）となるので、慣性の法則が成り立つ。従って座標系 O' も慣性系である！

12.3 非慣性系と慣性力

では、非慣性系はどのようなものだろうか？ それは、慣性系に対して加速度運動をする座標系である。例として、ある慣性系 O に対して、座標系 O'' が、座標軸の向きを変えずに、原点が等加速度運動をするときを考えよう。簡単のため、時刻 $t = 0$ で座標系 O'' の原点は慣性系 O の原点に一致しており、速度も 0 だったとしよう。その場合、時刻 t での座標系 O'' の原点 $(0, 0, 0)$ は、慣性系 O では

$$\left(\frac{a_x t^2}{2}, \frac{a_y t^2}{2}, \frac{a_z t^2}{2} \right) \quad (12.8)$$

と表せる（式 (4.30) より）。ここで (a_x, a_y, a_z) は、座標系 O'' の原点の、慣性系 O からみた加速度である。また、簡単のため、3 つの座標軸は、慣性系 O と座標系 O'' で互いに同じ向きであるとしよう。

さて、ある質点（質量を m とする）の位置が、慣性系 O で、

$$(x(t), y(t), z(t)) \quad (12.9)$$

とあらわされ、座標系 O'' において、

$$(X(t), Y(t), Z(t)) \quad (12.10)$$

とあらわされるとしよう。このとき、

$$\begin{cases} x(t) = \frac{a_x t^2}{2} + X(t) \\ y(t) = \frac{a_y t^2}{2} + Y(t) \\ z(t) = \frac{a_z t^2}{2} + Z(t) \end{cases} \quad (12.11)$$

となる。この各式の両辺を二階微分すれば、

$$\begin{cases} x''(t) = a_x + X''(t) \\ y''(t) = a_y + Y''(t) \\ z''(t) = a_z + Z''(t) \end{cases} \quad (12.12)$$

となる。さて、 O は慣性系だから運動方程式が成り立つ：

$$\begin{cases} F_x = mx''(t) \\ F_y = my''(t) \\ F_z = mz''(t) \end{cases} \quad (12.13)$$

ここで、(F_x, F_y, F_z) は質点にかかる力である。ところが式 (12.13) は、式 (12.12) によって、

$$\begin{cases} F_x = mX''(t) + ma_x \\ F_y = mY''(t) + ma_y \\ F_z = mZ''(t) + ma_z \end{cases} \quad (12.14)$$

となる。これを变形すると、

$$\begin{cases} F_x - ma_x = mX''(t) \\ F_y - ma_y = mY''(t) \\ F_z - ma_z = mZ''(t) \end{cases} \quad (12.15)$$

となる。このように、座標系 O'' では、運動方程式は左辺に、本来の力以外の項 ($-ma_x$ など) が生じる。従って、たとえ力がゼロであっても、座標系 O'' からみた質点は、加速度を持つ運動（つまり等速直線運動でない運動）をするように見える。従って慣性の法則が成り立たない。従って座標系 O'' は非慣性系である。

ところがここで、

$$(-ma_x, -ma_y, -ma_z) \quad (12.16)$$

も一種の力であると解釈し、

$$(F_x - ma_x, F_y - ma_y, F_z - ma_z) \quad (12.17)$$

を合力であると考えてしまえば、式 (12.15) は、見掛け上は運動方程式になる。この式 (12.16) は、もともと何かが質点に働きかけて実現した力でなく、非慣性系 O'' でも運動方程式が成り立つようにみせかけるために、形

式的・仮想的に導入された力（のようなもの）だ。このように、非慣性系において、運動方程式が成り立つようにみせかけるために付け加わる仮想的な力を、慣性力という。

例えば、電車が駅に近づいて減速を始めたとする。そのときに君がジャンプすると、君は電車の前のほうに飛んでいこう。ジャンプしなくても君は、減速する電車の中では前方にひっぱられる力を感じる。あるいは加速する電車の中では、後ろに引かれる力を感じる。これらは慣性力の例である。

このようなことを考えていれば、ただ「電車に乗る」という行為が、物理の実験に早変わりするのだ。

よくある質問 94 要するに、非慣性系でも慣性力を考えれば、運動の 3 法則が成り立つってことですか？ ... 慣性力も「力」のひとつとしてみとめてしまえば、運動方程式は成り立ちます。従って、従って合力（慣性力も含めて）が 0 のときは加速度も 0 になるので等速直線運動になる、つまり慣性の法則も成り立ちます。でも、作用反作用の法則が微妙です。慣性力には反作用が無いのです。どういうことか、考えてみたらわかるでしょう！

問 159 日本の H2A 宇宙ロケットは、打ち上げ後、約 100 秒間で高度約 50 km に到達する。

- (1) このロケットの運動を等加速度直線運動とみなし、加速度を求めよ。
- (2) このロケット内の物体には、どのような慣性力がどのくらいかかるか？ それは重力の何倍か？

よくある質問 95 トランポリンの上も無重力らしいですが ... よく知ってますね。それは、下りのエレベーターが動き始めた時に、中にいる人が、自分の体がふっと軽くなるように感じるのと同じです。トランポリンで跳ねた後に上空に浮かんでいる人は、重力に引かれて下向きに加速しているのですが、当人にとってはそれは上向きに引っ張られる力のように感じます。これが慣性力です。それが重力を（見掛け上）打ち消して、無重力状態のように感じさせるのです。

よくある質問 96 宇宙ステーションから星出さんがロシアの宇宙船ソユーズで地球に帰ってきたとき、自分の体重の 5 倍の力が体にかかったそうです。いったい体重の 5 倍の力が加わったら身体はどうなってしまうのでしょうか？ ... 下りのエレベーターが停止する直前に、乗ってる人は体重が大きくなったように感じますね。あれの激しい場合がソユーズの着陸です。ソユーズは着地の寸前にロケットを点火して、強い上向きの加速度をかけて減速します。ソユーズの中で直立していると、ま

さに体重の 5 倍に相当する力が足にかかるわけなので、60 kg の人が 240 kg の物体を持ち上げているのと同じ状態です。その過酷さを和らげるために、寝た姿勢で降りてくるわけです。寝ていれば、例えば後頭部（枕）にかかる力は頭の重さの 5 倍程度なので、せいぜい数 10 kg で、耐えられないほどではありません。お腹は... メタボな人にはつらいかも。

12.4 回転する座標系の慣性力

回転する座標系における慣性力を考えよう。いま、質量 m の質点が、平面内で運動している。平面内に、ある慣性系 O をとる。 O では、質点の位置と質点にかかる力はそれぞれ、

$$\mathbf{r}(t) = (x(t), y(t)) \quad (12.18)$$

$$\mathbf{f}(t) = (f_x(t), f_y(t)) \quad (12.19)$$

とあらわされるとする (t は時刻)。この慣性系 O の x 軸と y 軸をそれぞれ実軸・虚軸とするような複素平面を考え、 \mathbf{r} と \mathbf{f} をそれぞれ複素数で表現しよう。といっても難しいことなく、ベクトルの x 成分を実部、 y 成分を虚部とするような複素数を考えるだけだ。このとき、ベクトル $\mathbf{r}(t)$ に対応する複素数を $r(t)$ 、ベクトル $\mathbf{f}(t)$ に対応する複素数を $f(t)$ と書くと次式が成り立つ：

$$r(t) = x(t) + iy(t) \quad (12.20)$$

$$f(t) = f_x(t) + if_y(t) \quad (12.21)$$

複素数はこのように、(2 次元の) ベクトルを代替することができる。なぜわざわざ複素数を考えるかというと、それが以後の計算を楽にしてくれるからだ。

さて、 O は慣性系なので運動方程式が成り立つ。すなわち、 $\mathbf{f}(t) = m\mathbf{r}''(t)$ である。成分で書くと、

$$\begin{cases} f_x(t) = mx''(t) \\ f_y(t) = my''(t) \end{cases} \quad (12.22)$$

である。複素数で書くと、

$$f(t) = mr''(t) \quad (12.23)$$

である。ここで $r''(t)$ は、 $r(t)$ の実部と虚部をそれぞれ時刻で 2 階微分してできる複素数であり、すなわち $r''(t) = x''(t) + iy''(t)$ である。

さて、慣性系 O に対して、座標原点は同じだが、角速度 ω で、 x 軸から y 軸に向かって回転する座標系 O' を考える。時刻 $t = 0$ で O と O' の座標軸は一致していたとする (図 12.1)。

座標系 O' において、質点の位置と質点にかかる力は

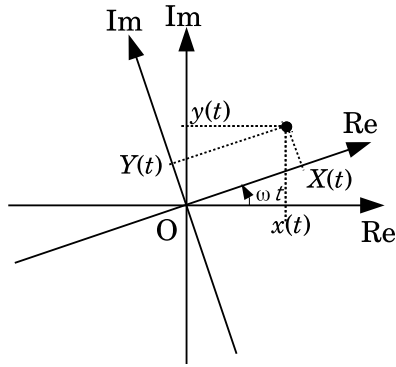


図 12.1 慣性系 O と、それに対して回転する座標系 O' 。複素平面で表現する。傾いているのが座標系 O'

それぞれ,

$$\mathbf{R}(t) = (X(t), Y(t)) \quad (12.24)$$

$$\mathbf{F}(t) = (F_X(t), F_Y(t)) \quad (12.25)$$

とあらわされたとする。慣性系 O について考えたときと同様に、座標系 O' でのベクトル $\mathbf{R}(t)$, $\mathbf{F}(t)$ にそれぞれ対応する複素数 $R(t)$, $F(t)$ を考える。すなわち,

$$R(t) = X(t) + iY(t) \quad (12.26)$$

$$F(t) = F_X(t) + iF_Y(t) \quad (12.27)$$

とする。

座標系 O' の座標軸は慣性系 O の座標軸に対して ωt だけ回転するから、 O における座標成分 (つまり $\mathbf{r}(t)$ の成分) は O' における座標成分 (つまり $\mathbf{R}(t)$ の成分) を ωt だけ回転したものになる。従って、次式が成り立つ:

$$r(t) = R(t)e^{i\omega t} \quad (12.28)$$

$$f(t) = F(t)e^{i\omega t} \quad (12.29)$$

さて、式 (12.28) の両辺を t で微分すると,

$$r'(t) = R'(t)e^{i\omega t} + i\omega R(t)e^{i\omega t} \quad (12.30)$$

となる。もういちど両辺を t で微分すると,

$$r''(t) = R''(t)e^{i\omega t} + 2i\omega R'(t)e^{i\omega t} - \omega^2 R(t)e^{i\omega t} \quad (12.31)$$

となる。両辺に m をかけると,

$$mr''(t) = mR''(t)e^{i\omega t} + 2im\omega R'(t)e^{i\omega t} - m\omega^2 R(t)e^{i\omega t} \quad (12.32)$$

$f(t) = mr''(t)$ に注意すると,

$$f(t) = mR''(t)e^{i\omega t} + 2im\omega R'(t)e^{i\omega t} - m\omega^2 R(t)e^{i\omega t} \quad (12.33)$$

となる。式 (12.29) に注意すると,

$$F(t)e^{i\omega t} = mR''(t)e^{i\omega t} + 2im\omega R'(t)e^{i\omega t} - m\omega^2 R(t)e^{i\omega t} \quad (12.34)$$

となる。両辺の全ての項に $e^{i\omega t}$ が掛かっているのをこれを約分する (つまり両辺に $e^{-i\omega t}$ をかける) と,

$$F(t) = mR''(t) + 2im\omega R'(t) - m\omega^2 R(t) \quad (12.35)$$

となる。右辺の第 2 項と第 3 項を左辺に移せば,

$$F(t) - 2im\omega R'(t) + m\omega^2 R(t) = mR''(t) \quad (12.36)$$

となる。この式は、座標系 O' でも成り立つ「運動方程式に似たような式」である。ここで,

$$-2im\omega R'(t) + m\omega^2 R(t) \quad (12.37)$$

を慣性力として考えよう。式 (12.37) の最初の項 $-2im\omega R'(t)$ は、 $R'(t)$, つまり座標系 O' での速度に、 $-i$ がかかっている。複素平面で $-i$ をかけるということは、 y 軸から x 軸に向かう向き (「慣性系 O からみた座標系 O' の回転の方向」の逆向き) に 90 度回転することに相当する。つまりこの慣性力は、速度に対して直角にかかる。また、その大きさは速度と角速度 ω に比例する。このような慣性力を、コリオリ力 という。

式 (12.37) の 2 番目の項 $m\omega^2 R(t)$ は、 $R(t)$, つまり座標系 O' での位置と、角速度 ω の 2 乗に、それぞれ比例し、 $R(t)$ と同じ向き (原点から離れる方向) にかかる。このような慣性力を、遠心力 という。

問 160 慣性系 O に対して一定の角速度 ω で回転する座標系 O' において生じる慣性力を導出し、それぞれがどう呼ばれるかを述べよ (上の議論を再現すれば OK)。

問 161 北極点上空を速さ v で飛ぶ、質量 m の飛行機 P を考える。地球の自転の角速度を ω とする。

- (1) P にかかるコリオリ力の大きさを m, ω, v で表せ。
- (2) P にかかるコリオリ力は重力の約何倍か? ただし $v = 1000 \text{ km h}^{-1}$ とする。
- (3) P はまっすぐ飛んだつもりでも、その軌跡はコリオリ力によって横方向にずれる。1 時間の飛行によってどのくらい横にずれるか?

問 162 回転半径 15 cm, 単位時間あたりの回転数が 4000 rpm の遠心分離器がある (rpm は rotation per minute, すなわち 1 分間あたりの回転数)。この遠心分離器で、試料溶液中の懸濁物を沈降させようと思う。遠

心分離器なしで、地上の重力にまかせて3.0日かかる沈降は、この遠心分離器を使うとどのくらいの時間に短縮できるか？ただし沈降時の粒子にかかる抵抗力は沈降速度に比例するとする。

問163 慣性計測装置(IMU)とは何かを述べ、その農業利用の例を挙げ、その仕組みをわかりやすく自分の言葉で説明せよ。

問164 台風について考える。

- (1) 北半球の台風の渦は、どのような向きに巻いているか？それはなぜか？
- (2) 北半球では、台風の進行方向を向いて右側(多くの場合は東側)は左側より風が強いことが多い。なぜか？
- (3) 1991年の台風19号は、九州に大規模な倒木被害をもたらした。青森では収穫前のリンゴの多くが落果した。このような大きな被害をもたらした背景を、この台風の進路や勢力で説明せよ。
- (4) 台風は熱帯地方で発生するが、奇妙なことに、熱帯のど真ん中である赤道付近では台風は発生しない。なぜか？という問いに、ある学生は「赤道ではコリオリ力が働かないから」と答えた。それに対して教師は「赤道だって地球の一部だ。地球は回転しているのだから、赤道でもコリオリ力は働くよね」と指摘した。それをふまえて君は、この問いにどう答えるか？

問165 以下について説明せよ。(1) 国際宇宙ステーションの中が「無重力」なのはなぜか？(2) 人工衛星が地球に落ちてこないのはなぜか？

ここで注意。君は「遠心力」という言葉を不用意に使っていないだろうか？例えば「人工衛星が地球に落ちてこないのはなぜ？」という問いに、「重力と遠心力が釣り合ってるから」と答えていないだろうか？

これはなんとなく「それっぽい」説明だが、間違っている。というのも、慣性の法則によると、もし力どうしが打ち消し合うなら、物体は等速直線運動をするはずであり、従って人工衛星は地球のまわりを周らずにすっ飛んでいくはずである。人工衛星が地球を周るならば、人工衛星にかかる力が「釣り合」ったり「打ち消し合」ってゼロになってはならないのだ。正しくは、「重力が、人工衛星の軌道をカーブさせる横方向の加速度を生むため」とか「重力が回転運動の向心力となるため」である。

「遠心力」は回転する座標系に「乗ったもの」に働く「見かけの力」(慣性力)である。人工衛星の中で宇宙飛

行士が重力を感じないのは、確かに遠心力と重力が打ち消し合うからである。しかし人工衛星自体の運動を論ずる座標系はそもそも回転していないのだから、その議論に遠心力を持ち出すのは筋が悪い考え方である。

演習問題24 つくばエクスプレスのつくば行き快速電車は、つくば駅の1.0 km手前から減速し、つくば駅で停車する。減速直前の列車の速度を $v = 100 \text{ km/h}$ とする。減速中の車内で列車後尾に向かって歩く人は、まるで坂道を登っているかのような負荷を感じる。それは傾斜何度程度の坂道に相当するか？列車は加速度 a の等加速度直線運動をするとみなしてよい。

12.5 解答

答159 (1) 一定加速度を a とする。打ち上げの瞬間を時刻0とする。時刻 t までの飛距離 x は $x = at^2/2$ 。従って、 $a = 2x/t^2$ 。これに $t = 100 \text{ s}$, $x = 50000 \text{ m}$ を代入すると、 $a = 10 \text{ m s}^{-2}$ 。注意: 実際はロケットの運動は等加速度運動ではない。その理由のひとつとして、燃料消費に伴って、質量が刻々と減っていくことがある。(2) 質量を m とすると、慣性力は ma 。一方、重力は mg 。両者を比較すると、 $a = 10 \text{ m s}^{-2}$ と g はほとんど同じなので、慣性力は(地上付近での)重力にほぼ等しい。ただし、この慣性力は加速方向(上向き)とは逆方向(下向き)にかかるので、重力と慣性力の合力は、重力の約2倍(下向き)となる。

答161 (1) 式(12.37)の第1項より、飛行機にかかるコリオリ力の大きさは $2m\omega v$ 。(2) 地球の自転の周期を T とすると、角速度は

$$\omega = \frac{2\pi}{T} = \frac{2 \times 3.14}{60 \times 60 \times 24 \text{ s}} = 7.27 \times 10^{-5} \text{ s}^{-1}$$

一方、 $v = 1000 \text{ km h}^{-1}$ を換算すると、 $v = 278 \text{ m s}^{-1}$ 。従って、

$$2\omega v = 2 \times 7.27 \times 10^{-5} \text{ s}^{-1} \times 278 \text{ m s}^{-1} = 0.0404 \text{ m s}^{-2}$$

これは重力加速度の約0.004倍。(3) 本来は円運動になるはずだが、横方向の等加速度運動として近似すると(加速度 a は(2)で求めた値)、時間 $t = 3600 \text{ s}$ の間に横方向の移動距離は $at^2/2$ になるから、

$$\frac{0.0404 \text{ m s}^{-2} \times (3600 \text{ s})^2}{2} = 2.6 \times 10^5 \text{ m}$$

すなわち、約260 km。

索引

eV	34
圧力	16
運動エネルギー	59
運動の三法則	2, 42
運動方程式	42
運動量	43
運動量保存則	67
エネルギー	28
エネルギー等分配則	75
エレクトロン・ボルト	34
円運動	54
遠心力	115
応力	16, 18
オッカムの剃刀	6
温度	75
カーリング	45, 61
概算	6
外積	97
解析力学	2
可逆的	84
角運動量	97
角運動量保存則	99
角振動数	52
角速度	52
仮想仕事の原理	26
慣性系	43, 111
慣性抵抗	46
慣性能率	104
慣性の法則	42
慣性モーメント	104
慣性力	114
起電力	33
ギブスの自由エネルギー	86
基本法則	5
空気抵抗	46
クーロンの法則	13
クーロンの摩擦法則	20
クーロン力	12
グラハムの法則	76
系	21
原理	5
向心力	55
剛体	103
公理	5
合力	10
古典力学	1
コリオリ力	115
作用・反作用の法則	10, 42

仕事	26
仕事率	33
磁束密度	13
質点	6
磁場	13
周期	52
終端速度	47
自由度	75
自由落下	44
重力	10
重力加速度	11
垂直抗力	19
静止摩擦係数	20
静止摩擦力	20
還移	102
線積分	90
相対論	1
第一原理	5
単振動	51
弾性衝突	69
弾性体	17
弾性力	17
力のつりあい	10
力のモーメント	99
中心力	100
定義	5
定積モル比熱	79
定理	5
てこの原理	26
電圧	33
電位	33
電位差	33
電荷	12
電荷素量	12
電磁気学	1
テンソル	18
電場	13
電流	34
電力	34
等加速度直線運動	41
等価振り子の長さ	108
統計力学	2
等時性	7, 93
等速直線運動	41
動摩擦係数	20
動摩擦力	20
トルク	99
ニュートン	9
ニュートン力学	1
熱放射	102

熱容量	79	ベクトル解析	14
熱力学	1	法則	5
熱力学第一法則	80	保存則	64
熱力学第二法則	86	保存力	32
粘性抵抗	46	ポテンシャルエネルギー	30
バネ定数	17	ボルツマン定数	75
バンジージャンプ	63	摩擦力	20
反発係数	70	モーメントのつりあい	27, 100
万有引力の法則	2	モデル	7
非慣性系	111	ヤング率	18
ひずみ	18	力学	1
比熱	79	力学的エネルギー	61
微分方程式	43	力学的エネルギー保存則	61
フックの法則	17	力積	68
フライホイール	106	量子力学	1
振り子	92, 108		